山岳

第三十二年
第二號

山岳

第三十二年第二號

山岳第三十二年第二號目次

ナンダ・コート日記　立教大學學友會山岳部　一頁

ガルワール・ヒマラヤの登山年譜　黒田孝雄　一三七

カラコルム紀行（抄譯）　盛岡英治郎　宮崎武夫　一五七

ウィリアム・マアティン・コンウェイ傳　高橋文太郎　二三六

會務報告　二六〇

月例—理事會—年次大會—新入會員—退會員

圖版

對頁

ラルシヤガルの泊場　一六
ナンダコート（ベイスキャンプより）　一七
ナンダコート（第一キャンプへの途上より）　三一
ナンダデヴィ（第一・第二キャンプの中間より）三三
ナンダデヴィ（第二キャンプより）　四八
「池のコル」よりナンダコート氷河を見下す　四九
ナンダコート（「池のコル」より）　六四
ナンダコート頂上附近より東北稜を見下す　六五
ナンダコート（トレィルスパスより）　八〇
ナンダデヴィ（トレィルスパスより）　八一
アブルヂ公　一八〇
K_2南壁下のキャンプ　一八六
K_2の西壁（サヴォイア氷河より）　一八七
K_2（東方第六キャンプより）　一九二
K_2（コンコーディア・アムフィシヤターより）　一九三

挿圖

ガルワール東北部略圖
ナンダ・コート登路概念圖
ガルワールヒマラヤ概念圖
バルトロ氷河概念圖

ナンダコート日記

立教大學學友會山岳部

昭和十一年六月二十四日、山縣一雄單身先發員として神戸出帆
七月十二日、本隊員、堀田彌一、湯淺晟、濱野正男、竹節作太（大毎特派員）神戸出帆
七月二十日、山縣カルカツタ着諸般の準備工作に着手す。
八月十日、本隊カルカツタ着
八月十三日、カルカツタ發
八月十四日、ブダガヤ通過—バレイリーにて乘換

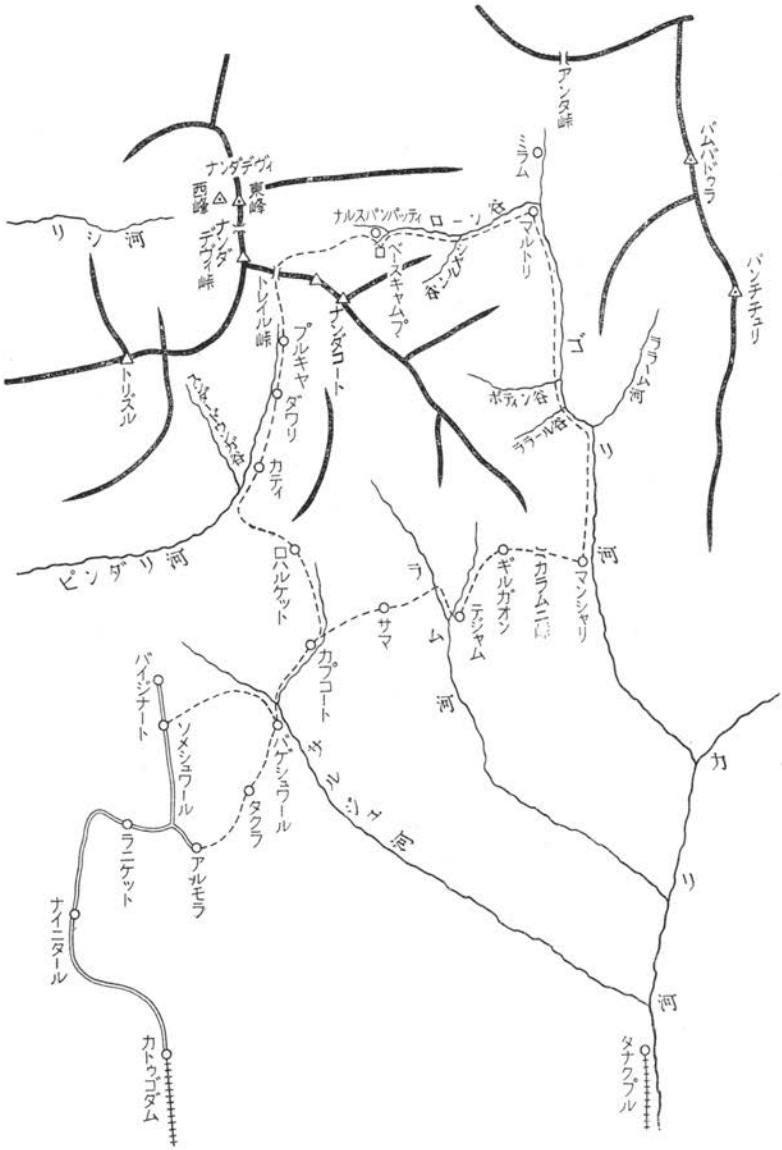
八月十四日の朝はブダガヤ Bhudalhgaya の驛で明けた。椰子の木が所々に孤立してゐる何の風情もない平原に小高くもれ上がつた丘のかげで佛陀が正覺道に入つたと聞く。それかあらぬか熱帶の涼しい朝風も、眠られぬ昨夜につかれた頭と體とを恢復する法悅の醍醐味であるかの如く感じた。モゴール・サライ Moghal Sarai の停車場で驛の食堂から印度風の食事を取寄せて車内で認めることとしたが、カレーには唐辛子（ミルチヤ）がふんだんに入れてあるので口の中が燃えさうであつた。この日一日汽車は坦々たる平原をひた走りに走る。車窓は二重か三重になつてはゐるが、どこからとなく煤烟塵埃とがとびこんで來て、扇風器でかきまはすのがかへつて

立つても居ても居られない。今年は雨量が多かつたためとか見渡すかぎりの平原が水浸しになつてゐる。その水の中から菩提樹が一本こんもりとしげり立つてゐる、どうかすると水牛が水をはねかへして歩いてゐる。ラクノウ Lucknow につくと大洪水救濟のため青年が車窓に義捐金を集めまはつてゐるので我々もそのもとめに應じた。夕食はまたカレー。ほかのものはあまり食ひたくないので、ついカレーと云ふことになるが、これで印度人が刺戟物を攝りたがるわけを體驗した。夜になるとさすが涼しい。十一時過汽車は三十分おくれてバレイリー Bareilly につく。手廻りのものだけ持つてロヒルカンド・アンド・クマウン鐵道 Rohilkand and Kumaum Railways と云ふ狹軌の地方鐵道に乘換へる。大荷物も多分一緒に積みかへて呉れたものと早合點して、その方のことはかまはずに身體だけ乘せてしまつた。新聞ででも見たのか運送屋の手代が車内に入つて來て、アルモラ迄の荷物の運送を請負はせて呉れといふ。人と荷物とこみで八十流比と云ふ約束をした。今度の車輛は幹線とちがつてコムパートメントになつてゐないが、相客もないのでシュラーフザックをひろげて眠りこんでしまつた。

八月十五日　カトゴダム着

終點はカトウゴダム Kathgodam 一六九一呎の高地である。眼の先には丘があり、河も近いらしく、何となしに島々の村をおもひ出させる。朝飯は驛の食堂でゆつくりと認め、その上バスに浴したりしたので、益々さつぱりした氣持になつたが大荷物が着いてゐない。十時半着の汽車にも積んで無い。十二時半着の汽車

ガルワル東北部略圖


アンタ峠
バムバドウラ
ミラム
ナンダデヴィ
東峰
西峰
ナンダデヴィ峠
ナルスパンパッティ
ローン谷
ベースキャムプ
シンガ谷
マルトリ
バンチチュリ
リシ河
トリズル
トレイル峠
プルキヤ
ナンダコート
ダワリ
カティ
ポティン谷
ララム河
ララム谷
ピンダリ河
ロハルケット
ギルガオン
ニカラム峠
マンシャリ
サマ
ティジャム
カプコート
バイジナート
ソメシュワール
バゲシュワール
タクラ
ラニケット
アルモラ
ナイニタール
カトウゴダム
タナクプル

にも乘つてゐない。これではならぬと一時半發の汽車で廣瀬老人にバレイリーに行つて貰つた。いつまでも驛前でうろ〳〵してゐることも出來ず驛附屬の休泊所 Retiring house に泊ることにした。清潔なバンガローでしかも涼しいので蘇生した氣持になる。夜になると外では螢が飛び交ひ、石だゝみではこほろぎがさびしくと鳴く。旅情豐かな夜を旅のつかれでぐつすりと眠りこんだ。大荷物は我々の乘つて來た汽車よりまる一日おくれてやつと到着した。采領の廣瀬老人の話によれば荷物はカルカッタから我々の乘つた夜十時發のデラーダン・エキスプレス Deraldun Express に積み込まれず、翌日のシヤラムポーア・エキスプレス Sharampor Express に積んだため昨日の午後五時半にバレイリーについたのださうだ。一應はその不都合に腹を立てても見たが、氣の長い人のゐる印度で發車のその日に大量の荷物を驛へもちこんだのが失敗のもとである。ことに荷物列車の運賃で客車便にのせやうと云ふのだから、腹を立てる方が餘計にまちがつてゐるらしいとあきらめをつける。

八月十六日　自動車にてラニケット經由アルモラへ

七時半トラックが三臺やつて來る。これに大荷物の木箱三十四箇、手廻品數十箇その他に一行の人間九人が乘りこむ。道路は舗裝してあるのであまり新らしくもないトラックも不愉快ではなく、小山を越え、谷を渡り、蜿蜒迂曲八十五哩の道の風光を樂しむ。八時五十五分ボウアリ Bhowali の小驛で一服、こゝからアルモラ Almora への舊道があるが勿論自働車は通じない。更に車行二時間でラニケット Ranikhet につく。

此所は兵營もあり避暑地の一つとして賑かである。こゝから道は少し悪くなるが大したことはなく、また一時間半でアルモラ Almora へ著く。この町の入口で道路税とか入縣税とかを徵集せられた。途中里を離れた處では猿が道へ出て來たり、とほりがかりの土地の人から珍らしさうに見送られたり、異國の山旅は實に興趣がある。この所へ來るまでに氣がついたが、日本の山だと大體一眼見て、尾根の方向などで山脈の觀念が漠然とでも得られるが、ヒマラヤの前山ではそれが全く出來ない。地圖を見てもすぐわかることだが、山が脈を爲さずたゞ無暗につゞいて居り、谷がまた得手勝手な方角へ流れてゐる。ヒマラヤ山脈はこれを巨大なしかけにしたものだと思へば大體にまちがひが無いと云ふものだらう。その上自働車道が曲りくねつてゐるのでどちらが北か南か見當がつかなくなつてしまふ。

アルモラは丘の尾根筋とその斜面とにひらけた町で、主だつた家は白堊でぬりつぶした石造の二階建である。道には水成岩の平たい石がしきつめて、水瓶をもつた女子供が往來する。足を伸ばすひまもなく群がる土地のクリーたちの罵聲の擒になる。彼等の風體は云ふまでもなく先づ跣足で、身にまとふものは南京袋ほどのあらさの毛織物の、衣服とは名ばかりのもの、しかもつぎはぎだらけ。ヌルサン Nursang や廣瀨老人の指揮で荷物はバンガローの石疊の上につみ上げられた。折しもスコール一過、清涼の氣が天地に漲つた。何と云つても海拔六千呎は有難い。やがて官の運送屋 Government Transport Agency のものが來て、奥地へつれて行く土地の人夫の徵募について談合する。すべての輸送はこの施設によつて司られてゐる。スコールは

そのまゝ地雨になつて、夜になるとトタン屋根をたたく音が旅愁をそゝり立てる。勿論このバンガローは完全な建物で、天井もあり、石敷の床には木棉のカーペットがしいてあり椅子、ベッドも整つてゐる。そして淋しさをそゝりたてるものは雨の音ばかりでなく、實に古風な石油ラムプでもあつた。ダージリンのものはバンガロー附屬の從者や馬丁などのためと思はれる一室にベッドを與へられた。しかし一人はうすらさむい夜を荷物の傍に羽根蒲團をしいただけでごろ寢をして荷物の番をした。

八月十七、八日　アルモラでの準備

廣瀨老人――と云つても大した老人でなく未だ五十にはならないが――は朝が早く、次の朝皆のものは彼に呼びさまされた。どことなくだるい身體をベッドで伸ばしてゐる間、彼はヌルサンたちと頻りに話してゐる。起きてゾボンをはいてゐると、つか〳〵と入つて來たヌルサンは我々の前に直立不動の姿勢で擧手の禮、「サラーム・サーブ」とかしこまる。夜汽車の中から大いに親しみはもつて來たが、これで全く毒氣を拔かれた。彼は中々物識りで英語も普通のことは少しも不自由しない。彼は歐洲戰線でも一はたらきあつたものださうである。さて今日は荷物の分解である。學校の體育館で運送屋が半日がゝりで本格的に荷造したがけのことがあつて、解體するのはなみ〳〵ならぬ苦勞である。しかし頑丈な木箱は少しも破損しないで此處まで到着した。やはり荷造は嚴重にすべきものだ。十時頃から堀田は廣瀨老人をつれて州知事を訪問した。若い人だが仲々練れた人で、よろこんで會つてくれ、色々注意を與へてくれた。西藏へ入るなと云ふことは入

國許可書にも書いてあつたことであるから心得ては居たが、尙ほくどく嚴重に申渡された。またベース・キヤムプ豫定地からの最近の村マルトリ Martoli の官指定食料商人より必需品を公用同樣に買受ける都合を計り、一行の世話人また行動の立會人として同伴する條件になつてゐる警部 Inspector of police についての注意もしてくれた。クリーは大體六十五人の用意はして置いたが、カンサマ（料理人）は日本人の食事に就て良くわからないから定めて置かなかつたとの事であつた。

バンガローに殘つたものは官營運送屋の立會で六十乃至七十ポンドを一人前としてともかく背負へるやうにつくつた。やがて人夫が百人位ぞろ〳〵やつて來る。若いのやら年のとつたのやら、皆ドティヤ族 Dhotial のものである。容貌はいくらか我々にも似てゐる。平地のインド人のやうに鼻の高いものはあるにはあるが、一括して蒙古人種的特徴を伺ふことが出來る。この百人の中からヌルサンは四十五人强さうなのをえらび出し、合札をくれてやつた。小雨はしよぼ〳〵ふりつゞけてゐる。そのなかで濡れるのもかまはず仕事にありついたうれしさで大聲で語りあつてゐる彼等について、一種の感慨なきを得ない。かくして荷物解體整理に一日を費した。もし出來れば日本出發の時から、すぐに背負はせるやうにしわけておいて、それを大箱詰にしてくれれば良かつたのにとも考へた。バウエルやエヴエレストの連中はさうしてゐたらしい。

翌朝マテルダス Materdas 警部が平服でのそりと顏を出す。打合せをして見ると彼のために人夫を三四人はつけてやらねばならぬ。やがて廣瀨老人が市場からクリー用の煙草、毛布、またダージリンの人夫のため

の食料の補給品（ミルク、砂糖、ツアンパ、唐辛子等）を買ひ足して來た。四十五人の人夫ではとても不足である。午後になつてやつと本とうの人數が定まつた。それは普通のクリー六十四人、頭一人、（トシヤといふ）、それにこゝのダツク・バンガローの料理人ハビジュラが是非にとたのむので一行の炊事係としてつれてゆく。マテルダスのためのサーバント一人もやとつた。雨の中でヌルサンはこの連中に荷物をおはせ、ぐるぐる歩かせてゐる。足並の悪いものを解傭し、別のを補充するつもりであるが、この處置を實施したか否か自分らは良く知らない。我々もこゝからは白い服などを着なくても良いから、すつかり山の服裝になり、脱ぎすてたものを大箱につめて警察署にあづける。これほど確實な預り手は先づあるまい。このいそがしさで我々は良い加減へと〳〵になつた。しかしダージリンのアンツエリン Angtsering もトツプゲイ Tolgay も皆氣の良い連中で仲々忠實に働く。前者は中々ひようきんもの後者は眞面目な奴である。フランスのカラコルム遠征、それに英米のナンダデヴイ遠征のため、良い人夫が得られまいと始めヒマラヤングクラブのダージリン支部の幹事キツド氏 J. W. Kydd からの手紙で心配してゐたが、幸にこのやうな連中が與へられその好意に感謝した。

八月十九日　アルモラ發—タクラ着

明れば十九日である。今日は昨日にひきかへて好天氣であるが、昨日の雨で塵が立たない。大勢の英人や印度人の立ならぶ中を總勢七十七人ぞろ〳〵と歩き出す。アルモラからバゲシュワール Bageshwar への道

は二つある。本道はソメシユワール Someswar, or Someshwar をまはるもので、タクラ Takula 經由の間道より十一哩も遠い。その上間道は大體高い尾根筋を通ることになるので、暑さも凌ぎよく、かつ一哩につき二安那と云ふタクシー的支拂方法で使傭する苦力であるから、哩數の少ない方が良い。サーブたちはヘルメットに半ズボン或はニツカース、　それに小型サックの輕裝、それに比べて苦力たちの重さうなこと。尾根筋の道の兩側には赤松が立ならんでそのなかに、時々大きなサボテンが混入してゐる。この邊は牛が多い所らしく、廣くもない道を横行濶歩して居られるとあまり氣味の良いものではない。濱野はアンツエリンをあいてにヒンドスタニ語の勉强にいそがしい。この勉强はひまさへあればいつもつゞけられてゐた。いつの間にか朝の爽かさはどこにか行つてしまつて熱帶の暑さが來た。道も埃が立ち草いきれがたまらない。たゞマイルストンがたのしみ。水がないので困つてゐるとダージリンの人夫たちは生胡瓜を食せて呉れる。何だか南アルプスの夏山のやうな氣分である。午の辨當はとある松の木の下で認めた。ひるさがりに尾根から谷筋へ降りるやうになつたが、そこには水田や畑がある。土造の家もある。そしてまた北に登るが今夜の泊りのタクラの村はそこにあつた。村をとほりぬけて眺望のひらけた小高い丘の松林の間にダツク・バンガローが建つてゐる。これには專屬の番人（チヨーキダル）が居て、水を汲んだり掃除をしたりして呉れる。汗をふき着更をすると椅子を前庭に持ち出して一服する。クーリーたちは日のくれかゝる頃集つて來た。それは日當と食費を貰ふためで、一々拇印をとるので大變手間がかゝる。うすぐらいラムプの下で順番をまちあぐんでゐる彼ら

の顏は少々人間ばなれがしてうす氣味が悪いやうでもある。金を貰つたものは、めい〳〵どこかの家の軒先を借りて寢につくのである。このバンガローにはベッドが一行の人數だけはそなはつてゐない。じやんけんで負けたものは床の上へシュラーフザックを敷いてゐる。

八月二十日　タララ發バゲシャワール着

今日の朝食は日本の米であるが炊ぎ方が下手なせいか、ぼろ〳〵してうまくない。たゞ食後の茶柱の立つ番茶の味はまことになつかしい。昨日にひきかへて今日は雨催ひで蒸し暑い。バンガローを出て峠の切通を通り越すと道はサルジュ河 Sarju Ganga に向つて下る。下り切つて河に出ると奇麗な砂の河原でその兩側には水田と畑、河はモンスーンの雨をあつめて水量が多く、勢もはげしくにごつてゐる。河についたりはなれたりして、上手へ道は我々をみちびいて行くが、いつの間にかバゲシュワール Bageswar, Bageshwar の家並が見えるやうになる。この邊の景色は長谷川さんの「ヒマラヤの旅」の寫眞で見覺えがある。村に近づくと黑い水牛が釣橋を占據して我々を通すまいとするが、どうにか御機嫌を取りむすんで通してもらひ、烟草屋、雜貨屋、洋服屋などが軒をならべてゐるバシャール Basaar, Bashaar の石疊道をつきあたり、右に曲るとサルジュ河本流を渡る大きな高い釣橋に出る。その先に今日のとまりのダックバンガローがある。今日の道は仲々あつく、かつ距離があつた。そのためかクリーはかなりつかれたやうに見えた。それをヌルサンが自腹で道ばたの汚ならしい店で買つたマンゴーをやつたり、背中をたゝいてはげましたりしてどうにかこ

ゝまでたどりつかせた。それでなめられたか、夕方になると苦力頭のトシヤが一部のものを代表して明日は休みにして呉れと云つて來た。僅か二日の徒歩の後に休日をやるわけには行かぬので、ヌルサンによく話させる。そしてクリー用の烟草の封を切つて三本づゝ分ち與へた。その効果は覿面でその要求を撤回すると改めて云はないがそれ切りになつてしまつた。此の町は毎年十一月にウトウライニと稱する市が開かれその時には西藏方面からは羊毛やその製品等、印度方面からは穀物等をもち寄つて大取引が行はれ、非常に賑ふ由であるが、今は空屋が軒をならべ、石だゝみ道の上に吐きすてられた擯榔子と石灰のまじつた一種の清涼劑を嚙んだあとの涎のみが、午後の陽に毒々しく赤い跡を殘してゐる。それにタマゴと稱する一種の水煙草を賣る店があつて、その代物の異樣な臭氣、店番の淀んだ眼の老人などは決して我々の印象を快くしなかつた。たゞ石造りの小さな佛寺があり、その塔が河に臨んで立つてゐるのが、せめてもののなぐさめであつた。更にバンガローの設備の良いことも忘れられない。

八月二十一日　バゲシヤワール發カプコートへ

朝早く村の女が河へ水浴兼水汲みに來る。瓶に水を汲み終へると腰卷のまゝ水の中にしやがんでゐる。河の水は奥の方の大雨を知らせて、ひどく濁つてゐる。庭には赤いあふひの花が咲き、芝が一面に生ひしげつてひろびろしてゐる。その上に雨がしよぼしよぼ降つてゐるが、ともかく出發と定めた。ことに昨夜村の醫者と警察のものからもきいたことだが、カプコート Kapkot, Kapkote 方面への道路がひどく崩壞して通行

不可能だから、こゝから東に轉じてグラムガル Dalamgarh を經由してサマ Sama, Shama に出るやうにした方が良からうと云つたことも頭にあるので、今日は何となく氣分が緊張してゐる。勿論グラムガル經由が安全なことはわかつてゐるが、どうしても兩三日は長くかゝりさうに思はれる。迂回して安全を取るか、直進して後で困るか。雨は愈々ひどくなつて來るが、ともかし直進することに方針を定めて、サルジュ河右岸を歩き出す。此の路にも牛が立塞り、路面は糞で埋つてゐるので不快なこと甚だしい。約三哩で左手からラホール Lahor と云ふ河が合流する邊からサルジュ河は廊下のやうな地形を取り、いくらか凄い景色である。それも一哩で盡きて普通の景色となる。更に一哩で愈々道の壞れた所にぶつかつてしまつた。しかし左手の山林にわけ入つて約二百米ほど高くまいて行くことが出來た。ハツイラ Hatsila の部落で晝食をすませ、愈々ひどくなつて來る雨の中を前進する。ガリヘツドの村の近く枝澤の小橋が落ちてゐてクリーに背負はれたのも一興であつた。左手からキル河 Khil Ganga が合流する所をわたると間もなくカブコートの村である。山の斜面に三四十戸の家が散在して、段々畑がつくつてある。奥多摩のやうな景色の所で見るからになどやかな氣分に滿ちてゐる。バンガローは村の下はづれ、二室しかなく、一體に小さく古く、ベツドも數が足りない。夜村の學校の先生が遊びに來た。クリーは流石につかれたやうだ。ヌルサンは道傍に立つてはげましながら、いくらかづゝ金をやつてゐるらしい。これも操縦の一つの方法であらうと感心して見てゐると、ブルース將軍から貰つたと稱する所の彼の汚いソフト帽も、今までのヒマラヤ登山家の苦心の象徴のやうにも

思はれてくる。雨の切れ目から北の方にちらりと雪山が見える。さまで高くもないが村人に名をきくとダクイ Dakhui と答へる。ピンダリ Pindari 河を挾む峯の一つであるさうな。マテルダス警部に附いて來た銃をたづさへた男が、どうして捕つたか一尺あまりもある河魚を三つもとつて來てくれた。早速料理番に云ひつけて串にさして遠火で燒かせる。このやうな料理の仕方は彼らの觀念にはないらしく、どの程度に燒くのかわからず、結局眞黑焦をこしらへてしまつた。これに粉末醬油につくつた醬油をつけて晩飯のおかずにしたが、鑵詰の魚肉よりははるかに美味い。夜半から雨が降り出す。そのふり方はトタン屋根にあたる音で適確にわかる。しかし小止みになつても風が吹くと、屋根に掩ひかぶさつてゐる菩提樹の葉が一齊に水滴をふるひおとすので、その音がはげしくなる。

八月二十二日雨　カプコートの滯在休養

アンツエリンの甲高い「サラーム・サーブ・サラーム・サーブ」の聲で眼をさます。雨は相當降つてゐるし、今日の泊は村でなくサマから少し行つた峠サマドウラの下でキヤムプになることでもあるし、サーブたちもつかれた故、ヌルサンと警部と廣瀨老とも相談して一日休養と決定した。さう話がきまると朝飯もとらないでまた寢てしまふ。眼をさますと、今朝早く警部がサマに出した使のものが歸つて來て色々報告する。この使はサマの次の村テジヤムの手前のラム河の徒渉についての準備を相談に行つたのである。話によるとラム河は大增水で幅は二百呎位、水勢の弱いよどんだ所は胸まで深さがあるので、テジヤムの村の者の內職である

河渡人夫をくり出すやうにして置いた由。その賃錢は一人四安那であることも話してゐた。午食はロティ。雨降りの一日。

八月二十三日雨　カプコートーサマデユラ

次の朝雨はまだ止まぬ。覺悟をきめて八時に發足する。アルモラからの人夫の中で二人腹痛をおこしたものを返してこの村の屈强なものを三人臨時に補充にする。石ころだらけの道を川沿ひに行くと立派な吊橋で左岸に渡る。水嵩は大したものである。この雨の中で牛や羊が道をふさいでたゝずんでゐる。一體人のための道か、牧場かわからない始末。昨夜話しに來た先生の學校の自慢のグラウンドの下からは平坦な道になるが、ひどい泥濘で、飛石がおいてある。これをふみ損じると泥水が頭まではねる。忽ちの間にレインコートは水をとほしてしまひ、ニツカースは下からだん〳〵にやがて腰までぬれてしまつた。四哩もこの不愉快な道を行くと、左手に立派な橋がある。これはロハールケツト Lohurkhet の村をとほつてピンダリ氷河へ行く道でよく手入れもしてある。サマ Sama への道はこれを渡らずに行くので、こゝからはぐつと惡くなる。兩側は荒れた山林で道は所々崩れ落ちてゐる。空は黑い雨雲で一めんに掩はれてとかく陰慘な氣持になる。兩側の草むらからは一寸位のやせた青い蛭が氣味の惡いポーズをとつて通る人を待ちかまへてゐる。厚い靴下もゲートルも何の役に立たず、どこからとなく闖入して血を吸ふ。ヌルサンがどこから手に入れたか煙草(スグ)の生葉(ナテ)をもつて來て踝の所に卷いてくれたが、これでいくらか助かつた。その上濱野と竹節はさきのピ

ンダリ氷河への道の橋にまぎれこまぬやうとの心づかひから、道傍の灌木を折つて橋の袂に通せん坊つくつた時、そのとげで手をやられ、かなり痛むのでしかめ面をしつゞけであつた。このいやなサルジュ河の沿道をどこまでも行くとサマの小部落につく。急な斜面に點々と散在する炭燒小屋のやうな土民の家はしづまりかへつてゐる。このころから天氣もいくらかよくなり、雲の切れ目からはげしい太陽の光がさし出ると、今までぐしよ〳〵になつた着物がすぐに乾き上る。爪先上りの道を大汗になつてサマドウラめがけて上る。その途中、峠の乘越までもう二三百呎と云ふところにキヤムプグラウンドがある。峠の頂上は六千七百三十四呎と測られてゐる。また雨がふり出す。地面はぐしよ〳〵でとても天幕を張るなどは思ひも寄らぬ。いつも親切な警部はそのあたりの店のやうな百姓の様な家に行つてその二階を借せと談判して呉れた。他宗派のものにはかさぬとことはつたのを、職權と辯口でうまくだまくらかしたらしく、汚い二階へ通された。それでも雨の中でテントにねるよりは良い。ダーヂリンのものはテント、他のアルモラのものはどこかへ散り散りになつてしまつた。宿所が定まつたら雨が上り、雲は眼覺ましく上下左右にちぎれて行き、赤い夕日が草山一ぱいにかつと照らしつける。着物をきかへてゐる間に料理番が氣を利かせて、ひどく甘い紅茶をこしらへて「チヤー・ボホツト・アツチヤ・ハハン」と鼻の下の長い八字ひげを手の甲で撫で上げながら腰で御給仕してくれる。白い夕霧が青黑い森林でうづまつた谷一ぱいになつてゐて落ちつき、山の頂だけが浮き島のやうに頭を出してゐて、ダージリンの者たちの天幕からは細い夕飯の煙が立上る。日が暮れるに從つて寒さがし

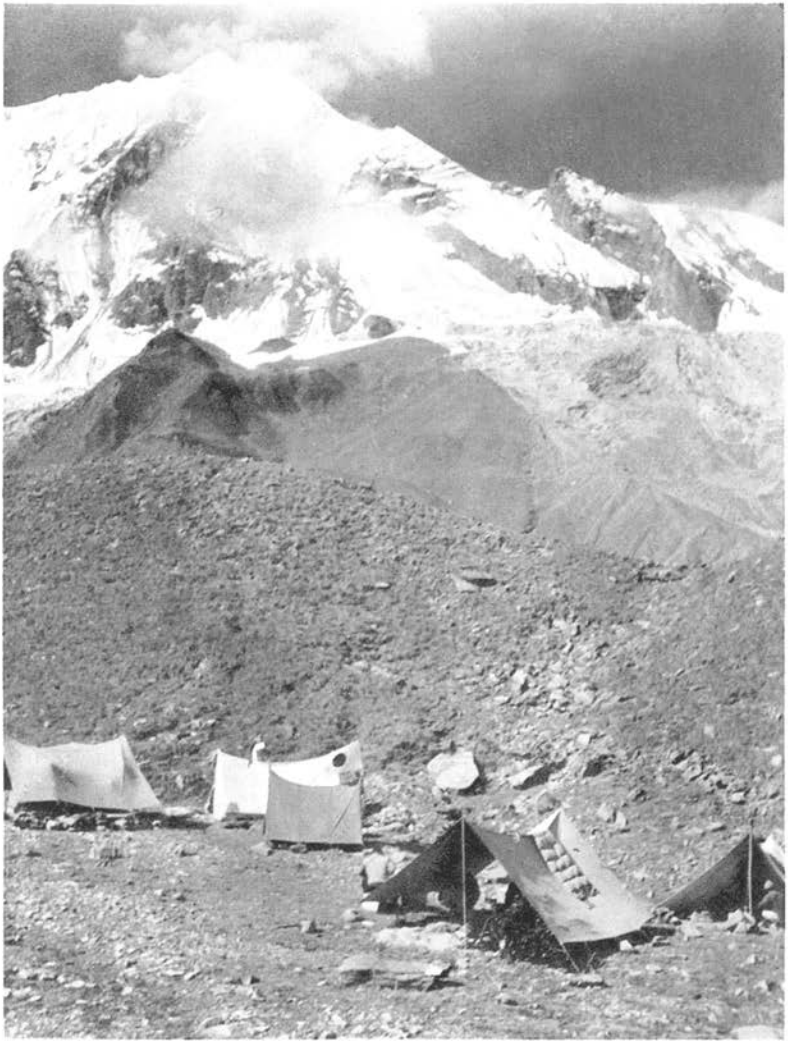
のびよつて來る。晩飯は今日も土人風のロティと馬鈴薯を主にしたカレー汁である。この頃からよほど土人食になれてギイの香も鼻につかなくなつて來た。食後焚火にあたつて皆の顏を見合ふと、色の黑くなつたのと、ひげがのびて來たのとで、時々つかふ印度語も板について來たやうだ。藁をあつめて敷布團にして寢てしまふ。これが所謂「旅心が定まつた」とでも云ふものであらうか。

八月二十四日晴　サマデュラーテジヤム

明ければ二十四日である。涼しく淸々しい朝の六時に出發の準備に取りかゝつて、七時にはテント場におかれてゐた荷物がダージリン・タイガーの三人の采配と手傳でクリーの背にのせられる。ヌルサンは例の如く洋傘を銃のやうにかついで、峠の方に先に行つてしまつた。料理番のはなしではこの峠の上に出れば雪の山が見えると云ふので、竹節は映畫撮影機にフイルムを入れて張り切つた氣持でいそ〳〵と爪先登に上つて行つたが、まだ雲が低くて、目前にひろがつた景色は森林の山々の重疊と、白雲にうづまつた谷筋の交錯とであつた。路ばたには直徑が一尺にあまる石楠の大灌木が林立して下草は美しい芝である。見渡す複雜な地形は南アルプスに似たものであるが、その廣大なることは到底比較にならぬ。涼しい下り路を尾根を絡みながら降つて行く、急阪の上でのクリーたちのかつこうは實に可笑しい。無理もないことで、足許の赤土がとてもひどく滑るので、背中をまるくしてバランスを取つてゐないと轉んでしまふ。下り切ると松の大木の生えた廣い谷である。河原をへだてた向ふ側に臺灣の大覇尖山の岩峯に似た岩山がある。その左手遠く頭に雲

の綿帽子をかぶつてゐるが、ラム河の奥深くとざす雲の間からナンダ・コートつゞきのするどい山が銀甲にいかめしく身をかためて、七合目とも思はれる所から下だけ姿をあらはし、我々を一蹴しやうと待構へてゐる。このいかめしさ、鋭さ、それに美しさ、我々は何か悪いことでもしたかのやうに、はつと胸をつかれてしまつた。今更ヒマラヤの大きさに心うたれて足もすくむ思ひである。しかし去來のはげしい雲はこの神秘壯麗な景色の幕を下ろしてしまつた。擴げた地圖をルツクサツクにしまひこんでなほも松林の中を河沿ひに下り氣味に徒渉點に出る。恐ろしく廣い河で二百米もあらうか。黄濁した水が滔々と流れ、中洲が一つある。テジヤムから出て來た河渡人足が七、八十人眞黑な背中と顏をならべて、口々に何か喋りながら我々の來るのを待つて居た。渡し賃についての談判がはじまる。水が多いの、何んのと云つてこの連中の頭らしいものが我々とかけ合をはじめる。氣の速い濱野と竹節と、ひようきんなアンツエリンが支度をして河にふみこむ。なるほど水は腹のあたりまで、相當にこたへるが特におそろしいこともない。これを見たアルモラの連中もつゞいて河に入りはじめた。この有樣を見た人足共もあつけに取られたらしく態度が軟化した。結局三十留比の請負と云ふことになつて、梯子を持ち出すやら、荷物をしよつたアルモラの人夫を中にはさんで兩側から腰をかゝへる奴やら、サーブを肩車にのせる奴やら、結局褌一本で三時間に四十圓あまりもうけられてしまつた。岸をあちこちしてゐた廣瀨老人は五尺程の小鰐を見つけた。土地の者から、鰐は緣起が良いものだからと文句をつけられたので鰐狩は中止になつた。

ラルシャガルの泊場



ナンダコート（ベイス・キャンプより）

道は河沿ひにひくいため、ひどく暑さがこたへる。また此處も羊の群であつた。左手から明日それに沿つてギルガオン方面に行くべきジヤーカラ澤が合流して一寸した橋がかゝつてゐて、あたりは岩の多い山である。この橋の向ふが今日のとまりのテジヤムの村である。村の一番手前の政府御用雜品店（サルカリバニヤ）、此家が我々の宿舍であつた。

今日はアルモラの人夫に駄賃をやる日である。手に〳〵鍋や毛布を持つてそのもらつた給料でツアムパを買ふためにこの店頭に雲集してゐるのが、見る眼も哀れである。しかし寒村のこと故彼らの全部に欲するだけのツアムパのストツクがない。買ひそこねた連中は家の横に作つてある黍畑にとびこみざまその莖にくひついてゐる。見てゐる間に畑は葉とかぢりかすだらけになつてしまつた。ダージリンの連中は澤と本流との間の芝生の廣場を占領してゐる。傍には轟々と水が流れ、風がすい〳〵と通つてゐる。そしてアルモラのものに云ひつけて焚木をひろはせ、自分らは靴を脱いで何か愉快さうに話してゐる。サーブの體面がなければ暑苦しい店の二階にねるよりも此所の方が心持よくねられるのにと思つた。それでも日がくれるとクリーたちは散りぢりになつてしまひ、あとはうすぐらい蠟燭の火と谷川の音。この暗の中で警部さん（ブラモン教徒）は裸體になつて端座して誦經に餘念がない。その細い體格の彼が何かしらガンヂーのやうで、壁にうつる大きな影も何か神秘な心持を誘ふ。この室は若干奇麗であるが、これは冬になるとマルトリ駐在の巡査ダンシンフの泊る所になるとのこと。

八月二十五日晴　テジヤム—ギルガオン

次の日の旅行のあつかつたこと、それにやつとの思ひでたどりついたギルガオンから見ると、朝たつて來たテジヤムが直ぐの眼の下に見えると云ふ馬鹿々々しい日であつた。道は登り一方、陽はがん〳〵と照りつけて頭の芯まであつさが泌みこむ。木かげにやすんでも風がないので暑さは少しも變らない。ジヤーカラ谷へ落ちる小澤の水まで生暖かくなつてゐる。まはりは眞黑な岩壁である。この急な谷の中にもあばら屋が所々にあつてぼろ〳〵の着物を着た農夫が畑をつくつてゐる。作物は主に黍である。女共は人が通ると、畑の中にかくれてしまつて顏を見せない。廣瀨老人は足に靴ずれをつくつたのだ、とても妙な顏をしてびつこをひきながら歩いてゐるのを見て、ヌルサンは色々世話してゐる。澤筋をはなれて木のない山腹を急にのぼると、そのあついこと〳〵とてもはなしにならぬ。谷の奥山の頂には大きな入道雲がむくむくと座りこんでゐて、それが崩れたら大夕立になりさうだ。廣い尾根筋にちらばつてゐるギルガオンの村にはデイストリクト・ボード・ハウスがある。これは目的は政府のたてたダツク・バンガローと同一で、デイストリクト・ボード・ハウスはそれよりも下位の地方政府で建てたものと云ふちがひがある。この小舍に入る頃にとう〳〵夕立になつてしまつた。小舍附の番人の姿が見えないので、アンツエリンが大聲で「アー・チヨキダルー」と怒鳴つてゐる。そのうちに夕立の白い霧の中からのこ〳〵と俳諧の宗匠の頭巾のやうなものをかぶつた奴があらはれる。小舍は二間しかなくて、それに一方の室は炊事場で、客室もベツドがない。石だゝみの上に

テントをしきシュラーフザックをひろげて寢るが、背中がこつ〳〵痛くて、氣持がよくない、それに蚤が多くて困るので、のみ取り粉をうんと撒布したは良いが、今度は人間が參つてしまひくさめが連續的に出る。明日は全行程中の大難所カラムニデュラ越である。

八月二十六日雨―ギルガオン―マンシアリ

朝飯には牛乳にありついた。久しぶりに中々うまい。小雨にけむる谷を見下しながら身仕度に取りかかつたが、人夫たちが仲々揃はぬ。氣が揉めるが、毎日のことなのでこのごろはいくらか馴れてしまつた。歩き出したのが十時。道は深い谷を右に見て大體東へ急に上る。村を出はづれるとすぐに森林で倒木のくされる香、苔のしめり、實に森林帶獨特の風物である。道は村から約三千呎の登りで二時間程で一番手前のカラムニドウラにつく。元來この名は三つの峠の總稱であつて、クリヤとかバニヤとかの一萬一千呎位の山から南に出た三つの出尾根を越すので、峠の乘越はざつと一萬呎ある。最初の峠からアイヤール・パンの谷を右に見下しながら卷いて行くと一時間半で中の峠につく。それから一寸下るやうになつて小澤を渉ると第三番目の峠の登りがはじまる。がその登りは大したことはない。たゞ雨雲がたゞよつてゐて樂しみにしてゐた眺望が少しも得られぬ。しかしそれでも下りが始つた時にパンチチュリ方面がちらりと見えた。しかしこの峠の高さと風物の大きさ、それにパンチチュリの遠望と云ふ三つのおそひものですつかりヒマラヤの氣分が出た。峠の頂上の道祖神のやうな所に一休みした。濱野と竹節は料理番と警部と一緒にぞろ〳〵と日本の高原に

咲く花と同じの草花を愛でながらあるいてゐると、猿の大群にぶつかつた。見た處十貫位もありさうな大きなのが頭らしく、二、三十頭大木に鈴なりになつてゐる。少々氣味が悪いのでその下を通ることも出來ず、大聲で叱りとばす。するとあわてゝ逃げるには逃げるがすぐに止つてまたこちらを見てゐる。その敏捷な運動に感心もして見るが若干癪にさわらないでもない。あとは下り一方で足先がいたくなつてしまつた。眼の下にゴリ河沿ひの段丘が見え出す。そして一行は山奥にしては良くひらけた村につく。小川の水は滾々と流れ、水車がせつせと稼ぎ小學校らしいものがあつて子供が大聲でわい〳〵騒いでゐる。この村は少し人種がちがふらしく、面構へがアルモラの連中と比べてよほど上品に出來てゐる。ボテイア種ではなからうか。このやうな村が十二、三ゴリ河に沿つて南北にならんでゐて總稱してゴリフアタと云ふ。ゴリ河畔の村と云ふ意である。そのうちの一つマンシヤリと云ふ處にバンガローがある。前は廣々した芝生で、杉の大木が生えてゐる。考へて見るとこの邊には杉の木がなくて、此處にだけあるやうな氣がする。それに櫻にそつくりの樹が生えてゐる。花がないので何とも確言は出來ぬが、もし櫻なら花時はどんなにきれいだらう。おまけに柳まで生えてゐる。杉、櫻、柳、――實に日本の春の景趣である。村の人々は物珍らし氣に我々を見物に來るが、子供も老人も白い羊毛を携へて、立止るひまさへあれば細い糸に績いで糸卷に捲いてゐる。白い頭布（ターバン）を卷いた老人の品の良い顔立ちは印象に殘つた。若者の中には滔々と英語でまくし立てる者もあるが、大いに氣障である。子供が大抵ギルガオンのチヨキダルのやうな宗匠の帽子をかぶつてゐるのがかわいらしい。

たゞその帽子は一度も洗濯をしたことがないと見えて、油と埃とでてか〳〵と光つてゐる。「アツチヤ・チヨコラ」（いゝ子だな）と云ひながら帽子をつまんでとると、下から印度人特有のちぢれた髪が出て來る。頭の天邊に少し長いのが殘してあるのが不思議だからわけを聞いて見ると、地獄におつこちさうになつた時、佛樣がつかまへて吳れる所をこしらへてあるのださうだ。さう云へば相當のインテリらしく頭を分けてゐる連中も眞中だけはちやんと伸してゐる。

此所の小舍はバンガローとは云はないで、レスト・ハウスと云ふ。その前庭からは深いゴリ河の河身は見えないで、村の白堊の家のとび〳〵に立つてゐるのが見えるばかり、背景が名は知らないが一萬三千呎の山だから、とても小まんじりとして奇麗である。壞れた古椅子をテレスに持出して煙草をふかす。こゝから先はゴリ河の峽谷でマルトリまでは碌な村はなく、泊りは皆テントである。まして物資を購入する手段はない。從つて三日間の人夫の食糧品をこの村ですつかりとゝのへなくてはならない。警部さんは色々と奔走して吳れたがツアムパがそろはない。どうしても明日は一日滯在して、粉に挽き上げるのを待たなくてはならぬ。やがてこの村の長官と云ふとおかしいが、カラムニ峠の險から奥は人もあまり通はぬので州知事はこの男に世話を賴んであるのださうだ。ハイヤツトシンフと云ふガルワール・ライフル隊の中尉殿である。ブレザーコートのやうな紺の上衣を一着に及び、役目柄品も良い。チベツト系の人種であらう。カルカツタの日本總領事館を通じて交附せられた奥地旅行許可書はこゝから始めてものを言ふ。人夫の公定賃錢もこゝを境界

として高額になる。新版の一吋を四哩にあてた地圖も、この邊までは精確な等高線が入つてゐるが、こゝから先は舊版の一吋一哩の見取圖同樣先づ出鱈目と思つて良ささうだ。そのやうな邊境へ入る關守は實にこのハイヤツトシンフ中尉殿である。一通りの用談をすませて再び景色を眺めると、どこからとはなく羊飼の牧笛の一ふしが響いて來る。思へば遠く來たものだ。

八月二十七日　マンシアリ滯在

次の朝は思ふさま朝寢をした。起きてから日本への便りを書く。こんな所から日本へ行く郵便物は先づ始めてであらう。それに村で取れた牛乳を飲む。くさい煉乳とは大ちがひである。十時頃中尉殿がやつて來て路の模樣、登山の注意など細かく話して吳れる。マルトリにはデワンシンフと云ふ老人が居て山に明るいから相談せられては如何とも云つてゐた。濱野はすつかりヌルサンたちと仲良しになつて、ヒンドスタニ語で宜しからざる話をするらしい。アンツエリンはブルース將軍をほめる歌をうたつてくれた。長閑な晝すぎヌルサンはクリーたちを集めて踊を見せてくれた。手に手に長い草の葉を持つて圓陣をつくり、中央に色は黑いが女にしても見まほしき顏立の良い若者が兩手で耳をおさへて獨唱する。歌のふしは抑揚の少ない寂し氣なものであり、踊りは腕と腕とを組み、肩と肩とをすり合せ、足拍子をそろへてまはる、その愉快さうな顏は見て居る我々にまで快よさをおぼえしめた。次に中年者がヌルサンの携へてゐる所のネパールの刀を借りて劍舞をやつて見せた。木の下で眼をむき出してやる踊は原始的な卽興舞踊であらうが、滑稽の感を十分に

味ふことが出來る。褒美に煙草を貰つて「サラーム・サラーム」で引下がる。夜に入ると共に雨になつた。八時頃白髮の西洋人が一人我々の使用してゐる小舍に入つて來た。色々話すことをきいて見ると彼氏はスイスのチユーリツヒ大學の地質學の教授でアルノルト・ハイム博士、アスコツトからダルマ溪谷に入つて地質研究をやつて居たが、研究上の興味から地方官に無斷でチベツトに二ケ月も入つてゐたことが判明し、アルモラへ引致せられる途中であることがわかつた。氣の毒な話なので我々の天幕を借し、食糧も分與して奥地の有樣を話して貰つた。この老人がヒマラヤを旅行してゐると云ふことだけでも我々を十分に感心させる。彼はチベツト犬の大きいのを引き連れてゐて、ダージリンからのカンサマを從へてゐるばかりであつて、クリーは後から來るとか。

八月二十八日　マンシアリールプシ・バガール

次の朝雨は未だ降つてゐるが、いつまでも安逸をむさぼるわけにも行かず、ハイム博士と訣別して九時に出發した。この村の人でボンベイの何とか云ふ專門學校を卒業したと稱する御用商人マンマシンフと云ふ男が一緒について來ることになつた。これは例の中尉さんの好意によるものださうである。村を出外づれる道は物凄い原始林の中にめりこむやうに入つて行き、梢には雲がまつはりついて離れやうともしない。やがてゴリ河の見える所まで下つたが、見下す河面は濁水の急流の連續。これを右手に見て數百呎の切り立つた岸の中どころに危ない道がうね〳〵とどこまでもつゞく、所々スレートが眞平らにしきつめてあるので比較的

歩き良い。行けども行けども原始林は盡きず、その間から對岸の大きな瀧が見え隱れする。チベットから下つて來る赤らがほの羊飼にも出合つた。彼自身のしよつてゐるのは羊毛で、また引きつれた羊の背のふり分け荷物も羊毛である。橙色の法衣を着た僧侶にも出合つた。恐らくカイラース巡禮か、マナサロワール湖へ行つたのであらう。この道は北へ北へと伸びてミラムを印度の最後の村落として、あとはアンタデュラとかクンリビンリ峠とかジヤンテイなど一萬八千呎級の峠でザースカル山脈をこえて秘密の國西藏に入る。ゴリ河はこの山脈から來て、グレート・ヒマラヤをナンダコートとパンチ・チユリの間で切つて南に流れる。このやうなざつとした地形の説明からでもその兩岸がいかに高く、その流勢がどれほどはげしいかを想像することが出來やう。十一時にラミヤ・アチヤトで一休み、十二時半にララムで午辨當。時々陽が雲から洩れて來るが、鬱蒼たる森林にたゞよふ涼氣は一萬呎と云ふ土地の高さと相俟つて暑さを感ぜしめない。二時にはヒマンチユラから出るやうに地圖に示されてゐる荒谷の落口を通過した。三時半パルバツトAからの冷たい水をゴリ河に落とすララーアガルの出合である。この邊はこの狹い峽中での殆んど唯一の廣河原で、右岸に美しい草の生えた河原がある。名をきけばルプシ・バガール（美しい河岸）と答へる。こゝを今宵の宿りと定めて幕營をする。テントの數は皆で六つ、宛然キヤムプ村である。我々の料理番はその世襲職業にも似ず火を焚きつけるのが恐ろしく下手で、外の人夫たちがすでにロテイを燒きはじめてゐるのに、我々は未だに熱い茶一杯飲めないと云ふ不始末。それだのに火を他からは貰はうとしないのは種族制度の陋習の所爲であ

らうか。夜が更けるに從つて雨ははげしくなり、天幕は遠慮なく洩りはじめ、地面も愈々濕つて來る。しかし枕頭にひゞく河の水音だけは何處の山でも變りはなく、私達の眠りを誘つて呉れる。

八月二十九日　ルプシ・バガール―ラスパ

濕つぽい衣服にぬれた靴を冷々した朝の空氣の中で身につけるのは世にもつらいこと。朝飯もそこ〳〵に九時に出發する。一時間半は昨日と變らぬ風物だが、ボテインガルの落口はまた廣くひらけてゐて白い羊が悠々と草を食つてゐる。その間に高原の植物が今を盛りとさきみだれ、原始林と急流ですりへらされた我々の神經も一方ならずなぐさめられる。更に進めばいつの間にか立木が疎になり岩肌が露出して來た。その岩壁が兩側からぐつと迫り、右岸が全くの垂直で道を切りひらく餘地もない。從つて路は危なつかしい假橋で左岸にわたる。荷を負つた人夫がわたるとぐら〳〵ゆれるので、ある者は恐れて一人でわたれなかつた。このあたりをナハールと云ふのださうである。路は約半哩で再び右岸にうつる。しばらく行くと絶壁から瀧が落ちて居て、その下に殘雪があり、この瀧の水の上で雪橋になつてゐる。しかし雪の表面は上から落ちた岩屑や土できたなくなつてゐるが、ともかくヒマラヤで見參する最初の雪である。クリーたちは裸足で平氣でこの上を歩く。ヌルサンは洋傘をさした姿で悠々と渡る。雪橋と洋傘とは少々妙な對照であらう。道は急に上りになつて河をはなれて、テラスの上に出る。この地形はかなり奥まで續いてゐるらしい。段丘の上では羊飼が天幕を張つて居り、亂れ咲く山草の中に鈴をつけた羊が歩いてゐる。ロングスタッフ氏がガルワール

地方は景色が良いと記してゐるが寔にもつともである。大きなチベツト種の犬が迂散臭さうに我々を見守つて、その揚句哮えはじめたのには少々膽を潰した。羊の群は續々と左手の斜面から下つて來る。首の鈴がこの靜かな谷間に透明な音をひゞかせて心を慰めて呉れる。此所はラスパと云ふ今日の泊り場である。また雨がふり出す。人夫たちは附近の岩小屋をさがしてもぐりこんでしまふ。谷筋なので風通しが良く、チベツト風にかぢかんだ手は食器をとるのも不自由である。この邊まで來るともう喬木は無くなり、丈の低い灌木ばかりになつてしまつた。しかも質がかたいので中々燃えない。やつとのことランプの石油をかけて燃やすことが出來た。

八月三十日　ラスパ―マルトリ

明ければ雨も小降りになつて來た。モンスーンももう上りさうなものだ。さう云へば昨夜は風が谷の下手から吹いたり、上手からふいたりしてゐた。上手からばかり吹くやうになればモンスーンは印度平原へ、印度洋へと吹き飛ばされてしまふのだが。歩き出す頃になると雲が切れて來た。陽光の下で谷間の牧場は明るく廣くひろがつてゐるなかを、七十人あまりの人數がぞろ〳〵と上つて行く。谷路は大規模の階段である。平らかな所がしばらくつゞくと、急な登りになつて、また牧場がひろがる。この段を登る毎に景色が變つて行くのが樂しい。ゴリ河ははるか足下に轟々のひゞきを立てゝゐる。その昔この河が未だ若かつた頃河身は今我々が歩くやうに、時々瀧になつてゐたのではあるまいか。やがてリルコツトの牧場である。土民の家が

道の兩側にきちんと九軒行儀よく並んでゐて、我々を珍らしさうに見てゐる。原の北のはしに小川がちよろ〳〵と走る。草原の中に腰を下ろして晝食をとる。ヒマラヤの山の中にもこんなのどかな處があらうとは思へなかつた。こんな美しい花がさきみだれるとは想像しなかつた。今まで拾ひ讀みしたヒマラヤの登山記はいづれもこのやうな景色の描寫を忘れてゐたやうに思へる。ガルワールの山水は秀麗だと聞いたが、それは山容がアルプス的であると云ふ意味に解してゐた。聞くと見るとは大ちがひで全くアルプスがこゝにあつた。鈴をつけた羊、石造りの山家、エーデルワイス、龍膽。これで天氣がからりと晴れて呉れさへすれば何も云ふことはない。しかし此處は一萬一千呎の高地である。ビスケツトを喰つてゐる間に霧はうすれて行き、ララムの峯が眞黑な岩をそびえさせてゐる。此處はこの世ながら樂園だ。また階段を一つ登ると谷奥深く雪の峰を見た。ルツクサツクを投げ出して寫眞機や地圖を取り出すが、胸がわく〳〵してゐる。あまりあてにならない圖面だが大體アンタデユラの附近の山だと云ふ見當はつく。石の垣根のやうなものに腰をかけた人夫たちも、美しい風物にうたれたのか、水煙草をすひながら、ものも云はず動きもせず、にやりにやりと笑つてゐる。羊は草の茂みを求めて列をなして山へ登り、水牛は動かないで、近くの草を食つてゐる。我々もいつまでも動きたくない。憶怯な足をあげて平坦な道を歩いて行く。對岸にトラの部落が少さくかたまつて見える。エーデルワイスの花はます〳〵多くなると共に溪谷は更に一段とひらけて、マルトリの家が點々とたちならんでゐる。

あゝマルトリ、マルトリ。目白の山岳部分室で過去數ケ月間一日として口にされぬことのなかつたマルトリだ。想像して居たとはよほど違つて廣々とした美しい處。マルトリで山から南にひきおろした尾根がゴリ河に向つてゆるやかな斜面をつくる。その斜面は二十軒程の家をのせて、やがて河に急な斷崖になつて落ちる。村はづれからはさきほど見えたチベツト境の山々はもちろん、ナンダ・デヴイから東へ長く延びた尾根にローン谷の奥へ物凄いがけになつて落ちてゐるのが見える。ナンダ・デヴイ東峯はまだ雲がひくゝて姿をあらはさぬ。高山植物の花をふみしだいて天幕を張る。心に思ふことは山岳部の連中を皆せいぜい此處までも連れて來たかつたことである。

一休みしてゐると警察分署長ダンシンフが挨拶に來た。早速ダージリンの連中のためと、料理場のためのテントを二つ借りる談判をし、ベースキヤムプより上でつかふアルモラの人夫たちの衣服を註文して貰ふ。ヌルサンは人夫の選拔の役を承はる。また食料品の補充のため食料品店との連絡を取ることにする。さてとう〳〵マルトリまで來てしまつたのだ。

八月三十一日　マルトリ―ローン―ラルシヤガル

西藏境の山からふきおろす蕭々たる朝風に天幕のはためく音で夢が破れた。外に出て見ると美しい草原の花の中の天幕は自分たちと同じやうに寒々としてゐる。溫度はと見ると零下三度程であつた。それでも陽光が柔かく草原に手を伸ばして來ると流石に天幕の中は暖くなつて來る。風上の方は雪の嶺つゞきで、屏風の

やうに立てまはされた急斜面には縦筋が多數に刻まれてゐる。それに向つて左手は今日我々が登つて行かうとするローン谷であるが、その奥にはナンダ・デヴイ東峰が朝雲の群がる中に時折鋭い頭を覗かせる。ナンダコートの頂上は密雲の中である。

かれこれしてゐる間に谷は一面の綠色に耀き、牛は一列になつて丘を登りはじめ、羊は牧童に追ひ立てられながら出て行く。斯くの如くにして靜かな山村マルトリのこの日のいとなみははじめられて行く。それと同時に黑ずんだ岩の斜面も明るくなり、岩と雪との境目の氷がきら〳〵と光る。この靜かな、しかも力强く壯大な繪卷はアルプス風景を彷彿せしめるが、さらに粗野であり、神經が太い。この繪卷の中で我々も仕度にとりかゝらうとする。

昨日ダンシンフ巡査が忠告して呉れた。ともかくあなた方はナンダ・デヴイに登りなさるのだから——土地の者はナンダ・デヴイもナンダ・コートも皆ごちや〳〵にしてゐますんで——その山の神樣に一寸御詣りして下さると大變良いんですが。まあこれが土地のしきたりなんです。と云ふやうなわけで我々はラムミン・ナンダ・デヴイに詣ることにした。村はづれの小高い丘の上にある石造りの御堂である。中は二室に分れ奥の方にはナンダ・デヴイの形をした白布の御神體が置いてあり、羊油の御燈明で覺束なく照されてゐる。我々は前室にしやがんだ。馬鹿々々しいとは思ひながら何だか恐しいやうな氣持がして來るのは矢張り自分等も東洋人だからであらう。何だか御經のやうなものを讀んで呉れて、皆でバカラの花を供へて一先づ式典

終る。外へ出ると犧牲の羊が殺されるのである。一人が首に綱をつけて前から引ぱる。一人は後から引は張る。もう一人が大山刀ふり上げてさつとばかりに血煙が立つて首が飛ぶ。この無慈悲な儀式は、それが慘酷であると云ふ理由で我々を苦しめた外に、羊の代金に幾何せびられるのやらわからないと云ふ心配とで二重に恐ろしいものであつたが、案外輕少で濟んだのは何よりも有難かつた。ふと御堂の屋根の上を見ると村人や西藏からの旅人が供へたのであらうか、化石、水晶、木彫の人形や動物などがぎつしり並んでゐる。一つほしいものだとも思つたけれど、何とも致しやうがなかつた。この儀式の間に霧がひた〳〵とローンの谷をとぢこめてしまつた。

天幕に歸ると西藏の方から來たと云ふ二人の踊子と三人の囃子方が我々を待つてゐる。僅かばかりの投錢をやるとその藝を始めた。村の者は子供たちをつれてぞろ〳〵と見物に來る。この臨時のおまつり氣分の中で天幕はたゝまれ、荷物は人夫たちの背についてしまつた。ローン谷の勝手を知つた屈强の村人を二人案内にやとふ。つらがまへは印度人と云ふよりも西藏人。長いめの上衣にズボンと云ふいでたちなのだが、アルモラからついて來た人夫たちの中の强い連中でベースキヤムプのまはりで働かせやうと思ふものにもこれと同じのをつくつてやつた。昨日註文して今日受取らうと云ふので、ヌルサンは仕立屋に夜どほしすはりこんで仕事を督勵した。細い羊の通ふ小路の柔い土、ネイルド・ブーツでふむとふか〳〵した感じのする柔い土の路を繩のやうに人夫たちがつながつて歩いて行く。しばらく行くと右側は深くえぐれたローン谷の峽間。

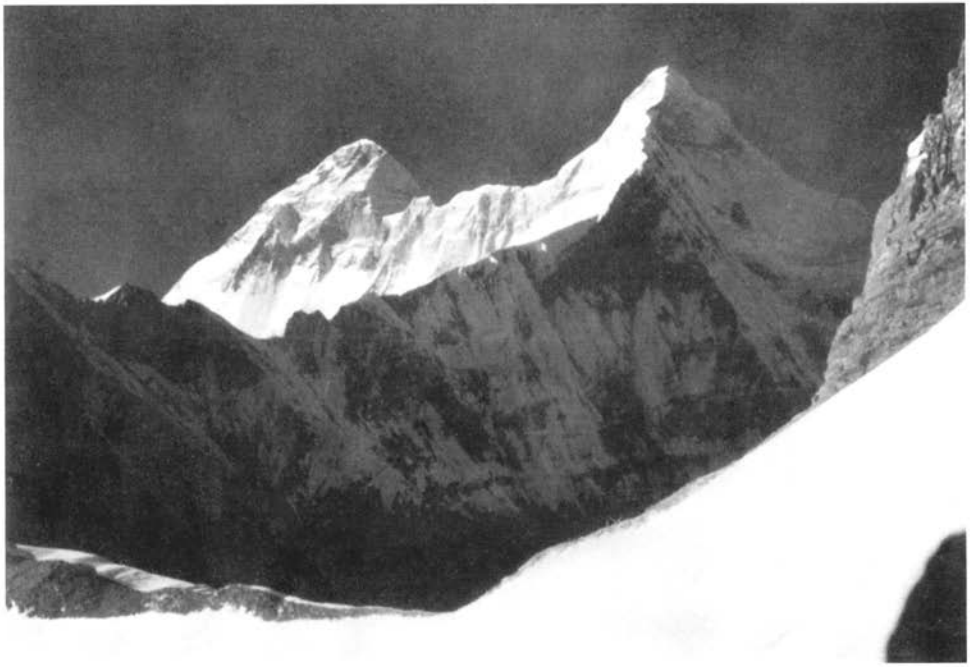
左手から流れ落ちる枝澤をいくつかわたつて行くといつしか山懐へ入つて來たと云ふ心持になる。ラミガルの草地からは、こゝから左手にわかれるシヤールン谷の奥にゆつたりした山容をもつシヤール峰を仰ぐことが出來た。またふりかへるとマルトリの村からは見えなかつた北の方の山が見えはじめる。そのなかでも印象に殘つたのは團子のやうな形をした氷雪をいただいた山。村の者にきくとララーム河の奥のバムバドウラだと云つてゐた。道はローン谷をはなれてこの谷についてしばらく南下する。そして谷が狹くなつた處で對岸に渡り、今までと反對の方角に進んで行くやうになる。やがてローンの部落である。

家が二軒はある。そして臺地を利用して芋のやうなものも作つてある。女たちは家の前でせつせと羊毛の糸を織つてゐる。午すぎの太陽は頭の上でかん／＼照りつけてはゐるものゝ涼しい風と高さの所爲で、決して暑くは感じない。日向の方が暖かで心持が良い位である。一つの家の裏では女が長い杵で何かついてゐた。見ると、黄色な油のやうなものであつたが、どうしたものなのか尋ねることもしなかつた。こゝいらはマルトリの村とはちがつて少しは木が生えてゐる。木と云つても這松と石楠と檜に似た灌木である。この外は一面の草で、河原撫子とエーデルワイスとがちりばめてある。マルトリからの臺地のつきる所は急傾斜になつてローン谷とシヤルン谷との出合となり、これを渡つて、ローンの部落に入るのだ。

一行は更に羊飼の歩いた踏跡を辿つてローンの谷深く進んだ。すると羊飼も幕營してゐる一寸した廣場がある。土地の者は此所をラブガガルともラルシヤガルとも云つてゐる。我々の豫定では明日は日の高いうち

にベース・キヤムプ建設豫定地に着き、大部分の人夫たちはそこで即刻解雇することになつてゐるので、今夜は大勢で飯を食ふ最後の晩である。先例に從つてマルトリから歩かせて來た四頭の羊をすつかり呉れて御馳走にしてやる。この四頭の羊はナンダ・デヴイの祠で犧牲にせられた羊の同類で此所まで來る間だけ生きのびたは良いが、險しい山道を歩かせられただけ損をした。羊は型の如くネパール刀で一刀兩斷に頸をはねられた。人夫たちに口々に何か、やかましくわめき散らしながら皮のついたまゝの足や肉片を彼らのポケツトに押し込む。全く淺ましい限り。彼らは粗末な羊毛織物の一枚の大きな布片を、身體のまはりに好きなやうにぐる〳〵まきつけるのであるから、好きな所にポケツトが出來る。此處へ水烟草管であらうと、鎌であらうと、食物であらうと何でも押し込む。この間に夕立が沛然と降つて來てあたりの草に付いた血しぶきをすつかり洗ひながして呉れたのは有難い。アンツヤリンは殊勝氣に兩手で顏を掩つてテントの中に跪座して經文を誦してゐる。彼はラマ教信者で殺生は好まぬからである。赤い焚火が所々に燃され、人夫たちは肉を燒いて舌づゝみをうつて嬉んでゐる。近くの羊飼の小屋からも白い細い烟が立上り、そこにも夕食がとゝのへられてゐるらしい。かくして靜かな、靜かすぎるヒマラヤの夜が來た。テントに落着いてゐるとトツプゲイが浮かぬ顏をして何か訴へに來た。よく聞いて見ると、持金をすつかり何處かへ落したのださうだ。もし見つからなかつたら半分位は恵んでやるから元氣を出せと云ひふくめてやる。外氣は日本の秋の山の夜のやうにつめたい。

ナンダコート（トレイルスパスより）



ナンダデヴイ（トレイルスパスより）

九月一日晴　午前七時幕營地發　正午バデイヤリグワル着幕營、午後ベースキヤムプ豫定地踏査。

ラブガガルで面白いものを見た。それは羊にもリーダーがあると云ふこと。リーダーは雄羊らしく角が大きく、頸に大きな鈴をぶらさげてゐる。此奴が先に立つて山腹を登つて行くとそれに從つて二、三十頭がくつついて行く。小さい小犬位の仔羊が親羊の腹の下乳の處にまつはりつきながら、ぞろ〳〵歩いてゐるのもある。此所から、地圖とはちがつて谷が廣くなる。道は河原についてゐたり、少し高捲きをしたり、石の多い小澤を渡つたり、羊のむらがつてゐる草原の中になつたりしてゐる。道はナルスパン・パツテイの草場を右に見ながらナンダコート東北稜の裾に沿つて、一哩位斜面から押出したガレを横切つて登つて行くと氷河の端堆石にぶつかる。羊飼の岩小屋もあり、廣々した處で大勢がかついで來た荷物を仕わけたりするのには至極便利である。しかし左側の山裾、正面の堆石などの關係で遠景がなく、その上どこもこゝも羊の糞だらけであるのが玉に疵である。堆石の高さは約五十米、下からは黄濁した手もちぎれさうな水が流れ出てゐる。此所に着いたのは未だひるすぎであるが、荷物の始末もしなければならないし、クリーの一部がひどく遲れるのでこゝへ荷物をおろさせた。こゝまで來ると何處からともなく雪崩の音が遠くしかも根强くひゞいて來る。こゝはバデイヤリ・グワルと云ふのださうだ。約一萬七千呎。

晝飯の後竹節と濱野とトツプゲイの三人でベース・キヤムプに適當な場所をさがすため更に上方に偵察に出かけた。崩れやすい堆石の山の上を右手に堆石をのせた汚れた、もみくしやにした樣なナンダコートから

の氷河を見ながら登つて行くが、雲にとざされた周圍の山の壯大さには、身震ひが禁じ得ないやうな壓迫を感じた。これが實にヒマラヤの山の姿なのだ。いくらか左手に曲るやうになると谷の奥がよく見える。今まで見えなかつた黑々としたナンダコートのバツトレスが、岩と氷と雪をきびしく鎧つて聳立して我々を追ひかへさうとしてゐるやうにも思はれる。堆石の切れめに腰をおろして煙草をふかしながら雲のきれるのを待つた。氷河は相當の幅があり、堆石がその上を被ひ、山の大きな力で、壓縮された樣に凹凸が甚しく荒れ果てゝゐる。中には靑い氷にとりまかれてキラ〳〵光る池もある。雲が切れるとナンダ・デヴイ東峰の横縞、トレイルスパス、ナンダコートの肩などが眼の前にパノラマとなつて展開して來ると、その山の懷に、しやがみ込んだ人間はいやに小さな存在となつてしまふ。

正面の黑い壁からは絶えず轟々と雪崩が出てゐる。音のする方に眼を放つと雪が濛々と煙のやうに谷を埋めて中空に舞つてゐる。その雪烟がどう鎭まるかと看守つてゐるうちに、山の中腹以上を包んで居た雲のカーテンが取り拂はれた。それと同時に我々の眼の前にあらはれたのは、白い、眞白い、途方もなく大きい山である。暮れかゝるヒマラヤの山々にうつゝをぬかしてゐた我々を、いやが上にも威壓せんとするものゝやうに、ナンダコートの頂上が此所に拜まれた。ロングスクツフ氏の寫眞で見る山とは大ちがひで、雪をふるひおとして、氷と岩で身を固めたナンダコートである。いくらか攻擊的であつた我々の氣持は完全にうちひしがれてしまつて、たゞひそかに考へたのは、とんでも無い山へ來たものだと云ふことであつた。もちろんナ

ンダコートはヒマラヤでは二流三流の山なのであるが、寫眞で見るカンチエンジユンガやナンガパルバートと同じ型の、どつしりした幅と厚みのある山であつた。時の經つのも忘れて眺め入つたが、いつか思ひは登路の上に及んだ。今我々が座つてゐる所の左手に岩屑と草つきの尾根が一つある。ナンダコートからローンにつゞく東北山稜にとりつくとすれば此のあたりから北よりに登るのが良さささうだ。しかしこれがロングスタツフ氏が登つた尾根なのだらうか。我々の眼はヒマラヤに慣れてゐないのは勿論のことではあるが、外を見まはしても登れさうな尾根は一つもない。

夕陽は靜かに堆石のかげに沈んで行つた。附近に生えてゐる刺のある草の新芽をつんで、ギーでいためた料理、同じくギーで燒いた羊の腿肉、これが雪崩の音を伴奏とする我々の豪華な晩餐。うすぐらいラムプの下で見交はす皆の顏はすつかり山搢れしてしまつてゐる。ムンシヤリからついて來てくれたマンマシンフがナンダコートについての傳說を話してくれた。

『アルモラ王とグルカ王とが昔戰火を交へた。アルモラの軍勢は次第にグルカの兵の爲に壓せられ、王は遂に死を決した。その時王女、ナンダは敢然として男裝に身をかため戰場に向つた。然し、アルモラ軍は敗戰に敗戰を重ね、王女ナンダも、身を置く處もなくなつてしまつた。ナンダは、遂に山の懷深く身をかくしたのだ。その山がナンダデヴイである。ナンダデヴイはアルモラ、マルトリ、その他二ケ所から良く見える。その四ケ所にはナンダデヴイの祠がある。ナンダコートは、ナンダ姫が寢に來る寢所なのだ。』

マルトリの人達にナンダコートに行くのだと云ふと、「登れるものか」と云つた。これはナンダコートもヒンドゥからは神とされてゐる爲である。ナンダデヴイそのものの本當の意味は一つの性教であるらしい。卽ちリンガーである。型からナンダデヴイやカイラースの樣な山は印度人の性教の對象となり神となるらしい。シバの女王にも關係のある宗教だ。

ヒマラヤを旅行して地圖の誤を見つけ出せないものは餘程どうかした者だと云ふ意味のことをロングスタツフ氏が何かに書いてゐたことを憶えてゐるが、九月一日の我々の經驗は全く如上の言の正しいことを會得せしめた。地圖に見てナルスパン・パツテイと記された地點はかなり閉された、けはしい感じのする處であるらしいと想像したが、想像と實際とは大ちがひで何と云ふ廣々とした處だらう。ナンダデヴイ東峰から南東に走つてナンダコートに連なる尾根はこの兩峰の間にナンダコートの肩と呼ばれる二萬七百四十呎の峰を挾み、この北側に、北からナンダデヴイ・パスとトレイルス・パス Traill's Pass 附近の二凹所をもつてゐるのが、ナルスパン・パツテイから一眼で見えるではないか。考へて見ると地圖にはナンダコートの肩から北東へかなりけはしい尾根が出てゐる筈なのが、このやうな眺望が得られると云ふのは、つまりこの尾根がないからなのである。よく見ると肩から絶壁や階段狀の氷河がつらなつて、忽ち高度を減じ、いくつかのなだらかな草原やガラ場の小さい尾根になつてしまつてゐる。このやうに書き上げると我々がこの地點に臨んでたちまちこのやうに看取したやうに思はれるかも知れないが、實際はかくたやすく地形の觀

念をつくることが出來なかつたのは云ふまでもない。實はナンダコートの肩がずいぶん高く大きいのでこれがナンダコート主峰であるやうに思はれたり、しばらくまごついた揚句、地圖の間違をはつきり頭に入れることも出來たし、また主峰はもつと左手にあつて、こゝからは見えない筈だと云ふことにも氣がついたのであつた。

九月二日雨　午前八時半發　九時半ベースキヤムプ豫定地に到着。幕營設備をなし、大部分の人夫を解雇す。

寒い雨がしづかにふつてゐる中を更に二哩たらず上手にベース・キヤムプを移した。側堆石と山の裾との間の凹地で堆石のつきる處である(一萬五千百八十九呎)。人夫たちは寒さに身をちゞめながら荷をこゝまでしよい上げて、石を轉がしたり、地ならしをしたりして天幕を張り、荷物を積んで防水布をかける。火事の跡かたづけのやうにいそがしい。出來上がつた天幕の中にフエルトのマツトをしき、ぬれた上衣を脱いで暖いスエツターに着更へてスルサンのつくつた砂糖のひどく利いた紅茶を飲む。暖かい茶碗はかぢかんだ手を溫め、茶碗の中にふきこまれる息は顏のこはばりをいやしてくれる。これでアルモラから來た人夫たち四十七人、マンシヤリからのもの七人、マルトリからの案内人二人の役目は濟んだので、出來るだけ早く下の暖い所へ歸してやらねばならぬ。マテルダス、ダンシンフ兩警官が料金拂渡しの面倒を見て呉れる。どうせ貰ふのだから少々早からうがおそからうが構ひさうにないが、それでも無智の淺ましさか、根性の汚なさか、逸早く賃金を貰はうとして緊張し切つた顏をして天幕のまはりで競り合つてゐる。受取の代りに一々拇印を

とるので相當手間がかゝる。歸る人夫には二人について一枚つゞあらかじめ與へてある毛布を分配することにしたが、これも淺ましい爭奪の對象となつた。かくして特にえらばれてベースキヤムプ附近で働く筈の十五人のアルモラ人夫を除いて他の六十人近くのものは解雇した。アルモラで雇つたカンサマのハビジユラは元來ずつとベース・キヤムプにおくつもりであつたにも係らず、彼たゞ一人回々教徒で外の宗派のものとは全く話が合はず、何かにつけて使ひにくいので矢張りかへすことにする。外の人夫たちが我々の與へた酒手で十分滿足してゐるにも係らず、もつと呉れろとねだるが、廣瀨老人とヌルサンにおどかしつけられてひき下がつた。自分は回々教徒だから一緒にアルモラへ歸るヒンドゥ教の多勢のものからどんなにいぢめられるかわからない。これが恐ろしいが我慢をするからもつとはづんでくれと云ふ。これを大きな身體をした、立派にひげを生した男が眞面目になつて主張するのであるから、可哀さうを通り越してふき出してしまつた。彼の人夫たちはサーブたちに暇乞ひに來る。かぢかんだ兩手を合せて「サラーム・サーブ」をくりかへし、我々から直々に貰つた一本の烟草を雨の中で消さぬやう兩手でかこつてのんでゐる。やがて、一人たち三人たちして霧雨の中を下手の推石のかげに消えて行く。この騒きがすんだあとは急に靜かになつた。そのせいか我々も少々濕つぽい心持になつた。マンシヤリから自發的について來てくれたマンマシンフも歸つた。彼に金一封を差出したがどうしても受けて呉れない。どうぞ御成功の上御歸りには御待ち受けしてゐますからと云つて行つてしまつた。このどもりの印度の田舍紳士は我々に快い印象を與へた。

さて愈々今日から山がはじまる。雨の晴れ間を見て食料品其他の梱包をひろげて陽にあてる。中にはひどくいたんだのもあつたが大體において故障はない。ダージリン人夫につかはせる防寒具もほどいて分配したが、こんな古物を未だ貰つたことはない、自分等はいつも新品だつたと云つて不平を云ふ。我々はヒマラヤへ始めて來たものであつて、また贅澤な旅行でないのだから、これで我慢しろ、自分達だつてこの通り有り合はせだ、と言ひきかせて納得させた。

九月三日　晴時々曇　登山用物資の整理を行ふ。

いそがしい一日であつた。日本から持つて來た色々の登山用具と食料其他を一々帳簿と引き合はせて整理する。今まで殆んど頭を使はない、のんきな徒歩旅行をして來た我々にはこの仕事が仲々骨であつた。今日は珍らしく美しく晴れた日で仰ぐ空は一面の桔梗色に澄み切つて居る。山には未だ白い雲がまつはりついてゐて、それが時々山肌からはなれる。晴れた空の下に仰ぐ山々は益々高く砥ぎすまして見えるが、雲がかゝると陰慘な相貌と變つて一段と高さと大きさが增すやうに見える。この壯大な景色の中に二十分間隔で雪崩の巨音がひゞきわたる。烟火と同じことで音がきこえる時には、もう雪崩がある程度まで進行した後であつて、雪崩の通路は濛々の雪烟である。その巨音と巨音との間は想像以上に靜かなもので、頭の芯までしいんとしづまりかへつてしまひ、淋しい心持になつてしまふ。これでこそほんとうの山なのだ。

夕方推石の丘を越して氷河の中の池に水をくみに行つた。手もちぎれさうな冷たい水が、氷の割れ目から

滾々と湧いて出る。氷河の上にも相當崩石や土が乘つかつてゐる關係か、水にはかなり泥がまじてゐて、そのまゝでは飲めない。それでビスケットの空き罐に溜めてしばらく待つてゐると、上の方が奇麗に澄んで來る。これをうまくしやくつて飲料にする。谷が日かげになると、今までの暑さにひきかへ、恐ろしく寒くなつて來る。身を切るやうな風が山頂から吹き下ろして、氷河の上を渡り、我々のテントをゆすつて行く。流石に風までが力強いもののやうに思はれるのもヒマラヤの所故であらう。此日の朝護衛の警官二人はこゝはとても寒くてたまらないから、ローンかマルトリに下つてゐて、一週間に一回づゝ聯絡を取りに來るからと云ひ殘して山を下つてしまつた。これで我々は隊員五人、采領の廣瀬老人、タージリンのもの三人と特に選ばれたアルモラのもの十五人になつてしまつた。昨日から今日へかけて人數が急に減つたので益々淋しくなるが、それだけに他所行の顏をしなくてすむので非常に氣が樂になり、ほんとうに山に入つたと云ふ心持が強くなつた。

今日はまた人夫たちのうち六人をマルトリへ食料の補給を取りに、六人をナルスパン・パツティ方面へ薪拾ひにやつた。

九月四日　晴　山縣は飲料品の整理に當る。他の隊員は十一時半ベースキャムプを發し、登路偵察をなし午後五時歸著。

何と云つても食糧品の配分が最も骨が折れる。山縣は三日一日中つぶして色々工面してあたつたのである

が、それでも仕事が殘り四日もそれにかゝらなければならなかつた。それで手の空いた堀田外三人はアンツエリンを連れて登路偵察に出かける。此の山に關してはログスタツフン氏の記事がある切りでかつ氏のやうな大登山家が選定した登路は、その後山の樣子が特にかはらぬ限り今でも矢張り登路になると思ふので、先づ氏の踏んだ跡を忠實に辿つて行くことにした。ヂオグラフイカル・ジヤーナルに掲載された氏の記事に據ると、此のあたりから急なガラ場の尾根をまつしぐらに登つたやうに思はれるので、我々も天幕から六七間左手の草附きと岩屑の斜面を登りはじめた。つまらない登りであり、それに荷物もないのにとても呼吸が苦しい。それを我慢しながらなほも登りつゞけるとベース・キヤムプが眼の下に見えるやうになつて來た。天幕の屋根には濱野のクラスのものがつくつてくれた日の丸の旗と、山岳部のものがつくつてくれた部の旗とがひら〳〵とひるがへつてゐる。これを見ると無性に元氣が出て來る。さあ、これが挑戰の第一歩だと云ふやうな張り切つた氣持が自から胸の中に湧いて來る。大きくうねり曲つた氷河も全貌を我々の眼下に帶の樣に横へてゐる。下半分は土や岩屑で汚ならしいが、上半分はクレヴアツス・氷河の流をズダ〳〵に斷ち切り、更にその上部がナンダコートのバツトレスの下部の白い氷の壁に續いてゐる。呼吸をつく爲に時々やすむが、その度毎に氷河を吹いて來る清らかに冷たい風が肺に一ぱいになるやう。こちらが登るにつれでナンダ・デヴイ東峰は愈々高く、ナンダ・コートは益々肩幅をひろげて來る。このやうな風景の中をひた登りに約二時間、バロメーターで約千四百八十呎だけ登りつめると視界が急にひらけて、船の甲板のやうな感

じのする平らかなテラスに出た。この高い處にも土があつて倭性のエーデルワイスに、あざみのやうな花、それに野菊そつくりなのが咲いてゐる。土は日本の山の六月頃に後立山の爺ケ岳、種池、又は劍岳の別山平の雪融けのあとに見られるのと同じく鱗形に波をうつてゐる。高さは一萬六千五百呎。

流石視界は廣大である。ナンダ・コートを正面に見るとその左に少し低いが險惡な「ナンダ・コートの肩」がつらなり、少しさがつてトレイルス・パスになるが、また勢を盛りかへして鋭い三角錐の如きローン峰となる。更にスカイラインははげしい鋸齒狀を呈しつゝナンダ・デヴイ・パスとなり、急に傾斜を强めて立上りざまにナンダ・デヴイ東峰となる。西峰卽ち本峰は未だ此處から見えない。東峰の後にはミラム氷河の右岸をなすとおぼしき山が大きな雪と氷の塊をぶちまけたやうに蟠り、山また山で地圖とてらし合はすことなど到底出來ない。東峰から殆んど眞東に出る長い尾根があるが、その上半分は固い氷雪でよろつた八ツ峰の何倍もの素晴らしいものである。しかしマルトリに近づくに從つて岩だけの尾根となる。

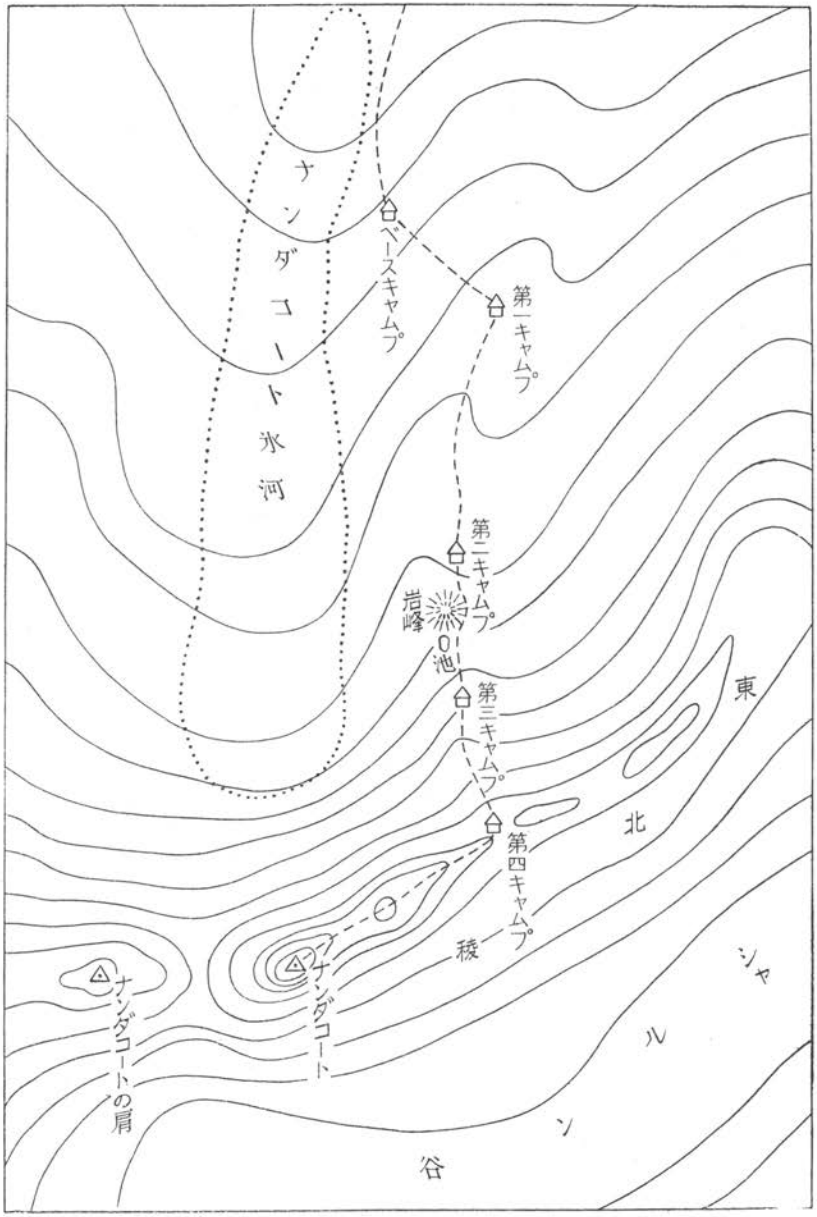
再び眼をナンダ・コート主峰に轉じて、左にうつしかへると、北東尾根が研ぎすました銘刀の刃を見るやうに午後の陽の下にぎら〳〵輝いてローンの寒村にまでつゞく。ローンの寒村の上手にはナルスパン・パツティの綠が見え、そのまた上手でナンダ・デヴイから東へ流れるローン氷河と、ナンダ・コート氷河とがむすびついて、しかもすぐに終つてゐる。十碼も歩くと尾根の突角に立つことが出來て、ベース・キヤムプも見下すことが出來る。この高臺の上に一つキヤムプをつくることにしたら、見通しも利くし何かにつけてと

ても便利だらうと思はれる。三十分の休憩の後我々は尾根に沿つて更に前進をつづけた。約三十分の登高で高さ約三百呎あまりの一つのテラスがある。あたりをよく見まはすと一寸位の太さの燃えさしの木があり、炊事のあとらしく岩屑をつみかさねてかまどのかたちにした處があり、赤錆びになつた空鑵がころがつてゐる。マルトリやローンの村のものがこのやうな處にまで登つて來る筈はない。どうしても三十年前にロングスタツフ氏がナンダ・コートを試登した時のキヤムプの跡だとしか思へない。高さもロングスタツフ氏が記錄したやうに一萬六千八百呎である。さう思ふとこの地點も何となく懷しいものに思はれて、直ちに立去り難い思にひかれて、焚火の燃えのこり一片を拾ひ、携へかへる。尾根が平らかな所故か小池もある。シプトン氏の第一回ナンダ・デウイの紀行によれば同じくロングスタツフ氏がリシ河の畔で營んだキヤムプのあとが認められたさうだ。キヤムプのあとは想像以上に長く殘るものらしい。更に前進をつゞけると遂に雪線に達したものらしく尾根は一面の雪原となつた。我々が進むにつれて前途の多難が益々はつきり感ぜられて來る。この雪原が終る所に一つの大きな岩峰があり、それらの上部では尾根自身が一つの大きな裂目となつてゐて、西側のナンダコート氷河の側の樣子が全然わからないが、東側は急斜面でそれは雪崩のあとと、無數のクレヴアスとに防備されてゐて、この方面を搦んで登ることも出來さうにない。しかもこの尾根が主稜と接する所はコルになつてゐるが、絶えず雪烟をまき上げて風の激しさを思はせる。

雪はだん〳〵深くなり、ザラメ雪でしかも一尺ももぐる。紫外線除けの眼鏡をかけるとさすが眩しくない

が、暑さは甚だしく、帽子と頭の間に雪を入れて見たものもあつた。雪原は次第に荒れて來て、雪の下は氷、その下は水と云ふやうな處もあり、裂目が恐ろしい口があいてゐる所もあつた。雪崩の心配のなささうな處をさがしてキヤムプの豫定地とする。先刻のテラスに第一キヤンプ、こゝに第二キヤムプを置くのは少し贅澤なやうであるが地形上、目下の處これが唯一の術策であつて、この外に策の施しやうがないと思ふ。先づ今日はこの位にしてベース・キヤムプに引上げる。歸途第一キヤムプ豫定地からベース・キヤムプに下る時アンツエリンに命じて左手のいくらか緩傾斜らしく見える谷筋を下らせて見たが、我々がベース・キヤムプに着いてから一時間もをくれて歸着し、その言にすると傾斜はゆるいが遠くて〳〵と云ふ。あまり遠くては一般人夫の通路としてはあまり適當ではないと云ふことになる。夜になつてキヤムプの設置箇所に關する堀田の考が定まつた。卽ち第一キヤムプは今日見て來た土の高臺、第二は雪原の終る所、第三は主稜にとつつく途中にある階段狀地形の中頃、第四は主稜上のコル、場合によつては頂上近くに第五キヤムプを設けるといふのである。また今日見て來た第一キヤムプ豫定地にベース・キヤムプ同樣の設備と物資の集積が出來るならば、第二キヤムプから先の足溜ともなれば非常に行動が樂に出來ることも容易に考へられる。それで明日明後日兩日は人夫を總動員して第一キヤムプ豫定地に物資を運び上げさせ、これを事實上のベース・キヤムプとすることにした。

九月五日　晴　午前午後二回人夫等をして第一キヤムプ物資を運搬せしむ。隊員は休養。



ナンダコート登路概念圖

サーブたちは第二キャムプより先きで便ふつもりの食糧その他を分類して大きなヅツク製の袋に納めるのに急がしかつた。この大袋は天幕の廢物利用である。人夫たちはめい〳〵約三十封度の荷物をしよつてヌルサン以下十人、昨日サーブたちが登つた路によつてアドヴァンスド・ベースキャンプに登つて行つた。出發は八時で、歸着は十一時である。午後はトツプゲイが采領で二時に出發して五時に歸つて來た。幸に一日中好天氣に惠まれて輸送に甚だ順調に進捗して皆のものは氣をよくした。

九月六日　晴一時曇　サーブは細かい準備に從事。人夫はなほ一回物資を第一キャムプへ運搬す。朝九時半發、午後三時歸着。

今日は試みに一人につき六十封度づつしよはせてトツプゲイ以下十一人の人夫を第一キャムプに上らせた。今日は馬鹿に手間がかゝつて九時に出て三時に歸つて來た。サーブたちは休養の筈であつたが事實上そんなことは思ひも寄らずベース・キャムプに殘しておくものをえりわけたり、金錢の始末について密議をこらした。その結果銅貨と銀貨はベース・キャムプの采領をする廣瀨老人に身につけて居て貰ひ、紙幣はそつと寫眞用具の箱に忍びこませておくことにした。晝飯を認めてゐるとマテルダス警部からの使が來て、今日は氣分が悪い故來られない、何か用があるなら傳言をたのむといふので、明日から愈々山かゝるからと言はせることにして早々にかへしてやつた。この使に案内せられてミラムの小學校長とその助手が私たちに會ひに來た。御馳走をしてその好意を謝した。夕食後明日からの行動の打合せの會をひらいた。ヌルサンは天幕

の入口に近い所に座つてただでさへ鋭く見える眼を愈々ひからせて廣瀬老人の通譯で隊長の指圖をうけとる。思ひなしか何となしに物々しい。戰の前夜と云ふ氣配がひし〳〵と心をうつ。明九月七日には隊員全部にヌルサンたち外にアルモラ人夫を總動員して明日中に第二キヤムプを設置し終り、堀田、濱野、トツブゲイ、アンツエリンがこれに止り、他のものは一旦ベース・キヤンプに引返し、更に翌日を期して第一キヤムプを更によく整備する任務につくことゝなつた。そして廣瀬老人はベース・キヤムプで米の飯を炊いて少なくとも第二キヤムプまでは人夫にしよはせて運ばせ、出來るだけ高所での炊爨の勞を省くことにした。この日は一時雲つたけれども大體晴で隊員の心は愈々緊張を加へた。

會談果てて躍る心を抱いて天幕の外に出て見ると、月光が皎々と冴えて遠くのナンダ・デウイ東峰やナンダコートは斜に光に浴びて、白銀と黑と靑とにかゞやき隈られて晝間とは全くちがつた世界のやうに思はれる。氷河を渡つてふいて來る風は向ふ岸の瀧の音をはこんで來るが、その音は何となくこはばつて氷それ自身が流れるやうにきこえる。この音も時々起る轟々たる雪崩の音に掩はれるが、この二つの音だけが生きて居るもので、他のものは一切死の靜寂である。この靜寂の中に我々の天幕だけがかすかにうごめく氣配である。銀と黑との城壁に挑むはやる心に我々は武者震ひがしてならぬ。シユラーフザツクに入つてからも我々は各々の物思ひで容易に寢つかれなかつた。退屈のあまり手を出して烟草を喫ふ、時々眞暗な暗が赤く切りぬかれる。誰かがごそ〳〵と天幕から匍ひ出して入口においてある石油罐の水をごくん〳〵と飲んで居

る。何とかして氣を落着せやうとするが、結局よく眠られない。

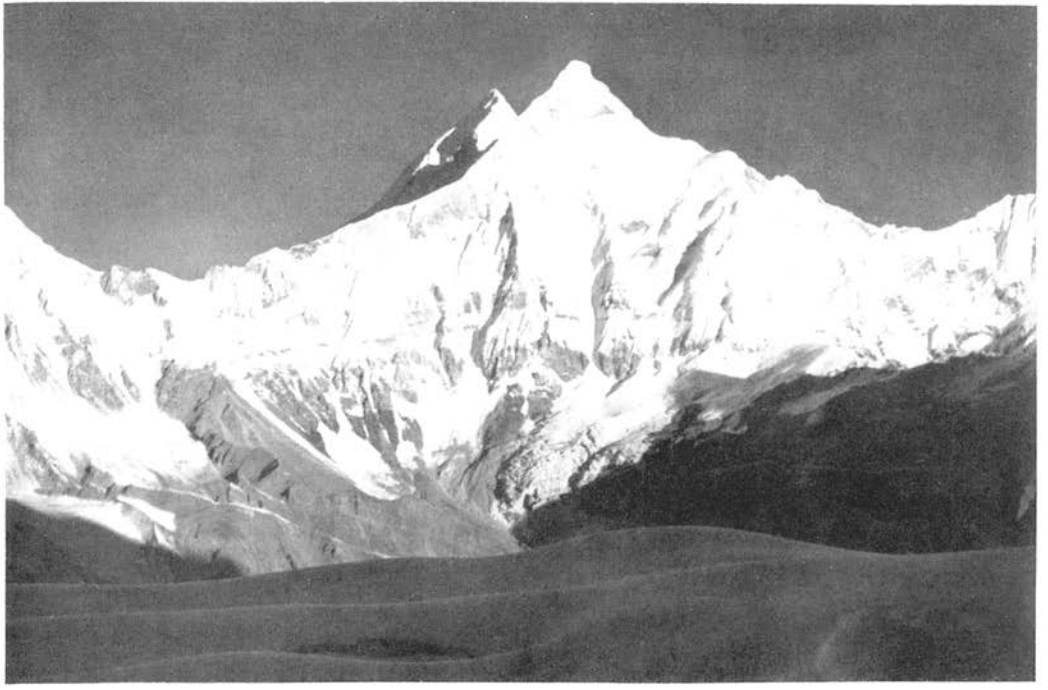
九月七日　晴後曇、夕方より雨　隊員其他全部午前十時ベース・キャムプ發、第一キャムプ豫定地十一時半――午後一時、第二キャムプ豫定地着二時四十分、堀田、濱野、アンツエリン、トップゲイ此處に泊、他は三時半發、第一キャムプ四時十分、ベース・キャムプ歸着五時。

愈々進擊の第一日が來た。未だ日が谷間を照らさぬうちに起き上り、冷い風に吹かれながら支度にとりかゝつた。食事を終る頃には人夫たちも例の如く額に背負紐をあてゝ重い荷を負ふてゐた。やがて彼らは蟲が甫ふやうに徐々と草つきを登りはじめる。我々は廣瀨老人に後事をよろしく賴み、別れを告げてピッケルをつき立てゝ足を踏み出さうとする。廣瀨老人は「行つていらつしやい」とも云ひたいやうに叮嚀な御辭儀をして我々を送つてくれる。口にこそ出さぬ、これが今生の別れになるかも知れない。御互の御辭儀には無限の思が托されてゐる。ふりかへる度に彼は御辭儀をして呉れてゐる。

やがてサーブ達は人夫隊に追ひついてしまつた。彼らを前景にしたナンダ・コート北壁は全く素晴しい景色である。アイモ撮影機をまはしたり、銘々のカメラをふりまはしたり、一時は中々にいそがしかつた。

第一キャムプ地點で第二キャムプに集積すべき物資をより分けて、これをなほつゞけて運ばせる前日どうにかかたをつけておいたので大した手間もかゝらず、やがて十五人の人夫とサーブたちはぞろ〳〵と歩きはじめた。荷物は一人あたり約四十封度ある。アルモラの人夫たちは雪を知らない。それがどれほど冷たいものやら、足がもぐるものやらさつぱり見當がつかぬらしい。雪線に入るに先だつて、裸足に近い草履のみを

つけてゐるものに歸るやうには話してやつたが、あくまでついて來ると云ふ。その上マルトリで大いそぎでつくらせた粗い羊毛織の服をつけてゐるものは七人しかない。靴も同數である。さて愈々草履で雪の上を歩かせて見るととても足許が危ない。一寸した裂目があるととても驚いて、恐ろしさのあまり雪の中にすはりこんでしまふ。どうなることかと心配してゐたが、結局彼らは第二キヤムプ豫定地までついて來た。こゝへつくすこし前に山一面薄霧がかゝつたので少し暑さが凌ぎよくなるかと思つたが、これは大まちがひで暑さは變らず太陽の眩しさも同じで、かへつて視界が狹くなつただけあつ苦しく感ずるばかりであつた。第二キヤムプは第一キヤムプのある臺地の終りにつゞく平らな雪田が、尾根狀地形に向つて急峻の度を增し、約百呎たらずもれ上がつた少さい臺地の上につくることになつてゐる。人夫もサーブも總がかりで雪を掘つて風當りの少ないテントにしやうと試みたが、少し掘ると氷が出て來て、しかも陽光の下でそれが融けて水がたまるので、掘ることは中止しその代り雪を踏みかためることにした。かくして得られた平地の上に古いウイムパーテントと古い布地の蒲鉾型テントを各一張づゝ建てた。たゞ困つたのはテントのペツグで硬氷で役に立つやうにと思つてわざ〳〵高速度鋼のものをもつて來たが、これが全くうちこめないほど氷が固い。それでつまらぬ努力に時を費すことを避けテントの周圍に雪をかき集めその中に竹製のペツグを少し斜にさしこんだ。かうしておけば日中の熱い太陽の光線で雪が融け夜になつたらそれがすつかり氷結して、たしかなペツグとなるであらうと思つたからで、また實際にその通りであつた。この蒲鉾型テントはずつと前に工夫



ナンダデヴイ（第二キャンプより）

“池のコル”よりナンダコート氷河を見下す

したもので、出來るだけ中の面積がひろくつかはれ、しかも風に強く、積雪にも耐えるやうに考へたが、內部の支柱に適當な材料が見つからず、積雪のためにぐしやりとつぶれたやうなこともあつたので、そのまゝ物置に押し込んでおいた。しかし西岡さんの發案で太い籐で支柱をつくつて見たが、今度は大丈夫だらうと思ふし、また大丈夫であつた。ウイムパー・テントの中には食料品、ザイル、捨繩、ピトン・カラビナ等を納め、アンツエリンとトツプゲイの二人をそこに寢させることゝし、蒲鉾型の方に堀田と濱野とが寢ることにした。日本を出る時にヒマラヤの雪はとてもひどくもぐると云ふことを聞いてゐたので信州の輪かんじきを若干用意して來た。さて愈々足に穿いて試みたが、この積雪狀態では全く役に立たぬことが判明した。と云ふのは輪かんじきでふみこんだ雪はすぐに氷に接してしまひ、爪がかゝらない。結局ネイルド・ブーツの方がふみこんだにしても下でしつかり止まるから安心である。やがて一通りの始末が出來たので山縣、竹節、湯淺と人夫たちは雪原をかけ下りてしまつた。そして堀田と濱野と二人のシエルパ人とがゆつくりと夕食の仕度をはじめた。夕方から第二キヤムプでは雪がふり出した。寒さは案外酷烈でなく、テントの外で僅かに零下二度であつたが、これは恐らく天候が未だ動搖してゐるからであらう。雪は一寸位積つて九時頃から星がきらめきはじめた。第二キヤムプに泊つた者は皆多少共身體の異常を感じた。堀田と濱野は前額が痛み、氣分がはつきりしない。アンツエリンは特に何も訴へるべき異常を感じなかつた。一等ひどくやられたのはトツプゲイで頭がひどく痛く、眼は充血し、口邊に絕えず輕度の痙攣が起り、一見して惡性の風邪であるこ

とが明瞭で特に高山病ではないらしい。それで今日は少々我慢をしてベース・キャムプに歸つてゆつくり寢たら良からうと云つてやつたが、彼はとてもこの上歩けないから今日はこの第二キャムプに泊らせてくれと懇願するのでそのまゝにしておいた。日沒後アンツエリンはいつもの習慣によつて經文を誦してゐるやうであつたが、やがてトップゲイのいかにも苦しさうな呻き聲と咳とがきこえるやうになつた。「トップゲイ、アツチヤ、ハイカ?」「トラトラ　アツチヤ」「トップゲイは良いか」「少しは良いです」と云ふやうなことでサーブたち二人は寢てしまつたが、病人は唸りつゞけてゐた。

大急ぎでベース・キャムプにはせかへつた山縣たちは夕方から雨にふられた。人夫たちは雪の上を歩いた御苦勞賃に烟草を一本づゝ貰つて大よろこびであつた。雨はしかし夜の更けると共に降り止んで、星がまたたき始めた。

九月八日　第二キャムプは雪、第一キャムプは雨、ベース　キャムプは雲　前進隊は午前十一時第二キャムプ發、前方偵察、池のコルに達す。歸途別路を偵察して第二キャムプに歸着。トップゲイ病氣のため朝より第一キャムプル下る。第一補給隊、竹節、湯淺及クリー三人は午前十時ベース・キャムプ發、第一キャムプ着十一時半、休憩及整備一時間の後出發第二キャムプ着二時十分。クリーは直ちに第二キャムプに歸る。

第二補給隊、山縣、ヌルサン及クリー九人は第一補給隊と共にベース・キャムプを發し、大部分の物資を第一キャムプにうつし、此處に泊。

次の朝はベース・キャムプでは曇天であつた。山縣はヌルサン以下アルモラ人夫九人をひきゐて第一キャム

プを設置し終つた。そして大部分の物資はこれまで引揚げてしまつて、事實上のベース・キヤムプにした。こゝでは雨が蕭々と降つてゐた。そして山縣はアルモラの人夫二人をこゝに止めて、下のベース・キヤムプや、第二キヤムプとの連絡をはかる。一方竹節、湯淺は人夫三人を連れて谷間のベース・キヤムプを出發し第二キヤムプに入つた。皆相當の荷物を背負つてゐたが休憩時間を除き三時間十分を費した。人夫を早速に谷間にかへしてサーブ二人は第二キヤムプに止まつた。前進隊ではトツプゲイの病氣と云ふ大事件にぶつかつてしまつた。夜が明けても彼はなほ少しも良くなる見込が立たぬ。彼は一人で良いからヌルサンの居る處へ歸りたいと云ふので、その希望に任かせて出發せしめた。もし途中で倒れるやうなことがあつても今日は下から補給隊が登つて來る故救援は出來ると云ふ見込があるのでいくらか安心して眼を放したのである。彼は全身からすつかり力がぬけてしまつたやうにピツケルに縋つてそろ〳〵と匍ふやうに下つて行く。その後姿に我々は云ひしれぬ可哀想な氣持を起した。殘つた三人はオートミールの朝食をすませて、直ちにアンザイレンしてテントを出た。高度に慣れたせいか、堀田も濱野も頭痛がなほつてしまつた。雪雲が谷一ぱいにひろがつてゐて、山頂は勿論見えず、大きく云へば眼の前だけが見えると云ふ天氣である。見當をつけて少し登り出すと縱横に雪田が割れて、その割目の底は青い氷である。この色を見ると何だか無性に恐ろしくて、足がすくむやうな氣がする。右に左にこれらを避けながら登つて行く。ある時には比較的淺い割目の中に入つて、その壁に足場を刻んで上に登つたり、危つかしい雪の橋をわたつたりするので中々緊張する。雪は足首

までもぐり、しかもすぐにその下は氷で足許があぶない。霧に捲かれてゐるために雪崩は見えないでたゞ音がきこえるばかり。音だけでどの方面から出たかを推察するのは中々困難である。今日は急な出尾根の岩峰の上まで偵察しようと云ふわけである。行けども〳〵岩峰には達しないし、傾斜はだん〳〵強くなつて來る。三時間も雪と氷とクレヴアスになやまされた揚句やつと岩峰の下に辿り付くことが出來た。もう二時である。この岩山は急なためか雪があまりついてゐない。我々は向つて右側の雪と岩との間を縫つて登らうとした。それには岩峰めがけてクレヴアスの出來た急な雪面を眞直に登るより外に途はない。さて愈々登りにかゝつたが、岩山の裾は一面のクレヴアスだらけで足のおき處さへ無いやうに見える。せめて一尺か二尺の巾のある畝狀の氷が見つかればそれをつたつて登れるのだが、それすら中々見付らぬ。左右の谷の側へ低く捲くことも出來さうにない。ピツケルであちこちをつゝきながら、惡路を歩む按摩よろしくの姿で岩山の裾の雪の切れ目めがけて登つて行く。霧は愈々ふかくなつて視界は益々狹少となり、眼に入るものはたゞ雪と氷と白い深い霧。この惡闘の後クレヴアス地帶を通過してどうにか固い雪だけの處に足を入れることが出來たが、そこはずいぶんな急傾斜であつた。やがて雪田は岩と接して堅氷を一方の壁とし、他方の壁が岩である處のベルクシユルンドに入りこみ、氷の側にステップを切りながら登ることが出來た。この氷の足場刻みは、實につらいアルバイトだ。いつの間にか岩山を捲いてしまつたと見え、コル狀の地點に立つことが出來た。それに何と有難いことだらう。そこには眞白な狹い雪面のなかに清らかな池があるではないか。我々は飽か

ずこの水を飲んだ。高度計を取り出して觀測すると約五千七百米（一萬八千七百呎）である。こゝを池のコルと假稱する。しばらく休んで息を入れてゐるうちに霧が幾分高くなつて來て第二キャムプの天幕をかこむ雪田を補給隊が蟻のやうに登つて來るのが見えた。これを見て急に思ひついたわけではないが、今通つて來たクレヴァス地帶と急なベルクシュルントとは荷をかついではとても苦しい道になるだらうから、何とか別の登路を見つけなくてはなるまいと感じた。それで色々頭をひねつて考へて見た末、岩山を尾根通し上下出來ないかを試みて見ることになつた。それで尾根の上部偵察は明日のことにした。岩峰の登りは池のコルから四、五米のほんの一寸した登りである。下りにかゝると案外手剛いと云ふことがわかつた。それはこの岩山は水成岩の相當古くなつたので出來てゐるらしく岩が甚だ不安定でこまかいバランスで下らなければならぬ。これを荷物をしよつて登ることは到底思ひも寄らぬ。この細い尾根を下り切ると雪になるが中々急である。アンザイレンしたまゝグリセードで下る。やがて雪が惡くなつて靴に團子がつき出す。眼下にはナンダ・コート氷河がセラツクとクレヴァスを用意して上からころがり落ちる者を一のみにしやうとしてゐる。幾分傾斜がゆるくなる部分と我々が先刻登つた雪の急斜面との間にはまた大きなクレヴァスがあつた。大骨折りをしてやつとのことで雪田に下ることが出來た。妙に生溫くじと〳〵した霧と時々降つてくる霙のためにづぶ濡れになつた身體を天幕まで運ぶと、湯淺、竹節が到着して居て、うまい紅茶を沸してゐて呉れた。この紅茶は勿論雪を融したものであるが、聞くと中々いつまでも沸かなかつたさうだ。

トツプゲイのことが氣になるので聞いて見ると、湯淺たちと彼とは第一キヤムプで出會つた。彼はサーブ達の姿を見たので急に氣がゆるんだと見え、地面の上にくづれをれてしまつた。山縣とヌルサンは彼を介抱して靴のまゝシユラーフザツクに入れ茶を飲ませて溫かにしてやつたといふ。

この夜の第二キヤムプは非常ににぎやかであつた。下から持つて來て吳れた米の飯をおじやにして馬鈴薯なども加へて溫い食物をつくつた。今日の勞働で空腹になつた前進隊のものは大いに食慾を滿足させた。トツプゲイは歸つたが、湯淺、竹節の元氣な顏が二つふえたので氣が輕くなつて話もはづむ。しかし話は今日偵察した登路をはなれない。それほど今日の試登は手剛いものであつた。しかしやがて高度に馴致すればこの困難も大したことであるまいとの自信がついた。この希望に滿ちた話の間にちら〳〵と黑點を印するのはトツプゲイのことである。もし彼の病氣がひどくなつて働らけなくなれば、たゞでさへ少ない人數が益々少なくなり、シエルパたちも落膽して充分に能率を發揮しなくなりはしないであらうか。それに病氣ときまつたら相當の手當もしてやらねばならず、財政狀態は惡化するであらう。ともかくトツプゲイによくなつてもらひたい。欲得をはなれて一人の人間が苦しんでゐると云ふことを思ふのが今の場合においても我々にとつてはつらいことである。夜になると雪は橫なぐりにふりはじめた。眞綿と羽毛のシユラーフザツクに入つて居ると身體は大して寒くはないが、鼻の頭がひどく冷たく感ずる。四人すしづめの蒲鉾型天幕は暖いことは有難いが三人用テントであつた爲ねかへりも出來ぬほど窮屈であつた。

九月九日　第二キャムプは雪、第一キャムプは雨霙　堀田、湯淺、濱野第二キャムプ發十一時、第一キャムプ着十一時半、トップゲイの症狀惡化につき下山せしむることに決し、連絡のため堀田ベース　キャムプに下る。竹節及アンツエリンも午後第一キャムプに下る。

九日天幕の外へ出て見ると雪がしん〳〵とふつて居る。軟かい新雪が三四寸にもなつて、雲がどんよりとあたりを立てこめてゐて、たゞ重苦しい壓迫を感じる。しばらくはふりやんだがまた〳〵ふりはじめた。これでは今日はとても行動は起し得ないので、同じ休養するならば第一キャムプの方が良いし、それに折角しよひ上げた第二キャムプの食糧の無駄使ひを出來るだけ防ぎたいとも思つたから、十一時頃堀田、湯淺、濱野は竹節とアンツエリンをこのキャンプに殘して下ることに決心した。第一キャンプの附近も昨夜から小雪で岩かげは處々白くいろどられ、陽のあたつた處はしめつぽくなつてて〳〵日に輝いてゐる。第一キャムプ卽ち前進せるベース・キャムプには大型の屋根型天幕一張、シエルパの人夫のために小型天幕一張、アルモラの人夫のために屋根だけの天幕に石を重ねて風の入らぬやうに工夫したものが一張設けられてゐて、山縣とヌルサンとアルモラのもの三人がこゝの主になつてゐた。こゝへ歸つて見るとトップゲイはいまにも絕え入るかと思はれるやうに苦しい咳を間斷なく發して居た。ヌルサンは心配さうに額に深い皺をよせて、左手に念珠をかけ、右手には山縣から貰つたホメオパシー藥の少さい粒を「チエ、ニイ、スン、シイ、ガー」と數へて居た。病人は苦しくて談話も出來ないらしい。醫學の知識のない我々にはどうにもしやうがないが、ともかく病氣は急性肺炎らしい。湯淺が一度やつたことがあるのでその經驗から推して察するだけのこ

とである。ともかくこのやうな高い處へおいておいては良くならうにもなれない。何とかして出來るだけ暖い氣壓の高い下界へおろさなければならない。一方天氣はます〳〵惡くなる。これでは第二キャムプから上は到底登行不可能であると見込がついたので倔强のアルモラのものに手紙をもたせて第二キャムプに居るものを呼びかへすことに一決して早速出發させた。堀田は谷間のベース・キャムプでトツプゲイの善後策をマテルダス警部と相談するとて、大急ぎで下つて行つた。翌朝ベース・キャムプからアルモラ人夫の頭トシヤをマテルダス警部の居るローンに走らせることになつてゐた。日沒に近い頃雨にづぶぬれになつて竹節とアンツエリンが歸つて來た。惡天候と病人、底冷えのする氷雨。これは我々を憂鬱ならしめるに十分以上の材料である。夜もすがらトツプゲイは咳をし、唸りつゞける。時々ヌルサンの誦經の聲がきこえて、寢るに寢られぬ一夜であつた。

九月十日　霰及雪　　トツプゲイ朝十時半第一キャムプ發山縣、濱野其他人夫に附き添はれベース・キャムプに下る。

次の日雪まじりの風雨の中をトツプゲイはビツケルにすがり、黑い粗末な毛布を頭からすつぽりとかぶせられ、ヌルサンの肩にすがつて急なガレ道を下つて行つた。意識も朦朧として居るらしく眼附きも定かでなくよろめいてゐる。高い熱の爲にがた〳〵ふるへてゐる。ベース・キャムプから迎へに來た三四人のアルモラ人夫に前後左右から手取り足取りの有樣が、この間からの元氣な彼の記憶と對稱をなして云ふことの出來ぬ憐れさである。濱野も山縣も後見について行つた。丁度ひる頃マテルダスがベース・キャンプに來た。マ

ルトリには醫者も居り、一通りの藥もそなはつてゐると聞いて一先づ安心し、ともかくローンまで下ろしこゝで醫者に見せてもう少し樣子を見た上でアルモラなり、ダージリンまで歸らせると云ふことに相談を定めた。それにしても今日はもうおそいからこゝで寢せておくことにきめる。

處がまた我々を震憾させる出來ごとがマルトリ附近の山の主デワンシン老人の口から傳へられた。英米聯合登山隊がナンダ・デヴイを目ざして出發したことはアルモラで聞き知つたことであるが、その人たちが、八月廿九日完全にナンダ・デヴイ本峰に登頂し、そのうちの若干名がナンダ・デヴイ乘越を通過し、ローンの谷を下り、マルトリに出たと云ふことである。しかし氣の毒なことにはマルトリへ出ることについて事前に許可を得てなかつたため、マルトリの警官ダンシンフに捕へられ、ハイム博士のやうに監禁旅行でアルモラに行つたさうである。こちらはトツブゲイに病氣になられ、天氣は惡化する。その上ナンダ・コートはナンダ・デヴイの子のやうなもので、親たる主峰が登られてしまつた後には、我々のくはだてはまるで詰らぬものゝやうに思はれる。それもまだ登つてしまつたのではない。これからどうなるかわらない。もし登れなかつたらと思ふと居ても立つても居られない氣持になつてしまふ。新嘉坡だかの新聞に「日本人は近頃少し逆上してゐるから、ヒマラヤの雪で少し頭を冷して來たら良からう」なんて書いてあつたことまで思ひ出した。いよいよ、試登だとか、實驗だとか云つては居られない。

歸途は同じ道を通るのも面白くないから、トレイルス・パスを越して見ようと思ひ立つて、早速マテルダ

ス警部に依頼して旅行許可書をとり寄せて貰ふことにした。かうしておかないと途中で捕まつたら大變である。

九月十一日　雨、雪　トツプゲイ　午前八時半ベース・キャムプ發、マテルダス警部外クリー二人附添、湯淺及クリー第一キャムプよりベース　キャムプへ。午後三時堀田、山縣、濱野、湯淺、ヌルサン、外クリー二人、ベースキャムプ、第一キャムプへ。

十一日の朝寒雨の降り頻る中にマテルダスをはじめ人夫たちに介抱されながらトツプゲイはローンに下ることになつた。給料とボクセス（心づけ）を與へると羽根蒲團のシュラーフザツクの中で手を合せて、涙を流しながら折角こゝまで來ておきながら、山頂どころか自分らが不要になる所までも御伴出來ないのは殘念至極だと云ふ意を繰返し〳〵口說き立てる。いざ出發となつてからも幾度となく「サラーム・サーブ」の挨拶をくりかへし、合掌の敬禮をしながらふりかへり〳〵雨にけむる堆石の陰にかくれて行つた。我々はマテルダス警部に彼の健康のために萬全の策を講じてくれるやう、理由のある費用ならいつでも支拂ふ用意があることをよく云ひふくめたが、これが現在の我々のなし得る唯一の慰藉である。ヌルサンは途中迄まで附添つて行つた。この別離はまことにうらがなしいものゝ一つであつた。我々の心の眼からあの憐れな後姿は終生離れてしまふことはないであらう。

この忠實な部下を失つたため殘つた我々は彼の仕事を分擔しなければならなくなつた。さればと云つて我々が急に荷物を多量にかつぐわけにも行かないので、人を失つた上は要するに日限を長くして目的貫徹をは

かるより他に途はない。しかしヒマラヤにもやがて嚴しい冬は來るのだ。一日も早く登らなければならぬ。とゞのつまり出來るだけ事を急ぐが肝要なのである。我々の心は皆この一點にあつまつた。ひるごろ湯淺は人夫を一人つれて第一キヤムプから谷間のベース・キヤムプにおりて各種の聯絡と熟議にあづかつたが、ゆつくり休息することもなく、三時頃をりから雨も小降りになつたので彼は堀田、山縣、濱野と共に第一キヤムプにとつてかへした。ヌルサンもアルモラのもの二人をつれて上のベース・キヤムプに戻つて來た。かくして我々はまた待機の姿勢をとることが出來た。

九月十二日及十三日　雪、雨　各隊動かず。

十二日の朝第一キヤムプで起き上ると新雪が一寸程テントに積つてゐる。流石に谷のキヤムプは白くなつてはゐないが下方の尾根は途中までうつすらと化粧してゐる。これで惡天候は五六日つゞいてゐるが、今日もからりと晴り上りさうにもない。心は焦燥するばかり、何ともしかたがなくて今日も天幕の中でごろ〳〵寢そべつてばかりゐて、飯時にサーブが臨時カンサマになつて自慢の腕をふるひ、天ぷらまでが給仕せられる豪遊ぶり。食物が豊富なのでこの點の心配はなくたらふく食べることが出來るのが有難い。谷のキヤムプから使が來てトツプゲイは途中無事で昨日午後二時ローンについたことを知らせて來た。我々はこれで一先づ安心をすることが來た。次の日も前日にまさる大雪で第一キヤムプ附近は五寸位で天幕の屋根が重さうにたるんだ。時々日光が霧を破つて洩れて來るが、それは全く僅な間のことで結局は霧と霙と雪の一日であ

る。時々霧が切れるので谷のキャムプを覗いて見ると、そこも眞白で人夫の天幕と食料品の天幕はつぶされてゐた。竹節は高山植物の整理のために谷のキャムプに下つた。聯絡の人夫が下から上つて來た。トツプゲイがヌルサンに宛てた手紙を携へて來た。

『ローンにて人夫頭トツプゲイ

トツプゲイは十一日午後二時ローンに着きました。堀田バラサーブ他日本の五人のサーブ方にトツプゲイは心から御禮を申上げます。私は十二日十三日は此所に止まり、十四日には下山致します。醫者は要りません。私のために費す金があまり多くなります。ですから私は行きます。私は此所に留まることは出來ません。』

この手紙はマテルダス警部に代筆して貰つたのださうだ。彼は如何にも東洋人らしい遠慮から私たちに出來るだけ迷惑をかけまいとする。その心根のいぢらしさは同じく東洋人なる我々を深く動かした。かくして彼は水牛の背に乘せられてゴリ河のほとりを下つて行くのであらう。午後三時頃から吹雪となつて天幕はゆすられ、雪煙が山腹をかけまはり、雪崩の音は間斷なくきこえる。凄壯なヒマラヤの嵐である。第一キャムプであるからこそのんきにながめてゐられるが、高いキャムプであつたならどんなに物凄く、心細いことであらう。

九月十四日　晴　午後堀田、濱野、湯淺、アンツエリン第一キャムプ第二キャムプ往復、五時歸着、竹節第一キャム

プに入る。

十四日になつて待つた晴天がとう〳〵惠まれた。太陽は紺碧の大空に晶々と輝き、白雪はたちまち銀となつて光りはじめる。この冴えわたつた天候に我々の腐り切つた心は奇麗さつぱりとぬぐひ去られ、子供のやうに雪の中を跳ねまはる。ヌルサンとアンツエリンの二人は雪で大きな人形をつくり眼鏡をかけ、山刀やピツケルを持たせてダージーリンのキツドサーブだと云つてよろこんでゐる。今度はそれをこはして馬をつくり、その上にまたがつてハイシドウドウとやつてゐる。十一時頃食糧の空箱、空鑵の類を程よくならべて椅子や食卓にし、輝かしい日の光の下で久しぶりに氣持の良い食事をした。その間に竹節がアルモラの人夫頭トシヤを連れて登つて來た。竹節の話によると昨夜來の雪で谷のキヤムプは相當ひどくやられたのでアルモラの人夫が恐ろしがり、暇をもらひたいと云つて騒ぎ出し、トシヤが一同を代表して陳情に來たのださうだ。谷のキヤムプの留守居廣瀬老人の手紙には次のやうに記されてゐる。

『今朝積雪四寸程せしためトシヤ始め苦力連中の天幕ペシヤンコにて昨夜は苦力連中もはや死ぬものと覺悟云々して今朝來早朝よりバラサーブ並にチヨキサーブ連中並に苦力一同も全部マルトリに行き避難云々の由來り候誠に笑ひ草のやうなるもともかく苦力連中のうち多少はベース・キヤンプに殘し置くべくお辨當運びの外薪が重大問題にして是非ともナルサンにマルトリにて武裝せしめ人數は如何にしても殘留方取計ひ度く候（中略）トシヤを代理として差向け候間篤と御相談あり度願ひ候也』

この趣をヌルサンによく云つて聽かせると、彼は合點してトシヤに向つて大いに眞面目くさつて說法を加へた。歸りたかつたら歸つても良いが、十四日間の給料は支拂はぬし、アルモラの知事さんに云ひつけるがそれでもかまはぬかと云ふのださうだ。ともかくおどしつけたり、もち上げたり、なだめたり、すかしたり談合數十分にわたつて、ともかくアルモラの人夫は留まることとなつた。雪をはじめて見た人夫が寢てゐる最中天幕につぶされたのだから驚いたのはもつとも至極だが、避難したくなるほどおそろしいのであらうか。この心理は一寸わからぬ處があるが、それが文明人とちがふ處なのであらう。ともかくこの一騷ぎは無事に納つて良かつた。ヌルサンの折衝の勞を多とする。

それにしても第二キヤムプはどうなつたらう。この雪と風で滅茶々々になつて居はしないだらうか。それならそれのやうに處置をしなければならぬ。ともかく九月も半ばになつてしまつたのだから、すべて事を迅速に取りはこぶ必要があるので、人夫騷ぎが納つたのを見すまして堀田、湯淺、濱野がアンツエリンを連れて檢分に行つた。この間からからだを樂にしてゐたせゐか、煙草をすひすぎた爲か歩くと呼吸が多少なりとも苦しいやうに感じた。通りなれた道である故、新雪がもぐり陽光はうだるやうに暑いけれども道は渉り、大した苦勞もなく第二キヤムプに到着した。この邊では新雪が一尺あまり、天幕の上にも同樣に積つてゐるが、幸に故障は少しも起つて居らず、たゞ布がいくらかたるんでゐるばかりである。早速雪を掃き下ろし、周圍をふみかため、繩のゆるみをなほす。この作業の間たゞひどく暑く、汗はだく〳〵流れる。周圍の山か

らは新雪の雪崩がやすまず落ちて、山全體が轟々と鳴りひゞく。修理作業を完うして持つて來た食糧を天幕に收め歸途についたが、今日の暑さは甚だしいものであつたらしく、僅か四、五時間の間に第一キャムプの雪は奇麗さつぱりと融けてしまつてゐた。

夕食後現下の狀態に應ずる計畫を立てた。それは先づ山縣は上の方のキャムプから何か指令があるまで兵站部の仕事をやるため第一キャムプに留まり、第三、第四のキャムプに運び上げる物資の整備及び谷のキャムプを通じてマルトリとの聯絡を司ることとし、湯淺と竹節は第一キャムプに待機していつでも前進隊に加はることが出來るつもりで居り、堀田と濱野とはアンツェリンをつれて明日第二キャムプに入り、明後日以後それよりも上方のルートの開拓に從事すると云ふのである。

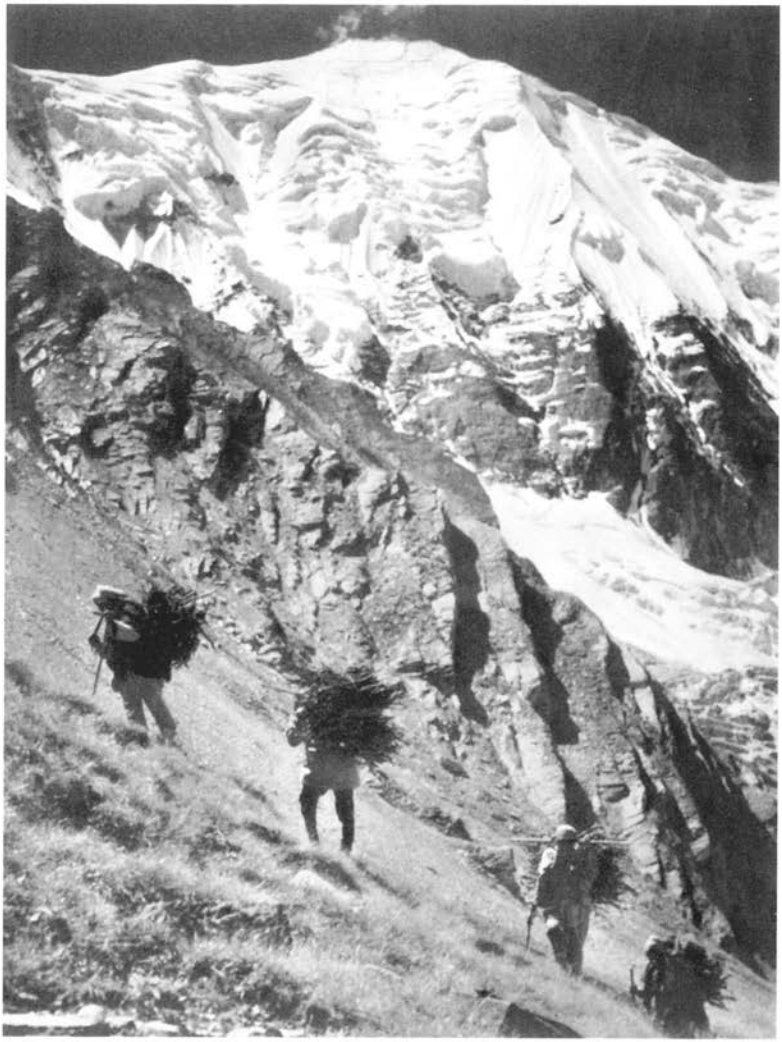
九月十五日　曇、一時雪　午後二時半前進隊堀田、濱野、アンツェリン及クリー第一キャムプを發し第二キャムプへ。クリーは第一キャムプに歸る。

明けて十五日は決して香ばしい天氣ではなく、霧が往來して視界は狹い。モンスーンの南風と、晴を知らす西藏からの北風とがナンダ・コートの頂上附近で攻略戰の最中であるらしい。未だモンスーンの方が優盛であるらしい、雲は東北稜を越えて、こちら側へ移動してゐる。この間に前進隊の三人は雪原をよこ切り第二キャムプに入つた。しかし有難いことには夕刻になると北風が勝利を得て雲は消散し、赤い炎のやうな夕燒の陽光に山頂は美しくいろどられて浮び出て來た。このやうに天氣が良くなつたからには前途を出來るだ

けいそがなければならぬ。それには通路の開拓が先決問題で、人手の多い方が疲勞も少なくて便利である。幸に竹節と湯淺とが待機してゐる故、多少昨夜の計畫とはちがつて來るが、この二人に第二キャムプ以上の材料及び物資をもつてこゝに來てもらひ、また山縣も仕事を出來るだけ早くすませて、あとはヌルサンにでも托して、登山そのものには加はるやうにしてもらふこととして、この趣を紙にかきつけ、第一キャムプから荷持につれて來た二人の人夫にもたせてやつた。

九月十六日　晴　湯淺、竹節午後第一キャムプより第二キャムプに入る。第二キャムプにありし前進隊は整理のため前進せず。

十六日竹節、湯淺は天幕其他を携帶して第二キャムプにやつて來た。これで天幕は三張りとなつた。この日一日はまた整理に忙がしかつた。場所が狹いのと、それに高度の所爲か仕事が敏達に進捗しないので大したことでもない整備にかなりの時間がかゝる。我々が登らうとしてゐる東北稜からの階段狀地形をなす出尾根の略中間の段が第三キャムプの豫定地である。こゝから見ると實にあぶなつかしい所で、あんな所にキャムプが出來るだらうかとうたがはしくなる。それにもつと上を見るとなほさら心配なことがある。それは北尾根が東北稜とむすびつく少し北側にコルがあつてこれに第四キャムプを設置して、頂上往復をもくろんでゐるが、この二地點間の距離が非常に遠く見え、果して一日で往復出來るのだらうか。出來ない方が當然なのではなからうかとも考へる。もつとも場合によつてはこの間にもう一つ天幕を張るつもりでもある。しか



ナンダコート（第一キャンプへの途上より）

ナンダデヴイ（第一・第二キャンプの中間より）

しそこまで行つて見なければ何も具體的に解決しない。思へば前途遼遠である。いつどこで見ても立派なのはナンダ・デヴィである。今これを見るのは實に癪の種である。ほんとうに登頂したのだらうか。千九百三十四年のシプトンのこの山への遠征にからまるパサンとクサンの話になると、アンツエリンは夢中になつてしやべり立てる。こんな天氣に、日向ぼつこをしながら山の話をするのはまことに愉快至極のことである。學校の連中がもつと大ぜい來て居たらどんなに嬉しからう。すつかり始末をして早く寢る段取りをする。夜天幕から出て見ると月は皎々とかゞやき、山はたゞしづかに凍結して、たゞ雪崩の音をきく。

九月十七日　晴　堀田、濱野、竹節、アンツエリン前進隊となり、第三キャムプ地を求むるため登高し、第二キャムプに歸る。湯淺連絡及物資補給につき第一キャムプへ往復、山縣第一キャムプに滯在し食糧の分類整理をなす。

高い東北稜に東を遮斷されてゐるために、此所にはなか〳〵日が當つて來ない。それまでは耳がちぎれる程寒くて外へ出て歩くことがたへられない。山頂だけはもう日をうけてうす紅に燃えて居て、それを見ると元氣が出て、防寒具を全部身につけて立ち上る。八時二十分。外の雪面に立つて足の先が靴の中でじいんと鳴るやうに凍える。すつかり水氣を失つた粉雪が古い雪の上に乘つたのでとてもよく滑る。前回に苦しめられた岩峰への登路は最短距離の樂な路を見つけたのでそれに從つて右折左折してクレヴアスをさけ、足場を切つて登つて行くが、身體の端々がひどく冷えて全く感覺がなくなる。やがて岩峰のさきのコルに來たが、このつめたさではとても我慢がならないので陽があたるまで、待つてゐることにした。アンツエリンはピツ

ケルで靴の踵をたたいてゐる。眞似をして見るとたしかに血がめぐつて來る。また靴をぬいで足を揉んで見たりした。陽はだんだんとそこらへ進んで來て谷は明るく輝きはじめる。陽のあたるその瞬間我々の見て居る前で雪の塊がころがり出す。それがたちまちにして雪崩を誘ひ出して、靑く凍結した雪崩みちをすべり落ちて行く。それと共に轟々と谷がなりはじめ、下の方から雪烟が高く中天まで捲き上がる。それが靜まつたあと、そつと覗いて見ると谷の氷河の源には扇狀の雪だまりが出來てゐる。このやうにして日の出には谷は雪崩のつるべうちによつてひゞわたる。我々の身體に陽光をうけるともう上衣もヴインドヤツケも不要であるほど暖かになつて來る。この勢で腹ごしらへをして早速登りにかゝる。アンツエリンが先頭である。やがて堀田か濱野がこれに代ると云ふやうにして雪の中を只管に前進するが雪が膝までもあるので相當骨が折れる。右手はまつすぐにナンダ・コート氷河に落ちる斜面なので氣味の惡いこと甚だしい。それに尾根にまで氷の裂目があり、比較的小さな段々が出來てゐる。二百呎も登つたかと思ふと一寸平らになるがすぐに壁狀の氷があらはれる。壁の下は大抵吹き溜りで雪がふかく、これを泳ぐ樣にわけて壁に近づくと、クレヴアスともベルクシユルンドとも云ふことの出來る溝があり、これを何とかして越して氷壁にステツプを切ると云ふ手間がかゝる。吹きだまりのラツセルで一稼ぎ、ステツプを切つて登るのにまた一稼ぎで、僅か三四十呎の壁を登るのに一時間もかゝる。これを登り切ると深い雪の緩斜面になる。右側は甚だ急傾斜で一寸雪の粒がころがるとそれがまはりの雪を誘つて大變な勢でざあ〳〵音を立てて谷に滑り落ちる。左側も急斜面だが

これはまた氷の裂目だらけで、時々この裂目が尾根をおかす。非常に大きな裂目が出來て、その下の方が三四十呎ずり下がると、今登つて來たやうな氷壁になる。つまり右へおちても左へおちても先づ生命はないと思はねばならず、うつかり前後にころんでも場合によつては少々心細い。緩傾斜が盡きるとまた氷壁、今度は前程高くはなかつたがやはり骨が折れることは前と同じ。氷壁は陽光を遮るためにこのあたりでは寒さがひどく、ことに足はたまつたものではない。今度の氷壁の前にはコルニスが出てゐて、これを避けるのに右へへつりしてやつと手うすい所を見つけ、これを破つて上に出た。もう一つ同樣の壁があつたが今までの例によつてのりこえることが出來た。

今まで脚下や、眼の前に迫るつる〳〵した氷の面や、せいぜい左右の谷のみを見て來て、上を見ることはできなかつたが、緩斜面にありついたので山頂を仰ぎ見ることが出來た。驚いたことには頂上が非常に近づいて來たことであつた。大きく云へば手がとゞきさうに見える。頂上は下で見た通り屋根形をしてゐるが右肩下りになつてゐることもわかるし、下から見てあれを登らうと思つてゐた左側のゆるい尾根もそのなだらかな風貌を一變して、磨きあげた鋭いナイフリツヂになつてゐる。しかし我々は正に東北稜から出る北尾根の半ばに達してゐる。すでにナンダ・コートの山そのものに登りつゝあるのだ。このよろこびも前面の氷塔を見ることによつていくらか殺がれてしまふ。高さ二百呎以上もありさうな氷の塔が尾根の上に立ちはだかり、すつかり通せん坊をしてゐる。その上部は二つに裂けてゐて、この割目には青い氷がぎつしりと詰つて

ねてとても硬さう。これは中々手剛い奴と思つたが、どうしてもこれをうまく片附ける方法は見つからぬ。時計を見るともう一時半である。これから大仕事をするにしては時間が不足で、持つて來た重い荷物を雪の穴に埋めて身體を樂にして、氷の塔を觀察することにした。いろ〳〵見たがこの塔に達すれば氷の塔の下にたてに通つてゐる細い氷のガリトを登るより外にない。左右の壁から雪崩がこれを通るので、出來るならばあぶない處を通りたくないのだが仕方がない。そして塔の根本について、今度は左よりに捲いて見やうとした。それから先きは見透しがつかないが、地形上やむを得ない。今日はこれまでとして下りには通路を補修する作業に取りかかつた。上の二つの壁は大したことはないが一等下のが困りものだと思ふので、これに繩をつけた。ピトンをうちこんで百呎のザイルを取りつけるが、雪の所にピトンは利かない。アンツエリンは「サーブ、ガラン、パニ」(湯を下さい)と云ふ。何のことかと思つたがやつと讀めた。彼の注文通りの方法でピトンを固めて第二キヤムプにかへつた。第二キヤムプ近くの雪は原傾斜が程良く、雪も良質で流石に竹節はスキーが欲しいなと喫いてゐる。今朝連絡のため第一キヤムプに往復した湯淺は谷のキヤムプの廣瀨老からの通信を持つて來てくれた。谷のキヤムプで人夫が二人發熱してローンまで下らせたこと、デワンシン老人が我々に助力しやうとしてゐること、卵が要るならとゞけることなど書いてあつたが、トツプゲイがマテルダス警部の保護の下によほど快方に向ひ、小馬をやとつてもらつてアルモラに向つて出發したことが報告されたので我々はよろこんだ。第一キヤムプでは山縣は首をひねりながら食糧の配分をやつてゐた

ことも話してゐた。

九月十八日　晴　堀田、濱野、湯淺、竹節、アンツエリン第二キャムプ發午前十一時、第三キャムプ設備用物資をキャムプ豫定地に揚ぐ。豫定地着二時、三時發四時半歸着

山縣　第一キャムプを發し第二キャムプに入る。

ともかく例の氷の塔は大分手剛いから、そのすぐ近くに御神輿を据えて持久戰になつてもかまはないだけの設備をしなくてはならぬので、今日は第三キャムプ設置の工作をはじめることにした。つくづく考へて見ると物資を背負ひ上げたりするのに我々自身が動きまはることは實に精力の空費にひとしい。經濟上の顧慮がなかつたならば、アンツエリン位の人夫を十人も連れて來て今日やらぬばならぬやうなことはすつかり彼らにまかせ、自分等はその間に前路の偵察をやつたり、十分な休養もしたいものである。目下の我々のやうなやり方では日數が倍どころか三倍も多くかゝることだらうと豫想せられる。ともかくも荷物を一人につき約三貫五百匁位背負つて、昨日の四人に湯淺を加へ第三キャムプ豫定地に向つて出發した。例によつて池のコルで食事をしたり、日向ぼつこしたりして元氣をつけて、氷壁に向ふ。第一の氷壁では荷物はザイルで引きあげ、人間は昨日設けておいたザイルにすがつて登つたので比較的樂であつたが、何と云つても荷物が肩へくひこみ、充分に呼吸ができないので相當の辛苦であつた。第二、第三の氷壁は割合に小さいので大したこともなく、大きな氷の塔を前に見る緩傾斜地に着くことが出來た。荷物を吹きとばされぬやうに雪の中に埋め、さつさと第二キャムプに引上げた。人夫代りの仕事で皆は相當に疲勞したが、夕飯に所謂卽席てんぷ

らを十分に食ふことが出來たので大いに元氣を回復した。この珍味は乾燥したほうれんさうを水でもどし、アンツエリンがいつでも御守りのやうに膚身はなさず持つてゐる唐辛をまぜ、フライ油で揚げるものなのだ。山縣も第一キヤムプの整頓が出來たので登つて來た。天幕を一つ張り足してこれで三つ、同勢六人が一つところにあつまつて、相當張り切つた心持でその夜はまたシユラーフザツクにもぐり込んだものであつた。

九月十九日　晴　前進隊、堀田、濱野、アンツエリン補給隊、山縣、湯淺、竹節午前十時半第二キヤムプ發、途中休憩四十分間、第三キヤムプ着三時、前進隊は此處に泊、補給隊は三時半發第二キヤムプ着五時。

十九日の朝も良い天氣である。前進隊の堀田、濱野、アンツエリンは自分達の使ふ寢具防寒具などを、補給隊の竹節、山縣、湯淺は第三キヤムプ用の物資を持つたが、昨日よりも重い位であつた。強い陽光の下で眞白な氷と雪との世界に勞働してゐると身體中がぐた〳〵につかれる。今日も池のコルの水をうまく飲んだ。また三つの氷壁を登つて到着した第三キヤムプは約一萬八千九百呎の高さで、今度の登山につかふつもりで新調した蒲鉾型の天幕である。天幕の大きさは六尺に六尺であるが、これを展張すべき場所が容易に見つからないのには非常に困つた。最後にやむを得ず、後方にやゝ平坦な雪を二米ほど掘へ、その端はナンダコート氷河への急な崖となり、右も左も深い氷の裂目と云ふやうな甚だ悪い場所に張ることになつた。頭の上に掩ひかぶさるやうに立つてゐる氷塔はいつ大きな雪崩を落してよこすかわからないし、天幕が流されて

しまふかも知れない。しかしどう考へてもこの他に張るべき場所がない。前進隊はこゝに留まり、補給隊は早々に第二キヤムプに引揚げた。日がくれると白い雲はしづがに谷にしづんで行き、ナンダ・デヴイはその雲の上を歩いて行けばすぐにも行けさうに見える。トレイルス・パスのあたりは風の通りみちらしく、雲が南から風に吹き寄せられてはこれを乗越し、ナンダ・デヴイ東峯の裾を去來してゐる。この様子では天氣がまたくづれ出しさうに思はれる。さう云へば今日はとても暑かつた。雪崩もこゝからはあまり見物できぬ。それは我々が相當登つて來たため、雪崩の最も壯觀を呈する後期の雪烟のまき上がるところが我々のはるか下になつてしまつたことと、もう一つにはナンダ・コート北壁の雪即ちナンダ・コート氷河を養ふ雪のなだれはこの天幕の高さと同じ高さからはじまるからである。それでも音ははるかの下から轟々とひゞきわたり、氷が振動するのではないかと思はせる。アンツエリンはつかれも見せず、まめ〳〵しく働いてくれる。今晩の食事はロテイにビスケツト、それに少量の米飯。馬鈴薯を羊孔酪(ギイ)とカレーでいためたアル・タカリといふ料理と唐辛をつけたロテイ等で、實に美味で食欲を増進せしめる。食後ひまになつたので西藏語を習ふ。夜八時、天幕の外では零下六度であつた。

九月二十日　曇一時雪　前進隊前方偵察

補給隊　第二キヤムプ發午前十一時發、第三キヤムプ着二時、三時發、四時半第二キヤムプ歸着。

次の朝外で寒暖計をしらべた處零下十度位で相當に寒さを感じたが、特にはげしいとは思はなかつた。空

はうすぐもりで天氣が悪い方に向つて來たことが誰にでもわかるが、先きをいそぐ登高の途中でまた悪天候に災ひされるのかと思ふと少なからざる焦燥を感じる。太陽のうす光が我々に當たるのを待つて豫定の行動を開始することになつた。ともかく足場が非常にわるいので天幕を出ると直ちに百呎の網でアンザイレンして深雪の急斜面を少々ばかり登るとやがて緩傾斜の地點に出ることが出來た。氷の塔はすぐ我々の前に立ちはだかつてゐて、これを通過しなければ上へはどうしても進めない。一番樂な方法は右側に比していくらか緩傾斜の左側をからんで、塔の向ふの上へ出ることであるが、無數の氷の裂目がいづれも青黑い底を見せてゐるので通過出來る見込は全然立たない。右側をからむことは卽ち雪崩をナンダ・コート氷河の側へふみおとすことになるのでこれまた絕對に通行不可能であり下を覗くことすらできない急斜面。一昨日から考へて居たやうに直登する他に方法はありさうにないので早速實行に取りかゝることにした。アンツエリンを先頭に立たせて氷の溝の中へステツプを切らせることになり、堀田は二番、濱野は殿りとなる。氷は非常に堅くアイゼンのツアツケが立たない程度であるから、ステツプを切るのも容易でない。しかし下で確保するために立止つてゐるものも、足が冷えて來るのでこれまた中々の苦痛である。ことに頭の上から氷の碎片が大變な勢で落ち來るし、どうかすると粉雪がザアと流れて來ることもある。百呎のザイルが伸び切るまで容易でなかつたが、それでも先頭のアンツエリンが上から確保すべき安定な場所が見つからぬ。上下でどなり合つて連絡をとり、ザイルをつぎたすことに定めた。濱野は御苦勞にもまた第三キヤムプまで往復して百三十呎

のザイルを持つて來た。この間堀田は一所にぢつとしてゐなければならなかつたため足をひどく冷やしてしまつた。やつとアンツエリンが止まつたので堀田だけそこまで登ることが出來た。アンツエリンはまた前進したが、溝は愈々急勾配となりステツプを切ることも困難となつたので、折角登つたのを少しさがらせ右側にトラヴアースしてまた上の塔に近づくと、塔が高いだけにその基底部のクレヴアスが廣く深い。そして癪にさはることには氷の壁が低くて容易に登れさうに見える處ではクレヴアスが絶對にわたれないと思ふ程廣く深いことである。我々が夢中でガリーを登つたり壁を見上げたりしてゐるうちに朝から心配の種になつてゐた天氣は愈々惡化して、雪が猛烈に降り出し、溫度も目立つて下つたらしい。足は言ふまでもなく手もすつかり感覺を失つてピツケルを握る力も甚だしく弱つて來た。これではならぬと元氣をふるひ起して見るが、どうにもならぬので、今日はこれまでと思ひ切つてキヤムプに歸ることにした。この間濱野はガリーの下の所で立ん坊になつてゐたのは勿論のことである。雪は愈々ひどくなつて來た。天幕に入つて手足をしらべるとかなりやられてゐることを發見した。用意の藥品をとり出すやら、揉み合ふやら眞劍になつて努力してゐる所へ第二キヤムプの補給隊が第四キヤムプの材料に食糧をそへて運んで來て呉れた。雪がひどくならぬうちにと云ふので補給隊は大いそぎで元の古巣へ舞ひ戻つた。今夜の飯には鷄卵があつた。これはマテルダス警部の肝煎でマルトリから、人の手から手へと大切にリレーされて來たものであつたが、籠入りなのでたゞ一つを殘して他はつぶれてしまつてゐたことは寔に殘念至極であつた。夕飯は例によつてロティに馬鈴薯、

飯でたらふく食べるとまた元氣が出て來る。しかし前途を思ふとおち〳〵寢ることも出來ぬ。夜になつてからは風は吹きつのり、天幕の綱はびゆん〳〵鳴り、それがきこえなくなると雪の降る音がさら〳〵と聞える。かじかむ手にペンを握つて今日の記錄を書かうとするが、蠟燭の灯はゆら〳〵と吹きこむ風でゆれ動く。淋しい、落着かぬ夜である。どう云ふわけか知らないがアンツエリンはこのやうな寒さの中でもはだかでなければシュラーフザツクの中へ入らない。だから朝起きる時は大變で、何から何まで寢袋の中へひつぱりこんで身につけると云ふ段取りである。

九月二十一日　雪　各隊行動なし

二十一日は朝から雪が降りつゞけなので外で活動することなどは思ひも寄らず、羽根蒲團の中へもぐり込んだまゝごろ〳〵してゐるより他になかつた。朝六時には天幕の外では零下六度で大した寒さではなく、これではすぐに天氣も良くなりさうにない。ひまつぶしにアンツエリンの持つて來た材料でロテイをつくつて見やうと云ふので、蕎麥粉を水で煉つてそれに干葡萄を少し入れ、手で平たくのばす。一方ギイを鍋に入れて火にかけ、ぐら〳〵煮えて烟が立つのを見すまして、平たいやつをその中に入れて油あげにする。つまり煎餅とドーナツツの合の子のやうなもので、自分でつくつたためか一段とうまいやうに思つた。たゞ困つたことには油の烟が狹い天幕の中に一ぱいになつて息もつけぬやうになるので、とうとうやり切れず三人とも天幕の出入口から頭だけ外に出して、やつと息をついたやうな始末であつた。濱野はアンツエリン相手に語學

の勉強と土俗學的知識の吸收に餘念がない。あまり雪がふるせゐか第二キヤムプの元氣な連中も今日は登つて來ない。夕方になつてやつと雪がふり止み、七時頃には雲が切れはじめ、月の光が下の方々を照らすやうになつて來た。やがてその月光は我々のまはりの景色を照らしはじめた。うすい霧が未だ山の中腹にヴエールのやうにからんでゐたが、それも徐々にうすくなり、雪の山肌が青の月光にすつかり我々の前にあらはれ出た。月が冴えるにつれてヒマラヤは碧玉の細工物のやうにたゞ青の一色に靜まりかへつて、底知れぬ寂莫である。

一日中靜かにしてゐたのでアンツエリンまでが妙に神經質になつてしまつたらしい。夜半のことであるが、彼は突然隣でよく寢込んでゐた濱野をゆり起した。外で何か「エー」と叫える聲がしますと云つて眼を皿のやうにして天幕の中から電燈で外を照らしてゐる。その樣子がどうも變なので濱野がたづねて見ると、屹度ヒマラヤ・アドミが來たに相違ないと云つて、眞蒼な顏をしてがた〳〵ふるへてゐる。アドミは人のことで、ヒマラヤ山中で登山その他の際變死した人夫の亡靈や、山の鬼神が時折り迷ひ出て、生きた人を仲間に入れやうとしてやつた來るものださうである。濱野は一笑して彼をなぐさめて寢につかせたが、朝になつて見るとやはり恐怖のため一晩中熟睡することが出來ず、明け方にはいやな夢を見たと云つてしほれてしまつた。アンツエリンのみならず、土民がこのヒマラヤ・アドミにおびやかされることは稀でないらしく、彼らはほんとうにその實在を確信してゐる。次の朝起きてから天幕のまはりをしらべて見ると獸類の足跡のや

うなものが確かにあつた。彼はそれを指して、この通りほんとうに來たでせうと云ふ。その足跡が果して何かの足跡であるか、それとも他の原因で出來たものだか我々にもわからないので、積極的に彼の迷信を打破してやることは出來なかつた。しかし元來快活な彼は今度出たら殺してやる、サーブも助太刀をして下さいと大眞面目で賴むので、死んだものがもう一度殺せるかと云つてひやかしてやらうと思つたが、この話に深入りして印象を强めると、またうなされても困ると思つて、ふん〳〵と云つて置いた。

九月二十二日　曇一時晴　前進隊前方偵察、補給隊、第三キャムプ往復。

二十二日の朝はあまり芳ばしい天氣ではなかつたが、ひる近くなつてすつかり晴れ上がつた。今日こそ何とかあの氷の塔をものにして見せるぞと云ふ意氣込みで、十分に腹も足も身のまはりも拵へて雪の急斜面を登つて行つた。昨日の道は何と云つてもあまり結構ではないので、もし出來れば別の道を見つけたいといふ希望も捨ててしまつたわけではなかつた。それで樋狀の地形の中に入らず左側に捲いて腰までもぐる深い雪をラツセルしていくらか下り氣味に進んで見た。と云ふと雪が深いばかりで他に何らの障碍がないかのやうに思へるが、實はクレヴアスが至る處に口をあけて居るので、ラツセルしながらその中へ落ちないやうにしなければならない。その上雲つてゐるので雪の面の凹凸が見えず、とても歩きにくい。この苦しみを味つてゐるうちに、また雪がちら〳〵と舞つて來た。急な斜面をトラヴアースしてゐると雪が足許からも上の方からもさら〳〵と流れ出して氣味の惡いことは夥しい。そして細かい運動が出來ないため、手足がたちまち

冷えて來て、氣がつくと無感覺になつてゐる。これではならぬと、ます〳〵はげしくふる雪の中を天幕にとつて返した。天幕につくとうす日が照り出す。すると例の氷の溝はてら〳〵輝き、その上の塔は私達を馬鹿にしたやうに突立つてゐる。重ね重ねの不成功に三人共すつかり氣をくさらせてしまつた。元氣なアンツエリンが「トラトラ、ウツパル、ジヤエガー、バラフ、ギルター、ハイ。キヤ、カルクー、ハイ」(少し私達が登ると雪が降る。どうしようつてんだ)と怒鳴つてゐる。我々も至極同感でこんなことを繰返して居たら、いつ頂上は愚か、主稜に出られるかわからない。氣持はやゝあせつてゐる。そこへ補給隊三人が例の如く物資を背負つてやつて來た。今日の様子を話して意見を交換したが、良い考へは浮ぶ筈はない。皆の顏はうすぐらい天幕の中のせゐか、いやにくすぶつてゐるやうに見えて、何だか心細くなつて來た。結局今まで第三キヤムプにねばつて攻擊に從事してゐた隊は、大分身體もつかれたし氣分もいくらか弛んでゐるので、明日は第一キヤムプに歸つて二三日休養し、第二キヤムプにたむろしてゐた連中は、第三キヤムプに、これ以上の高所キヤムプで用ふべき物資を一通りはこびをへたので、そのうち第四キヤムプに使用すべき新らしいウイムパーテントを第三キヤムプに張つてこゝへ引移り代つて攻擊をつゞけ、今までの前進隊が休養を終つて歸つて來てもこゝに頑張つて、總がかりでこの難局を突破しやうと云ふことに定つた。話が定まると下から來た連中は大急ぎで元の古巢へ歸つて行つた。

九月二十三日　曇時々雪　堀田、濱野、休養の爲第一キヤムプに下る。山縣、湯淺、竹節第三キヤムプに入る。アン

ツエリンは第三キヤムプに滯在。

今日も時々雪が降る陰鬱な日であつた。午前に堀田と濱野とは支度して、アンツエリンに暫時別れを告げて、凍傷にいたむ足で後退の途についた。第二キヤムプに着くと、山縣、竹節、湯淺が今支度をしてゐる所で、昨日話し足りなかつた所を打合せて暖い第一キヤムプに向つた。僅かのことだけれど第二キヤムプのまはりのいくらか平らかな處は、第三キヤムプから下つて來たものの眼には、非常にのんびりした處に見え、空氣は柔らかに身體を包んで元氣を恢復し、終日額に皺をよせて考へ込んでゐた憂鬱さを忘れしめるに十分であつた。

九月二十四日　晴時々曇、夕方雨　前進隊は第三キヤムプ發十一時、氷壁を迂回して上登し、其上部にある平坦部着午後二時半、第三キヤムプ歸着午後五時。

昨夜第三キヤムプに宿泊した新手の三人は次の朝の晴天を利用して早速登路開拓に取りかかつた。堀田たちが前進した時には、最後最悪の場所と場合にと、アイゼンと上靴をしまつて置いて用ひなかつたが、この日からの前進隊は、前者からの申送りによつてこれらのとつておきの道具を用ふることにした。そのために凍傷にもかゝらず、スリツプの憂も少なく大變樂に行動することが出來た。氷の樋のやうな地形の中に切られたステツプは一夜にして埋つてしまつてゐるので、また切り直さなければならなかつた。さてこの地形を通過してから後の登路は約三つあるやうに考へられた。その第一は右手の雪の尼根狀の地形を直登すること

であつて、これが可能であるならば最短距離であらうと思はれるが、近づいて見ると隨分の急斜面で、やゝもすれば雪崩をおこす處がある。こゝで雪崩が起つたら一行の命は悉く失はれるであらう。第二は氷壁の割目をよぢ登るのである。割目はたくさんあるらしいが、そのうち三つが我らの眼に見える。そのうちでも二つはオーヴアーハング氣味で登路にはならぬ。一番右手のものは登れさうに見えたので近づいて見ると、ベルグシュルンドがあつて取りつくことが出來なかつた。殘る第三の路として氷壁の下を左手に捲く道を拓くことだけである。氷壁には無數の氷柱がたれさがつてゐて、これに陽光が照りつけたら世界一豪華なシャンデリヤが出來るだらうと思つたが、丁度日陰になつてゐて、たゞいかにも冷たさうに感じるばかりで、實際休んでゐる我々も一方ならず寒氣を感じた。さてと云ふのでアンザイレンして氷の壁の下を登り加減にトラヴアースしはじめた。足許は五十度乃至六十度の雪の斜面で、よほど注意して踏まないと大雪崩を踏み出すにきまつてゐる。先づ三十呎程進んでそこにピトンを打ち、これを手はじめとして三十呎おきに更に四本のピトンを打つて、これにザイルと細い綱とを固定した。この作業をはじめたのは十二時半で、終つたのは二時半であつた。このザイルの終る所は上のコルからふきおろす雪がふきだまりになつた緩傾斜地である。一同はかなりひどくつかれたので雪の上にどつかと腰をおろして紅茶を飲み、パンを嚙つた。時々霧がかかつて寒くなるが、陽があたるとこの高さでもなかなか暑い。緊張した二時間の後の食事。ことにこれで主稜のコルまでもう氷の壁がなくて、ラツセルしさへすれば何とかなると云ふ見透しがついた時の食事はこの上も

なく美味かつた。高度計は約一萬九千三百呎を示してゐる。四時に下りにかゝり、下の氷の樋の上部にピトンを打つて細綱を固定しこの次の通過を容易ならしめ、五時第三キャムプに歸ることが出來た。今回の前進隊は今まで比較的低い處に居て身體を樂にしてゐたせゐか、作業中非常に呼吸困難を感じ、速いモーションは絶對に出來ず、もしうつかりやらうものなら後がしばらく苦しくて動かれなくなつてしまふ。長く第三キャムプに居たアンツエリンは高度にはなれたやうであるが、咽喉をやられたらしく、引切りなしに咳きこんでゐる。それにどうしたのか今日はとても臆病で少しも先きに立つて進まうとはしない。しかし雪をこぐのは相變らず強くて、我々はとてもかなはぬ。

九月二十五日　晴　前進隊午前十一時第三キャムプ發。主稜の鞍部着午後三時二十分、第三キャムプ歸着、六時三十分、堀田、濱野は第一キャムプより第三キャムプへ。

氷壁の道がひらけたので昨日引返した地點まで僅かに二時間半で達することが出來た。こゝで晝食、二時十分再び尻をもち上げて主稜に向つて突き進んだ。主稜から落ちて來る雪がたまり〳〵して大變な深さになつてゐたので、これをラツセルして登るのはとても大變な努力であつた。しかしさすがにアンツエリンは力が強くて、傍目もふらずに先に立つて進んだ。そのおかげであとからついて行くものはずいぶん樂をすることが出來た。このやうな行進が約一時間餘で、今まで登りつゝある出尾根狀の地形は自づから主稜につゞくやうになり、一行はいくらか左捲に歩いて、主稜のコルに立つことが出來た。主稜の北側は縱に物凄いすぢ

ナンダコート（“池のコル”より）

ナンダコート頂上附近より東北稜を見下す

がついてゐて如何にもヒマラヤらしいので、南側卽ちシヤルン氷河側も急斜面を爲してゐるのであらうと想像したが、こゝに着いて見ると想像とはちがつて、平らがな廣々したラグビーでもやれさうな雪田であつた。まはりの景色を眺めることよりも少しでも前途を偵察しておきたいといふ氣持に驅られて、深い雪をおしわけて頂上への尾根を登つて一つの突起に立つことが出來た。折惡く霧がかかつて來たため頂上は見えなかつたけれども、我々の前途には狹い山稜がつゞき、その先にドームが一つあり、またその先に頂上があることが確められた。しかし何と云つても主稜に出ることが出來たことは大きな歡びであつたので、足も輕く下山の途に就いた。

この日に第一キヤムプから第三キヤムプに登つて來た濱野は次のやうにその日記に記してゐる。――『私達(堀田と濱野)はクリーを二人連れて第三キヤムプに向つた。クリーは第二キヤムプの下までで歸らせ、何回も〳〵上下した路を登つて行つた。第三テントの彼等は此の日も勇猛心を奮ひ起して登路を開拓してゐるのであらう。第二キヤムプ上の池のコルを登つてゐる時に彼らは氷の塔の上に出てゐるのが見えた。第三キヤムプに着いた時には霧がすべてをつゝんでしまつたため、彼らの姿は全く見ることを得なかつた。そのうちに主稜のコルから右に伸びた山頂へつゞく稜線上に彼等の姿が、霧の晴間から明らかに見えてゐた。とうとう彼らは主稜に立つことが出來たのだ。よく見ると兩手を高く上げて「エツホー」を叫んでゐる。これは恐らく日本人がヒマラヤで擧げた最初の「エツホー」ではなからうか。思へば頭の芯まで感激が浸みわたる。

實に幸ある山登りである。夕刻彼らは尾根の烈風に叩かれた兩頰を希望に輝やかせながら第三キャムプに歸つて來た。成功の感激の一時もすぎ、六人で蒲鉾型テントの横に無理にウイムパーテントを建てた。賑やかな夕食の後、二つにわかれてめい〳〵の天幕にかへつて寢についた。バウエルのカンチエンジユンガの報告に、夕食後隊員がピツケルをついて各自の天幕にひき上げる樣子が記されてゐたことを思ひ出して獨りで嬉しくなつてしまつた。蠟燭の光が天幕の隙間からもれて來る。がさ〳〵と羽根蒲團にもぐりこむ音がして、蠟燭の光が消えて、そして靜かな寢息がヒマラヤの靜寂をもれてきこえて來る。かくして我らは希望の夢を結んだのであつた。』

九月二十六日　晴　夕刻から雪　堀田、濱野、湯淺、山縣、竹節は午前十一時第三キャムプ發、午後三時半第四キャムプ地着、堀田、濱野此に泊り、他の三名第三キャムプに引返す。アンツエリンは物資補給及第四キャムプ第二天幕に使用するため第二キャムプに張り放した天幕を撤收して運び上げるため第二キャムプに發向。

朝暾に全山が銀甲を輝かす美しい朝である。昨日の偵察で頂上までの樣子が略々のみ込めたので隊員の元氣も一しほ盛んである。しかし物資をつめこんだ三貫目のルツクサツクは相當負擔である。アンツエリンは朝飯をすますと大急ぎで下に向つて出發したが、これは皆の一等好物となつてゐる砂糖が不足しさうなのを補ふためと、もう一つには第四キャムプは全員を收容しなければならぬ關係上、四人用の天幕だけでは足りないから、幸ひ第二キャムプにウイムパー・テントが一つ餘分に張り放してあるからこれを上にかつぎ上げ

る任務を與へられたからである。彼を見送つて後、堀田はじめサーブたちばかり五人でぞろ〳〵と天幕を潜ひ出したのが十一時であつた。二日間ふみつけた道は夜中の雪で埋まつてゐるとは云へ、まことに歩き易い。氷の壁の下のへつり路は固定索があるとは云ひながら、右はオーヴァーハングの氷壁からたれ下がつた氷柱、左はクレヴァスに向つて落ちる六十度の斜面なので一寸の油斷も許されない。その上荷物が氷柱にぶつかつてともすれば身體のバランスがやぶれさうになり、我ながらはら〳〵することもある。アイゼンのツアツケが果して利いてゐるか否かを疑ふ位足許も危ぶない。この惡場をすぎるとあとは雪の深い斜面だけになる。昨日前進隊がラツセルしてをいた道も、風の爲に所々全く埋つてしまつてゐる。このやうな處を歩く時には汗が滲み出し、雪の反射で眼が眩しい。それにこの高さでは三貫目の荷物がひどくこたへて息がきれる。所々眞平でどちらに向いて歩けば良いのか見當のつかぬ所もある。荷物を雪の中に投げ出して、どしんと腰をついて休憩すると、暖い陽の光に心は伸び〳〵となる。二萬尺のヒマラヤに來てゐるのか、日本の山の春で吹き溜りの雪の中でのびてゐるのか、わからないやうな氣持である。ビスケツトと紅茶とソーセージの晝食はいつものことであるが、すつかり慣れてしまつたので、口の中がぼそ〳〵になつてしまふまで飽食することが出來る。以前富士山でいや〳〵ながら口にしてゐたことも今となつては樂しい思ひ出である。

再び深雪の急斜面を押し登るのであるが、頑張るとどうしても息が切れる。左下の凹谷では目の先きのコルから崩れ落ちる雪が氷になつて、それが一面のクレヴァスをつくつてゐるのが見える。このあたりは高

度計で一萬九千八百呎であるが、風が強いためか雪の表面がすつかりクラストになつてゐて大變に歩きやすい。しかし傾斜が愈々急になるため四這ひになつて行かねばならぬ所もある。荷物が身體を後に引くので危なかしい。尾根狀の登路はがやて終つて左側をトラヴアースしてコルに立つた。惡天候の前觸をなす南風が非常な勢で吹いてゐるのでうつかりしてゐると吹きとばされさうである。

コルの頂上につゞく尾根はコルで八十呎の氷壁になつてゐる。その下が最も風當が少ないと見て雪をふみならして天幕を張つた。壁の直下では何だか氣持が惡いのでそれから約二十呎離れた雪の上である。天幕建設の作業は五人がゝりであるが風が吹いてゐるため非常に苦心と努力を要する。その上風につれて粉雪が舞ひ上つて天幕の周圍は吹きだまりになつてしまふ。第四キヤムプの高さは約二萬七百呎である。

湯淺、山縣、竹節の三人を送りかへしてから炊事にかゝつたが、石油焜爐の調子が甚だ惡い。色々頭をひねつて分解しては組立て、組立てゝは分解して見るが改善されて行く見込はたゝぬ。勢のない赤い火がゆら〳〵と燃えるばかりで、雪からコツプに二杯の紅茶をつくるのに三時間も費した。夕食はゆで上がらない餅とビスケツト。茶も飲めないと云ふ慘めさ。夕方から北風も出た。それがこのコルで南風の最前線と衝突するのでコルの平坦部ではひつきりなしに龍卷狀に粉雪が舞上り、その度毎に天幕が持つて行かれはしまいかと心配させられた。それに焜爐の修繕に頭をつかつたためか濱野が氣分を惡くしてしまつた。心細い一夜。シユラーフザツクに入つてもおち〳〵と眠ることも出來ない。

アンツエリンは任務を果して第三キャムプに歸つて來た。彼の忠實な、しかも陽氣な働きぶりには誰もうれしくなつてしまふ。

九月二十七日　強風雪、時々晴　第三第四キャムプ共に行動せず。

第四キャムプの主な仕事は焜爐の修繕であつた。その上天幕のまはりに降り積つた雪が時々照りつける太陽のために融けて表面から緊つて行くので時々除雪しなければならぬ。何をするにも倦い一日、話をするのも臆劫であつた。午後五時天幕内で零下六度であつた。第三キャムプでは上の前進隊がこのやうな苦勞をしてゐることを知らず、少しでも早く頂上をふみたい心持で、朝十時には身支度を整へて天氣が好轉し次第出發することが出來るやう待機してゐたのに、どうしても見込が立たず、逸る心を押し鎭めて滯在したのであつた。

九月廿八日　昨夜來より強風、朝より風も風ぎ晴となる。午後三時頃より降雪。

第三キャムプの三人は正午これを發し午後四時第四キャムプに着しこゝに泊。第四キャムプにありし二人は上方偵察をなす。アンツエリン病氣につき第一キャムプに歸らしむ。

能率の惡い焜爐を唯一の武器として雪を征服して茶にする。それでも正午頃には天氣も良くなり、茶もいくらか滿足するまで飲んだので、ラツセルと偵察とのつもりで天幕から出た。天幕の後方の氷壁の横をからんで尾根筋に出ると、右側のナンダ・コート氷河に向つた側に大きな雪庇が出てゐて、その下からは五十度もあらうかと思はれる氷雪の斜面が驀地に氷河に落ちこんでゐる。左側は天幕の南側の雪原のつゞきで緩傾

斜である。はるか彼方に見える頂上の手前にドームが一つある。左手の緩傾斜の雪原はそのドームに直接につゞいてゐるやうに見え、一方今自分たちが登りつゝある尾根は先きへ行くと切れて居はしまいかとの懸念を與へる。しかし雪原をラツセルするのは時間がかゝるし、尾根は時間はかゝらない。明日は尾根を通らうか、それともこの雪原を行くか、どちらとも決定することが出來なかつた。今日は先づ尾根が切れてゐるか居ないかをはつきり見定めて來ようと考へたので、尾根を登りつゞける。

やがて痩せた尾根になつてしまつて、風にひどくたゝかれた雪の稜線を注意しつゝ登つて行つた。左手の南側から風が吹き上げて來るので油斷は許されぬ。それに呼吸が甚だ逼迫して來て、十歩前進しては立止り大息をつかねばならなかつた。左のシヤルン氷河がゆるくカーヴして、コルの向ふ側に立ち連なる東北山稜の研ぎ澄した劍の刄のやうな尾根の後にかくれて行く。群がる白雲の彼方にはパンチ・チユーリのピラミツド型の峰が遠く浮んでゐた。尾根は愈々細くなつて來て、殆んど雪庇の上を歩かねばならぬやうになつてしまつた。固くしまつた氷雪をふみつゝ緊張した登高をつゞけた。ロングスタツフ氏が引き返したのはこのあたりではなからうか。ナンダ・デヴイの双峯は、こちらの高度が高まるに連れて愈々その威容をあらはし來り、山頂は文字通りに鎗の穗先である。雪庇の上のあぶないバランス登高が二時間つゞいたが、既に天候は崩れはじめ、再び白魔が我々をつゝんだ。出來るだけ向ふへ行つて見やう。この一念に驅り立てられてなほ三十分程同じやうな地形を前進したけれども、風は愈々はげしくなり、このまゝ前進しては歸途が危ぶま

れるので引返すこととした。結局今通つた尼根が先で切れてゐるか否かは見きはめ得なかつたのである。天幕に歸つて休憩して居ると第三キャムプの連中が登つて來た。

今日の偵察は短時間であつたが相當につかれたが、新手三人の々を見ると元氣が湧き戻つて來る。愈々明日は頂上だ。たゞ不都合極まるものが一つ。この石油焜爐である。五人分の茶をわかすのに三時間もかゝる。ビスケツトにハム、ソーセージ、生にえの餅、生ぬるい紅茶が闘志ではち切れさうになつてゐる我々の夕食である。我々の永年の夢は遂に明日は實現されるか。雪明りに冷たく光る鋭い山稜や、雪田には、風もいくらか風いだと見えて、雪烟が時々捲き上がるばかりである。東京に殘して來た先輩や仲間や、指導鞭撻して下さつた先生や、激勵や祝福の言葉を與へて下さつた山岳會の先輩たちの希望が明日實現されるかと考へると、我々の心は今はどうしても冷靜では居られない。胸は興奮と希望とでどき〳〵してゐる。明日はどうしても頂上を踏む。

午前三時起床と決めて早々シユラーフザツクにもぐり込む。この天幕は五人を容れるには狹すぎるが、かへつて暖くはある。どうせ今夜は寢やうと云つたつて寢られるものではないと思つてもやはりつかれでうと〳〵寢込んでしまつた。

九月廿九日　晴午後より吹雪　全員六時半第四キャムプ出發頂上に向ふ。午後三時頂上直下五六百呎の稜上より引返す。第四キャムプ歸着午後五時。

うと〳〵したかと思ふともう三時である。いくら今日が晴れの登頂の日だと云つてもこんなに早くたゝき起すと云ふ手はないと考へるねぼけた腦に、二萬尺の寒氣が浸み渡ると、もう眼は醒めてしまつてゐる。相變らず工合の悪い焜爐の御機嫌をとりむすんでテルモス三本に入れられるだけの茶をつくり、朝食は携帶口糧や堅パン、ジヤム、バタの如き保存食糧と我慢し得る最少限度の茶だけですませた。大いに努力しなければならぬこの日、出來るだけつまらぬことに精力をつひやしたくないこの日に、まづいものを食ひ、ゆつくり茶も飲めないのは全く困りものであつたが、人夫が一人も居ない今は何とも仕方がない。それに今日は高度も二萬呎以上の所であるし、風に叩かれることもあらうし、思はぬ悪場に出會はないとも限らぬので出來るだけ重裝して行くことに定め、百呎のザイル一本、ピトン、ハムマー、映寫機、中食用の食糧としてビスケツト、ソーセージ、胃に入ると忽ち吸收されて元氣をつけると云ふ森永が特につくつてくれたチヨコレート、乾果ドロツプスを携帶した。

昨日歩いて見たナイフ・リツヂはどうも險難なので、今日はシヤルン氷河寄りの雪原をドームめがけて歩くことにして、第四キヤムプを出たのが午前六時半であつた。もうこの頃には蒼黑い空の星は消えて力强い太陽は東の空に出はじめ、風に虐げられて固くなつてゐる氷雪の面に薔薇色の反映を投げはじめた。はるかに望むネパールの山々はうすむらさきに氷の肌を輝かせ、下半身は動かぬ白雲に包まれてゐる。太陽は愈々登る。耳を澄ませば日輪の軋きも聞えるかと思ふほど力の籠つた、素晴らしい出發の朝である。朝風が時々

雪煙を天幕にたゝきつける。防風上衣、防風帽、上靴をつけアイゼンの紐をきりつとしめて、今日の此日に幸あれと第一歩を踏み出したのであつた。我々の登高欲は愈々熾烈に、氣宇既に頂上を呑むものがあつたのだ。

いざ雪の緩斜面に入つて見ると、もとより深雪は覺悟の上であつたが、豫期以上の深さで腰のあたりまで沈んでしまふ。あまつさへ處々にクレヴアスが口をあけてゐて、まつしぐらに直進することを許さない。これでは時間がかゝり、勞力が增すばかりで何にもならぬとあきらめて、昨日の痩尾根を登らうと云ふことになつたが、もうこの時には稜線は約百五六十呎上になつてしまつてゐる。今更天幕の所まで引返すのも厭なので、尾根の側面を直登した。稜線に立つた時にはすでに七時半になつてしまつた。はるかの頂上は屋根の形に見え、その左端が尖つてゐて最高點らしく、物凄い雪庇がついてゐる。その手前のドームは案外近距離にあるやうに見えた。我々の歩いてゐる尾根は仲び上り、せり上りして三つの峰をつくつてゐる。左側下の廣い雪原から舞ひ上がる雪煙は逆光線で金粉となり、さつと我々に注ぎかゝるかと思ふと、感覺を半ば失つた頰や鼻先をかすめて右側の空高く、銀粉となつて散じて行く。この尾根になり雪庇がついてゐるが、ある所では右、また他の所では左にと甚だ不規則であり、またナンダ・コート氷河の側へは怪物のやうにのし上つて尖つた雪塔をつくつてゐる所もある。雪の狀態も不規則で軟かい雪の處は非常に勞力を要するので、出來るだけ硬い處硬い處とえらんで行く。これを克明に上下して前進すると、先はたゞ一枚の板のやうにのつ

ぺりした緩傾斜の幅の廣い尾根となつて、ドームへつゞいてゐる。この緩傾斜地は完全に我々の目測を誤らしめた。その上高度が増すに連れて僅かの登りも多大の精力を奪ひ取る。十數歩歩いてはピツケルをやゝ固い雪に立て、それにつかまつて天を仰いで大息をつかねばならなかつた。しかしそれでも頂上は歩一歩と近づいて來る。山頂の方向から吹き下ろす風は防風衣をとほして骨まで凍えさう。我々はしかし傍目もふらず一心に先へ先へと進む。

行けども行けどもドームは近くならない。さていよ〳〵登路はドームにかかつたが、案外急勾配で直登すると息が苦しいため、電光形にゆつくりと登つて行つた。好い加減の所から右側をまくつもりで平らに歩いたが、ドームの裏側には雪崩路があつて頂上直下のコルへの道はさへぎられてゐる。やむを得ず苦しい思ひをしてドームの頂上近くまで登り、また下つてコルに達した。時間は丁度正午である。

コルには狭いが平らな所があり、我々の最後の鋭氣を養ひ、闘志を恢復するにはもつて來いの場所である。風當りの少ない南側の雪面にどつかりと腰をおろしてこの日の最初の休憩らしい休憩を樂しむことが出來た。テルモスの紅茶その他の食糧がルツクサツクから取り出されて食事がはじまる。休息して見るとつかれてゐるのがはつきりわかつて來た。それもその筈でこの地點は二萬一千五百呎あり、前夜は睡眠不足、炊事具の不調に起因する食物の不足等が一緒になつて、身體の狀況は決して上乘ではなかつた。しかし何と云つてもあと千呎たらずの登りである。少々足場が悪からうが、急であらうが高の知れた一千呎である。これ

が頑張り通せなかつたら、はるばるヒマラヤに來た甲斐はない。コルから急にそゝり立つきらめき輝く山頂の尖塔をにらんで思ふのは東京の先輩の附託である。彼らに代つてヒマラヤの夢を現にかへすのは今なのだと思ふと、身體の不調もどこへやらけし飛んでしまふ。

ナンダ・デヴイの右、ミラム氷河の奥の山々はたゞ重なり合ひ、ひしめきあつて、どれが山頂なのかわからぬ程である。更にその右にはクンリ・ビンリ峠あたりのすつきりした白線をかぎる山がつゞき、はるか向ふはチベツト高原が黑々とつゞいてゐる。そのまた向ふに、はるかにはるかに白い雪の山が見えてゐる。眼を更に右に轉ずればネパールの山波である。パンチ・チユーリ――これもかつてはあこがれの山であつた――のなほ彼方に黃色がかつた雪をきたピラミツド型の山がすばらしくそびえてゐる。何と云ふ山か見當もつかないが、あたりを壓して聳立してゐる有樣は所謂ヒマラヤン・ヂヤイアントにいくらも讓らない逸物であると見えた。左の眼の下はシヤルン氷河である。その氷の上から雲が湧く。その雲は亂れとび出して何時の間にか眼の前の山頂にまで匍ひ上つて來る。バドリナートの山塊らしいものが認められたが遠方である爲か雪の色が妙に黃色く見える。このヒマラヤの大觀をほしいまゝにする心も、山頂を包みはじめた雲を見ると落着いては居られなくなつた。南風だ。印度洋から、多量の濕氣を運んで來る南風だ。見てゐる間に雲はシヤルン谷をこめ、山頂は時々雲に包まれる。さあ、いそがなければならぬ。

こゝから見る峰頭は、シヤルン谷の側は文字通り垂直に落ちこみ、雪もつかない有樣である。右は四十五

度程の急な雪の斜面で七千呎下のナンダ・コート氷河の底までつゞく。但し下から見える雪のつかない程急な岩壁があるため、上からはこの斜面が途中で切れて段になり下は見えない。不要のものはコルに殘し午後一時最後の攻撃を開始した。左側に出てゐる雪庇をよけて右側を搦んで行くが、雪が膝までもぐるため足ははかどらぬ。やつと登ると右側に雪庇があるので、これをさけて稜線を辿つてやゝ長い登りをつゞける。雲は次第にあたりをこめ、太陽の光を鈍らせ、殆んど降雪に近い狀況となつて來た。時々切れる雲の間に山頂は遠く遠くかすんで見える。稜線上の雪はやゝもすれば崩れ落ちさう。否時々崩落するので一歩毎にふみしめては足場をつくり、蝸牛の歩みの如きおそさで登る。それに日がかげつたため寒氣は增々加つた。足は云ふまでもなく、ピツケルを持つ三重に保護された手さへ動かなくなりさうなので、膝やピツケルの柄をたたいたりして血液の循環を促す。かくて三百呎あまりも登つた時、丁度その時先頭に出てゐた湯淺の踏んだ足許の雪が、ばくりと口をあけて忽ち幅三十呎あまりの板狀雪崩が始つた。バランスを失つた湯淺は一緒に十呎あまり流された。と思つた途端彼はピツケルを動かぬ雪面につき立てゝその方にとびうつつたため危險を免れ得た。しかし雪は下の雪をさそひ込み、もりおこし、すさまじい勢でやがて轟々たる音響を發して谷底へ落ちて行つた。あれに乘つてゐたらと、四人は共にぶるつと身内に感じる或物があつた。しかし當人は案外平氣でさつきからのリヅムをこはさないで尙ほ登りつゞけた、彼は雪質と地形とから、殆んど本能的に雪崩を豫察し無意識のうちにそれに對する心構へが出來上がつてゐたのであらう。

この騒ぎの間に雲は愈々密になつて視界は甚だ狹少となり、頂上は愚か登路たる稜線を雪庇から區別することさへ出來ぬ。しかし頂上は後もう數百呎であらう。全く一擧手一投足の勞と云ひたい所。傾斜は愈々急に風さへ强くなりはじめた。そこでやむを得ず持合せの百呎のザイルでトツプとラストとがアンザイレンすることにした。この變則な遣口については我々自身は決して肯定してゐない。雲霧は遂に雪となつた。それに烈風、身體の疲勞。時計を見ると既に午後三時である。

すべての狀況は惡化の急坂を下りつゝある。頂上、二年間の憧憬の的なるナンダ・コートの頂上、それに立ちさへすれば生命も惜しくない頂上は僅か數百呎に迫つてゐる。しかしこゝで猪突したら、頂上を踏むことが出來ても第四キヤムプに歸れるだらうか。見合す顏には深刻な苦悶がありありとあらはれてゐる。再擧か。しかしこの吹雪が一週間もつゞいたら、それはもうヒマラヤの冬である。それに歸國の豫定日も迫つてゐる。しかし隊長の斷乎たる一言、「駄目だ、今日は引返さう。」

一歩一歩と頂上から離れる氣持、それは筆舌に盡し難い慘めな心である。一ケ月たらずの苦心は皆今日のこのためにでなかつたのか、いや二ケ年の準備工作も今日のためであつた。思へば泣いても泣いても泣き切れない心境であつた。コルまで降りて小雪まじりの烈風の中で今日の最初の烟草をすつた。つかれ切つた五人準備工作の泣き笑ひの顏。ルツクサツクに撮影機、ピトン、ハムマー、其他食料の少量を納めて雪の中に埋めておいた。コルをあとに風におひ下ろされながら、ふら〳〵に疲れた我らはしばしば休憩にかこつけて

は、うらめしい山頂をふり返つた。雪は時々止んでその間夕陽は赤々とかゞやくが、風は依然として強いと見え、雪煙が捲きかへり、神の劫火のやうに燃え上つてゐた。太陽はトリスルとナンダ・デヴイの間に落ちて、空は夕やけであつた。轉びさうな足をひきずり〳〵やうやくたどりついた第四キヤムプの天幕はすつかり夕暗につゝまれて、寒々とした氷のがけの下で震へてゐた。私たちは天幕の前の雪の中に身を投げ出して座り込み、一言を發する氣力もなくなつてしまつた。誰もアイゼンの紐を解いて天幕の中へ入らうとはしなかつた。やがて白い星がかすかに頭上に現はれるやうになつて、始めてアイゼンを解き始めた。凍りついた紐はなかなか解けない。ピツケルの先でひつかけ、引張つて解く時の腕の力は殆んど無に等しい程弱くなつてゐた。かくして五人は粉雪だらけのまゝシユラーフザツクにもぐり込んでしまつた。苦心慘憺してつくつた砂糖湯を一ぱいづゝ飲んで、あとは何一つするのではなく、痛む頭と疲勞した身體をやすめようとつとめたが、あの四時半の赤いナンダ・コートの頂上の景色が眼から離れようとはしない。

天幕の中で落着いて考へて見ると、今日の退却は實に光榮ある後退であつた。もし猪勇に驅られて前進したら恐らく下山することは出來なかつたであらう。たとへ下山出來てもこゝへ歸るのは八時頃になつたであらう。さうすれば手足は凍傷にひどくやられ、或は疲勞の結果どんな災厄が突發したかわからない。今日でさへいくらか凍傷にやられたではないか。しかし再擧の機會がこゝ十日の間（これが我らに殘された日數なのだ）に與へられるであらうか。これを思ひ、かれを思ひしてゐるうちに、疲勞のために眠におちてしまつ

たのであつた。

九月三十日　晴　全員第一キャムプに集結休養。山縣のみ第四キャムプに殘留。

夜半から猛烈な吹雪で、少し凹地になつてゐるキャムプ場を埋めた。天幕は次第に積雪に壓しつけられ、雪のつめたさが頭に感ぜられる程低くたれ下がつて來た。それで不知不識の間に身體を曲げて、海老のやうになつて寢てゐた。朝になつて時刻から考へればもう陽があたつてゐる筈だのに、天幕の中は眞暗で、その上頭痛と、恢復し切らぬつかれのため、誰も起きようとせず、屋根の雪を落して樂に横にならうともせず、たゞぢつとしてゐるばかりであつた。十時すぎ、漸くシュラーフザックから匍ひ出して外を覗ふと、テントのすぐ前が固さうな雪の壁でふさがれてゐる。外を見るにはどうしても頭を伸ばさなければならぬ。暗い天幕の中から急に太陽の光の反射が燦然と輝く外を見ると、眼を開けては居られないほどまぶしい。周圍には新雪が四尺六寸も積り、天幕の支柱だけが雪の上に突出してゐる。前夜あまりにつかれて外に置放しにしておいたスコップやアイゼン、ピッケルなどの影も形も見えない。何はさておきピッケルがなければ第一キャムプに下つて休養は出來ないので、つかれた身體に鞭つて、殊に全く道具がないために飯盒の蓋や、食器で雪を掘りはじめた。この仕事は實に辛いものであつた。その上昨夜から食事らしいものを口にしてゐないため、十分間とこの仕事をつゞけることが出來なかつた。五人のものが代り〳〵雪の中に座りこんで仕事をつゞけた。漸くピッケルが一本得られたので仕事は非常に樂に進捗した。それでも全部の品物を掘り出すには

四時間を要した。しかしアイゼンが一つどうしても見つからなかつた。

羽根蒲團だけをルツクサツクに入れ、何も食べないで、よろめく足許に氣をくばりながら下山しはじめた。山縣は、自分はとてもつかれて居るから今日は此處で寢てゐて、明日必らず下山すると云ふので、勿論我々も非常に心配ではあるが、彼の沈着と經驗とに信頼して、彼の欲するまゝに委せた。二日前の踏跡は風と新雪のために跡方がなくなり、いくらか高低が認められるにすぎなかつた。氷の壁の下のトラヴアースは衰へた體にとつては隨分危險であつた。第三キヤムプで何はさておき、蜜柑の鑵詰を食つた時には全く蘇生の思がした。第四キヤムプで焜爐の調子が悪かつたため茶を十分に飲むことが出來なかつたが、その補ひをこゝで十分につけることも出來た。下降をつゞけて池のコルの冷い水をたらふく飲んだ。第二キヤムプまで下つて來るとアンツエリンがクリーをつれて迎へに來て呉れた。何よりも先きに山縣サーブはどうしましたと聽く。實は四人切りで下りて來るので、これはかならず誰かやられたに相違ないと思つたのださうだ。委細話してやるとやつと安心した。彼はそれにつゞいて頂上近くの有樣を根堀り落堀り尋ね、この次の登高には必らず御伴して頂上をきはめませうと云つた。

第一キヤムプの雪のない土地は珍らしかつた。そして心が落着いた。ヌルサンは自分で茶をつくつて給仕しながら色々樣子を聽いた。クリー達は一列に整列して、擧手の禮をして「サラーム・サーブ」と挨拶する。恐らくヌルサンの訓練であらう。やがて食事が運ばれた。印度米のカレー、マイタのロティ、アル・タルカ

リ。甘つたるい紅茶で、何日分かの榮養不足を補給した。過勞のためか關節が痛み、足先の凍傷がづき〳〵する。ヌルサンは望遠鏡で我々の登高を眺めてゐたのださうだ。山頂に近づいたのを見た時急に霧がかゝつて何も見えなくなつたため、非常に心配して、絶えず觀察をつゞけ、霧の間に五つの人影を認めて一安心したのであつた。しかし今日はまた四人の姿しか見えないので心配でならなかつたと云つた。冷たい雪の上でなく、柔い土と暖かいマツトの上で山縣のことを心配しながら眠りについた。

十月一日　晴　山縣第四キヤムプ發第一キヤムプへ、他は行動せず。

ヒマラヤの晩秋が第一キヤムプを訪れた。朝眠をさますと天幕の內側に霜がついてゐて、外から朝日に暖められると羽根蒲團の上にぽた〳〵滴になつて落ちて來た。外へ出ると雲一つない紺青の空で、鋭い雪山のスカイラインはなほするどく見えてゐた。土の上にも霜がおいてゐて、エーデルワイスなどの花や葉がかさかさと音を立てる。日當りの良い、風をよけた天幕の横に食糧入の木箱をならべて朝飯をたべたが、背中にぽか〳〵あたる太陽の氣持の良いこと。

やがて第四キヤムプのコルに黑い點があらはれた。單獨行登山から出發した山縣は遂にヒマラヤでも單獨行をやることになつた。羽根蒲團や手袋や衣服を日當りの良い處にひろげて日乾しにし、ふくれた頃にその上にねそべつて午睡をした。この快晴の日でも午後になるとナンダ・コートの頂上附近では雪煙が舞ひ上りはじめた。そして時々澄み切つた空氣を震動させて雪崩が落ちる。さすがに九月の末からは雪崩の回數も著

しく減じたやうだ。日が傾いてトレイルス・パス附近の雲を赤く染めはじめた頃、山縣は飄然として第一キャムプに歸つて來た。勿論アンツエリンは第二キャムプまで出迎に行つたのであつた。これで全員悉く集結を終へた。薄暗い天幕の中には、陽氣な笑聲がひゞきはじめた。

日が落ちると急に骨を刺す寒さが襲つて來る。しかし星は大きく輝き明日の好天氣を豫言してゐる。この日アルモラの知事からトレイルス・パス越の旅行許可證が到着した。未だ登頂が完了しないのに、歸り仕度が出來たのである。何とかして此所一週間の間に頂上をふまなければならない。しかしまだ疲勞は恢復しない。願はくば第一キャムプの土よ。我らに元氣を吹きこんで呉れ。

十月二日　晴　　全員休養。

凍傷に軟膏を塗布したり、靴に油をつけたりして一日暮してしまつた。この日も心憎いばかりの快晴である。しかしどうもつかれが恢復し切らぬのが氣がかりである。寒さは日增に酷くなつて來ると見え、第一キャムプのはづれの水場も日の出るまでは凍結して水が汲めなくなつた。

十月三日　晴　　全員第一キャムプ發、山縣、竹節、アンツエリンは第三キャムプ泊。他の隊員は第二キャムプより再び第一キャムプに引返す。

まだつかれの殘つてゐる身體に鞭ち、靴の中でうづく凍傷を我慢しつゝ、今日は登高することに決心した。幸に天氣は快晴でこの分ならばしばらくは大丈夫らしく思はれる。アンツエリンを入れた我ら六人はヌ

ルサンやアルモラの人夫たちの心からの挨拶に送られて、ルツクサツクを背につけた。人夫のうちの二名に第二キヤムプまで荷を持つて來させる。

第二キヤムプの近くまで來ると、濱野、湯淺、掘田の三名はどうも調子が惡く、今日の豫定の第三キヤムプまで登ることが困難であるらしい。それでこの三人は第二キヤムプで前進を打切り、今夜第三キヤムプに泊ることになつてゐる連中と、明日第四キヤムプで落合ふことと定めた。しかし第二キヤムプに着いて見ると、しばらく使用しなかつたため、何となく泊り心持が惡さうである。こゝで樂でない一夜を明かすよりも、第一キヤムプに戻つて、明日少々頑張れば却つて能率が上がるだらうと考へ、早々に引返した。山縣と竹節とアンツエリンは豫定通り第三キヤムプに登つた。

十月四日　晴　堀田、湯淺、濱野は第一キヤムプより、山縣、竹節、アンツエリンは第三キヤムプより何れも第四キヤムプに集結す。

第一キヤムプに泊つた三人は午前十時、うららかな陽光の下に出發した。例によつて人夫二人をつれて荷物を持たせた。この人夫たちはいくらか雪の上を歩くことになれたと見えて、自發的に第二キヤムプの上まで御伴しますと云ひ、實際この約束を果した。これが今次の登山における普通のクリーが登つた最高記錄となつた。その高さは約一萬七千六百五十尺であつた。しかしクレヴアスの多い所では實にまともには見て居られぬ格構で歩くので、幾度か爆笑せざるを得なかつた。彼らをかへして我々三人は調子よく登高をつゞけ、

三時には第三キヤムプを通過し、五時には第四キヤムプに到着した。山縣、竹節及アンツエリンは正午に第三キヤムプを發し、午後四時に第四キヤムプに着いてゐた。手が揃つたので、さあとばかりに前から張り放しにして雪の下になつたまゝ捨てゝおいた天幕を掘り出すが、今度は中々調子がよく、別の雪のひどく溜らない氷壁の直下にそれを移轉し、第二キヤムプから背負ひ上げた白いウイムパーテントを、口と口とを合せて新設したが、全部仕事を終つたのは七時であつた。座つて見ると一寸變つた氣分であつた。新調のウイムパーテントには竹節ヒアンツエリン、あいた所に登山用具、もう一つのテントには他の四人がすしづめになつたが前回とは比較にならぬ程樂であつた。アンツエリンは調子の良い石油焜爐で炊事をはじめたが、食事を終つたのは九時頃、今回は食糧も豐富であり、高度に馴致したため頭痛を感ずることなく、雜用はアンツエリンにさせるので、前回に比して非常に樂であつた。たゞ夜嵐が時々雪を吹き上げ、天幕をうごかすと、その度毎に天幕の内部に下がつてゐる氷柱が金屬性の音を立てゝ下に落ちるのが、妙に寒々した感じを與へ、その上寒さがはげしい所故かマツトが固く硬張つて行くのがわかる。明日は愈々最後のチヤンスであつて、これを逸すれば、先づ三度試みる可能性はない。それを思ふと何となく武者震ひがする。明日は早朝から出發出來るやうに手順を定めて、シユラーフザツクにもぐり込んだ。頭痛が殆んど感ぜられないため、ぐつすり眠り込むことが出來た。

十月五日　風烈しけれど快晴　第四キヤムプ發午前七時半、頂上手前の鞍部着十時、一時間半休憩、頂上着午後二時五十五分、休憩三十五分間、第四キヤムプ歸着五時半。

何だか暖かさうな、快よい音がすると思つて眼をさますとアンツエリンが焜爐で炊事をはじめてゐた。もう五時だ。さあ、今日は頑張るぞと覺悟を定めた顏が、湯氣の立ちこめた天幕に集つて、暖かいオートミールを飽食した。この前のみじめな朝立ちの時とは比較にならぬ豪奢ぶり。朝風が時々はた〳〵と天幕を動かす。

隊長堀田はその日の有樣を次のやうに記してゐる――『天幕の中ですつかり武裝を固め、各自のウインドヤツケのポケツトの中には、乾杏、ビスケツト、チヨコレート、ドロツプス等をつめ込んだ。これによつて歩行中に隨時に食事を攝ることとした。風當りの強い雪稜に向つて苦しい登行を續ける時には、ルツクサツクから食糧を取り出すことは非常に不便であるからだ。しかも食欲の減退する高處の登高においては、食物を攝らないことはエネルギーの消耗を來すおそれがある。それで私達は無理にでも少量づゝ何か口にすることにした。食欲のない時には、出來るだけ自分の好むものを口にすべきだ。私達は各自の好みの食物をポケツトに、より多く入れたのだ。アンツエリンにテルモスの紅茶を持たせた。これで重みのあるものが私達の負擔から減つたので大變助かつた。七時半頃私達はテントから外に飛び出した。快晴の日和ではあつたが烈風は相變らず吹き捲つてゐた。高度に馴致したためと、先日歩いた跡がある爲に、天候さへ良ければ必らず登れるぞと云ふ氣持が私達の登高をはかどらせた。ナンダ・コート氷河側から西北風が吹りつけるやうに吹きつけるのに反抗しつゝ登つて行つた。つかれた肉體の何處に、此樣な鋭氣が隱されてゐたのか、次第に旺盛な登高欲と、闘志とが再び私たちの體に漲りわたるのを感じた。こゝろよい一歩々々が頂上へと向つて行

つた。天候は益々良い方になるやうに思へた。圓い瘤の頭への長い登りも大した苦痛にもならず、十時には全員が、この瘤の頭と本峰との間の鞍部に着くことが出來た。廿九日の登高の時間と比較するに、相違は嘘のやうに甚だしい。廿九日には六時半から十二時までかゝつた。卽ちこのコルまでで三時間も違つてゐた。高度に馴れた爲であらう。

『此コルは第四キャムプから頂上に至る間の唯一の休み場所で、此處で十分に息を入れて休み、最後の登高に取りかゝらねばならぬ。風も幾分おさまり、天候は良くなつた。ナンダ・コートをめぐる幾多の山々は一段と冴え切つて紺碧の空に映えて居た。この素晴らしい眺めを見ながら、食事をとつた。不要なものをこゝにおき、先日埋めておいた國旗や、映畫撮影機、ピトン等を掘り出した。撮影機は太陽の熱にあたると再び快音をたてゝ廻轉をはじめた。むさぼりうつすヒマラヤの大觀。

『十一時半愈々最後の攻撃に向つた。コルから眺められる頂上への山稜は非常に急峻である。その兩側には不規則な雪庇が連續してゐる。稜線を眞直に登るのは危險である。それで先日と同じく稜線の右側十五六呎の所、卽ちナンダ・コートの北壁の最上部を登ることとした。雪質は先日と異り、アイゼンで歩くのに丁度良い位に緊つて居り、ピツケルで刻む足場も、しつかりと形が殘る程であつた。これは數日間の烈風と、十月になつてからの快晴が雪質を變化させたためであらう。私達にとつては幸運な變化であつた。暫く登つてからアンザイレンした。ザイルが百呎のもの一本のみであつたため、變則な登り方をした。卽ちトップとラ

ストとがアンザイレンして、他のものはこの間にはさまつてゐるだけでザイルをつけないのである。トツプがザイルの伸びるだけ登つてジツヘルすると、四人がその所まで登り、最後にラストが登ると云ふシステムであつた。最初湯淺がトツプ、それに堀田、アンツエリン、竹節、山縣、ラストが濱野と定め、前進登行をつゞけた。ステツプを切るトツプは腕がひどくつかれるのでなか〳〵容易な仕事ではない。先日登つた所までこの順序を變更しなかつた。それからは自分がトツプに出た。この頃から各員の調子は愈々良好になり、實に愉快な登高をつゞけることが出來た。足許から數千呎の急斜面が直接にナンダ・コート氷河にまでつゞいてゐて、氣味の惡い所であるが、好調にある私たちにはこの恐ろしい斜面も眼中になかつた。ステツプを切る手と、踏み出す足に全神經が集中せられてゐた。この樣な狀態にある時には非常な惡場でも氣持よく登れるものであることは、これまでしば〳〵經驗したことだが、此時の登高は私がこれまで經驗した中で最も氣持の統一された、快調の登高であつた。隨つて登るにつれて斜面も急になり、惡場もつゞいたが、何らの不安も感ぜられなかつた。私が湯淺に代つた時には、到底頂上までのステップ・カツティングはつゞくまいと思つてゐたが、登るにつれて調子が良くなつたので、身體の疲勞も呼吸の切迫も打ち忘れ、とても引き退る氣にはなれなかつた。たゞ先頭に立つてステツプを切る快味に醉つてゐた。頂上を目睫の間にして、殆んど自分の力の大部分を注ぎ切つてしまひ、言語につくせない程苦しくなつたが、それでも先頭を交代して貰ふ氣にはなれなかつた。二番に居た湯淺に、最後までステツプを切らせてくれと賴んだ位であつた。尺取蟲

のやうにザイルは何回も〳〵仲びたり縮んだりした。あと何回で頂上に出るだらう。ところがなか〳〵目算通りに山頂は近附いて來なかつた。しかし遂にあと五六十呎のところまで登りついた。この最後の所は全く直立で、山頂の雪庇が稜に向つて、蔽ひかぶさるやうに突き出してゐる。

『こゝに來た時には私は感激のために、後をふり向いて隊員の顏を見ることすら出來なくなつてしまつた。不安も危險も、何も感ずることなく、たゞ足場を刻んだ。比較的雪庇のうすい所に向つて、渾身の精力をしぼり出して、下から雪庇を打ち割つた。雪の破片を頭から全身に浴びながら打ち割つた。ぽつかりと開いた穴、そこからぬつと頭をつき出すとそこには全く素晴しい別世界が展開した。ナンダ・コートの山頂にピッケルをつき込み、感激にふるへる身體をずり上げた時には全く夢中であつた。足に力を入れ、一踏張りして、身體をはづませるやうにして、頂上に轉げ上がつた。見わたすと自分の今立つてゐる處よりも高い處はまはりに見あたらぬ。山頂に來た。立直つて後續の隊員に登つて來るやうに合圖をした。そしてザイルを頂上の雪につきさしたピッケルにぐる〳〵捲きつけ、感激と疲勞のあまり、その上に俯し倒れた。その時思ひついて時計を見ると二時五十五分であつた。溢れ出て來る感激の涙は止め度がなかつた。

『續いて湯淺の顏が雪庇の穴からせり上つて來た。忽ち私の傍に彼は立つてゐた。私のつかれ切つた手を固く握りしめて、一言も云はない。つゞいてアンツエリン、竹節、山縣、濱野が登つて來た。』いづれも手を握り合ふだけで、歡びの言葉が出なかつた。もし言葉を出したとすれば、涙に溶けてしまつたであらう。全員

何の故障もなく、この二萬二千三百五十呎の處女峯に立つことが出來た。これ實に偉大なる何物かの恩惠に外ならぬ。感謝の極みである。

私達の部長の顏、激勵してくれた日本山岳會の先輩諸氏の顏、數年間共にヒマラヤの夢を見つゞけて來た部の先輩同輩、心から喜んで見送つてくれた後輩の顏。そして東京驛頭の人の渦がまざ〳〵と瞼のうらによみがへつて來た。苦節數年の宿望はこゝに達成せられた。あせり、あきらめ、再び頑張り、再びあきらめた。あの焦々した苦しい五週間。これは實に無駄ではなかつた。九月二十九日に吾々を拒絶した山靈は遂に我らの望をかなへてくれたのだ。

白銀の嶺は眼のとゞく限り、脈々と列つて居た。眺望は前回の登高に際して眼にうつつたのと大差はないが、何と素晴らしい景色だらう。寫眞機のシヤツターを切るのも忘れた。寒風が西から吹きつけて、手袋を外すことが出來ない。竹節が苦心をしてこゝまで持ち上げた撮影機は動きはじめた。兩手を上げて萬歳の格構だけしたが、とても大聲を出す程の餘裕はなかつた。頂上に居たのはたゞの五分か十分かのやうに感ぜられたが、三十分も何かして居たのであつた。ルツクサツクの中から、國旗、校旗、大每社旗をとり出して、山頂の氷雪にピトンをうちこみ、それにしつかりと結びつけた。アンツエリンもこれにならつて持つて來た赤い細い布をむすんだ。幾分よごれた國旗は、凍りつくやうな寒風にちぎれんばかりにはためいた。我々は國旗を前にして自から肅然たる氣持になつた。この氷雪が跡方なく崩れ落ちぬ限り未來永劫この國旗は我々

の初登攀を物語つてくれるであらう。

しかし私たちは歸らねばならない。頂上の國旗に心からの敬禮を捧げて、歸國の第一歩をこれから踏み下した。再び立つことがないであらうナンダ・コートの頂上を後に、濱野を先頭に、登りの時の順を逆にして、一歩々々下降をはじめた。頂上直下の部分ではいくらかひまがかゝつたが、そのあとは堀田の切つた見事な足場を馳せ下らんばかりの好調子で下降をつゞけた。注意はたゞ足許ばかりに注がれて、左右を見ることも出來ぬ。何時の間にか足場は右に緩くトラヴァースするやうになつた。コルに出たのだ。最も惡い場所を通過し得て一安心したため急に空腹を感じた。先刻埋めておいたルツクサツクを掘り出し、食物を口に運んだ。雲が殆んど動かない。私たちがベース・キヤムプを設置してからの最も靜かな日であつたやうに思はれる。しかしそれは幸福感に醉ひしれた我々の錯覺かも知れない。ふりむき仰ぐ山頂への稜線には堀田の切つた見事なステツプが殘り、雪庇の穴さへもよく見えてゐる。

長い、廣い氷の斜面をかなりのスピードで下降した。第四キヤムプの上の細い山稜で、たそがれ迫る山頂に最後の挨拶をした。今日は雪烟を上げてゐない。薄晒色の空に浮ぶ山の姿は實に寂然として、今我々人間をその上に立たしめたことに、何の痛痒も感じないが如くであつた。喜び勇むアンツエリンはお茶を沸かしますからと云つて一足先にキヤムプにはせかへつた。實に彼もはじめてヒマラヤの山頂に立つたのである。

キヤムプに着くとアンツエリンは早くも夕食の支度をしてゐた。今度はつかれたにはつかれたが、全く快

くつかれた。またアイゼンを解いたり、靴を脱いだりするにも苦痛を伴はなかつた。夕飯には卽席の餅で雜煮をつくらせた。美味さうな香がテントの中にみなぎり、腹がふとると共にまた元氣が出て來て、山の歌は勿論果は浪花節まであらはれた。ヒマラヤの山靈にさゝげる御神樂である。アンツエリンも喜んで歌つた。

カングリ　コルニラ　ヨンエ
カンジュ　トンニラ　ヨンエ
カンギ　サンギラ　カルム
ゴムバ　シュニラ　ヨンエ

（大意――ヒマラヤの中に入り、それから出るうまい水をのんだ。山頂に登つて、そこに居る白い高麗犬（サンギ）にぬかづき、山を下つて來た――チベツト、ネパールのものはヒマラヤの五つの山の頂には白い高麗犬が居ると信じてゐる）

彼は得意の絶頂にある。彼らシエルパの山人夫のなかにも、頂上に立つたのはほんの數へる程しか居ない。ともかく彼は二萬二千三百五十呎でも山頂に立つことが出來たので、仲間に對して幅が利くやうになるのであらう。何時までも樂しい話と歌は續いた。アンツエリンは數回雪をとかして紅茶をつくらねばならなかつた。私たちはこの第四キヤムプでの最後の睡眠を樂しむべく、シユラーフザツクに鼻唄交りでもぐり込んだ。

十月六日　晴時々曇、午後時々小雪　午前十時第四キャムプ發、午後三時半第一キャムプ着、宿泊。

昨夜あまり食つたり飲んだりしたために石油がなくなつてしまつた。幸ひ携帶燃料があつたので茶を沸して飲むだけで我慢する。ウイムパー・テントはグラウンド・シーツを切り捨てて紀念のために持ちかへることにした。ポールを長くつぎ合はせてコルの深雪の中に突きたてゝ子供のやうに喜んだ。色々な器具は捨てゝ行くつもりであつたが、トレイルス・パス越があるので皆とりまとめて背負ひおろすことにした。昨日のつかれがあるので少々こたへるが、何と云つても凱旋なのだから苦しさを殆んど感じない。しかし隊員のあるものは頭痛がすると云つてこぼしてゐた。いよ〳〵おわかれだ。あたりの風物をもう一度見廻して往路を下りはじめた。氷の壁や、氷の溝の惡場も注意はしたが、比較的樂な氣持で下ることが出來た。三十日の歸途とは全く變つた心の輕さである。第三キャムプの上手に來て見ると、三日前に登つた時にまたぎ越えたクレヴァスが一間あまりになつてゐる。しかもそのまはりにはデブリが出てゐて、一見して氷の壁の上部からの雪崩が出て、このクレヴァスの上を掩つた雪を押しのけたことがわかつた。デブリの下端は第三キャムプまで僅に五六十呎であつた。こんな雪崩の出た時第三キャムプに居たら、どんなに恐ろしかつたことだらう。

こゝに小憩の後天幕は明日アンツエリンに取りに來させることにして下山を急いだ。眼下の雪原を三つの人影が登つて來る。そのうち二人はやがて第二キャムプの上の所にあらはれた。アンツエリンは、あれはヌルサンとアルモラのもの一人だと云ふ。サーダーヌルサンが喜んで迎へに來たのだ。池のコルに下ると岩か

げに風をよけて居た二人は私たちの前にとび出して來た。ヌルサンは感激に輝く眼で、私たちの手を握りしめた。ヒンドスタニ語、チベツト語、ネパール語、英語ごつたまぜで話しかけて來る。彼は嬉しさのあまり餘程あがつてゐるらしい。水を飲んでゐる時にも、寫眞をうつさうとしてゐる時にも、そばによりそふやうにして色々聽きたがる。「山の頂上はどんなでしたか」「望遠鏡で下から見て居りましたよ」「堀田バラサーブは日本のシエネン(ジエネラルの訛らしい)ブルースです」と、初老の彼がこんなに狂喜したのは初めて見ることであつた。さうかと思ふと彼はアンツエリンと喧嘩でもしてゐるやうなネパール語で話し合つてゐる。この一幕がすむと彼は色々の食物を取り出して、我々の手におしつけんばかりにすゝめる。自分で加減してうまくつくつたのださうだ。空腹の我々は池の水を飲み、その御馳走を食つた。ヌルサンは私たちの荷物をかなり澤山背負つた。サーダーとしては珍らしいことで餘程喜んでゐたと見える。人夫がのこ〳〵やつてきて、合掌の禮をしてくれた。第二キヤムプまで下ると大勢の人夫が迎へに來てゐて、擧手の禮をして例の通りに「サラーム・サーブ」をやつた。荷物を皆彼らに持たせて手ぶらで雪原をぶら〳〵下つた。ヌルサンは少し歩いては、立戻つて山を眺め、また話しかける。華々しくはないが樂しい凱旋行列である。雪線の下の池でまた一時間程腰を下ろしてやすんだ。山頂は薄黑い雪雲に掩はれて見えなくなつた。ヌルサンは彼が知つてゐる英、獨の登山家のこと、特にブルース氏、バウエル氏のことを話した。「私はとても嬉しいのです。ダージリンのヒマラヤ・ンクラブのキツドさんは私とアンツエリンに御馳走して呉れます。日本のエキスペ

デイションは一人の負傷者もなく全員登つた。御前達が良く働いてくれたからだと云つて賞めて下さいます。ナンガ・パルバートでも、エヴエレストでも、カンチエジュンガでも私たちの仲間も、サーブも死んでゐますものね」「ベース・キヤムプではボムベイサーブ（廣瀬老人のこと、太つてゐるのでモタワラ・サーブとも呼ばれてゐた）が喜んで待つてゐますよ」。彼は私たちが登頂したと望遠鏡で看取するや否や、居合せたアルモラのものにもレンズをのぞかせ、狂喜して第一キヤムプに立てゝあつた日章旗をふり廻しながら、そこいらを走りまはつたさうである。その夜信心深い彼は暗い灯の下に端座して喇嘛に私たちの無事下山を祈願したことであらう。「どうぞまたヒマラヤへ來て下さい。この次も私たちをやとつて下さい。どんなにしてでも御伴します」はじめは彼の若年の私たちを見る眼は、英獨の先輩登山家に對するとは同一ではなかつたことは確かである。しかし今日は何と愛想の良いこと、ほんとうに我々を尊敬するやうになつたのだらう。日が暮れかゝるころ、私たちは滿ち足りた心持で第一キヤムプにくつろいだ。ヌルサンとアンツエリンは一生懸命に御馳走をつくつてくれる。

十月七日　晴時々曇　隊員はベース・キヤムプに下り休養、人夫等をして天幕等の撤收をなさしむ。

久し振りにガレや岩屑の上を歩くと足に妙な感觸がおこる。斜面に生えた高山植物の葉や莖は悉く枯れ果ててゐる。ベース・キヤムプからは白い炊煙がゆるく立上つてゐるのが、今の伸びやかな我々の心持を象徴してゐるが如くであつた。ミラムの警官ダンシンフと附添のマテルダス警部が丁度登つて來て、登頂成功を

聞いて心から喜んだ。夕食に際してたつた一本だけ持參したウイスキイを氷河の冷たい水で割つて祝杯を擧げた。好い氣持になつた警官たちは頻りに Golden night, Lucky night の祝辭を連發して、私達を嬉しがらせた。ダンシンフは河口慧海師のことをよく知つてゐて色々な話をしてくれた。かくしてこの宴は九時半頃までつゞいた。

この日アンツエリンはまめ〳〵しく第三キヤムプまで登つて後かたづけをしたし、ヌルサンは第一キヤムプの後片づけをした。クリーは總動員で大多忙である。實にアンツエリンの達者なのにはすつかり感心してしまつた。彼らは今夜は第一キヤムプに泊り、明日下山する豫定になつてゐる。

十月八日　晴　人夫達もベース・キヤムプに集結し終る。

十月も八日になればベース・キヤムプでも初冬である。木枯とも秋風ともつかぬ冷たい乾いた風が西藏から、荒涼たる氷河の上を吹いて來て、そゞろに身にしみる。赫々たる太陽の光も今は快く肌に感ぜられる。人夫共は風り當のない岩かげでこくり〳〵と居睡りをしてゐる。時々はつと眼をさましてはぼろ〳〵の衣服から虱を取つてゐる。廣瀨老人と人夫たちがつくつた石塔がナンダ・コートを正面に見る場所に立つて居る。老人の平素信仰してゐる高野山の小さい懸軸がかけてあつて、空鑵には枯エーデルワイスが挿してある。

第一キヤムプから下つて來たヌルサンは、挨拶もそこ〳〵に老人と一緒に念珠を手にかけて、石塔の前に跪座して、長い間祈念してゐた。この敬虔なる態度と風姿とは、白い大きい聖なる山を背景として、實に神

祕な或るものを感ぜしめた。アンツエリンも阿伽の水をとりかへ、枯れては居るが花をとつて來て捧げてゐた。

食物が大分餘つたので各自食ひたいものは食へるだけ食ひ、餘りは人夫に勝手に取らせた。彼らは大喜びで口々にしやべり立てながらよりどりをしてゐた。私達のトレイルス・パス越を案内するデワンシン老人も來て居た。彼はラツトレツヂ氏を案内したと云ふ履歴を持つてゐる。しかもこの近在での資産家で羊を何萬頭とかに、現金を數萬流比とか持つてゐるさうである。見た所力のない赤い眼をしたやせた老人で、これで山が歩けるのかしらと大いに心配になつたが、ともかくピツケルや靴其他の器具を與へた。

我々の一行は明日から二つに分れる。隊員五人はアンツエリンと、デワンシン老人をつれてトレイルス・パスを越えてアルモラへ、廣瀬老人とヌルサン、マテルダス警部はクリーをつれて往路を再び旅行して、十月十四日カプコートの村で落合ふことにした。夜は有りたけの薪を持ち出してキヤムプ・ファイア。アルモラの人夫は暖い故郷へ歸れるので大喜びで、頻りに單調な歌をうたつてゐた。時折氷河をわたつて來る冷たい風が焰をあふり立てた。

十月九日　晴　午前六時、隊員及アンツエリンはデワンシンの案内に從つて出發。トレイルス・パス着午後三時。午後八時其南方斜面斷崖上にてビヴアツクす。

眞暗な夜明前の天幕の中でお茶漬に味噌汁の朝食をすませたが、酷い寒さで身體中ががた〳〵震へる。最

も厄介の鍋貨と銀貨とは、廣瀬老人に持つて行つて貰ことして、我々は紙幣だけを持つて行くことにした。出來るだけ身を輕くして今日の長い路程をむさぼらうと云ふ考へなのと、その上勝手を知つたデワンシン老人は、峠の向ふ側に良い岩小屋があるから天幕は不用だと云ふし、持物は羽根蒲團始め防寒具と少量の食料だけに止めた。六時には未だ薄明であつたが、皆の見送をうけて直ちに堆石の丘に上つてナンダ・コート氷河を横斷した。太陽の熱をうけない氷河をわたる風は飄々と寒く身に泌み、耳を、頰をちぎるやうに冷たいが、やがて速い歩行のため身體が全體溫くなつて來た。このあたりでは氷河の上に大小の岩がごろ〳〵乘つてゐるので先づ滑る憂はないが、時々底の方で高い冴えた音がするので、ひやりとさせられる。まさか急に氷河にクレヴァスが出來て我々をのみこむわけではないのだが、甚だ不氣味なものである。所々に小さな池もある。この夜明の寒さには前に聞こえた融けた水の瀧の音もかすかであつて、風の向によつてはきこえなくなることすらある。デワンシン老人は氷河に出ると曲つた腰もしやんと伸び、猿のやうに身輕になつて氷や岩を巧に飛び歩くので、そのあとからついて行く我々もすつかり感服して、なるほどこれではこの邊の山の主と云つても良からうと得心した。對岸の岩地に達した頃には太陽は漸くナンダ・コートの山頂を薔薇色に染めはじめたが、見る見るうちに光が伸びて來て山も谷も明るくかゞやき始めた。美しいヒマラヤの朝景色。

氷で埋められた小澤を登りつめ、草つきの尾根に出たが、土はすつかり凍結してゐる。羊飼がやはりこの邊

まで來るらしく羊の路が山腹を縱橫に走つてゐる。しかしもうヒマラヤは冬で、羊どもは例年の如くマルトリの人達に追ひ立てられつゝゴリ河の道を埋めて暖い南へ南へと移つて行つたことであらう。我々もナンダ・コートによつて數年來の登高欲を滿足せしめられて南へと足を運ばうと云ふのである。このあたりの景色は實に荒凉としてゐる。ことに今は眼の下になつたナンダ・コート氷河はその焦點である。大小の無數のクレヴアスは龍の鱗であり、側堆石は背中に生えた鰭のやうに見え、上部の雪の扇狀の堆積は八岐の大蛇の尾を思はせる。今我々はナンダ・コートの肩(と云つても獨立した一峯だが)から東北に走る不規則にわかれた尾根の一つを西南に廻りつゝあるのだ。一萬七千二百呎のあたりから雪を踏むやうになる。こゝからはナンダ・コートを左に見るやうになつたので、デワンシン老人に催促されながらもその大觀を心の乾板にやきつけるため時々立止る。ベース・キヤムプから第一キヤムプの草付きの尾根通は垂直に近いガレのやうに見え、第三キヤムプ附近は尾根らしくは見えず、たゞ氷の巨塊がもく〳〵と斜面にくつついてゐるやうであり第四キヤムプから頂上までの登りは隨分ながく、途中のドームまでは大變な勾配に見えてゐる。下をふりかへるとベース・キヤムプを引拂つて歸らうとする人夫たちの列が堆石に沿つて動いてゐるのが良く眺められた。ベース・キヤムプの附近も來年羊飼が來るまではその本來の靜寂を取りもどすのであらう。ナンダ・デヴイはもう間近であつて呼べば答へさうであり、ことにナンダ・デヴイ峠は手をのばせばとゞきさうだ。やがて道は一轉してナンダ・コートの肩とトレイルス・パスの間の小さな隆起から出た小尾根の斜面を登るこ

とになつたが、相當急傾斜があつて雪崩に注意しなければならず、尾根の上に出るには雪庇をこはさなければならなかつた。その隆起の北側をからんで愈々トレイルス・パスを最凹所とする釣尾根の上に出た。細い尾根の道は段々と平になつて、大雪原をつくつてゐる。道草を食つたおかげで大分時間がおくれたが、良い案内は居るし、第一我々の氣分がすつかりのんきになつてしまつてゐるので、あまり急がうともせずまはりの景色を眺めて悦に入るばかりである。乘越の鞍部についたのがもう四時で、それから南折してピンダリ河の斜面をなすゆるい勾配の雪田をいそいで下りはじめた。殆んど平らな雪田は中々つきない。ふりかへつてナンダ・コートを仰がうとしたがもう見えない。太陽が沈みかけて空はいくらか暗くなつたけれども、ナンダ・デウイの双峯はいつまでも高く、白く、清らかにそびへてゐる。やがて宵の星までが輝き出したが未だに岩小屋には達しない。その内にデワンシンの老人ラツセルしたあとを見定めてやつと歩くやうな夜になつてしまつたが、未だに岩小屋には到着しない。電燈をとり出して足許を照らしながら下降をつゞけると、兩側が氷の壁になつてゐてその上から雪崩でも出さうな狹路になつたり、また幾らかあたりがひらけて起伏のある雪原を歩いたりするやうになつた。もう時刻はかれこれ八時である。良く訊して見ると、この下は五百呎の岩壁でこれを降ると氷河があり、それを少し行くと岩小屋につくのだと云ふ。それでは到底夜は下降することは出來ないことはわかつてゐる。つまり今朝からあまりのんびり歩き過ぎたことがたたつたので、全くの自業自得と云はなければならない。結局我々が立つてゐる岩棚の上で今夜はヴイヴアツクと覺悟を定め

ざるを得なくなり、あたりの雪を皆で力をあはせて除去し各自寢心持の良ささうな處に陣取ることとなつた。一方携帶燃料で砂糖湯をつくり、ビスケツトを嚙つて夕食の代用とし、星の影も凍りさうなヒマラヤの夜空の下でシユラーフザツクにもぐりこんで岩陰にしやがむものや、一つだけ持つて來たツエルトザツクに二人で入つたりして寒さを出來るだけ防がうと云ふつもりである。南と思はれる方角を見ても雪をかぶつてない黑い山が屏風のやうに立ちはだかつて、ピングリ氷河がどこなのだか見定めることも出來ぬ。その山の中腹には燈火が點々と見えるが恐らく羊飼の焚く火であらう。夜が更けるに從つて寒さは增し、岩に接した腰がいたくなり、つめたくなるので位置をなほして見たり、退屈をまぎらせるために烟草をふかして見たりする。しかしこの間から寒さに慣れてゐたためか、自信がついてゐたせいか、案外苦しくはなかつた。たゞ早く夜があけてくれればと思ひつゞけながら、いつのまにか眠り込んでしまつてゐた。この時まで星がこんなに澤山あつて、しかもこんな奇麗なものだとはさとることが出來なかつた。

十月十月　晴後曇　午前十時出發、十一時より午後三時まで途中休息、五時十五分、アルモラより七十五哩のマイルストンを見る。午後九時ブルキヤのバンガロー着。

居たたまらない寒さで眠がさめたが未だ四時であつた。所在なさに烟草に火をつけてうづくまつてゐた。やがて空が白くなりはじめると、澤山の星の光がだん〳〵黃色くなり、やがてうすくなりつ消えて行く。一萬七千呎の峠の朝がはじまつた。山風がさつと吹きはじめると共に東天は茜色に染められ、山の頂は白さを

増し、やがて自分たちの居る處のあたりも分明にわかるやうになつて來た。昨夜はわからなかつたが、南方の眼下にはなるほどピンダリ氷河が白く光り、山の間を流れて幾重にも裾を合せた山々の間に姿を消す。その山の彼方は頂きに薔薇色の曙光をうけた紫の山波が果しなくつゞいて、霞のやうに印度の平原に續いてゐる。ナンダ・コートの南からの眺めは實に素晴しいもので、自分ながらよくも登つたものだと感心せざるを得なかつた。こゝからは「肩」が大きく根を張つて、その右側に本峯が見えるが、とても鋭く尖つてゐて、犬の牙そのまゝのすがた。そして山頂の直下は雪もつかぬ位急峻で黒い岩がそのまゝ現はれてゐる。矢張り我々がロングスタツフ氏に教へられてあつた登路が唯一の登路なのである。ナンダ・デヴイはローン峰の蔭になつてもう見えなくなつてゐる。こゝでも陽があたるまでは動かれない。陽があたつて來ると先づ固く氷つた靴が暖まるのを待たねばならぬ。羽根蒲團から首だけ出して鼻の先に置いてある靴を見て居ると、くつついてゐる氷が見る〳〵とけて水球になつて行くのも面白い。

朝食は持合せのビスケツト、ソーセージ、ハムで簡單にすませ、仕度をとゝのへて岩場を下りはじめたが、大した苦勞もなく雪の斜面に出て、グリセードで飛ばした。氷河の上を歩かずに右側の尾根を歩いて行くと小高い丘があり、そのあたりにケールンが積まれて居て、古い板が數枚落ちてゐた。デワンシン老人の談によるとラツトレツヂ氏の前にこの地方の長官であつたテラル（どう云ふ字を書くのか知らない）氏が氷河見物に來た時クレヴアスを渡るのに使つたものだと云ふ。アンツエリンは一足先に急いで行つて御茶を沸して

おきますと云つて行つてしまつた。更に下ると岩にかこまれた適當な野營地がある。高さは一萬四千呎であつた。丁度ひるなのでラットレツヂ氏が運ばせたのだと云ふ古い薪を燃して茶を沸し、餅を食ひ、ゆつくりと尻を落着けて休息した。こゝから見ると氷河は各々二百呎以上にも及ぶ大氷瀑となつてゐて見る眼も恐ろしい。アンツエリンはたしかに始めはデワンシンを馬鹿にしてゐたらしいが、昨日から今朝へかけての活躍振りにすつかり感心してしまひ、今も我々が飲んだ御茶の殘りを先づ「デワンシン・バブー」に給仕し、自分はそのあまりを飲むと云ふ尊敬振りである。三時になつてやつと腰を上げエーデルワイスの花盛りの草附きや礫路をどし〳〵かけるやうに下つて行くが、時々一輪一輪と摘みとつてはポケツトに入れる。時々小川が流れてゐる。その水の美味いこと。こんな奇麗な天然の水を飲んだのは何日かぶりのことである。霧がどこからとなく捲いて來て方角がわからなくなるが、老人は中々勘が良くて決して不安心な案内の仕方をしない。所々に「テラル」が作らせたと云ふ道のかたちが殘つてゐる。四時半頃氷河を歩かねばならなくなつた。クレヴアスを右に左に避けながら歩くのだが、時には細い刄のやうな上をバランスを取つて歩かねばならぬ所もあるし、氷の傾斜面をつる〳〵と辷りおりてその勢で向側の氷のこぶに飛びうつることもあるし、暗いトンネルをくぐる所もあるし、僅か一時間半程であつたが、面白い經驗をした。この間霧は愈々濃くなつて來るので方角は全くわからない。老人は時々立止つて耳に手をあてゝ氷河の下を流れる水の音を聞いて方角を定め危なげもなく案内して呉れる。やがて氷河の表面の凹凸も少なくなり、木片のやうに見える岩屑が氷

の上に乘るやうになつて來たが、これは氷河の末端に近いことを示すものであつた。この氷河の堆石は灌木や草ですつかり掩れてゐて、夕霧にぼかされてゐるが、久し振りに見る綠の山は心から我々を樂しませてくれた。この間にとぎれ〳〵に細い道がついてゐる。やがて「七十五哩」のマイルストンが見つかつた。距離はアルモラから測つたもので、氷河見物の道路の終點を示すものである。何とも云へない溫い氣持が胸の中に湧き起るのを禁じ得ない。これからは人里なのだ。自然の力におびやかされないでもすむ。

紫色の夕霧が堆石の上を、谷を、山を靜かにつゝむ。こゝでは霧までが暖い。ふと耳をすますと水の音だ。柔かい土の草原がひろ〳〵と左右にひろがり、羊の道が縱橫に走つてゐる。草と土の香、生々と水の流れる音。これ等すべては長い間氷雪の世界にこはばつた我々の心を柔かにときほぐして行く。今夜の泊りのブルキヤのダク・バンガローは未だ遠いが、先きの心配はすこしもないので、坦々たる道を電燈でてらしながら、夜霧を分けて散步氣分で下つて行くのが、丁度日本の秋の山の夜道と同じであつた。時々放牧の馬が灌木の茂みの中から、長い顏をにゆつとつき出して私達をおどろかせる。九時になつてやつと、この道の最後のバンガローにつくことが出來た。汗だらけの衣服を乾させ、代りのシヤツを身につけて、勢よく燃える爐の火にあたりながら幾十日かぶりに落付いて家の中で烟草をふかす。うす暗いラムプにてらされた高い天井、石疊、近くを流れる水の音、まるで秋の夜の小屋の休息である。安堵の心、滿足の情、完成の喜が口にこそ出さね、皆の胸に油然と湧いて來る。東京の學校の連中は心配してゐることだらう。電信の利く所へ出

たら早速知らせてやらねばなるまい。何と皆がよろこんで呉れるだらう。これを思ひ、かれを思ひ、話す言葉もなく五人のものはたゞ火をみつめて煙草をふかしてゐる。やがて米の飯が出來た。ハヤシライスにして空腹につめこんだが、昨日のひるから今まで食物らしいものを口にしなかつたため猛烈に食欲を發揮して、六人分のつもりが五人で食ひつくし、アンツエリンは自分の分を炊きなほさなければならなかつた。十一時になるのに誰も寢ようとはしない。たゞ火をみつめ、煙草をふかし、思をかなたこなたに走せてゐた。

十月十一日　晴　ブルキヤ出發午前十時、ダワリ着十一時半、發正午、カテイ着四時半。

朝起きて外に出て見ると草の上には森の木々の間から洩れる朝日があたつて、露がきら〳〵と輝いてゐた。その生々した光と色とは常と變つて私たちを喜ばせた。それでも木立を通して遠く望まれる雪の山をなほも飽かずに眺めわたし、ことに一昨日から昨日へかけて窮屈な眼に會つた氷河の上の岩棚はことに興あるものに眺められる。再び谷を見わたすとそこは一ぱいの綠であつた。この時ほど綠の色――それは新鮮でない秋の綠であつた――が和やな氣分をおこさせて呉れたことはない。貴重品を自分たちのルツクサツクにつめ、手廻などはアンツエリンに背負せてバンガローをあとにピンダリ河沿ひの路を下りはじめた。前途は未だアルモラまで七十三哩、それでも我らには旅の終りと云ふ、嬉しいやうな、悲しいやうな、或は早く歸りたいとも、歸りたくないとも云へる氣持で滿たされてゐた。ヒマラヤへの別離、またいつ來られるかも知れない雪の巢への別離。我々はあんなに苦しみ拔いた山でありながら後髮を引かれる思で歩一歩とこれから遠

ざかり行くのである。

ダワリの小川のほとりに野苺が眞赤に熟れてゐる。パサ〳〵したビスケツトの晝食のあとの珍味にと手に溢れるばかり摘みあつめて、むさぼり食ふ我々の舌には、新鮮な甘酸ぱい味がとけて流れる。落葉をくゞつた柔い水の味もこの時には珍らしいものであつた。椎の實が路の上にころ〳〵轉がつてゐるのをふみつぶし、撫のやうな大木の疎らな林の下を落葉をわけて歩き、放牧の牛や馬に戯れつゝヒマラヤの丘の秋の旅を滿喫した。ふと氣がつくと河は深い森林の溪の下でさわやかな音を立てゝゐる。幅の廣い溪谷の兩側は絶壁であつて、そのむかし氷河がけづり取つたものだと云ふことが一眼でわかる。この谷最奥の村カティについた。家が十數軒あつて段々畑が山の高い所までつくつてあり、空には入道雲がもく〳〵と座りこんで動きさうにない。此所のバンガローのチョキダルは人の良い奴で薪も豊富に持つて來て臭れたし、牛乳を買つて來たり、蜂蜜も提供してくれた。牛乳を咽喉まで飲み、ロテイに蜂蜜をつけてむさぼり食つた。それに新鮮な馬鈴薯もあつた。

十月十二日　晴　カテイ發午前八時、ダクリにて休憩正午より午後一時迄。ダクリ峠頂上にて休憩午後二時半より五十分まで、ロハルケツト着五時。

ヒマラヤの丘の秋は酣であるらしい。今日は道程が長いので早發する。そしてこの村で人夫を三人賴んで皆輕裝で徒歩旅行をつゞける。スンダードウンガ河の落合を通過したが、これを溯ればトリズール東峰に近

づき、それからナンダ・デヴイの附近に達することが出來るのである。千九百三十四年にはシブトンとティルマンとがナンダデヴイ盆地から、この途をとつて此處へ出て來た。ハラニの部落から我々はピンダリ河に分れる。河は西流してシブトンの本などでおなじみになつたバトレシユワルやカルナプラヤグの方面に行く。我々は高原狀にひらけた尾根を南に上つてダクリ峠を越えてサルジユ河の岸に出やうとするのである。上り路は高原と亭々たる黑木の原始林である。峠の上には道祖神のやうな小さい祠がある。赤い布片や花が手むけてある。我々も何となく菩提心をおこして、カテイのもののすゝめるに任せて登り口で摘んだ花を手向けて、何の神か佛か知らないが、幸多かりし我々の山旅を感謝するやうな心持になつたのは自分ながら不思議であつた。下り路はゆるい坂で綠の草原をつつきつてゐる。所々に疎林があつて、白い羊がその中に群つてゐる。耳をすますと羊飼の笛の音や羊の首の鈴の音がきこえる。强さうな西藏犬が遠くで吠えてゐるかと思ふと、突然草の中から我々の前に躍り出て一方ならず驚かせられる。五時にはロハルケツトのバンガローに着いた。石疊の道、石でかこつた田甫や畑は印度の山村の特徵であらう。部落の子供等が我々の顏を見に來る。外にはたらいてゐる大柄なドテイヤの女も不思議に美しく見える。谷に下つたため暑さを感じるやうになつて來た。愈々里に來たので氣分に大いに弛んだかたち。

十月十三日　晴　ロハルケツト發午前九時、カプコツト着午後四時。

次の日はサルジユ河の右岸沿ひの道を下る。途中で營林署長格の英人に會つた。ピンダリ氷河見物の歸り

で、荷物は駄馬に積み、從者は軍隊式に一列にならんで、印度人の小合奏團の音樂につれて氣持良ささうに行進してゐる。三哩でドウトリヤと云ふ鐵橋で左岸に渡るが、このあたりは低い山と赤松の林で奥多摩見たやうな景色である。一時河をはなれてガクレイと云ふ小さな峠を越すとライパティ河に出る。やがて橋を渡ると往路に合する。そしてしばらく行くとカプコートの村である。往きの時に異つて河の水は澄みわたつてゐる。西藏方面からの旅人や羊飼に屢々出會ふ。バンガローはふさがつてゐるのでデワンシン老人の家にとまることにした。村に入る所で往路に濱野が道づれになつたこの村の者とばつたり出くはした。喜んで話しかけて來るが、今度は濱野の印度語も大いに上達してゐたため、大いに意志を疎通した。ほんの一ときの面會であつたが何だか舊知にあつたやうな氣がした。デワンシン老人の家は土造ではあり奇麗ではなかつたが、彼のもてなしによつて愉快な一夜を送ることが出來た。村の評判になつたものか一人の白髮の老人がうやうやしく黄色い花をもつて最大の敬意を表するためにやつて來た。我々がナンダ・コートに登つたと聞いて、バトリナートやカイラース巡禮に對すると同じやうに尊敬の心をおこしたものらしい。

十月十四、五日　カプコート滯在。

廣瀨老人とヌルサンとに引率されてゴリ河を下つて來る輸送隊は今日明日のうちにこゝに到着する豫定なのでバンガローに移つて滯在してそれを待つことにする。しかし十四日には到着しなかつた。夕方聯合州總督の夫人と令孃がピンダリ氷河見物に來て隣りの部屋に宿を取つた。十五日一日待つてゐたが輸送隊が到着

せぬ。夕方マテルダス警部が大汗になつて、あたふたとバンガローにかけこんで來た。輸送隊の通路は上の方から下つて來る羊の大群で一ぱいでこれを追ひ越すことがむづかしく、從つて行程はすこぶる捗らず、まだ二日はおくれるであらう、從つて不自由なバンガロー泊りをしてゐるより早くアルモラに行つてゆつくり休息せられる方が宜しからうとの注意と共に、廣瀨老人の手紙を持つて來て呉れた。その手紙によると出來るだけ荷物を整理したけれどもマテルダス警部の荷物が二人分をはじめ色々な荷物があるため道が捗らず、十五人のキヤラヴアンは第一日はナルスパンパツテイの河原、第二日はマルトリ、以下ラスパ、バクディアールと泊りを重ね、これでは本隊に長く待たせることになると云ふので、聯絡を取るため、手紙をもつてマテルダス警部に先發して貰ふことになり、輸送隊はそれ以後マンシヤリ、ギルガオン、テジヤム、サマと泊つて十七日にカブコート、十八日はバゲシユワール、十九日にソメシユワール、二十日にアルモラと云ふ豫定で旅行するつもりと記されてゐる。マテルダスは今朝テジヤムを發して二日路を一日で飛ばして來てくれなのださうだ。夕方ラクノウ大學の先生たちがやつて來て、このバンガローに泊つた。氣のおけない人々で大に談じた。

十月十六日　晴　カブコート發午前九時半、ハスチリア休憩午後四時半より一時半迄、バケシユワール着午後四時。

十六日デワンシン老人と別れをつげて出發する。金子の御禮はとらぬと云ふ約束なのでピツケル、ルツクサツク、靴その他の登山用具を贈つた。非常によろこんで合掌「サラーム・サーブ」の挨拶をくりかへし、

見えなくなるまで見送つてゐた。途中からパンカティアの雪峰が見える。肉厚の覇王樹を前景にしたヒマラヤの峯は實に面白い景色である。稻の收獲がすんだと見えて穗のなくなつた稻藁が松の木にかけてある。今日の泊りはバゲシュワール。十一月一日のウトライニの市を眞近にひかへて町を大分賑つてゐる。

十月十七日　バゲシュワール發午前九時、リメシュワール着午後五時。

幸ひ駄馬が二頭あつたので年長者の竹節と堀田に敬意を表してそれを提供し、他の若いものは歩くことにする。朝九時にバンガローを出てゴマチイ河を下り、支流に入りグレー・チヤナの峠（五九〇〇呎）を越えてコシ河に出て、五時にソメシュワールの村はづれのバンガローに入つた。と思ふとひどい雷雨がおそつて來て、すつかり涼しくなつた。

十月十八日　午前五時自動車にてソメシュワール發　アルモラ着午前七時。十月二十一日まで滯在

次の朝ねむい眼をこすりながら朝の五時と云ふのに自働車に乘る。自働車と云つてもトラツクとバスの合の子見たいなもので、今日は朝飯前の一稼ぎと云ふ所らしい。コシの村まで來ると丁度カトウゴダムからアルモラへ行く定期自動車に出合つたので早速乘り換へて、アルモラに着いたのが朝の七時であつた。アルモラの少し手前バスの中から秋晴の空にナンダデヴイの山々を見た。二ケ月振りに見る町は日曜日で中々賑やかである。バンガローからバドリナートの山を既に新雪のきた前山をこへて見渡すことが出來た。マムの「ヒマラヤの五ケ月」にはこゝから見るヒマラヤの大觀が記されてゐて、何とかしてこれを見たいと思つて

ゐたが丁度良い處であつた。實に雄大そのものである。その中のナンダ・デヴイや、ナンダ・コートに人の足がかかつたにしても何でもない。まだまだ登る山はそれこそ山ほどある。谷間から湧きあがる雲につゝまれてこの大觀は消え失せてしまつた。二十日夕方輸送隊が豫定の如く到着した。それでも西藏人の馬に托した荷物は未だ到着しない。もうこゝへ來ると歸心矢の如しと云ふ心持になつて、荷物の揃ふのが待遠しい。知事に御禮のため面會し記念撮影をした。二十一日全部の荷物が到着。急いで大箱につめこみ、トラツク一臺、乘用車二臺に分乘してアルモラを後にする。この間からつかつたクリーたちが荷物かつぎに來た。自働車のガラス窓から消えて行く街、クリーの顏、秋の色の濃くなつたあたりの山波と松林、果ては雲のかなたにかくれたヒマラヤ。さらば、また會ふ日まで。

バレイリーでカルカツタ行に乘るヌルサンとアンツエリンとに別れた。どうぞまた御伴をさせて下さいと、御世辭でなく名殘を惜んでゐた。暑苦しい汽車旅行四十數時間、途中二度乘換をして十月二十三日午前十一時五十分ボムベイについた。驛頭には領事をはじめ多勢の在留同胞が出迎へて下さつたので、すつかり逆上してしまつた。この時日本山岳會員林悌助氏に始めて御眼にかゝることが出來た。二十八日まで各方面で歡待せられて、すつかり營養を恢復し、甲谷陀へ汽車旅行、またこゝでも大變な歡待で愈々逆上、十一月二日またひまらや丸の厄介になつてドツクを離れた。また合ふ日までの挨拶を送りつゝ、船は黃濁の河に出たのであつた。

ガルワールヒマラヤの登山年譜

黒田孝雄

一、はしがき
二、ガルワールヒマラヤ
三、ガルワールとロングスタフ
四、ガルワールヒマラヤの先蹤者—グレハムとシュラーギントワイト
五、ロングスタフの遠征（一九〇五—七年）
六、カメト群—ケラス・ミード・スマイス
七、ナンダデヴィ群—ラットレッヂ・シプトン
八、ガンジス源流群とバンチチュリ群—ミード・パリス
九、ナンダデヴィ（一九三六年）
一〇、主要文献

一

トリスル Trisul がすでに二回も登られ、近年にはカメト Kamet が、そして一昨年はナンダデヴィ Nanda Devi が登頂された。また近い將來に於て多くの登攀が期待されるガルワールは、恐らくヒマラヤ山脈中でシキムと並んで、最も速かに探檢時代をぬけきつて、東洋のブレイグランドとなることであらう。一九三六年度に於て我國として最初のヒマラヤ遠征隊が立大の人々によつて送り出され、幸にもナンダコト Nanda Kot に初登頂の榮譽を得ることのできたのは、我々として大きな歡びである。これに關聯して、ガルワールに於ける登攀の歷史を、ヒマラヤに對する一の常識として、一應回顧し、纒めて置くこともあながち無益なことでもあるまい。

二

ガルワール・ヒマラヤと呼ばれる範圍は、嚴密に云へば、大ヒマラヤ山脈のうち、サトレジ河 Sutlej からカリ河 Kali に至る部分をクマオン・ヒマラヤ Kumaun H. と呼び、そのうちでもバギラティ河 Bhagirati 以東の部分を特にガルワール・ヒマラヤと稱するとのことである。この取扱ひ方では、ガルワールと目と鼻の間にあり乍ら、ザスカール Zaskar に屬するといふことで、カメトなどは當然除外されるのである。

敍述の便宜上私は一層大摑みに取扱つて、英領ガルワールに含まれる大ヒマラヤ山脈並にザスカール山脈を以つて、ガルワール・ヒマラヤの範圍とした。卽ち、ザスカール主脈を北の境界、カリ河を東の境界、サ

トレジ河を西の境界とする地域、緯度並に經度から見れば、略々北緯三〇度より二一度、東經七八度より八〇度半に亘る地域である。

この地域に含まれる山岳群は略々次の四つの部分に分けることが出來る。

一、サトパント、ケダルナート、バドリナートのガンジス源流の山群、卽ち行政上テリガルワール Theri Garhwal に所屬する。ガンジスの源流、ガンゴトリ Gangotri 氷河の周圍を取圍む山群で、その北を限るものがサトパント Satopanth であり、それは北、中央、南の三峰に分れ、北峰が最も高く七〇八三米に達する。その東南端はバドリナートにつゞくが、この交點にクマリン Kumaling（七一三八）が聳え、それより南に向つてガンゴトリとサトパントとの兩氷河の分水嶺をなしつゝ、バドリナート Badrinath の諸峰が連亘する。ガンゴトリの南に連なるのがケダルナート Kedarnath であり、カルチャクンド Kharchakund 群を經てバドリナートに連なる。ケダルナートの一群は最高六九四〇米でつひに七千米級のものがない。

二、カメト群　英領ガルワール北方に屬するザスカール系の一支脈であつて、そのマナ・パスとニティ・パスの中間より南に向つて分れる。イビガミン Ibi Gamin 西峰及び同東峰を起しつゝカメトに於てこの地方第二の最高峯に達し、ダウリ Dhaoli とアラクナンダ Alaknanda との兩河の分水嶺をなしつゝ南下し、マナ Mana、ラタバン Rataban（六一二五）、ガウリパルバート Gauri Parbat（六六二八）ハティパルバート Hathi Parbat（六七四九）の諸峯を連ね、カワティト Kawatit に至つてダウリ河の右岸に終る。

三、ナンダデヴィ群　カメト群の略々南東にそれとダウリ河を挾んで對峙するものである。その主峰ナンダデヴィ西峰は、ガルワールの最高峰であり、同時に英領に於ける最高峰であるが、それを馬蹄の頂點とし左右に高い山々が連亘する。その内部はリシガンガの源流であり、ナンダデヴィ内陣と稱せられてゐる。北の方に擴る一翼には、六九九二の無名峯、カランカ Kalanka（六九三〇）、チャンガバン Changabang（六八六三）ドゥナギリ Dunagiri（七〇六六）があつてリシガンガの北方を取圍み、南の方には、ナンダデヴィ東峰（七四三四）よりトリスル東峰（マイクトリ六八一五）を連ね、更にトリスル西峰（七一二〇）、ナンダグンティ Nanda Ghunti（六四八八）に終る。ナンダデヴィの南から一つの支脈が南東に分れ、ナンダコト（六八六七）に連なる。

四、パンチチュリ群　行政上クマウン、ボートマハールに屬する。アタンデュラ・パス Atandura から東につゞくザスカールの、ゴリ河とカリ河の間に當る部分であるが、この部分に於て略々三本の大支脈を南に延ばしてゐる。そのうちパンチチュリ Panch Chuli、バムバデュラ Bambadura 等の峯を持つてゐるが、全部を通じて七千米を超へるものは見出されない。

以上四つの山群のうちから七千米級の主要峰を拾ひ出して見ると次の如くである。

ナンダデヴィ西峰	七八一七	ナンダデヴィ群	
カメト	七七五七	カメト群	

ナンダデヴィ東峰	七四三四	ナンダデヴィ群
イビガミン西峰	七三七六	カメト群
同　東峰	七三七〇	同
マナ	七二七三	同
クーマリン	七一三八	ガンジス群
トリスル西峰	七一二〇	ナンダデヴィ群
サトパント北峰	七〇九一	ガンジス群
バドリナート第一	七〇六八	同
ドゥナギリ	七〇六六	ナンダデヴィ群

高さ及び規模から見て、ナンダデヴィ、カメトの兩群が最も秀れて居り、他の二つは至つて貧弱な感がないでもない。登山の發達から見てもさうであり、ナンダデヴィとカメトは最も古くから登山者の注視したものであり、ガンジス源流群は比較的新しく、パンチチュリ群に至つては、今尚殆んど注意されてゐないといふ狀況である。

註　山名及その高度は、木暮理太郎氏の「中央亞細亞の山と人」山岳講座第七卷に負ふ所が多い。

三

我々は、ガルワールの名と共にロングスタフの名を直ちに聯想するのであるが、彼は、ガルワール・クマウン・ヒマラヤについてこんなことを述べてゐる。

『このヒマラヤの部分こそ眞實の姿のヒマラヤである。山の構造は全くアルプス的であり、世界中にいくら山が多いからといつても、これほどに美はしい山は他に珍らしい。ガルワール・クマウンの名は、インド・アーリヤン族の古代史誌にもすでに知られて居り、彼等の呪文と結びつけられて神聖なものに考へられ、如何にも魅力にあふれた名である。そればかりでなく、こゝの民族の多種多様なこと、その住民の美はしい習俗は、こゝの森林、草花、鳥獸の有する素晴しさとコントラストと共に、アジアの高地には又とない興趣を添へてゐる。』

古來英國人を初め、多くの歐洲人がこの地を訪れ、今日までこの地方に最も多くの登攀の歴史が殘されてゐることも、この地が政治的にかなり解放的であり、また山に近接し易いといふ事情もあるが、一つには、かうしたガルワール・ヒマラヤの有する自然、風物の美が、人々をかくまでに惹きつけてゐることは、爭はれない。

ともあれ、ガルワール・ヒマラヤ登攀の歴史は、ロングスタフによつて開かれた。しかし、それに先立つ三

十年程前、すでに幾人かの先蹤者がガルワールの山に現はれてゐる。

四

測量とか其他の科學的研究のためガルワールに入つた人達はともかくとして、純粋に登山の立場から、近代登山者がガルワール・ヒマラヤに注目し始めたのは一八八〇年代のことである。卽ち

一八八三年、シキムに於ける登山を終へたグレハム W. W. Graham は四月より八月まで、ボス E. Boss とカウフマン U. Kaufmann を伴ひ、ジョシマト Joshimath に現はれ、リシガンガ Rishi Ganga に沿ひて前進、ナンダデヴィを目指したが、ラマニ谷 Rhamani との出合から先に前進するを得ず、失敗に終り、ついでドゥナギリに試登してその六九二〇米に達し、更に『この地點から、A 21 に登り、之にマウントモナールの名を與へた』といはれる。(1)

同一八八三年、グレハムとは全く別個にケニディ T. S. Kennedy がガルワール登山を計畫、ジャン J. Jaun とフィシャー Joh. Fischer を伴つてガルワールのミラム谷に入つたが、當時不幸にして各所にマラリヤ病が流行したため、山そのものには一歩も近づき得なかつた。彼の目的はミラム谷 Milam よりナンダデヴィを窺ふのであつたらしいとのことであるが、記錄は何も殘つてゐない。(2)

十九世記に殘された登山者の記錄はこのグレハムとケニディの二つにすぎないが、そうでなしに、特殊の

科學的目的を以つて、ガルワールに入つた人達はかなりに多く、その時代もずつと古い。そのうちでもシュラーギントワイトの名はカメトと共に最も著しい存在である。しかし、最も古いのはトレイルであつて、

一八三〇年（一八二〇年とも傳へらる）トレイル Traill はすでにピンダリ氷河 Pindari から一つの雪の峠を越へミラムに入つた。この峠はシュラーギントワイトの一七七〇〇呎と觀測した峠で、後にトレイルの名を附して Traill's Pass と呼んでゐる。(3)

一八五五年、シュラーギントワイト兄弟 Adolf u. Robert Schlagintweit はこのトレイルスパスを越へてミラム谷に入り、八月にはカメトに向ひ、イビガミン氷河を遡り、その斜面に十日間もビワックを行ひ、東イビガミンを試登して、その六七八〇米に達し、當時としての一記錄を殘したことは有名な話である。彼等はその他にも五〇〇〇米以上の峠を九つも越えてゐる。(4)

一八六一—二年にはエドマンド・スミス Ed. Smyth がガルワールに幾多の探檢を行ひ、トレイルスパスやビアンダルカンタパス Byundler Kanta 等を越えてゐる。スミスとシュラーギントワイトがモンテローザの登攀に聯想され、またガルワールで二人の名が結ばれてゐるのも何かの因緣ではある。(5)

一八九二年にはカール・ディーネル C. Diener が地質學研究のためミラム谷よりアンタデュラパス、ニッティパスを越え(6)、また

一八九三年、同じやうな目的でクルト・ボェック K. Boeck がピンダリとミラムの流域を調査しつゝデュ

ラパス Dhura Pass を越へた。(7)

五

シュラーギントワイト、グレハム等の先蹤者の後に來るものは、當然ロングスタフであるが、彼がガルワールに強いあこがれを持つに至つたのは、ストラチイ、エドマンド・スミスと親交を結び、彼等からガルワールの話をきいたことによるのである。ともあれ、彼の名がガルワールと共に不朽の存在となつたのは、一九〇五年及び一九〇七年の再度に亘る大規模な彼のガルワール探檢であつた。

ロングスタフは、一九〇五年には、アレキシス及びアンリーのブロシュレル Alexis and Henri Brocherel を伴ひ、先づミラム谷に入り、パンチュ Panchu 及びルワンル Lwanl の氷河を偵察し、ナンダデヴィの外廓の一端(彼のナンダデヴィパス五八二二米といふコル)にとりつき、ナンダデヴィ東峰の東南面を六〇二〇米まで登り、更にナンダコトに向ひ、その六四一〇米まで到達することができた。かくして彼は、グルラマンダハタ Gurla Mandhata カイラス Kailas の遍歷を終へ、九月グワルダムに戻り、更にトリスルの南面、クルムトリ氷河 Kurumtoli を偵察した。(8)

一九〇七年にはロングスタフ、ブルース C. G. Bruce、マム A. L. Mumm それに前記の二人のブロシュレルとインダアビンネンの案内からなる大規模なエクペディションが、ナンダデヴィとカメトに送られた。

四、五月にはロングスタフ、ブルースがナンダデヴィの内陣を極める目的を以つて、先づダオリ谷 Dhaoli よりバギニ氷河 Bagini を渡つて初めてバギニパス Bagini Pass を越へてラマニ氷河を經て、リシガンガに出で更にそれに沿うて内陣に入る目的であつたが失敗し、六月の上半、マムとロングスタフはアンリー・ブロシュレルを伴ひトリズリ氷河 Trisuli を偵察しつゝ、北面よりキャンプを進め、六月十二日、ロングスタフは、漸くトリスル西峰の頂を極めることができた。それより、六月下半及び七月の間はロングスタフとマムとは北上して、ニティ Niti に至り、カメトに東西より接近し、ライカナ Raikana 及びカメト氷河を偵察しカメット自體にはその六三六一米まで近づくことができた。彼等は更にビアンダルカンタをこへてカメトの西側に出で、そのカイアム Khaiam とガストリ Gastoli の兩氷河を探檢し、八月には、ロングスタフのみトリスルに向ひ、その南面マイクトリ Maiktoli 及びスカラム Sukaram の氷河を探檢し、この半年に亘るエクスペディションを終つた。(9)

この二回にわたるロングスタフのエクスペディションによつて、ガルワールは殆んどくまなく探檢され、之を登山の結果として見てもナンダデヴィこそ陷れることはできなかつたにもせよ、トリスル西峰に登頂し得たことは、恐らくカメトの征頂されるまで、ヒマラヤでの最高征頂記錄であつた。またカメトの東西兩面を偵察し、西面のカイアム氷河が將來の最も有望な登路なることを明にしたのもこの時のことであるが、不幸にしてこのルートは其後の登路として成功しなかつたけれども、この時以來、カメトが一躍世界登山界の

視聽を集め、かくて、其後の十年間は、ガルワールの登攀はカメトの一點に集中された形勢である。

六

古くはシュラーギントワイトによつてイビガミン東峰が試登されて以來、ロングスタフの後をうけて、カメトに向つたのはミードとケラスとであつた。卽ちミード C. F. Meade は、

一九一〇年、アレクシス・ブロシュレルとピエル・ブラン Pierre Blanc を伴ひ、ロングスタフの指示したカメトの西面を偵察し、カイアム氷河の上、五八八二米に到達し、カイアムパスをこへた。(10)

一九一一年にはケラス Dr Kellas がシキムでの登攀後、八月バトリナートに現はれ、カメトの西面を探檢し、同じやうにカイアム氷河を四九六八米まで偵察し、カイアムパスをこへ、その北の一峰六一五七米に登つた。彼は其後ナンガパルバートを偵察したのであらう。(11)

同一九一一年、スリングスビー A. M. Slingsby も亦、クレスピニイ H. Cur. de Crespigny と共に西面を偵察し、つひに二つのイビガミンの間のコルをこへて、カメトの本體に六七〇〇米まで肉迫した。このコルは彼の名をとつて Slingsby Saddle と呼ばれる。(12)

一九一二年、ミードはピエル・ブラン及びロホマッター Fr. Lochmatter ペラン P. Perren を伴ひ、再びカメトの西面を窺ひ、スリングスビーのルートに從つて東イビガミンの七〇〇〇米に達することができた。

後サトパント及びバガトカラク Bagat Karak の兩氷河を探檢し、クリアパス、ビアンダルカンタパスをこへて、カメト東面に出で、ライカナ氷河を全體に亘つて偵察した。(13)

一九一三年、ミードは三たびカメトを窺ひ、ピエル・ブランを伴ひ、東面より肉迫、東カメト氷河を經て、つひに東イビガミンとカメトの間のコル(七一三〇米)に達することができた。彼の名をとつて、ミーズコル Meade's col といふ。(14)

同一九一三年、スリングスビーも、カメト西面を一九一一年のルートによつて試み、スリングスビーサドルをこへて、七一一七米のジャンダルムまで達した。(15)

一九一四年にはケラスがカメトを偵察したが、記錄が殘つてないので判明しないが、恐らく西面からであつたといふ。(16)

かくて、カメトに向つては、ケラスとスリングスビーは主として西面から、ミードは東面から幾度か攻擊され、つひにミードは一九一三年ミーズコルに達し得て、カメツト登頂への重大な鍵を開いた。其後、ケラスとモルシード H. T. Morshead. のバァティが東面からカメトに迫り、即ち一九二〇年、一九一三年のミードのルートを追ひつゝライカナ及び東カメト氷河を偵察し、ミーズコルの七一九三米まで到達した(17)。

かくして、カメトの東面は登攀への定石となり、その登頂の機會はもはや時機の問題となつて了つたが、約十年餘りもカメトのことがヒマラヤから取忘れられてゐたのは、一九二一年以降エヴェレストがヒマラヤ

の人氣を一手に引受け、また多くの有能なメムバーはエヴレェスト登攀のために總動員されて了つたからである。そして、一九三一年、つひに英國の若いメムバーによつて漸く完全に登頂されたのである。卽ち、一九三一年スマイス（F. S. Smythe）ブェーマン（E. B. Beauman）ホルヅウォース（R. L. Haldsworth）グリーン（R. Greene）及びシプトン（E. E. Shipton）より成る英國の登攀隊がカメトを窺ひ、ダオリ、ニッティを經て東面より之を攻擊し東カメト氷河よりミーズコルに達し、つひに六月二十日及二十二日の兩度その頂上をふむことができた。其後アルワ谷（Arwa）を全域に亘り探檢した。(8)

カメト群のマナ Mana Peak の登頂が一九三七年に行はれた。

一九三六年のエヴエレスト登攀隊の一員であつたオリーヴァー大尉とスマイスとは本年（一九三七年）七月二十二日 Bhyunder 溪谷で相會し同名の峠（一六・六八八呎）を越えてバンケ溪谷に入り、バンケ氷河最北端一四、〇〇〇呎の地點にベースキャンプを設定した。例のヒマラヤ小遠征隊主義によつて二人は五十封度の荷を運ぶのに五名のポーターを從へたのみで、この中一名はシエルパ、四名はブーテイアでいづれもタイガー連で人夫頭はエヴエレストの猛者ヌルプ（オンデイ）であつた。

印度測量部のR・A・ガーディナー中尉が探檢したバンケ氷河北岸のバンケ臺地（プラトー）（この探檢は本年春から初夏に行はれ、シプトン、テイルマンのナンダ・デヴイ内院探檢以來の興味深いものだとスマイスは云つて居る）に取付き第二キャンプから二二、四〇〇呎峰に登つてプラトー一帶とカメツトを展望したが、これに

よつてマナ・ピークの前衞をなす二二、四八一呎峰及び二二、八九二呎峰の中腹を卷くことの不可能を覺り、進路を南方に變じ、八月四日二〇、二〇〇呎に第四キャンプを設け、二二、四八一呎峰に登つたが天候不良で見通しがきかず翌日更にこの峰に登つて前進の可能性の有無を檢したが、數千呎の斷崖に遮られて結局退却を決意せねばならなかつた。

かくて方針を變更し、次にはバンケ氷河の源頭からマナ・ピークを偵察するに決し、氷河を遡行し、八月十日ザスカール峠一八、八九二呎に立つたが、こゝから眺めるマナ・ピークも決してよくなく、直接の攻擊は不可能なので二一、五〇〇呎の西南の支峰をトラヴァースすることに僅の望みをかけ、同日同支峰に登つて觀察したところ、北西稜からマナ・ピークへ取付けば一、〇〇〇呎の急斜を登りさへすれば登頂の可能性あることがわかり、早速翌日二〇、〇〇〇呎までキャンプを上げた。この位置はより高くしたくはあつたがこれ以上は固定ロープが人夫達に必要になり、それに日を費して好天のチャンスを逸するのが惜しく、四、〇〇〇呎の高差ではあつたが、この位置で我慢して人夫を峠へ歸らせた。翌八月十一日は午前四時に朝食、五時に出發、無風快晴だが、寒さは猛烈であつた。前日と前々日に切つたステップが有效に用ひられて二時間で二一、五〇〇呎峰をトラヴァースしてマナ・ピーク直下の雪原に到着これを横切つてマナ・ピークとカメツトを結ぶ北西稜に向つたが、行つて見ると豫想に反して斜面は雪でなく氷であり、丹念にステップを刻んだら頂上まで一日はおろか二日掛りにもなる恐れがあるので又この山稜を見限り殘された唯一の策略であ

る南稜に僅の望みをつないだ。

數百呎下降した揚句たつぷり千呎の胸壁を登らされて午前十時やつと南稜の胸壁上に立つことが出來た。この南稜は鋭い雪稜と、岩塔の連續で最初は水平だが次第に峻險さを增し頂上直下一千呎は最も急斜であり、二三、〇〇〇呎の邊では一〇〇呎位はある手ごわい岩で絕ち切られて居る有樣だ。從つて南稜上に立つてからの一時間と云ふものは勞力に比して進まざることおびただしく、遂にオリーヴァが充分高度に馴致して居ない故前進を斷念すると云ひ出した。天候も安心なのでスマイスは單身登高を續け、苦鬪の末、彼の卓越した技術によつて遂に午後一時半、アナ・ピークの頂に立つた。

中央アジアの澄明なパノラマが快晴の下に擴がり、一九三一年彼が足跡を印したカメツトは霧に包まれて居たが、懷しいその登路が指呼されスマイスはオリーヴァがこの頂にともに居ないことを殘念に思はずには居られなかつたと云ふ。一時間後にはそのオリーヴァに合して、元氣恢復したオリーヴァと共に六時にキャンプに歸り、更に低キャンプまで足をのばしてこの登頂を終つた。

戰略を變へること三度、しかも最初のパンケ高地よりの登攀と、第二回目のパンケ氷河源頭よりの登攀とではその方向變換の努力だけでも並大抵でないと推測されるが、この自由な行動のとれる處にも小規模遠征隊の特徵が存すると見られやう。〔「會報」七十二號より轉載追記〕

七

カメトの登頂はすでに時機の問題として殘されてゐる間に、ロングスタフ以來しばらく注意を向けられてなかつたナンダデヴィが再び登山者の興味をひくに至つた。それはラットレッヂがガルワールに現はれてからである。卽ち、

一九二五年、ラットレッヂ H. Rutledge ウィルスン R. C. Wilson カーフロウ T. C. Carfroe のパァティがピンダリよりミラムに入り、ミラム氷河を探檢したのを手初とし、(19)

一九二六年には、ラットレッヂ、ウィルスン及びソマーヴェル (T. H. Somervell) のパァティがミラムに入り、ティムフウ氷河 Timphu を偵察しつゝ、ナンダデヴィ東峰の北のコル（五二一二米）に達した。更にクアルガンガカパハアル Qualgauga Ka Pahar なる一峯に登り、後マルトリからララム谷をつめてララムパス Relam をこへ、カイラスパルバットの試登後、トレイルスパスをこえて歸る。(20)

一九二七年には、約二十年ぶりにロングスタフがナンダデヴイに戻つて來て、ラットレッヂ、ウィルスンと共に、トリスルの南面を偵察、ナンダグンティ氷河 Nanda Ghunti 上にキャンプを進め、トリスルとナンダグンティのコル、リンティサドル Rinti Sadlr（五一八二米）に達することができた。(21)ロングスタフとしては恐らく最後の思出深い登攀であつたらう。

カメトの登頂の翌年、一九三二年、ラットレッヂは、エミール・レイ Emile Rey を伴ひ、ナンダデヴィの南面を偵察すべく、マイクトリ氷河を經て、サンデルドンガ・コル Sunderdhunga col を目指して登つたが頂に達することはできなかつた。(22)

一九三三年には、オリヴァ P. R. Oliver とキャムベル D. Campbell とがダウリよりドゥナギリに試登し、その西のバットレスに達し、後ロングスタフのルートを略々追つて、トリスル西峰に第二回の登頂をなした。(23)

かくの如く、ロングスタフ以來、ラトレッヂを經てナンダデヴィの外壁は、外側の各方面から試みられたが、まだ、その内陣は依然として秘密境であつた。それを探檢したのが翌年のことである。卽ち、

一九三四年、シプトンとティルマン W. H. Tilman のパアティは、先づリシガンガに沿ひて、つひにその内陣の一部に入り、北部及び南部の氷河をくまなく探檢し、ナンダデヴィを南面氷河より偵察しつゝその六二四八米まで達し、またトリスル東峰マイクトリピーク（六八〇三米）にも登り、サンダルドンガ・コルによつて内陣を出ることができた。彼等は尙、バトリナート等のガンジス源流をも探檢した。(24)

これによつてナンダデヴィ内陣の秘密境も明かとなり、同時にナンダデヴィ登頂のチャンスも濃厚となり、その南面によるルートが最も有望と指摘された。かくして、このプランでナンダデヴィに最後の攻擊を試みたのが、一九三六年のことである。その詳細については項を別にして最後に述べることにする。

同年、このティルマンの後を追つて恰度入れちがひにシプトンもナンダデヴイ内陣に入り、オスマストン

を援助しつゝこの地方の測量に従事した。その間オスマストンが北部氷河を探検する間、シプトンはミラムとリシのと兩氷河の分水嶺の無名峰（六六三六米）に登頂し、またチヤンガバング氷河を探検し、後一緒になつてドウナギリを試登し、十月バギニ・パスをこへてドウナギリ氷河を探査した、のちシプトンのみリンテイ谷より（リンテイサドルよりトリスルに寄る）一鞍部に達した。（A. J. 49 p. 27）〔追記〕

一九三六年、我立教のパァティによつて我國最初のヒマラヤ登攀が企てられ、堀田、湯淺、山縣、濱野の一隊が一九〇五年のロングスタフのルートを追つてナンダコト（六八六七米）に登頂し、トレイルス・パスをこへて歸つたのである。〔別項「ナンダコート日記」參照〕

八

ガンジス源流のバドリナート、ケダルナート、サトパント群は、一九一二年ミードがサトパント、バガトカラーク兩氷河を探檢した[15]のに始まるが、其後、一九三一年、スマイスのパァティがカメット登頂後、アルワ氷河ガンゴトリ氷河の分水嶺を探檢した、[16]位に止まり、餘り登山者の注意に上らなかつたが、一九三三年に至つて本格的に探檢された。卽ち、マルコ・パリス、ヒックス、カーカス、ニコルスン、ワーレン（M. Pallis, F. E. Hicks, C. F. Kirkus, R. G. C. Nicolson, C. Warren.）のヒクスペディションがそれで、バギラッティよりガンゴトリ氷河に入り、之をくまなく探檢し、サトパント中央峯 Central Satopanth 六七二〇

米、其他の山を登り、更にスピティに入りレオパアルギャル Leo Pargial にも登つた。[25]

一九三四年にはナンダデヴィの内陣を探檢したシプトンとティルマンは、モンスーンの雨期をミードのルートに沿つてバガトカラク、アルワの氷河を偵察し、その分水嶺をこへて、ゴンゴトリ氷河を下つてガウムクに來り、更に同じ道を引返して、サトパントパスをこへてウキマトに出た。[26]

一九三五年十月オーデン J. B. Auden とマクドナルド D. G. Macdnall がガンゴトリとケダルナート氷河を探檢、この地方の地形を明かにした。(H. J. S. P. 96)〔追記〕

かくしてカメット群、ナンダデヴィ群、ガンジス源流は、かなり登山者に注目せられ、多くの登攀が行はれてゐるものゝ、パンチ・チュリ群に至つては、今日まで登山らしいものゝ行はれたことを聞かない。尤も一九〇五年グルラマンダハタやカイラスを遍歷したロングスタフはこの山懷に深く入つてゐるし、また一九二六年ラットレッヂのパァティはララーム谷をつめてララーム峠をこへ、また一九二七年には長谷川傳次郎氏の山旅によつて、我々には親し味深いものであるが、パンチチュリ群のみを登山の目的で入つたものはまだ一人もないやうである。

一九三六年五月より十一月にわたりかなり大規模な探檢がこの地方に行はれた。卽ち、ハイム Arnold Heim ガンセル A. Gansser ウイツケルト W. Wickert の地質學研究が行はれた。一部はネパールに足を踏み入れ、國境上のプンデイ Phung-Di (六〇〇〇米) に登り、あるひはカイラス近くまで足を延ばし、シア

ラ、レボン、ララーム、クングリ・ビングリ、アンタデュラ等の五千米以上の峠を順次に十五もこへ、のちバドリナートに移つて、バガト・カラク氷河の北の一峯にも登つてゐる。(Die Alpen. Vol. 13. No 3.)〔追記〕カメット、ナンダデヴィに比して、高さも低く、雪も少し、至つて地味なこの山群があまり登山者を魅する力の少いことが、大きな自然的理由なのではないであらうか。

九

以上述べた處によつて、ガルワール・ヒマラヤに於ける登攀の主要なる記錄は殆んど全部取扱つたつもりである。最後に、一九三六年に於けるナンダデヴィの登頂を稍々詳しく傳へ、この登攀の有する意味と、登山から見てのガルワールの地位を明にして結びとする。

一九三六年のナンダデヴィの英米登攀隊は、ハーバード山岳會を中心として、プライヴェイトに組織されたものであるが、メムバーも亦ハーバード關係のものが大部分であつた。卽ち、カーター A. Carter, エマンズ A. B. Emmons ハウストン C. S. Houston. ルミーズ W. F. Loomis が米國から加はり、英國からはロイド P. Lloyd. オデル N. E. Odell ティルマン、それに隊長格としてブラウン T. G. Brown が加はつた。オデルは一九二四年のエヴェレストに參加して居り、エマンズは一九三二年のミニヤゴンカア隊の一員であり、ティルマンは一九三四年シプトンと共にナンダデヴィ內陣を探檢したものである。

この登攀計畫として、ナンダデヴィの南面が登路と豫定されたのは、ティルマンの助言によるものであるらしく、彼はシプトンと共に、事實上、その南面を偵察し、六二四八米までは達してゐるので、彼の存在はこの登攀にかくべからざるものであつた、以下經過を稍々詳しく述べよう。

先づ準備工作として、ティルマンとルミーズはラニケートからリシガンガに入り込み、ポーター用の食糧十二個を根據地に置いて、一先づラニケートに戻つた。

七月十日、カーターを除く七名のメムバーは、六名のシェルパ人夫、三十七名のドーティアル人夫と共にラニケートを出發し、二十日ジョシマトで更に十一名のマナの人夫を追加して傭ひ入れた。

二十一日トパボン發、ラナコリ・パスをこへてナンダデヴィの外陣に入り、二十六日ラマニ谷の岸に着。ラマニ谷の增水に恐れたか、三十七名のドティアルは次の朝前進を拒絶した。そのため以後は他の殘りの者が、それだけ荷物を餘分に負擔することになつて了つた。リシガンガは一九三四年のシプトン及びティルマンのルートによつて見事に突破して內陣に入つた。內陣の軟かい草地南部氷河の推石に、キャンプを進め、ナンダデヴィの南稜或は南東稜の麓に着いた。そのうちに、カーターも一行に參加することができ、そして氷河の面から一〇〇〇呎も上の所、そのリッヂの首部から一寸下つた所を前進根據地と定めた。ドカ雪にたゝられて、豫定より一週間も後れ、八月七日にBC(五三三五米)がつひに備けられた。マナの擔夫は、解雇するには惜しい程、よく働いたが、病氣になつたシェルパ一名と共に引上げた。IC(五八五〇米)は殘りの

者によつて八月十一日に作られた。エモンズは測量のためBCに殘る。十四日には狹いリッヂの上にⅡC（六二二〇米）が設けられた。この高度ではシェルパは全く役に立たず、荷物の運搬は全く殘りの登攀隊員七名によつて行はれることになつたが、十六日には狹い嶮しいリッヂを傳はり、雪の一の肩の下にⅢC（六四六〇米）が設けられ、同二十日までにはエモンズを除く七名は全部このキャンプに集結することができた。二十二、三日はひどい風で仕事は捗らなかつたが、二十四日には雪の肩をこへその上にⅣC（六六二〇米）を設け、二十五日には七二〇〇米にビヴァックテント（ⅤC）を立てることができた。オデルとハウストンは其夜ⅤCに泊り、二十六日上のルートの偵察に向つた。その夜ホーストンは病氣になり、二十七日下のキャンプに下り、ティルマンが彼に代つた。二十八日、オデルとティルマンは高い雪のプラットホームにビヴァックテントをかつぎ上げ、之をⅥCとした（七三〇〇米）。

八月二十九日山と取組んでから二十二日目、ラニケート出發後五十一日目である。ティルマンとオデルは午前六時十五分ⅥCを出發、先づ上の方の狹いリッヂに取組んだ。雪は非常に軟かく腰を沒するほど深い。このリッヂからヴントにうつる所の上部は廣いコリドール狀をなし、この雪はなほ更軟く深く手に負へないものだつた。高度の增すに從つて呼吸は一歩毎に八を算へ、十歩毎に一本立てねばならなかつた。このコリドールは二五、〇〇〇呎の所で岩の碎けた面につゞくが、この處は、一度は失敗したものの、二度目に漸く一本のチムニーを見つけて之をきりぬけた。そして雪のグラチスへかゝり、それを上に向つて進むと急な雪の

ガリーになり、それを傳つて雪のプラトーに出た。そこが頂上であつた。出發後九時間、午後三時、つひにナンダデヴィの頂上に立つた。モーンスンの大きな雲塊が周圍の山々をかくし、頂上からの視界は殘念ながら至つて狹くあつた。

休憩しつゝ眺めの廣くなるのを待つたが無駄であつた。雪しかない頂上にはケールンも積めず、何か證據をと云つても、直ぐ雪に埋められて永久に殘るわけでもない。旗は一オンスでも餘分な荷物を負ひたくないのでかつぎ上げはしなかつた。かくして、頂上に止ること四十五分、三時四十五分降り始め、そして五時四十五分にはⅥCに無事歸還した。カメトのやうに、他のメムバーも頂上に登ることになつてゐたが、時日が切迫し、天候が次第に惡化しさうに見えたので、遂にこれ以上の活動を打切つて、早速引上げに決し、三十一日にはBCに全員が歸還した。ティルマンとホーストンとは九月三日までの間に一九〇五年にロングスタフの達した外廓の一端をこへ、他の者は往路を辿つて、九月二十一日には全隊員はラニケートに無事歸還した。(26)

經過だけを見ては至つて簡單な登攀に終つたやうなものの、すでに一九三四年に或る程度の偵察が行はれ、それに基いて、簡素に迅速に計畫を進めたのが、この登攀の成功した最も大なる原因であつて、それがためか、前に述べたやうに、全く私的に組織され、經費も隊員の負擔になつたが、それも一人當り僅かに百五十磅ですんだと傳へられてゐる。

ともあれ、この登攀が我々の特に注意を惹くのは、二つの特殊な目的を有ち、それを充分に證據立てた所にある。第一に、モンスーン期にヒマラヤの大物にぶつかつたこと、第二に、山にかかつてからは、地元の擔夫にはなるべく援助されず、なるべく登攀隊員自身の力によつたことである。

エヴェレストを初め、ヒマラヤの中級峯に至るまで、その登攀は多くの場合、モンスーンの時期をさけるといふのが英國流のエクスペディションの定石であつた。カンチェンヂュンガに於けるドイツ隊の故智に倣つた譯でもないだらうが、このエスペディションのやうに、ことさらその季節を選んだことは、ともあれ、從來の定型を打破しての大膽な試みではあつたが、幸ひ非常な好結果に終つたのである。これによつて、モンスーン期に於てさへ、ヒマラヤの相當の大物は攻擊し得ることが最有效に證據立てられ、將來の遠征のタクティックに大なる示唆を與へるであらう。

增水に怖けて途中からぬけ出したドーティアルは問題外であるが、ベイスキャンプまでではあるがマナは非常によく働いた。山にかゝつてから賴みにしたシェルパも案外に駄目で、第二キャンプに達し得たものは二人だけであつたといふことで、山にぶつかつてからの運搬は、事實上登攀隊員自身の努力によらざるを得なかつたわけである。しかし、それにしても、登攀員の間ではヒューストンが病氣にかゝつた位で、オデルの如き四十四歳で、大した故障もなしに立派に彼等によつて行はれたのである。

この二つの問題は、この登攀に於て、十二分に所期の目的を得た點に於て成功であつたし、この問題は完

全に解決された。この意味に於て充分に研究される價値を有するであらう。要するに輕裝の少數者によつて、チャンスを掴んで、急速に登攀し得たことが、この成功を生む最大原因であつた。

最近に於けるヒマラヤ登攀を見るのに、一面に於て、その最高級の峯を目ざして、それに高く、より高く登らうとする傾向があると同時に、最高級ではなくとも、それに次ぐ二流所の頂に達しやうといふ傾向が他方に現はれてゐる。ヒマラヤのメイジャーピークスに於ける登攀の體驗と成果を以つて直ちにヒマラヤンジャイアンツに向ふとするのは明瞭な誤りであるが、そうした體驗と成果とが基礎となり、ヂャイアンツに對する攻擊方法が幾分でも見直されることはあらう。ともあれ、この二つの傾向は、將來益々顯著になるであらう。『ヒマラヤ大山脈を旅しようとするものは、登山者たるばかりでなく、旅行者でもなければならない』といはれた言葉は、今日のヒマラヤでも、大部分に於て眞理であるが、しかし今日では、漸く登山者と旅行者といふ者が、ヒマラヤでも區別されて來つゝある。大規模なエクスペディションのための登山ではなしに最少限に地元の擔夫を使用し、しかも氣のおけない比較的小さいパアテイを以つて、ヒマラヤに登山のための山登りを滿喫しやうとする場合に先づ考へられ、そして選ばれるヒマラヤは、さしあたりこのガルワールであらう。そして、この種の登攀に對して、最も典型的な一規準を示したのは、この數年來に於けるガルワールの英國隊の試みであり、殊にこのナンダデヴィ隊である。この意味に於ても大いに研究されるに足る登攀であつた。

ロングスタフがトリスルに殘した記録は、二十四年もかゝつてカメトによつて更新され、そして僅か六年でそれはナンダデヴィによつて更新され、これが今日に於ける世界の登頂の最高記録である。今後、また更に短かい期間にどんなパアァティによつてこの記録が更新されるであらうか。

一〇

一

ヒマラヤ登攀に關する總體的の文獻としては十九世紀の部分は

N. Collie — General History of Mountaineering in the Himalaya. (Climbing in Himalaya and other Mountain ranges 1902)

〃　— A short Summery of Mountaineering in the Himalaya (Aepine Journal 33. p. 295)

また最近代までのものとしては

W. Schmidkunz :— Alpine Geschichte in Einzelaten (Alpines Handbuch Bd. I. 1931.)

M. Kurz — Die Erschliessung des Himalaya ("Die Alpen" 1933)

— Liste chronologique des expeditions dans l'Himalaya ("Die Alpen" 1933, 1936, u. 1937)

等等擧げられる。このうち最後のエクスペディション年譜はよく纒められて、簡單に調べるにはよい辭書

代りにならう。

二

各登攀事項の文獻は次の如くである。表中左端の番號は文中の註の番號であり、右端のアラビヤ數字の番號は(一)の地圖目錄の番號であつて、同時に文末のガルワール概念圖中の番號に照應する。文獻はなるべくオリジナルによるのを原則としたが、古い所はそれも出來ず、孫びきをやつた所もないではない。

A.J. = Alpine Journal.

H.J. = Himalayan Journal.

G.J. = Royal Geographical Journal.

の略字を用ひる。

(一) 參照文獻

1. W. W. Graham—Travel and Ascents in the H.—A.J. 12. p. 25.
2. 8 及び A.J. 17. p. 332. 參照。
3. 8 參照。
4. 同上。
5. Meade—The Schlagintweits and Ibi Gamin (Kamet)—AJ.33 p.70 (Ⅲ)

6. A. J. 16. p. 119. 参照。

7. 8 参照。

8. T. G. Longstaff—Six months wanderings in H.—A. J. 23. p. 202 (Ⅶ)

9. T. G. Longstaff—Mountaineering in Garhwal—A.J. 24. p. 107. (Ⅰ)

Mumm—Five months in the H. 1909.

10. 13. 参照。

11. Kellas—Mountaineering in Sikkim & Garhwal—A.J. 26. p. 52.

〃 Mountains of Northern Sikkim & Garhwal—A.J. 26. p. 137.

12. Slingsby—An Attempt on Kamet. Yorkshire Ramblers' Club J. vol. 4.

Smythe—Kamet Conquered p. 15. 参照。

13. Meade—A note on the Garhwal H. 1912.—A.J. 26. p. 434.

14. Meade—The Schlagintweits and Ibi Gamin—A. J. 33. p. 70.

15. Slingsby—An attempt on Kamet—A. J. 27. p. 326.

16. 17. 参照.

17. H. T. Morshead :—Report on the expedition to Kamet 1920.—G. J. 57. p. 213.

18. Smythe—Kamet conquered 1932. (Ⅱ.)

〃 —Kamet Expedition 1931.—A. J. 43.

Birnie—The First ascent of Kamet.—H. J. 4. p. 27. (Ⅱ.)

〃 —An Exploration of the Arwa Valley—H. J. 4. p. 35. (Ⅸ.)

19 H. Ruttledge—Wanderings in the Kumaon H. 1925-6.—A. J. 39. p. 71.

—Traill's Pass 1925.—H. J. 1. p. 81. (Ⅶ.)

20. R. C. Wilson—Kailas Parbat and the two Passes of the Kumaun H.—A. J. 40. p. 23.

21. Longstaff—Twenty Years ago—A. J. 40. p. 281. (Ⅳ.)

22. Ruttledge—Nanda Devi—H. J. 5. p. 33.

23. Oliver—Dunagiri & Trisul 1933.—H. J. 6. p. 91. (Ⅴ.)

〃 —Trisul 1933—A. J. 46 .p.142.

24. Shipton—Nanda Devi. 1936.

〃 —Nanda Devi Basin—A. J. 47. p. 58.

〃 —Nanda Devi & the Ganges Watershed—G. J. 85. p. 305 (Ⅳ. Ⅹ.)

Tilman—Nanda Devi, the sources of the Ganges—H. J. 7. p. 1.

25. M. Pallis—Gangotri & Leo Pargial 1933—H.J. 6 p. 106. (Ⅺ.)

Warren—Gangotri Glacier and Leo Pargial 1933. AJ. 46. p. 306.

26. Brown—Nanda Devi 1936—AJ. 48. p. 313.

Tilman—Ascent of Nanda Devi 1936.

C. S. Houston—Narda Devi.—American. A.J. Vol III. no. 1. 1,937 p. 1.

11 地 圖 類

以上各章目に掲げられてゐる地圖類には次の如きものがある。

Ⅰ. Part of the Garhwal Himalaya,　1inch=3.94miles.

Ⅱ. Eastern Approaches to Kamet　1/2 inch to 1mile.

Expedition to Kamet.　1/2 inch to 1mile.

Ⅲ. Kamet.（略圖）　1 inch to 1mile.

Ⅳ. Trisul, Nanda Ghungti.　1 : 175,000.

Ⅴ. Trisul Duuagri.（略圖）

Ⅵ. Nanda Devi Basin.

Ⅶ. The Milam Valley.　1 inch 4 miles.

Ⅷ. Traill's Pass.（略圖）

Ⅸ. Arwa Valley.　1 inch to 2 miles.

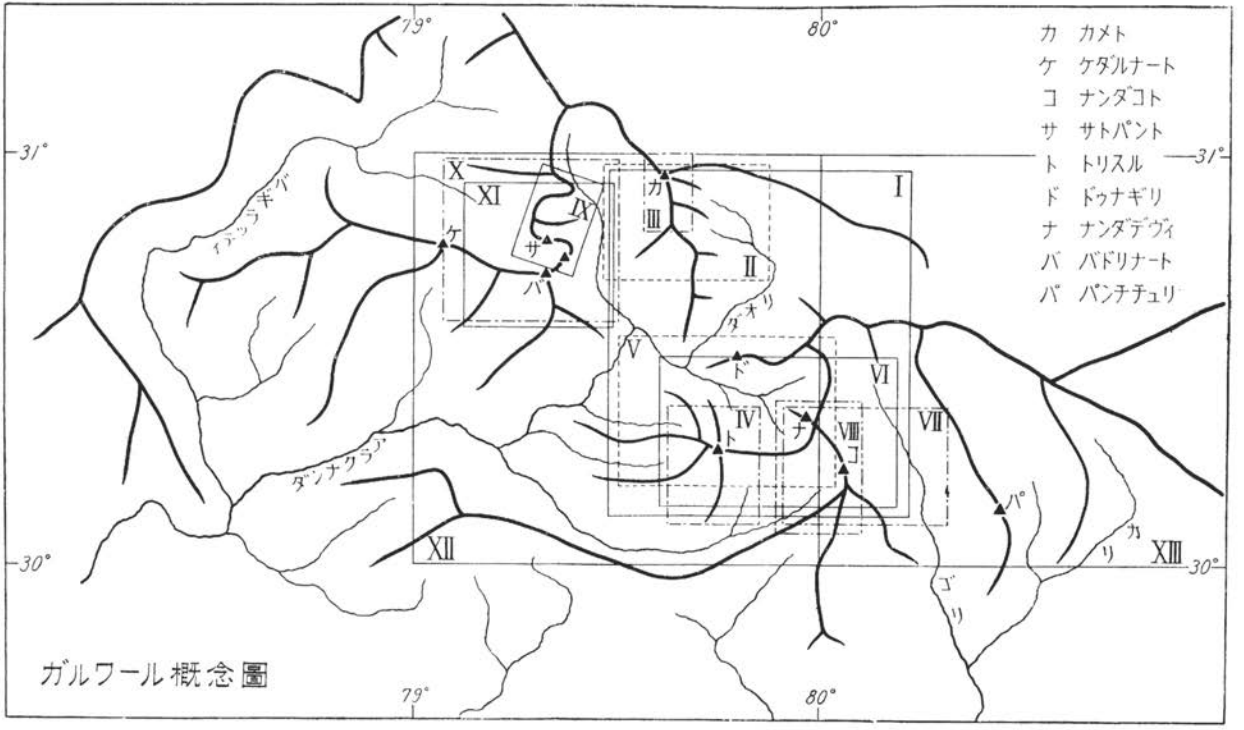
Ⅹ. Badrinath Group.

Ⅺ. Gangotri and Arwa.（略圖）

Ⅻ. Tibet and United Provinces. No. 53. N. Badrinath　1 inch 4miles.

XIII. Nepal, Tibet & United Provinces. No. 62. B. Nanda Kot.　〃

最後に掲げた二面は Survey of India 發行の一般圖である。　（一九三六、二、四―一九三七、一、二〇追記）


カ カメト
ケ ケダルナート
コ ナンダコト
サ サトパント
ト トリスル
ド ドゥナギリ
ナ ナンダデヴィ
バ バドリナート
バ バンチチュリ
79°
80°
31°
30°
I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX
X
XI
XII
XIII
カ
ケ
サ
バ
ト
ド
ナ
コ
バ
ダウリ
ダンナクラ
ゴリ
カリ

ガルワール概念圖

カラコルム紀行（抄譯）

盛岡英治郎
宮崎武夫

はしがき

一

一九〇九年伊太利のアブルッヂ公（Duke of the Abruzzi）親率するところのカラコルム遠征隊がバルトロ氷河に入つた。このときの英文の報告書に

Filippo De Filippi, Karakoram and Western Himalaya 1909. an Account of the Expedition of H. R. H. Prince Lugi Amedeo of Savoy Duke of the Abruzzi.

がある。本篇はこの報告書を抄譯したものである。

アブルッヂ公については既にいろ〳〵と語られてあり、その業績についても周く知られてゐるからこゝで

は單に山の方面のことゞもを年次的に簡單に記しておこう。

一八七三年一月二九日　マドリッド市に誕生、父君 Amadaeus of Savoy-Aosta は伊太利皇帝ウムベルト第一世陛下の御兄弟で、公誕生の直前までスペイン國王であつた。

公は十七歳にしてイタリー海軍に進まれた。

一八九二年、同九四年にはモンブラン、モンテ・ローザ、マッターホルン等に登攀を試み、一八九四年英國山岳會員に推薦せられた。

一九〇一年　グランド・ジョラスでかゞやかしい初登攀を幾つかなし遂げた。

巡洋艦 Cristoforo Colombo に乘組み世界一周中一八九五年一月ダージリンからヒマラヤ山脈、カンチェンジュンガ等を初めて眺め、異狀な感激を覺えた。

一八九七年　アラスカ遠征　五月にイタリー出發、アラスカに向ひ、七月三一日好晴に惠まれてセント・エリアスの頂上に到達した。U. Cagni, F. Gonella, Vittorio Sella, F. De Filippi それにアルプス・ガイド四名、寫眞助手一名がお伴してゐる。

一八九九年　北極遠征　七月アルハンゲルを Stella Polare 號にて出發、ルドルフ島に冬營、三月一一日いよ〳〵カニー以下が北方に向つて出發、四月一四日北緯八六度三四分に到達し、ナンセンの記錄八六度一四分を破つて歸途についた。U. Cagni, F. Querini, Dr. A. Covalli Molinelli. とアルプス・ガイト四名がお伴し

てゐる。

一九〇六年　ルベンゾリ遠征　四月イタリー出帆、アフリカのモンバサ港に向ひ、六月一〇日ルベンゾリの最高峰一五・二八六呎に登頂、ついで附近の高峰を全部征服し、大成功裡に歸國、Cagni, Dr. Cavalli Molinelli, Vittorio Sella, A. Roccati, 寫眞助手一名、アルプス・ガイド二、ポーター二名が同行してゐる。

一九〇九年　ヒマラヤ遠征　年來の憧憬の地カラコルム目指して三月イタリー出發、ボンベイ、スリナガルを經て春まだ淺きゾーチ・ラを越え、インダス河沿ひに進んでバルトロ氷河に達し、ロドカスにベースキャンプを設けてK²の偵察、試登、ステアーケース・ピーク、ブライド・ピークの頂をうかゞつたが不幸にして天候に惠まれず、何れも登頂の機を得なかつたが、ブライド・ピークにおいて二四・六〇〇〇呎の最高記錄を樹立して歸國した。爾來バルトロ氷河に來訪するもの絶えてなく、一九二九年スポレト公親率の伊國隊が漸く訪れ、ついでディレンフルト博士、佛國スゴーニュ等がバルトロ氷河に足を踏み入れた。

K²遠征後、間もなくイタリーからフィリッピを首班とするカラコルム、支那トルキスタン地方への大がゝりな遠征隊が送り出されたが、これに公自身は參加しなかつたが、多大の援助を惜まれなかつた。

歐洲大戰中はアドリア海聯合國艦隊司令長官として偉勳を樹て、平和克復とゝもに、伊領ソマリーランドの開發に意を注ぎ、公の異狀なる努力により、往年の曠野は今や廣大なる沃地と化し、年々多大の收穫をあげてゐる。またその間諸方面へ踏査探檢にも赴き、先人未踏の地域を闡明し、學術上多大の貢献をなし、軍

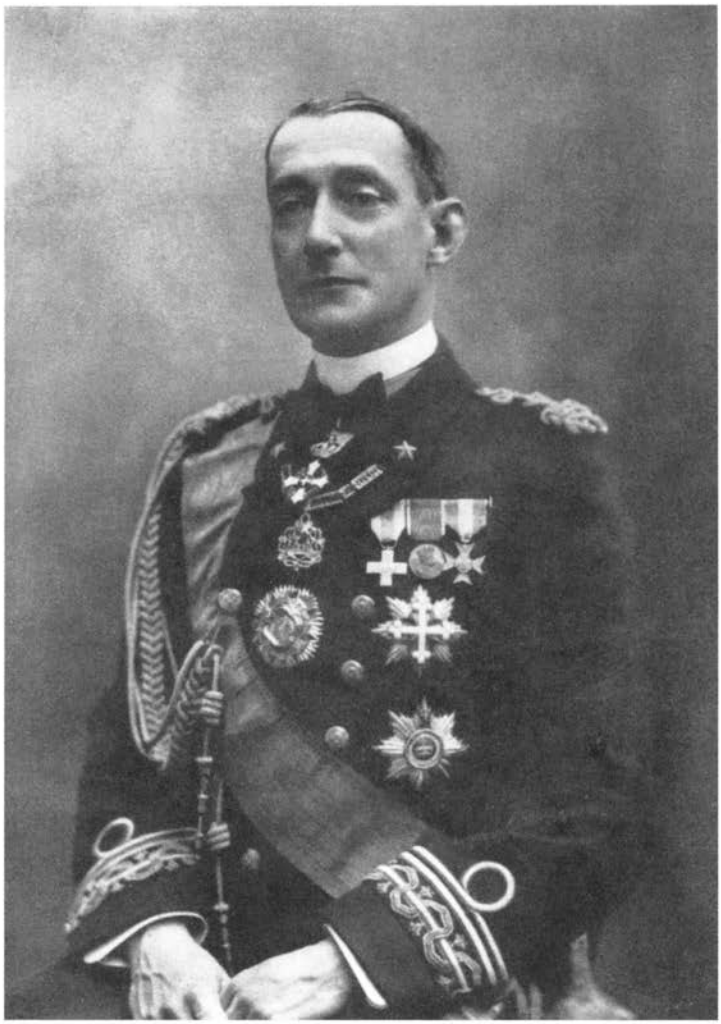
事上にも寄與するところ尠くなく、エチオピア經營の礎をきづき上げたといへやう、一九三三年三月一八日思ひ出多き伊領ソマリーランドの小邑にて薨去せられ、こゝに多幸な御生涯を終られた。

公は性溫厚にして至仁、痩軀に燃ゆるやうな鬪志を藏し、山頂を前にしては常に自ら第一線に立つて隊員を鼓舞、指揮し、北極行の際などは終に凍傷にかゝつたほどで、己むなく指揮をカニーに委ね、勝報の至るを待ち佗びてゐた。

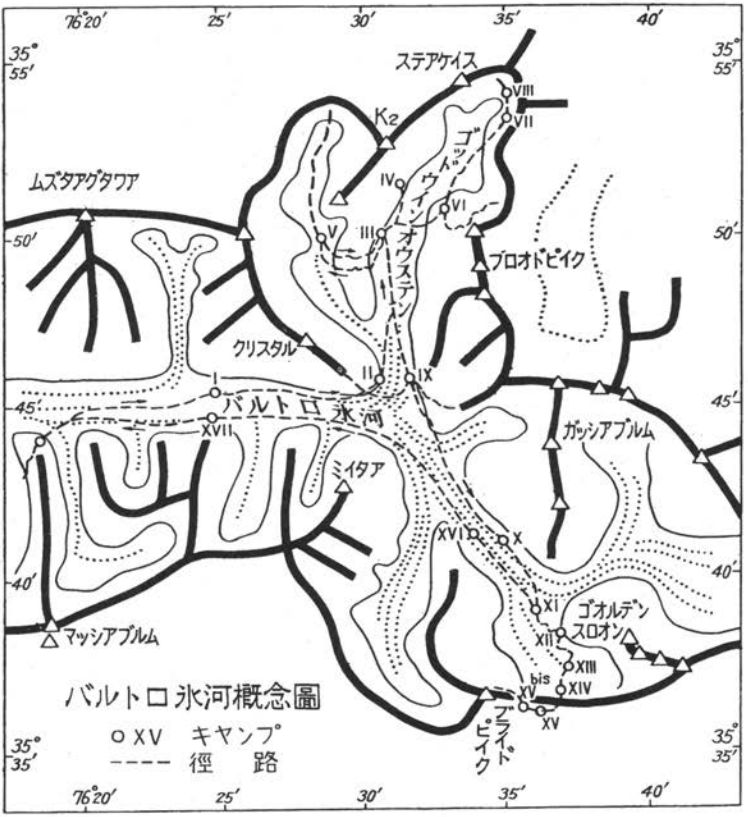
一九〇九年、スリナガルに公を迎えたヤングハズバンド卿が次のやうにいつてゐるが洵に至言である。

The Duke of the Abruzzi was himself an ideal leader of such enterprise. He had already led successful mountaineering expeditions to Ruwenzori in Central Africa, and Mount St. Elias in Alaska. He was about thirty six years of age, slim and wiry of body, burning with the most ardent spirit, a natural leader of men, European or Asiatic, and a most efficient organizer. No worthier foeman has matched himself against the Himalayan giants. And he brought with him besides the experienced scientist and mountaineer, Dr. de Filippi, and the finest of all mountain photographers, Vittorio Sella, four Italian guides, and four Italian porters.

Sir. F. Younghusband, Everest : The Challenge, p. 7



アブルヂ公


76°20′
25′
30′
35′
40′
35°
55′
50′
45′
40′
ステアケイス
K2
ムズタアグタワア
ゴッドウィンオウスチン
ブロオドピイク
クリスタル
バルトロ氷河
ガッシアブルム
ミイタア
マッシアブルム
ゴオルデンスロオン
ブライドピイク
I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX
X
XI
XII
XIII
XIV
XV
XV bis
XVI
XVII
バルトロ氷河概念圖
○XV キャンプ
---- 徑路

二

バルトロ氷河に足跡を印したのは勿論公が最初ではない。卽ち早くも一八五六年にはシュラギントワイト(A. Schlagintweit)が東ムスター・パスに入つてゐる。一八六一年にはゴトウィン・オースチンがバルトロ氷河を遡り、コンコーディアに到達してゐる。一八八七年にはヤングハスバンド卿が支那北西地方横斷を終へシャガス谷からムスター・パスを通つてバルトロ氷河に越えてきてゐる。一八九二年にはコンウェーがアルプス・ガイドを伴ひ、登山隊としては初めてバルトロ氷河に入り、惡天候と闘ひつゝもよく踏査をつゞけ多數の資料を齎らした。一〇年後の一九〇二年にはエッケンシュタイン等の國際登山隊はバルトロ氷河を溯り、K^2の麓に至り、なほも進んでK^2の東側に廻り、北側を窺ひ、東尾根を約三千呎登つてゐる。ついで一九〇九年のアブルッヂ公のバルトロ入りとなる。このときの準備、裝備は實に完全細密なもので、他面學術調査にも意を用ひ、隊長自ら氣象計測器の目盛を數へるといふ狀態で、その組織に於いても、内容に於いても、はたまたその業績に於いても近代的ヒマラヤ遠征型態を整へた最初の登山隊であり、これが爾後の岳界に及ぼした影響は實に多く、この意味からいつて、この遠征隊は歴史的な意義を持つものである。この點に私は多くの興味を持つてゐる。爾來バルトロ氷河に來訪するものなく一九二九年漸くスポレト公(The Duke of Spoleto.)親率の伊國隊が訪れ、ついでディレンフルト、佛國のカラコルム遠征隊が、クイン・メリー・

ピークに、或はヒドゥン・ピーク目指してバルトロ氷河を溯つたのはまだ世人の耳新しいところである。

これ等の遠征隊はそれ〴〵報告書を送り出し或は出版しつゝある。アルパイン・ジャーナル、ヂェオグラフィカル・ジャーナルその他の雜誌に掲出されたものを加えるとかなりの篇數であらう。佛國のカラコルム遠征報告書はすでに發刊されてゐるが未だ我が國に舶載されてゐないから目下のところでは諸雜誌によつてわづかにその概略を知りうるのみであり、スポレト公の報告書も極く最近發刊されたがこれ亦我が國に未だ到着してゐないので短篇、小文によつてその輪廓を推測してゐるにすぎない。結局大戰後のバルトロ氷河遠征報告書としてはディレンフルトの「デーモン・ヒマラヤ」(Dämon Himalaya)があるが、これには餘り多くを期待出來ないので、フィリッピの著「カラコルム紀行」に手をつけた次第である。本書の外にもバルトロ氷河の文献は數冊あり、ことに

Sir W.M. Conway, Climbing in the Himalayas. London 1894. 2 Vols.

は名著の譽高く、フィリッピの著書と共にカラコルムの代表作とされてゐるが、機會があればこれにも手を染め度いと思つてゐる。

三

フィリッピのこの本は伊太利文では

Spedizione nel Karakoram.

英文では

Karakoram and Western Himalaya.

と題してともに一九一二年に刊行された。本書は第一章から第一九章まであり、附錄として寫眞、氣象、地質、植物の四篇がある。

本文は碩學の譽一世に高いフィリッピ（Filippo De Filippi.）の筆になる詳細な記述で、沿道の風土を記し人情の機微を寫し出し、興味洵に津々たるものがあり、やゝもすれば千邊一律に墮しがちな一般紀行文の臭味もなく、しかも先人の足跡に言及し、諸所にて科學的見地から論述するところがある。山岳寫眞の名手、セラの苦心の作になる出來榮の洵にすばらしい別刷の寫眞が多數あつて本書を飾り、なほ文中にはとも刷の寫眞が無數に挿入されてあつて、フィリッピの名文と相俟つて、インダス河畔の狀況や、バルトロ氷河をとり圍む高山峻峰の偉容を眼のあたり現出させるに役立つてゐる。

全文四六九頁よりなり、用紙も亦上質にして實に堂々たる大版の大著である。

寫眞と地圖、索引が別冊になつてゐる。寫眞はセラが豊富な經驗により、實に大がゝりな準備をしてバルトロ氷河に來り、惡天候と闘ひつゝ岩尾根を匐ひ登り、或はクレバスを渡つて決死的撮影をなしたパノラマ寫眞一八枚で實に見事な出來榮えで何かといへばいま尙この寫眞から複製されてゐるほどで三〇年近くを經

た今日でもこれを凌ぐバルトロ氷河の寫眞は出來てゐない。地圖は三枚あり、一つはバルチスタン地方の概念圖、他の二枚はバルトロ氷河の十萬分ノ一の精巧なもので、うち一枚には寫眞の撮影箇所、方向が詳細に記されてあり、これとパノラマ寫眞とをひき合せてみるとよく判る。

とにかく内容、外觀ともに兼ね備つた豪華版で、流石に王侯の著とうなづかせる。原著は伊太利文であるが英語に譯されてゐるのみで、その他の國語には未だ譯されてゐないやうである。この英語版も重版されてゐないので年月の經過とゝもに漸く稀覯書の列に入らんとしつゝあつて、これを入手するには相當根氣のよい捜索を必要とする。定價は六三志であるが、時價もこれにほゞ等しい。

私達がまづ第一にこの書に手をつけた所以は、この遠征隊が多分に歴史的な意味を保持するものであり、フィリッピの記述には以て範となすべきものを多く含んでゐるからに外ならない。然しながら洵に殘念なことには、私達は語學の素養極めて乏しく、幾多の誤譯曲解を犯し、その上紙幅その他の都合上抄譯にしたので取捨その宜しきを得る能はず、ために折角の名著を冒瀆すること甚だ尠からざるを想ひ、ひたすら恐縮してゐる。しかも敢てこれを譯出したのはより良い第二、第三のものを作り出さんとするに外ならない。各位の御了解と御垂教を幾重にも願つて止まない。（一一月五日）

一、抄譯は英國版に依つた。

二、抄譯であるから對照に便するため所々に原著の頁數を算用數字で附記しておいた。

三、固有名詞は發音が判らないものが多く、單に假稱するにとゞめ、原語を括孤内に記しておいた。

四、第一一章　ロトガス　は省き、第一六章、第一七章のやうに登攀のところは紙數の許すかぎり省略しなかつた。

第一章　ヒマラヤについて

ヒマラヤといへば人々は白雪で蔽はれ雲際高く聳え、灼熱の印度平原を眼下に見下してゐる高い山脈を想像するだらうが、ヒマラヤとは單に蜒々と連る山脈だけを指稱するのではなく、そのうちには山脈、高原、溪谷、河川等があつて(p.1)、ヨーロッパ中の山脈を併せても高さに於いても、廣さに於いても全く問題にならない。このごろではヒマラヤといふ言葉のうちには印度と中央アジアとの間に蟠居し、アフガニスタンからビルマに至る延長千五百哩――ナポリ、セントピータースブルグ間の距離に等し――幅員五〇〇哩に及ぶ廣大な地域を含んでゐるのが普通で、數條の山脈がほゞ平行して北西から南東方に走つてをり、大河巨川もここにその源を發してゐる。またその地方により、氣候、植物、産物を初めとし、住民、政治組織、文化、言語、宗教、慣習などをそれ〴〵異にしてゐる(p.2)。ヒマラヤ山脈は人寰遠く距つてをり、物資の補給は容易でないが、印度測量部では諸種の困難を克服しつゝ測量作業をつゞけてゐる。最近S・G・ブラードとH・H・ヘイゾゥン(S. G. Burrard, H. H. Hayden)がヒマラヤ山脈の概略を記した著書を刊行した。註1　この書物の高山表によると、ヒマラヤ山脈中の高山として

二萬四千呎以上の高山	七五座
二萬五千呎　同	四八座
二萬六千呎　同	一六座
二萬七千呎　同	五座
二萬八千呎　同	三座

を擧げてゐる。エヴェレスト山以上の高山は見當らないやうであるが二萬五千呎乃至二萬七千呎級の高山で未測量のものがヒマラヤ山脈中にはまだかなりある模樣である。今次の遠征の際にもバルトロ、ゴドウィン・オースチン雨氷河の上流で、二萬七千呎以上の高山一、二萬三千呎以上の高山一五座を初めて測量したほどである。二萬七千呎以上の高山は各山脈中に散在し(p.3)、三大高峰も一は中央に、次は西に、他は東に位してゐる。

第三位の高山キンチンジュンガ（Kinchinjunga. 二八・一五〇呎）は避暑地グーヂリンから山麓まで約四十五哩餘、比較的容易に行ける(p.4)。この附近は夏になると降雨量が多いので種々の植物が繁茂してゐる。一〇月ごろからは好晴の日がつゞくやうになるが、その時分は寒氣すでに烈しく、晝も短かくなるので二萬三千呎以上の高所に登るのは六ケしくなつてくる。しかし一九〇七年ノルウェー人C・W・ルーベンソン（Rubenson）モンラッド・アース（Monrad Aas）の二名はカブルーの頂上間近か約二萬四千呎のところまで

登り、終に最高到達レコードを樹立した。註二 キンチンジュンガは一八九九年、フレッシュフィールドの一行により隅なく探査された(p.5)。註三このときはセラ（Vittorio Sella）も参加してをり、寫眞を通じてこの地方の風光美を紹介してくれた。フレッシュフィールドは登頂不可能とは言明してゐないが、また成功の可能性があるやうにもいつてゐない。セラの寫眞を見ても登頂ルートは容易に求められそうになく、結局シッキム・ヒマラヤでは登高の好機に惠まれることは尠く、また地理的新發見も多くを期待し得ない。

シッキム・ヒマラヤの西方には中央ヒマラヤがネポール（Nepal）とチベットとの間にある。このうちには最高峰のエヴェレスト山（二九・〇〇二呎）もあるが、これ等の地方は豫てより歐人の入國を禁止してゐるので、山から八〇哩以内の近距離に立入つた者は誰もない。ブラードの高山表には、この山脈中に二萬四千呎以上のもの二五座、二萬五千呎以上のもの一九座、二萬六千呎以上のもの八座、二萬七千呎以上のもの二座、外に二九・〇〇二呎のエヴェレスト山をあげてゐる。この地方こそ地理的探檢上今なほ興味ある地域だが、現在の政治狀態が變化せぬ限り、この方面の探檢は望み得ないこと柄である(p.6)。

ネパール・ヒマラヤの西方にはクマオン、ガルワルの地方がある。この邊は印度平原から容易にとりつけるのと、物資の補給も容易である關係上旅行者や登山者がよく訪れてゐる。ヒマラヤとかヒマレー(Himaleh)といふ名稱は白雪に蔽はれたガルワル地方の山間にその起源を發してゐるといふことである。ナンダ・デビィ(Nanda Devi. 25,000—26,000ft.)の近くにカメット峰（Kamet）がある。シュラギントワィト兄弟（H. and

R. Schlagintweit)が一八五五年に二二・二六〇呎の高度に到達してゐる。註四　一八八三年にはW・W・グラハム(W. W. Graham)がガルワル地方に登行を試みデュナギリ(Dunagiri)で二三・一八五呎の地點に達し、註五一九〇七年にはトリズル(Trisul 23,406 ft.)の頂にロングスタフ(Dr. T. G. Longstaff)が登つてゐる(p.7)。註六

ガルワルの西方にはパンジャブ・ヒマラヤがある。一九〇六年にウォークマン夫妻(Dr. Hunter Workman and Mrs. Bullock Workman)が來訪し、夫人はヌン・クン(Nun Kun)で二三・三〇〇呎の高度に達した。註七ヌン・クンから山脈はカシミル高原の北方を走り、西端にナンガ・パルバット(Nanga Parbat. 26,620 ft.)が聳えてゐる。ナンガ・パルバットといへばマンメリーの名をすぐに憶ひ出す、マンメリーは一八九五年にナンガの北西側を窺ひ、二萬呎附近に達しなほも強襲をつゞけてゐるうち雪崩に襲はれて行方不明となつた。ナンガを近くから眺めた人は皆、急峻な氷壁で鎧はれてゐるので登頂は恐らく不可能だといふ。註八　またナンガ登頂に失敗すれば近くに適當な高山を他に求めるわけに行かぬし、またこの附近では地理的大發見を期待するわけに行かない。

このパンジャブ・ヒマラヤの北方にはカラコルムの大山彙が横はつてゐる(p.8)。インダス河の上流を隔ててヒマラヤ山脈に相對し、スリナガルから二百哩ほどもあり、大がゝりな遠征隊を組織しないと到達し得ない關係上、この地方を訪れたもの少く、未踏査の谷や氷河が澤山ある。

モーアクロフト(W. Moorcroft)によればカラコルムとは黑い砂(Black gravel)といふ意味である。モー

アクロフトは一八二〇年ごろにカラコルムを横斷した最初の外人である。註九 地理學的にいつてカラコルム山脈をヒマラヤ山脈中に包含せしめるか、或はこれと別個の山系と見做すかといふことに就いては色々と議論のあるところだが、シュラギントワィト、カンニンガム (Cunning'ham)、ウッークマン等は後説を採つてゐる。註一〇

カラコルムには大氷河、高峰が相集つてゐる(p.9)。チョゴルングマ (Chogo Lungma)、ヒスパー (Hispar) 兩氷河附近には二萬四千呎乃至二萬五千呎の高山が七座もある。カラコルムのうちではこの邊が最初に踏査され、調査も最もよく出來てゐる。卽ち一八三五年にはヴィーン (G. T. Vigne) 一八四一年にはファルコナー (Dr. Falconer)、一八四七—四八年にはトムソン (Dr. Thomson)、一八五六年にはA・シュラギントワィトが探査してゐる。註一一 一八九二年にはコンウェーがヒスパー、ビアフォ(Biafo) 兩氷河を初めて縱斷し、その延長を測つた。註一二 チョゴルングマ氷河はウッークマン夫妻が度々踏査し、その間ウッークマンは二三・四〇〇呎の高地に到達してゐる。註一三

フンザの東方にバルトロ氷河がある。アブルッヂ公の遠征前までは、バルトロ氷河には二五・一一〇呎—二八・二五〇呎の高山八座のみが知られてゐた。一八六〇—六一年にゴトウィン・オースチン大佐(Colonel Godwin Austen)がカラコルム地方調査中初めてバルトロ氷河を發見し、その下流を調査した(p.10)。一八八六年にはヤングハズバンド卿(Sir Francis Young'husband)がやつてきた。註一四 次いでコンウェーが一八九二年

に踏査したのは著名である。コンウェーはバルトロ、ビアフォ、ヒスパーの各氷河をも踏査し、測量した。註一五　バルトロ氷河は上流が二つに岐れ南東方の支流はやはりバルトロ氷河といひ、コンウェーはこちらの方だけ踏査した。北東方の支流は一般にゴドウィン・オースチン氷河と呼び、K^2の南面を貫流してをり、一九〇二年にエッゲンシュタイン(O. Eckenstein)の率ゆるところの一隊が訪れた。このときの一行はA・E・クローリー(A. E. Crowley)、G・ノーレス(G. Knowles)—以上二名英人—H・ファヌル、V・ヴェセリ兩博士(Drs. H. Pfannl and V. Wessly)—以上二名墺國人—J・J・ヂラモンド(J. J. Guillarmod)—スキスの醫師—よりなり(p.12)、アブルッヂ公よりも以前に間近からK^2を眺めたのはこの一行に加つた人々だけである。註一六　バルトロ氷河を取り圍む山々のうちで既に登頂された山は僅かに二峰で、ともに一八九二年コンウェーが登つてゐる。卽ち一つは氷河の右岸に聳ゆるクリスタル・ピーク(Crystal Peak 19400 ft.)、他は氷河の終端にあるパイオニア・ピーク(Pioneer Peak 26,200 ft.)—コンウェーの命名—である。

文獻に徵するにバルトロ氷河が登山及遠征に最も適當してゐるやうである。卽ち第一こゝにはK^2がある。K^2は歐人が現在入國しうる地域での最高峰で、エヴェレスト山とはわづかに七五〇呎の差である。それから曩にK^2を間近から眺めたところによると登頂の可能性はあるだらうといふことである。ヂラモンドも登れるだらうと語つてゐた。その上K^2附近には人類の最高到達記錄をはるかに超してゐる二萬六千呎乃至二萬七千呎の高峰が澤山あり、そのうちには登頂可能と思はれる山もある。最後にバルトロ氷河にはわづかに一隊の

入山があつたのみでまだ測量も出来てをらず、大部分は人跡未踏の地域であるからだ。

註一 Col. S. G. Burrard and H. H. Hayden, A Sketch of the Geography and Geology of the Himalaya Mountains and Tibet. Calcutta 1907—1909.

註二 C. W. Rubenson, An Ascent of Kabru, Alpine Journal 24, 1908. p. 63.

註三 D. W. Freshfield, Round Kangchenjunga. London. 1903.

註四 Hermann von Schlagintweit-Sakünlünski, Reisen in Indien und Hochasien. Jena 1869—1880. 4 vols.

註五 W. W. Graham, Travel and Ascents in the Himalaya, Proc. Roy. Geog. Soc. VI. 1884. P. 429.

註六 T. G. Longstaff, A Mountaineering Expedition to the Himalaya of Gahrwal. Geog. Jour. 31 1908, P. 361,
do Mountaineering Gahrwal. Alp. Jour. 24, 1908, p. 107.

註七 W. Hunter and F. Bullock Workman, Peaks and Glaciers of the Nun Kun. London 1909.

註八 J. Norman Collie, Climbing on the Himalaya etc. Edinburgh 1902,
C. G. Bruce, Twenty Years in the Himalaya. London 1910.

註九 W. Moorcroft and G. Trebeck, Travels in the Himalayan Provinces of Hindustan, etc. Ed. by H. Hayman Wilson. London 1841. 2 Vols.

註一〇 Schlagintweit. 前掲書
Sir A. Cunningham, Ladak and Surrounding Countries. London 1854.
W. Hunter and F. Bullock Workman, In the Ice World of Himalaya. London 1901.

註一一 G. T. Vigne, Travels in Kashmir, Ladak, Iskardo, etc. London 1842. 2 Vols.

H. Falconer. cited by I. Murchison, Jour. Roy. Geog. Soc. 28. 1858.

T. Thomson, Western Himalaya and Tibet. London 1852. and various notes in Jour. Roy. Geog. Soc. 23. 1853, pp. 232, 318.

Schlagintweit, 前掲書。

註一二　Sir W. M. Conway, Climbing in the Himalayas. Londou 1894. 2 Vols.

註一三　W. Hunter Workman and F. Bullock Workman, In the Ice-World of Himalaya. London 1901. do. Ice-Bound Heights of the Mustagh. London 1908. do. Peaks and Glaciers of the Nun Kun London 1909. do The Call of the Snowy Hispar, London 1910.

以上の外ジオグラフィカル・ジャーナル、アルペイン・ジャーナルその他地理、登山雑誌に載出の記錄多數あり。

註一四　Sir F. E. Younghusband, A Journey across Central Asia, from Manchuria and Peking to Kashmir, over the Mustagh Pass. Proc. Roy. Geog. Soc. N. S. 10, 1888, p. 485

註一五　Sir W. M. Conway 前掲書。

註一六　Dr. J. Jacot Guillarmod, Six mois dans l'Himalaya. Neuchàtel.

Pfannl, Von meiner Reise zum K2 in den Bergen Baltistans, Mitt. der Georgr. Ges. Wien, 47, 1904, p.247, 及び Zeit. d. Deut. u. Oest. Alpenvereins, 35, 1904, p. 88.

第二章　マルセイユ發スリナガルへ

遠征隊の準備萬端は二月と三月とで出來上つた、いろ〳〵の事情(p. 14)でアオスタのクールマイエルからガイドとポーターを連れて行くことにした。

この種の遠征では登攀の時機をえらぶことが何よりも大切なことである。カラコルムへこれまでに這入つた人々の經驗から推すと、この地方の天候は極めて不規則のやうである。卽ち一八九二年五月から九月までカラコルムにはいつてゐたコンウェーは初め惡天候に惱まされ、九月になつて天候はやうやく落ちついてきたが、そのころになると寒氣が加はり、强風が吹きつのり、日が短かいので登行には不便になつてくる(p.15)。ウォークマンは一九〇八年の八月に例外的な好晴に惠まれたが、普通カラコルム西部は七、八月は非常に天候の惡い季節である。エッケンシュタインの一行は一九〇二年にはいつてゐるが六月から八月まではやはり惡天候に惱まされてゐる(p. 17)。

これ等の前例を參酌して、我々は六月初旬に登攀にかゝれるやうに本國を出發することゝした。歐洲からカラコルムへ到達するのに二ケ月はかゝるので、隊員一同は三月二六日にマルセイユを出帆した。四月九日の未明ボンベイに入港、直ちに荷物の通關、積替を行ひ、その日の午後ボンベイ驛を出發、一一日の夕方ラワルピンディー驛に到着した。荷物は一三二箇、その全重量は一三・二八〇封度に及んでゐる(p. 18)。この荷物はスリナガルまで約二百哩の街道をエッカに積んで運ぶのである。この街道は海拔一・七〇〇呎のラワルピンディーからジェーラムの谷に沿うて、海拔五・二〇〇呎のカシミル高原に延びてゐる。一三日の早

朝隊員は二臺の馬車に分乘してラワルピンディーを出發した(p.20)。手廻り品はトンガに積みこんだ(p. 21)。荷物の運搬に用ふるこのエッカ（Ekka）は二輪の荷車でその積載量は八、九百封度で、一頭の馬が挽き、ラワルピンディー、スリナガル間は普通八日行程である(p. 19)。トンガ（Tonga）は矢張り二輪車だが、幌屋根がついてゐて四人分の坐席があり、その上かなり荷物も積むことが出來、馬二頭で挽くのである(p. 21)。

現在ラワルピンディー、スリナガル間は自動車、トラックが頻繁に往き來してをり、一九〇九年のころとはその事情を大いに異にし、直接參考になることも比較的少いので、この間の道中記は全部省略することゝした（譯者記）。

第三章　カシミル

スリナガルは誰れもが皆口を揃へてほめる市街で水郷として有名である。このスリナガルの盆地の成因については色々の說(p. 28)があるが註一それは兎に角としてこの東洋のヴェニスと稱されてゐる(p. 35)スリナガルの町に遠征隊は四月一六日に到着し、二三日まで丁度一週間滯在した。それは荷物が到着するのを待つてゐたのである。他方その間に我々は最後の準備を仕上げた。この町でキルタス(Kilkas)を買つた。これは一種の背負籠で、輕くてしかも强く形は長方形の桶狀で、羊皮でおほはれ、蓋には錠がついてゐる。易損品をこの籠に入れて運ぶのである(p. 40)。

當局の特別の取り計ひで輸送の一切の手筈がもう整つてゐた。ヤングハズバンド卿はA・Cベインス（A.

C. Baines)に我々のキャラバンの編成、馬やクーリィや行進中の必需品の調達を委託してくれてゐた。それでベインスは我々が町に到着する二週間前にスリナガルを發ち、ドラスの谷で待ちうけてゐる(p. 40)。ヤングハズバンド夫妻以下英國官憲の好意により何も彼も準備が出來てゐるので附近を見物して廻つた。ローカル・カラーの濃いところで、東洋風の風物にはいたく興味を覺えた(p. 40)。この邊は午後になると殆ど毎日のやうに空は曇り天候は險惡となる。印度平原から吹いてくる熱風と山から吹き下してくる冷風とが出あつて嵐をまき起し、俄雨がくる。時には降らないこともあるが二時間もするときまつて空は拭つたやうに晴れ上り、やがて美しい夕方となる(p. 43)。

「ヒマラヤのお庭」(Garden of the Himalaya)とも稱すべきこの風光明媚のカシミル盆地について記すことはいくらもあるが、紙面の都合上こゝでは割愛する。この附近は五〇年や七〇年以前も、今も殆ど同じ狀態で餘り變つてゐないから、詳しいことを知り度い讀者は昔の旅行者の記錄を繙かるゝがよいと思ふ(p. 44)。註二

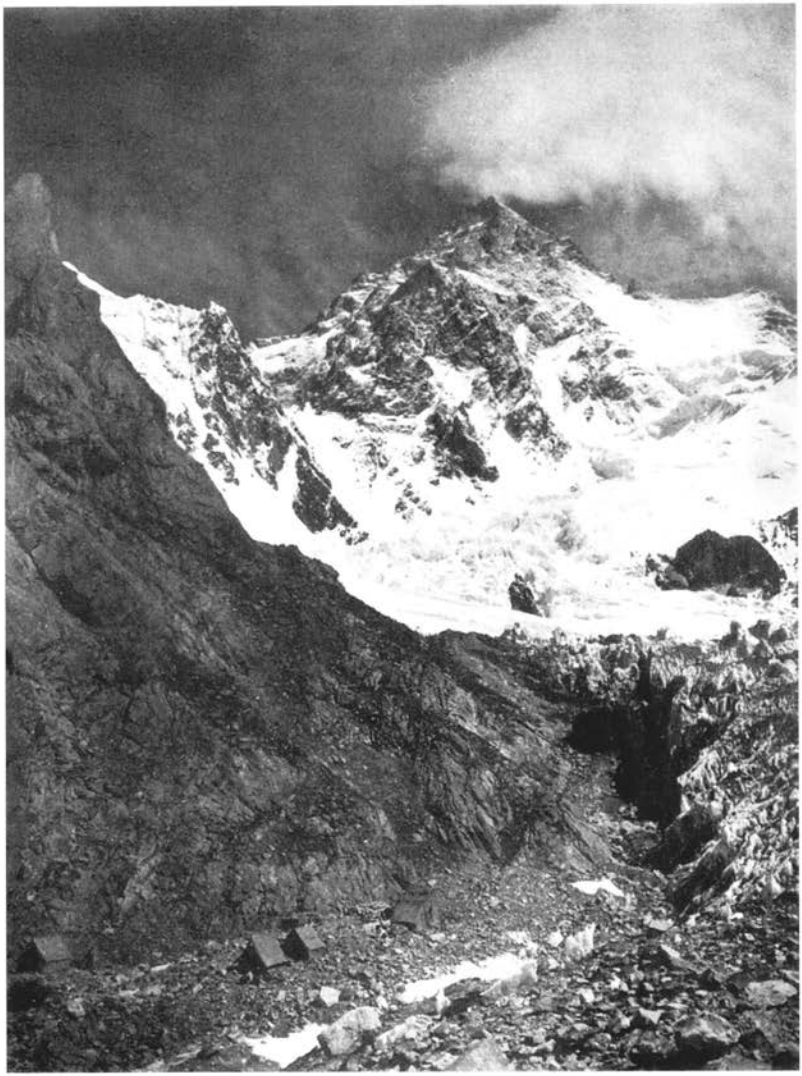
四月二三日の朝荷物をつんだエッカの長い行列が官邸に到着した。物資の整理を了へ直ちに六隻の舟に積み、早くもその日の夜スリナガルを出發した。水運を利用して山麓まで舟で運ぶのである。

スリナガルからカラコルムにはいるには先づヒマラヤ山脈を越すのである。その峠としてはシンド谷(Sind)の頭、一一・二三〇呎のゾーチ・ラ((Zoji La)が最低個所となつてゐる。こゝからドラスの谷を下るとやがてインダス河にはいる。インダス河は北流してバルチスタンの首都スカルドウ(Skardu)に達してゐる、こ

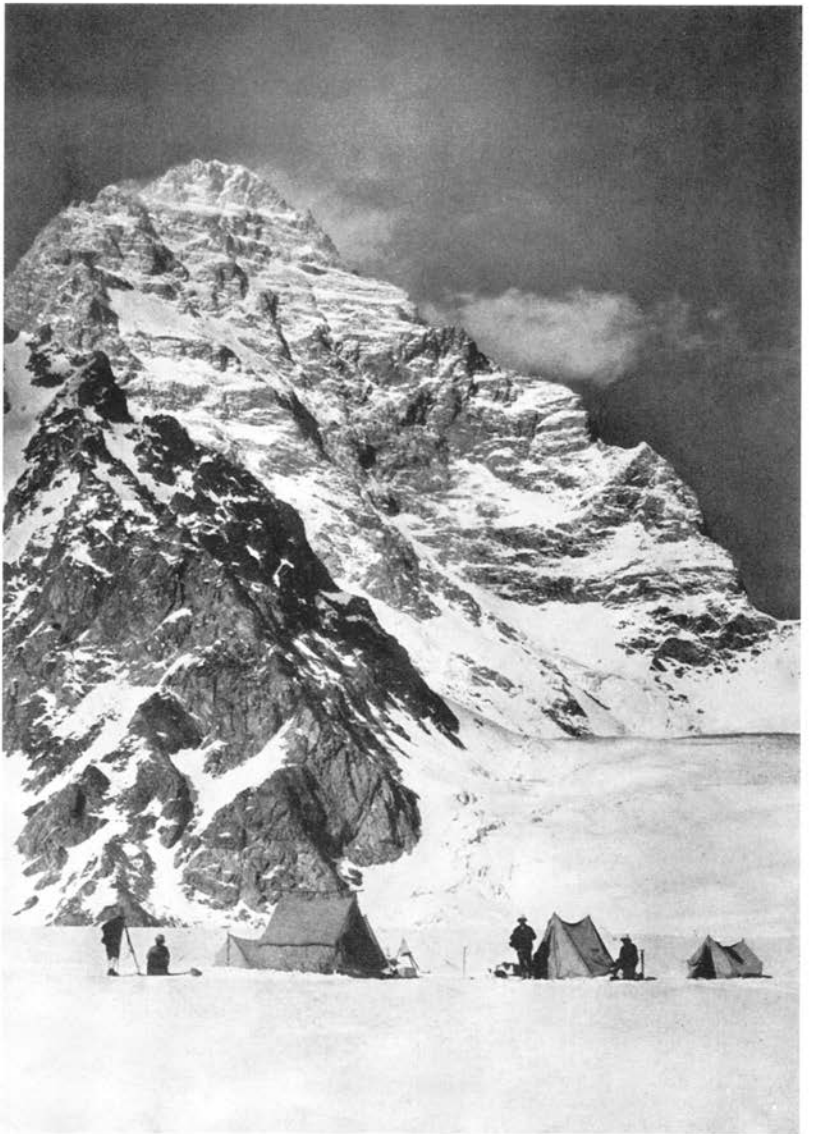
こで河を渡り、眞直ぐに行くとカラコルムに到達するのである。このコースは、特別荒天の場合の外は一年中通過の出來るメイン・ルートである(p. 45)。

他にはスリナガルの眞北にあるラヂアンガン峠(Rajdiangan)を越え、キシェン・ガンガ(Kishen ganga)の谷に沿うて溯り、曠漠たるデオサイ高原を突切つて直接スカルドウに至るルートがある。このコースはゾーチ・ラ經由に比し約五〇哩ほど短距離となるが、デオサイ高原は四月はまだ雪が深く、時々嵐が襲來して危險なので大部隊の通過には適しない。ゾーチ・ラでさへ、大部隊になると全然危險がないとは斷言出來ない(p. 46)。註三

午後スリナガル出發、ヤングハズバンド夫妻は途中まで見送つてくれることゝなり一緒に出かけた。溝のやうな狹い運河を通つて殆ど眞北へと進んで行つた。街の間のゴミ〳〵した運河をすぎ、田畑の間を通り、ジェーラム河の大支流たるシンド河(Sind)にはいつた。暫く溯つて東に方向を變へシンド谷を直進して行つた。この谷の入口にはハラムク・ピーク(Peak of Haramuk)が聳えてゐる。この山は平原から約一二・〇〇〇呎卽ち海拔一六・九〇三呎の高度を有し、カシミル盆地の周壁中の最高峰である。この山へはE・F・ネーブ博士(Dr. E. F. Neve.)がG・ミライス(G. Millais)と共に一八九九年に初登攀を行つた。更に一九〇七年にはA・L・マムとブルース少佐とが登つてゐる。註四 ステーション・ピーク(Station Peak)として知られてゐるハラムク西峰(約一六・〇〇〇呎)から一八五八年にモントゴメリー大佐(Colonel Montgomerie)が、一三七哩



K 2 南壁下のキャンプ



K 2 の西壁（サヴォイア氷河より）

の彼方、デオサイ高原（Deosai Plains）の上空にK"を見つけ出し、初めて三角測量法によつてその高度を測つた(p. 48)。註五

シンド谷の入口にあるグンダバル(Gunderbal)に午後五時到着、プラタブ・シン(Pratab Singh)はシャムに滞在してゐて留守中であつたが、部下に命じて諸準備を整へてゐて呉れた。十二のテントがちやんと架設してあり、美しい鞍の乗馬四頭や駄馬も用意してあつた（p. 48)。その夜は憧れのヒマラヤを夢に見ながら眠りについた。

註一　これが關係文獻は次の通りである。

W. H. Purdon. On the Trigonometrica Survay and Physical Configuration of the Valley of Kashmir. Jour. Roy. Geog. Soc. 31, 1861, p. 14.

Lydekker, The Geology of Kashmir and Chamba Territories. Mem. of the Geol. Surv. of India, 22, 1883, p. 186.

E. F. Knight, Where Three Empires Meet. London 1905.

註二　參考書文獻としては

Baron C. von Hügel, Kashmir und das Reich der Sick. Vienna 1840.

W. Moorcroft and G. Trebeck, Travals in the Himalayan Provinces of Hindustan, etc. (ed. by H. Haymnan Wilson) London 1841. 2 Vols.

G. T. Vigne, Travels in Kashmir, etc. London 1842. 2 Vols.

Th. Thomson, Western Himalaya and Tibet. London. 1852.

Sir A. Cunningham, Ladak and Surrounding Countries. London 1854.

以上の外 Sch'agintweit, Drew の各著及び Younghusband の著 Kashmir は良い書物である。

註三　ドラス・ルートについて詳しく最初に紹介した歐人はモアクロフトである。スカルドウ、スリナガル間のドラス・ルート、デオサイ・ルートについては Vigne, Thomson の前揭書に詳しい。

註四　E. F. Neve, The Ascent of Haramuk. Alp. Jour. 20, 1900, p. 122.

A. L. Mumm, In and About Kashmir. Alp. Jour. 21. 1908, p. 195.

譯者註　英國版第四七頁下欄註には Alp. Jour. 24, 1898, p. 195 となつてゐるがこれは明かに一九〇八年の誤植である。尙伊國版第五六頁の註には 1908 年となつてゐる。

註五　Synopsis of Results G. T. S. VII. Dehra Dun 1879 p. XXX.

第四章　シンド溪谷

四月二四日早朝グングバル出發。荷物は二六二個に及んでゐる。二個乃至三個を背にのせた九五頭の馬がまづ出發し、我々はヤングハズバンド夫妻に別を告げて九時に出發した。荷物は本國で荷造りするときにクーリィの負ひ易いやうに一個の重さを五〇封度内外にしておいたが、これが大變便利であつて、積替や出發にも時間を空費しないですんだ。

本日の行程は約一二哩、シンド河(Sind) 沿ひに歩む(p. 49)。ルートは大體右岸についてゐる。谷筋は大體

西から東に延びてゐる。谷の左岸は急峻で森林に蔽はれてゐるが、右岸はさほど急坂ではないが、殆ど裸地である(p. 50)。畫すぎにカンガン (Kangan) に到着、夕方俄雨あり、こゝに一泊した。

第二日の行程はシンド川の右岸にあるグンド (Gund) まで約一三哩である。カンガンの部落を出はづれると、道は漸次爪先上りとなり、景觀はアルプス風を呈してくる。この邊には到る處に氷河の痕跡がある(p. 51)。註一まだ雪が深くて馬は役に立たないので返すことにし、荷物は全部クーリィの肩で運ぶことにした。それで附近の部落から二五〇人の人夫を狩り集めた。何れもカシミル人である(p. 52)。この附近を旅行するには當局の許可證が入用である(p. 53)。

一七一個の荷物を一七一人のクーリィに割り當てる。クーリィは一人五〇乃至五五封度の荷物を擔ぎ、その外に約二〇封度位自分の荷を持つてゐるから結局七五乃至八〇封度の重さになり、これで雪のゾーヂ・ラを越えて行く譯である。クーリィの賃銀は食料ぬきで普通一日四乃至六アンナ (四片—六片) である。クーリィは坂道でも割合さつさと歩く、とき〴〵荷を卸しては息を入れてゐる(p. 55)。この日は八時半に全員休養につく。

グンドからのキャラバンは役人、召使クーリィ等を合すると二七〇人にも達した。クーリィ一七一人は我々の到着の日にグンドを出發し、百人は我々と同行した (p. 56)。數時間もすゝむと道は漸次急となり附近の山々も急峻になり、風物も春景色から冬景色にと替つてきた(p. 53)。ソナマルク (Sonamarg) 高原は三呎

の深雪に蔽はれてゐる。註二その上手にバンガローがある。グンドから一四哩半、海拔八・七六三呎の地點にある。この日は終日曇り勝ちの空模樣であつたが、我々が到着したころにはたうとう降り初め、氣溫はF四一度であつた(p. 57)。このバンガローはシンド川の左岸にあり、右岸にはこの谷筋では最高の村があつて郵便局や小さな氣象觀測所もある。

四月二七日ゾーヂ・ラの麓にあるバルタルの部落に着いた。行程約九哩(p. 59)。海拔九・二五八呎で註三ゾーヂ・ラの南に聳え立つカニパトリ山群(Kanipatri)支脈の崖下にある(p. 60)。

スリナガルとレー及びスカルドー間の郵便物は一週間毎にリレー式に遞送してゐる。配達夫の歩行距離は一日平均三〇哩に及ぶそうである。我は支那トルキスタン、チベット方面へ往來するキャラバンに出合つた。チベット、カシュガルとカシミル、アフガニスタン、ペルシャ間の通商路としてはヒマラヤ山脈を越えるのにはこの路しかないのである(p. 60)。

註一　R. D. Oldham, Note on the Glaciation and History of the Sind Valley, Kashmir. Rec. Geol. Surv. of India, 31, 1901, p. 142.

註二　この附近の降雪量は年により非常に相違してゐる。一九〇二年にエッケンシュタインの一行がほゞ同時季にこゝを通過してゐるが、そのときの積雪量はうんと少かつた。ギラモンドの著書中の寫眞と比較されるここのことが明に判る。

註三　Schlagintweit は九・三二一呎、Oestreich は九・三五〇呎と發表してゐる。

第五章　ゾーヂ・ラ

ゾーヂ・ラはインダス側とカシュミル側との間のヒマラヤ山脈の最低點で、海拔一一・二三〇呎、註一一年中郵便配達夫が週に一回この峠を越えてゐる(p. 63)。

四月に三百人以上のクーリィをつれてこの峠を越すことは全然危險がないこともない。四月二八日の早朝バルタルのバンガローを出發、その朝は天候思はしくなく軟雪であつたので隨分骨が折れ、二百ヤード歩く毎に休んで呼吸をつかねばならぬほどであつた(p. 64)。ランタンを灯し、デブリで一杯になつてゐる路を眞直に登つて行つた。二時間ほどするとダッピロイ峠の頂についた(p. 65)。こゝから北の方へ流れ出る水はグンバー(Gumbr)の流の源となつてゐる。

ゾーヂ・ラは地形上非常に特徴があるので、かねてから地質學者の注意を惹き、ブラード、ハイデン、エストライヒ等がいろ〳〵の意見を述べてゐる(p. 66)。

我々は曉に峠の頂に達した。その頃から天候は好轉しだし、下り路ではカニパトリ群峯の北側の氷河を鑑賞しながら約一時間休憩、更らに四哩ほど下手にあるムタジュン・バンガロー(Mutajun)へと軟雪の中を進んだ。隨分暑く感じたがそれでも實際の氣溫はF二四度であつた(p. 68)。

ムタジュンの部落は一萬呎以上の高度があり、部落から約百米下手にバンガローがある。午後二時にこゝ

についた。今日は頭痛や輕い日射病でクーリィの多くがへばつてしまつた(p. 68)。この行程はガイド・ブックによると一五哩とあるが、少くとも一八哩位はあるやうに思はれた。

翌二九日は成る可く涼しいうちにとうんと早く出發した。パンドラスの部落を通過して尙も歩きつゞけると、雪は漸次少くなり、山鼻を廻るとドラス川との廣い合流點にさしかゝつた(p. 69)。谷の左側、幾分平たい處にスキス風のバンガローが建つてゐる。一〇時にこゝへ到着、先行のベインス氏が準備してゐて呉れた美味しい朝食を攝つた。到着して暫くすると村人がやつて來た。この邊は豊饒な土地ではなく、村民はゾーチ・ラを越すキャラバンのポーターをその生業としてゐる(p. 70)我々が到着して二時間ほどしてクーリィがやつと着いた、荷物をもう一度數へ、グンドからの賃銀として四ルピー四アンナづゝ支拂つてやつた(P. 71)。

註一　Burrard は一一・三〇〇呎 Oestreich は一一・三一九呎と發表してゐる。

第六章　ドラス溪谷

まだ深雪に埋れた山々や谷間を四日間も歩きつゞけて荒涼たるドラス川の畔に辿りついた。すでに春の花が咲いてゐたカシミルに比べて、こゝはまた何といふコントラストをなしてゐるのであらう。ゾーチ・ラ一つで隨分違ふものである。ことに夏ゾーチ・ラを越へた人々はなほ一層のことこの感が深いことであらう(p. 72)。

この地方は一年間の雨量は六吋程度で、氣候は乾燥してゐる。もしもこゝが平原ならばサハラ沙漠のやうになつてゐるであらう。寒暑の差は甚しく、冬は非常に寒くて、川は堅氷で蔽はれ絶好の通路となる。夏はやけに暑くて空氣は乾燥してゐるから、全く耐へ難い。それでゐて夜は馬鹿に涼しい(p. 74)。

いま、我々はインダス河の支流ドラスの流に沿ふて下つてゐる。ドラスの村からインダス河まで約四八マイル (p. 77)。一行は四月三〇日早朝ドラスを出發した。ドラスの谷もさうであるが、一般に西部ヒマラヤの渓谷は下流が上流よりもズット狹くなり、V字型になつてゐる。この特徴はたつた今通つてきたグンバ渓谷でも非常にはつきりとしてゐる。このやうに谷の上流が開けてゐるのは昔氷河に蔽はれてゐたからであらう(p. 78)。

ドラスの谷は初めの七、八マイルは東行し、それから東北方に屈曲してゐる。ドラスから約四〇マイルの間は路は殆んど河の左側を通つてゐる。長い一日の行程はカルブ・バンガロー(Kaubu)で終つた。こゝはドラスから二一マイルのところで、谷が狹くなつてゐる (p. 78)。この附近の住民や、往き通ふ人々は蒙古族に屬するものが多數を占めてゐる (p. 76)。カルブからほど近いところでシガル川が左側から流れこんでゐる。同名の川がスカルドーの近くでもインダス河へ注いでゐるが、この兩者はよく混同される。ドラス川のこの支流はデオサイ高原にその源を發してゐる(p. 81)。

テントを張り終るや否や風がひどく吹き出し、砂が舞ひこんできて、目や鼻口にまで入り、一面に厚く積

つた。これからは毎日のやうに午後強風が襲來した。この大風は大體三、四時間位つゞき夕方になると止むのが普通である(p. 83)。泊場の附近ではスル川が南の方からドラス川に流れこんでゐる。このスル川はヌン・クン山塊の雪どけの水を蒐め南から流れてきてゐる大きな川である(p. 84)。この夜、F四二度まで下つたので、クーリィ達は寒くて弱つたらしい(p. 84)。夜が明けると溫度が昇り、早朝でも陽射しがつよい。第三日の日程ではドラス川沿ひに僅か一四マイルしか歩かなかつたが、それでも相當疲れた(p. 85)。

バンガローはオルシンタング(Olthingthang)の村の一番上に建つてゐるが、汚いものでクーリィ達には使用出來るが、我々はすぐ上の廣場の杏の木蔭にテントをはることにした。午後附近の病人を診察し、藥をやつた。このことが住民達に接近する機會となつた(p. 86)。

第七章　インダス溪谷

ドラス河とインダス河との合流點からスカルドーの町まで約八六マイル、インダス川の左側約一・五〇〇フィートの高さのところを行く。道がよいので全部馬に乘つて行けるほどで、この區間は約六日行程である(p. 102)。この間左岸からは大支流の注ぐものなく、濁つた河水がゆるやかに流れてゐる。川幅の狹いところでは急湍となつてゐるが、瀧といふほどのものは一ケ所しかないのも妙である。この瀧はカルマング(Karmang)の下手にあり、その高さは一五乃至二〇フィート位で、コンウェーが初めて指摘したものである。

川幅の割合に水量が尠いが、これはこの地方の乾燥ぶりを示してゐるものといへやう(p. 104)。それからこの邊は濁流ばかりで清水を得るには困らされた。

我々は規則立つた日常生活を送つてゐる。五時乃至五時半起床、まづ荷造りしてテントをたゝんで朝食(p. 104)六時すぎには出發準備が整ひ、クーリィや馬子に勞銀の支拂をする。殆ど一旅程毎にクーリィや馬を繼ぎ替へねばならない。といふのは農作の關係で二、三日以上も村を離れられないからである(p. 105)。セラは撮影のため人夫に寫眞機を持たせて先發し、時には途中で待ちかまへてゐて一行の撮影をしたりなどしてゐた(p. 105)。或は歩き、或は馬に乘つて進む(p. 107)。出發後三〇分間といふものは毎日疲れてし樣がなかつた。ガイド達は一團になつて一行の先頭になつたり、或は最後になつたりして進む(p. 107)。非常に暑く輻射が強いのでヘルメットをかぶる。そのくせ氣溫は六〇度乃至六八度、空氣は大變乾燥し、いつもそよ風が吹いてゐる。殆ど毎日午後三時ごろには強い風が西又は南西の方から吹き出し、細かい砂を舞ひ上げるので空は薄暗くなり、まるで濃い霧がかゝつたやうである(p. 107)。毎日一〇時には暑い陽射をさけて木蔭で晝食。午後二時にはその日の行程を終つてテントを張つてゐる。綠色のウィルスデン・カンバス(Willesden)で作つた輕い、熱帶地用のテントは六張あり、我々四人、歐人のガイドやポーターが用ひた(p. 108)。一行は召使四人を連れてゐる。卽ち二人は我々に、一人はガイド等に、もう一人は炊事に使つてゐた。召使に食事の給仕をさせ、歩いてゐるときは水甕を持たせ、一日の行程を了へ休息するときには脚のマッサージもし

てくれる(p. 102)テントの架設作業がすむとそれ〴〵皆忙しい。公は氣象のデーターの整理のほか隊長としての仕事もいろ〳〵と多く、セラは寫眞班としての準備に、ネグロトはクーリィのことで何かと多忙であつた(p. 110)。一行が到着して暫くすると病人が村から押し寄せてくる。患者の大部分は慢性の皮膚病類である(p. 110)。お茶のときには一同集り、遠征隊の組織、クーリィや裝備等に關し色々と論議し合ふのである(p. 110)。テントでの調理は歐人よりも印度人やカシミル人の方が上手である。夜は九時に就寢、この時分の氣溫はF四一度乃至四五度位である(p. 111)。

第八章　オルシンタンからスカルドーへ

五月三日朝インダス川畔にはいつた。オルシンタン(Olthingthang)から徒歩約一時間である。タルクッタ(Tarkutta)の部落を過ぎてインダス河畔の砂原にテントを張つた。あまり暑かつたので、水浴しやうと思つたが、驚いたことには水は氷のやうに冷たかつた(p. 112)。翌日川を北の方に下りつゝ前進した(p. 113)。カルマン(Kharmang)の部落の川向ひに小さなバンガローがある。ドラス溪谷のアラル・バンガローとそつくりである(p. 114)。今日はこの近くにテントを張ることゝした。川にかゝつてゐる吊橋——jhulaといふヒマラヤ地方によくある一種の吊橋——は一時に四人乃至六人づゝしか渡れないことになつてゐる(p. 116)。六つに分けた第一及び第二旅程では全荷物はクーリィの背で運んだが、トルティ(Tolti)では馬を雇ひ入

れた(p. 118)。馬子達は始め雇はれるのを肯じなかつたが、當地役人の半强制的な斡旋により、やうやく話がまとまつた。荷を運ぶ馬までが嫌さうにしてゐる(p. 119)。こんな村はこゝが初めてゞあつた(p. 118)。午後は相變らず風が出てきたが丘で圍まれてゐる小さい谷の中ではあり、それに樹木が生え茂つてゐるので砂や埃を浴びるといふやうなことがなかつたので、木蔭で充分に涼を入れることが出來た(p. 119)。つぎの旅程は約五時間半、いままでのコースとは違つて變化があり、興味ふかいものだつた。パルクッタ(Parkutta)の村は川面より三百呎も上にあつて川の兩面に擴つてゐる大きい村で、上手にラジャーの古い宮殿が建つてゐる。テントを張り終つたとき、ラジャーの公式訪問をうけた(p. 121)。特に催された踊やポロ競技を後刻參觀した(p. 121)。パルクッタの下流約八哩の地點でインダス河はダプサン(Dapsang)臺地から流れくるシオク(Shyok)川を併せ、その水嵩も倍近くなつてくる。シオク川はインダス河の大支流の一つで、その長さは約四百哩に及び、途中カラコルムの南半、無數の氷河の水を蒐めてゐる(p. 122)。この合流地點については地質學上色々の意見が現れてゐる(p. 123)。註一

五月八日いよ〳〵スカルドー(Skardu)への行程についた。その距離は二一哩、ゴル(Gol)のキャンプを午前三時半に出發し、月明を利用して歩き始めた。谷はだん〳〵廣く開けてくる(p. 129)ゴルから下流約一〇哩附近のところで川は南方に急曲し、ついで西へ曲つてゐる。谷はます〳〵廣くなり、やがて平野となつてゐる。これがスカルドー臺地で延長二〇哩、幅員五哩にも及んでゐる。この臺地から見ると北方の山稜の

上には雪をいただいたマンゴ・グソー(Mango Gusor 20,633ft.)が聳えてゐる(p. 125)。大小幾多の氷河の水を蒐めてくるシガル川(Shigar)がスカルドーでインダス河に合流してゐる。この附近の平原の眞中に千呎にもあまる巨大な岩塊が聳えてをり、恰も奇妙な怪物が砂の上にしやがんでゐるやうに見える。この附近も地理學者、地質學者にとつては興味ふかいところで、エストライヒ、オースチン、シュラギントワイト等がそれ〴〵意見を發表してゐる(p. 126)。註二

スカルドーの部落に入る手前でこの町の酋長、その一族、樂隊や町民の出迎をうけた。樂隊を先頭にして長蛇の列を作り、兩側に堵列する群集の間を行進し十一時半にバンガローに到着した。人夫部屋や廚所が別棟になつてゐるバンガローである。當地方の要人、主だつた商人達は種々の贈物を携へて儀禮的な訪問をなし、廣いベランダーはたちまちにしてレセップション・ルームとなつてしまつた。贈物のうちにはスリナガル出發以來見かけなかつた新鮮な野菜類もあつた(p. 128)。アレキサンダー大王はこんな遠い地方にまで侵入した。根據は薄弱だが、このスカルドーはイスカンダリヤ(Iskandaria)——アレキサンダーの町といふ意——の轉訛したものだといふことである。なるほど昔の人はこの町のことをイスカルドー(Iskardo)と呼んでゐるが、トムソン(Thomson)によるとこの町のほんとの西藏名はスカルドー(Skardo)またはカルド(Kardo)であると述べてゐる。何れにしても現今より昔の方が榮えてゐたやうである。先蹤者のトムソンやビアルビ(Vitalvy)等は昔の文化の片鱗を見つけ出してゐる。今では市場附近の中心地以外は野ッ原に小舍

が集り合つてゐるやうな狀態である。この邊の家は大概二階建で、階下は居室、階上は穀物置場になつてゐる。この附近には果樹多く種々の果實を產出する(p. 129)。

スカルドーでの半日間は荷物の點檢、分類、クーリィの雇ひ替へ等で非常に忙しかつた。一四七個の荷物をまづシカル (Shigar) に先發させ、他方隊員と共に高地まで連れて行くクーリィ達の茶、砂糖、鹽、煙草、手巾等を買ひ入れた。

隊長は我々の遠征の期間中ズット一日三回づゝ氣象觀測をスカルドーでも行つてくれるやうに依賴したりまた一行の者に宛てた郵便物についても色々と考へてくれ、郵便も電信もスカルドーから奧地へははいつてゐないが、公が交涉された結果、郵便物を特にカラコルム氷河まで取りついでくれることになつた(p.130)。五時からは公の歡迎のために催されたポロ・ゲームを見物に出かけて行つたがなか〳〵壯觀であつた(p. 131)。

こゝへ歸つてきたときの食糧についてスカルドーの商人と打合をなし、相當の代金を先拂にしてやつた。隊員は寸暇を得て手紙を書いたり、電報を打つたり、一一時間以上も仕事に追はれ、つかれ果てゝやつと午後一一時に床に就いた。思へばヒマラヤの山道を一一日間に二二五哩進んだ。これで第一の難關は突破出來たので流石に嬉しく思はれた(p. 131)。

註一　T. Thomson, Western Himalaya and Tibet, London, 1852.

Godwin Austen, Proc. of the Geog. Section of the British. Assoc.

Sir John Strachey, India, London. 1888.

Ellsworth Huntingdon, The Vale of Kashmir. Bull. Amer. Geog. Soc. 38, 1896, p. 657.

do; The Pulse of Asia, London, 1897.

R. D. Oldham, Note on the Glaciation and History of the Sind Valley, Kashmir, Rec. Geol. Surv. of India, 31. 1904, p. 142.

Schlagintweit, Jour. Asiat. Soc. of Bengal, 26, 1857.

註二　Lieut. Col. Godwin Austen. The Glaciers of the Mustagh Range. Jour. of the Roy Geog. Soc. 34,1864, P. 19.

H. von Schlagintweit. Jour. Asiat. Soc. of Bengal, 26, 1857.

第九章　スカルドーからアスコリーへ

——シカル谷とブラルドー谷——

五月九日(日曜)、午前六時半クーリィ一一一人、小馬八頭とスカルドー出發。クーリィ一五人、馬四八頭は昨日先行させておいた。インダス河からスカルドーの町を通らないでシカル溪谷にはいるのにはゴルでインダス河を渡つて右岸をすゝみ、ちよつとした峠を越してシカルへ直行出來る。地圖で見るとこのルートの方がずつと近いやうに見えるが、ゴルではインダス河を越すのが厄介だ。小さな、原始的な筏で渡るより方法がなく、これでは我々のやうな大部隊だと渡河だけに一日たつぷりかゝつてしまふ。その外スカルドーで

は種々の用件もあつたのでこの近道をとるわけには行かなかつたのである(p. 132)。昨日きた道を少し戻ると、シカル河の合流點の上手に渡船が二隻ある。一隻に一二人の船頭がつき三〇分間で全隊員が渡れた。この邊で川幅は約三百碼、流速はかなり早い方だが、ほゞ眞直に渡り切つた(p. 133)。地圖上ではシカル附近には川の左岸に沿ふて村があるやうになつてゐるが、細長い耕地の間に、お寺を圍んだ小部落が散在してゐるだけで、村らしいのはシカルだけである(p. 135)。シカルに着く手前で藩侯の出迎をうけた。こゝのポロ遊戯場はバルチスタン地方最大のもので、場の周圍には胡桃やポプラの大木が繁つてゐる(p. 135)。今まで通つてきた村のうちではこのシカルが最も裕福のやうで、村民の服裝や住宅も小ザッツパリとしてゐる(p. 135)。

この邊の谷は深く、かつ長いので、シカルから見えるのは北の方につゝ立つてゐて大きな氷河のあるコサー・グンゲ(Koser Gunge 21,000ft.)だけである。シカル渓谷のはるか北方にシカル人がシンビラ(Simbilla)といつてゐるガンヘン(Ganchen 21,294)の雪峰が見える(p. 140)。路は谷の左側卽ち西側を登つてゐる。マンゴ・グソール(Mango Gusor20,633ft.)に源を發する谷がシカル河に注いでゐる。シカルの上流五哩のところには第二の支谷スコロ・ルンバ註一(Skoro Lumba)が流れこんでゐる。この谷は、アスコリーへの近道であるスコロ・ラ(Skoro La 16,716ft.)にその源を發してゐる。シカル、アスコリー間は三日行程になつてゐるが、峠はまだ雪に蔽はれてゐるので、山脈の裾を川沿ひに進むことにした。まづシカル河の兩俣まで、それ

からブラルドー(Braldoi)の谷をアスコリーに行くことにした(p. 141)。

シカルの谷ではアルコリ(Alchori)ユノ(Yuno)に泊り普通三日行程であるが、我々はその一日行程の二九哩か三〇哩を二日行程とし、クシムル(Kushimul)で一泊しドッソー(Dusso)でテントを張つた。ブラルドーの谷はスケールこそ大きくないが、インダス河と同じタイプの川である。ドッソーから谷を登つてその最高の部落たるアスコリーまでは約二二哩で、その間に七・八七四呎から一〇・〇一三呎のところまで登るから二・一四〇呎の標高差がある(p. 145)。途中の峠のいたゞきでは一息入れたが、そのときガンヘン(Ganchen)の大氷河を眺めることが出來た。ゴンボロ村(Gomboro)の近くにテントを張つた。五月一三日も前進をつゞけた(p. 146)。川原は堅くて厚い泥の層で蔽はれてゐる、これはバルチスタン奥地々方の特色の一つでシュア(Shwa)といつてゐる。シュアが崩れ落ちるのを我々は遂に目擊しなかつたが、その有様は半ば山崩れ、半ば洪水ともいふべく、ゴトウィン・オースチン、コンウェー、ウッークマン、ヂラモンド隊等はこの奇現象を目擊してゐる(p. 148)。註二この日は川畔の小部落チョンゴ(Chongo)で泊ることにした。チョンゴからアスコリーまで僅か六哩なので、途中ゆつくり休憩し、道端に湧き出てゐる溫泉にはいつたりした(p. 153)。この湯の噴出口で湯の溫度をヒックス溫度計で測つたところF一二〇度であつた(p.154)。註三入浴の後足取りも輕く出發し、奔流を二つ渡り、アスコリー(Askoley)に九時前に到着、村の近くにテントを張つた(p. 155)。この部落が、カラコルムの南側では最奥の部落になつてゐる。二一日間に荷物を持つて二

九〇哩を歩き、しかもその間に荷物一つ紛失せずに運搬し得た。これを以て見てもバルチス人は如何に正直であるかゞ判る。隊員一同のコンディションは良好である。これは當初の我々の旅程の區分方法が適正であつたからである(p. 156)。

アスコリーは海拔一〇・〇一三呎註四の地點で、山棄への入口に位しカラコルムの大氷原も遠くはない(p. 156)。午後隊長は前進隊を編成し、クーリィ九三人が各自八〇封度の荷物を運び、三五人は高山地用の食糧、一〇人は人夫の途中の食糧をそれ〴〵運ぶことになつた。このクーリィ達はアスコリーや、この下手の部落から狩り集めてきたもので、そのうちには子供もをれば老人も混つてをり、甚しいのは跛もゐたが應募者は皆傭ひ入れることにした(p. 157)。このうちから高所のキャンプ地まで連れて行けるやうな强健なものを嚴選した。

アスコリーは實に一寒村でバルチスタンのうちでも最もきたない村の一つで空屋や廢屋が澤山あり、野良犬が多いのには驚いた。またこのアスコリーほど世間と隔絶してゐる村は少いであらう。前には曠漠なる大氷河があり、後方には一年のうち大半は雪に埋れてゐる荒れ谷がある(p. 157)。これほど自然の防壘があるに拘らず永年に亘り、フンザやナガル地方の匪賊に荒されつゞけてゐた。英國の遠征隊がナガル地方を平定しカシミル王國に併合するやうになつてやつと匪害から免れた。當時の匪賊はヒスパー氷河を溯り、コルを越えてビアフォ氷河を下り、この間實に六五哩に及ぶ氷河を涉つてアスコリーに來寇したもので、最後の來

襲は一八四〇年のことである(p. 158)。

アスコリーへ到着してからは忙しかつた。セラは窩眞の準備に忙殺され(p. 159)、山の中でもミルクや肉をしじゆう喰べられるやうにと、こゝで羊、山羊を買ひ入れ、バルトロ氷河の南端の山鼻に放しておくことゝし牧夫等とゝもに先行させた。山中で料理の單調化するのを避け、かつ榮養の增加をはかるため、卵を澤山買ひ入れた。カシミル人の召使はこゝから奥へは行けないので我々が歸つてくるまで待つてゐることになつた(p. 160)。

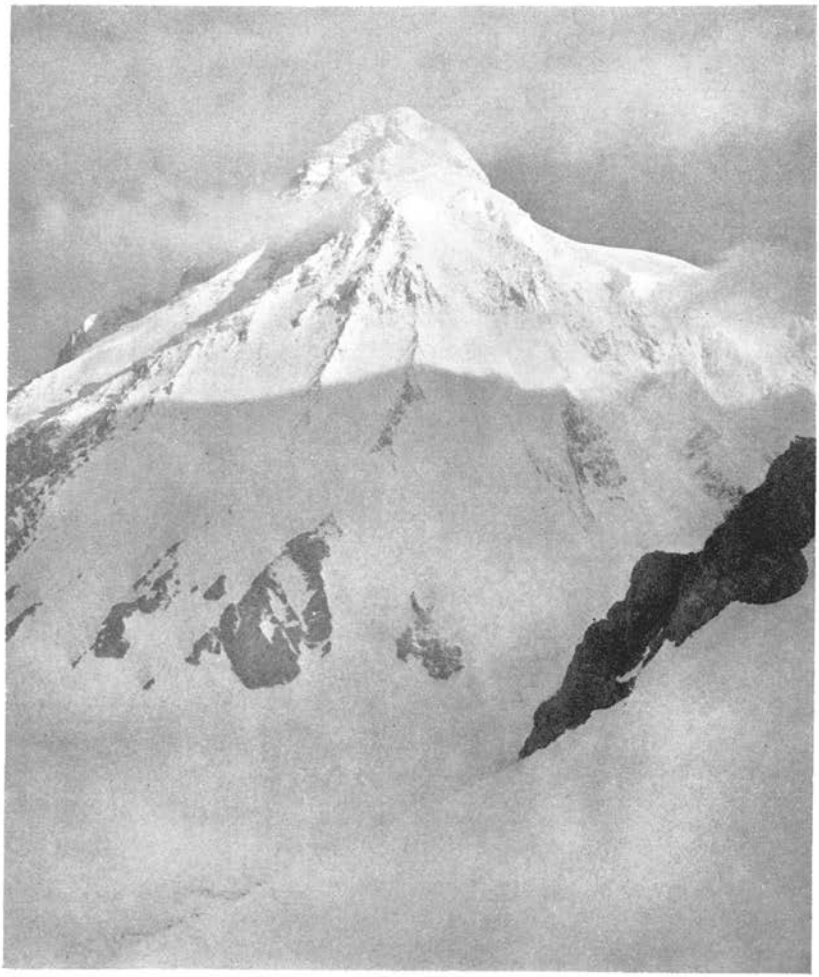
天候が變調なのでその回復を待つて二日間アスコリーに滯在した。夜は靜かで、氣溫はF二八度まで下つた。

註一　Lumba は Loomba とも書き、Valley と同じ意味である。

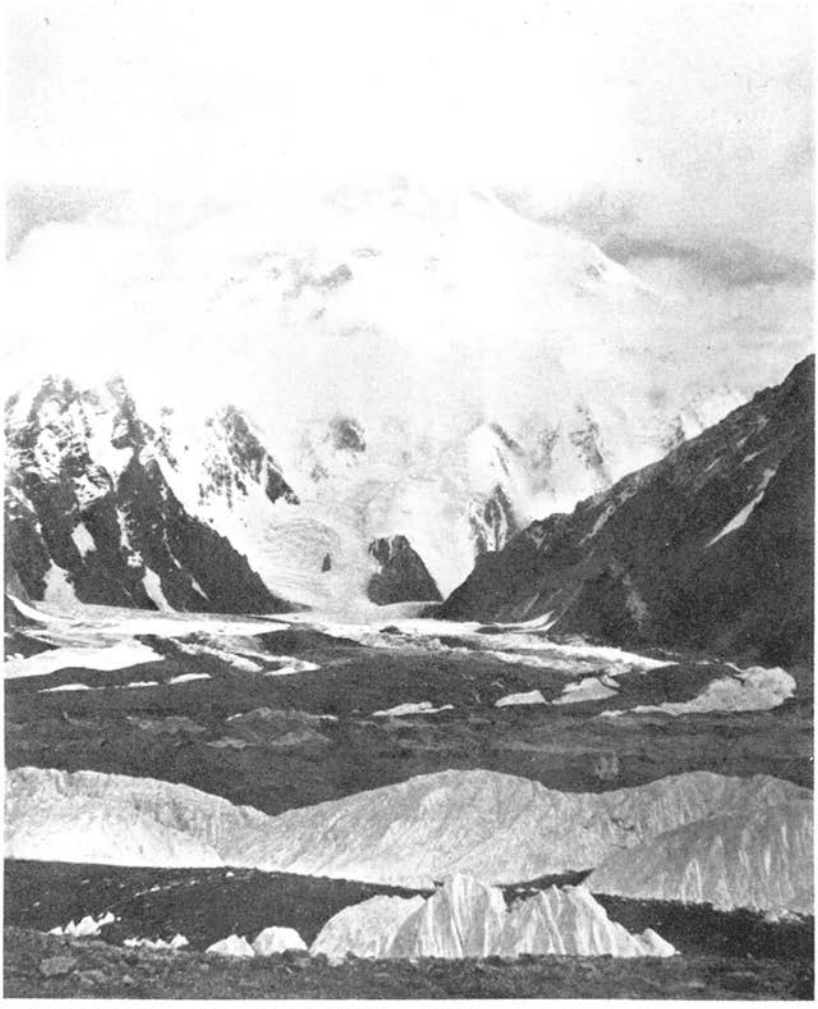
註二　Godwin Austen, Conway, Workman. Eckenstein, Guillarmod 等の著の外 Col. H. C. B. Tanner, Our Present Knowledge of the Himalayas. Proc. Roy. Geog. Soc. N. S. 13, 1891, p. 403.
Ch. Rabot, Glacial. Reservoirs and their Outbursts, Geog. Jour, 25, 1905,

註三　ギラモンドの一九〇二年の測定ではF百度七分であつた。ゴトウィン・オースチンはF百四度五分、百三七度、百廿二度、百七度、一一〇度の溫度を有する溫泉をこの附近で發見してゐる。

註四　コンウェーは、アスコリーは海拔一〇・三六〇呎と發表してゐるが、これはどうも誤植らしい。ウァークマンは



K 2 （東方、第六キャンプより）



Ｋ２（コンコーディア・アムフィシヤターより）

アスコリーの東方約一哩の地點を一〇・三〇〇呎としてゐる。

第十章　アスコリーからロドカスへ、ビアフォ氷河とバルトロ氷河

五月一六日午前六時アスコリー出發。スリナガルでは文明の香に接することが出來、スカルドーでは電信線で文明の息吹きに接することが出來た。しかしこのアスコリーこそは人間社會を遠く隔つた僻地で、いよいよこゝからカラコルムの氷の砂漠へとはいつて行くのだ(p. 161)。幅が廣くて底が平かなビアフォ溪谷はバルトロ氷河の末端までは急な坂もなく、約八二〇呎ほど徐々に登つてゐる。コロホン(Koroplion)を出發してからは川の右岸を谷底に沿うて溯ると約一時間ほどで支流ブンマー(Pummah)との合流點にきた(p. 167)。今夜はこの三角洲にテントを張つた(p. 168)。

北方へ喰ひ込んでゐるブンマーの谷は奥の方には廣い氷河がある。裾野の人々はこの谷に入り、海拔一萬九千呎の所謂ニュー・ムスター峠を越えるコースを開かうとしてゐるが、氷河が嶮阻な上、途中には山賊が蟠居してゐるのであまり人は通らない(p. 169)。この峠を越えた歐人はまだない。一八五六年にR・シュラギントワイト及び一八六一年にゴドウィン・オースチンがアスコリーから登らうとしたが吹雪に阻まれて失敗した。ゴトウィン・オースチンは氷河上でヤルカンドからきたバルティス人四名に出合つた。そのときの話によると、この峠を越すと近くて樂であり、峠の兩側とも傾斜がゆるく、どうにか馬や犂牛も辛じて通れ

る。ところが一八六三年から一八七〇年の間にはバルチスタンとトルキスタンとの間の交通は杜絶えてしまつたほどである(p. 169)。ヤングハズバンド卿はこの峠越を企て、オールド・ムスター峠を越えて、アスコリーに到着したが、セラックスの落下に阻まれてこれ亦失敗に歸した(p. 170)。

五月一七日、今晩はバルトロの下手にテントを張りたかつたので早朝に出發、まだ時期が早いので川は水位が低く、おかげで川原を眞直に歩けたので、川岸の上下の多い道を行くよりはずつと樂をした(p. 170)。註一この日の行程半ばにして溪谷の底にうづくまつてゐる巨大な黑い怪物のやうな大バルトロ氷河の末端に辿りついた(p. 171)。ゴトウィン・オースチンがK²を發見し、またヂラモンドがムスター・タワー(Mustagh Tower)を眺めた場所では相憎濃い霧が高いところ一帶にたれ罩めてゐたので山はどれも見ることが出來なかつた(p. 172)。清流には鱒(*Mount.in trout*)註二が泳いでゐる。大きさは七、八寸位、セラは網や釣針もないのにかなり捕獲した(p. 172)。

先年エッケンシュタイン等が食糧の貯藏所にしてゐた岩小屋からほど遠からぬところにテントを張つた。バルトロの谷はすぐ眼前に展開してゐる(p. 172)。アスコリーから先行させたクーリィ達がこゝまでくるのに三日間かゝつたので一行全部が今夜こゝに集り、四百人近くの人員となつた。陽が落ちると急に寒くなる。あちこちに焚火が出來、クーリィ達のほのかな影が、焚火の周りを右往左往してゐる。

五月一八日の朝も例によつてパットしない曇天に明けた。太陽は雲の厚いベールをかぶり、濃い霧がバル

トロの谷の奥を押し包んでゐる。バルトロ氷河の氷壁までは僅かに三百碼ほどである(p. 173)。バルトロ氷河の末端をゴドウィン・オースチンとコンウェーとは全然同じ様に記述してゐる(p. 173)。バルトロ氷河の下端は海拔約一萬一千呎であり、ビアフォ氷河の下端よりも約八二〇呎も高い。カラコルム地方の大氷河の下端はシアツェン氷河一萬一千六百呎(一九〇九年ロングスタッフ)、ヒスパーは一萬八百三呎(一九〇八年、ウッークマン)チョゴルングマは最も低くて九・五一九呎(一九〇二年ウッークマン)である(p. 177)。九時半所謂リヽゴ(Liligo)の泊場についた。クーリィ達は我々の周に集まり時間はまだ早いのにこゝで泊らうといひ出したが、苦もなく說き伏せて前進をつゞけさせた。ガイド達は急な氷河にす早く二百呎ばかりステップを切つた。ついで巾六〇碼、長さ一五〇乃至二百碼位の楕圓形の凹所に下つた。こゝをバルチス人達はマチカンド(Machichand)と呼んでゐる(p. 182)。このキャンプ地はゴロゴロ石でしかも谷合ひなのでもし雨が降ればかなり困ることであらう(p. 183)。楕圓形のこの廣場の中心に碎岩をならしてテントを張つた。クーリィ達は氷河が怖しいのか、いつもの樣に三々五々歩かないで一團になつてやつてき、寢るときも出來るだけ氷河から離れた壁の上で露營してゐた。泊場について荷を卸すと谷の上手へ薪を探しに出かけ、枯れた杜松(Juniper)の枝を運んできた(p. 184)。註二 夕方冷えだすとゝもに空はだん〳〵晴れ上つてきた。急に暮れて夜となり、こゝには黃昏時は殆どない(p. 185)。

翌朝アブドルラー(Abdullah)は氷河上を進まないで落石の危險のある所や、壁と氷河との間の狹い谷間

を案内して行つた。その途中エメラルド・グリーンの水を湛えてゐる小さい池を幾つも見た。その池の周圍は高い氷の壁で圍まれてゐる(p. 185)。出發後一時間ほどして氷と岩との間に水を湛えてゐる長さ二百碼、幅五乃至一〇碼の池の邊にきた。この池はあまり丈夫そうにもない氷壁でせきとめられてゐる。この氷壁が氷河の流下か水壓のために一たび決潰したら昨夜泊つた泊場などは非常な危險に曝されることであらう(p. 186)。ウァークマンや、ロングスタフ等は氷河上の池の氷堤が決潰してヒドイ目に遭つてゐる(p. 186)。

註一　ヂラモンドの隊員達は一萬呎の高所の稀薄な空氣に馴化するやうにとアスコリーで八日間滯在したが、コロホン、バルデマル(Bardumal)間で、早くも高度の影響による疲勞の前兆を感じてゐる。しかるに我々の場合は全く異つてゐる。隊員一同は些かの變化もなく、至極健全にバルトロ氷河に到達することが出來た。

註二　この種の鱒(*T. Himalayana*)はこの地方奥地渓流中の特産である。カンニンガムは海拔千五百呎位のラダーク附近の流れで大きさ五吋位の鱒を捕へたことがあり、ヴィグー(Vigne)も矢張インダス河の特産であるといつてゐる。

註三　ヂラモンドはリリゴの上手で杜松(Juniper)の幹を發見してゐるしウァークマンもチョゴルングマの兩岸で現在生えてゐるのより、すつと太い枯枝を見つけてゐる。これ等は氣候の變遷を物語つてゐる。

第十二章　ロドカスからコンコーディア・アンフィシアターへ

五月二三日の朝、天候がはつきりしないので暫く迷つたがバロメーターと風向きから判斷して出發するこ

とにし、牧夫ベイーン等を殘し、八時にロドカス出發、ヂラモンド遠征隊の歸途のルートを進んだ。卽ちヤングハズバンド氷河の少し上手の北岸にある泊場に向つてバルトロ氷河を斜に横切るコースである(p. 205)。南側のマシャブルムから流出してゐるムンドー氷河(Mundu)、イェルマネンド氷河(Yermanendu)がロドカスの上手でバルトロ氷河に合流してゐるが、北側から注いでゐる氷河にはこんなに大きいものは見當らない。この合流點附近から上手は、氷河の表面が割合平坦になつてゐるので行程が捗つた(p. 205)。やがてヤングハズバンド氷河の入口近くについた。こゝは一八六一年にゴトウィン・オースチンが到達したことのある地點で、また一八九二年コンウェーの來訪のときにはアスコリーの一バルティー人がムスター峠、バルトロ氷河、ムスター・タワー、マシャブルム、ガッシャブルム、K^2等の大體のスケッチを砂の上に描いたといはれてゐるが、村民等もこの氷雪の山域を幾分は知つてゐる模樣である(p. 207)。氷河の上には氷の塔が處々にツッ立つてゐる、溯るにつれてこれが多くなつてくる。初めてこれに注意したのはゴトウィン・オースチンで、ヂラモンドはこのアイス・ピラミッドをオーバーハングになつてゐる氷河から落下したセラックスが融解してこんな形になつたものだと考へてゐる(p. 209)。フェーバーはこれに何等言及してゐない。バルトロ氷河にはまた小さい池がところ〴〵に水を湛えてゐる(p. 210)。天候は漸次好轉しだし、空には狹霧があつてまだ晴上つてはゐないが、附近の高い山の頂が見えだした。霧の晴間にはマシャブルムもその勇姿を現してきた。二五・六六〇呎の主峰、その後方から纔にのぞいてゐる二五・六一〇呎の第二峰、また氷河がか

ゝつてゐる巨大な北壁等も見える(p. 212)。前方にはガッシャブルムがまるで谷を遮るやうにつっ立つてゐる(p. 213)。ガッシャブルムに續いて北方にはブロード・ピークの大圓頂が前山の上の方にガッシリと聳え立つてゐる(p. 213)。

七時間あまりも行進をつゞけ、クーリィ達をずつと追越し、午後四時ごろヤングハズバンド氷河とゴア(Gore)との中間にあるやゝ平坦な堆石地にテントを張ることにした。クーリィ達は夜になつて到着、焚火を作るのに苦心してゐた。夜に入るとゝもに空は曇りだし、やがて雪さへ降りだした。クーリィ達に大きな防水布を二枚貸してやると、器容なバルティス人達は石コロを取り除け、地馴をして、周圍に石垣を手早く築き上げてその間に防水布をかけて屋根を作つてゐた。なかは窮屈で壽し詰め同樣だが、雪はどうにか凌げる(p. 214)。夜中の氣溫は零點下であつた(p. 215)。

泊場から一時間足らずでヤングハズバンド氷河上方二番目の谷の入口にある小さい池についた。クーリィ達はゴアといつてゐる。コンウェーもエッケンシュタインもこゝで泊つてゐる。このどちらかの隊の積んだ「ケルン」が今も尙殘つてゐる。コンウェーは屋根を登つて一萬九千四百呎の高所にまで至り、これにクリスタル・ピークと名付け、こゝからコンコーディアや、そこに流入してゐるゴトウィン・オースチン、上部バルトロ及びヴィグーの三大氷河を發見した。コンウェーが登つたこのクリスタル・ピークはドクサン(Doksum)の殆ど直上にある二〇・五八七呎のクリスタル・ピークとは何の關係もない。後者はネグロットが命名したも

ので、望遠寫眞を撮るのに非常によい場所である。地形測量をしてゐると目にとまる地點に適當な地名や記號を付するのは止むを得ないことで、測量作業の便宜上單に假りの名を附するの外、我々の手で高度を測定した山でも名をつけなかつた (p. 215)。

やがてバルトロ氷河の本流の終點近くに到達した。いま眼前を遮つてゐる尾根を越せばゴトウィン・オースチン氷河やK^2が展開するのである(p. 217)。廣い堆石について山鼻を廻るとコンコーディアの廣大な氷の廣場が眼前にひろがつてゐる。突如霧が霽れ上り、ゴトウィン・オースチン氷河が展開し、群山を從へた盟主K^2の偉容が顯れ出た。その山容は實に素晴しく群峯を制壓して、突兀と聳えてゐる。前山に遮られて遠方から仰ぎ見るを得ず、長大な氷河のため近付くことも容易ではない。K^2をたゞ望見するだけでも大がゝりな計畫をたて多大の苦勞を拂つて長途の旅をつゞけて來なければならないのである。

第十三章　コンコーディアからK^2の麓まで

——偵察と試登——

五月二五日の明方、溫度計はF一五度を示してゐる。昨夜は霧がかゝつてゐたが、今朝は山のディテールも見えるほどに晴れてゐる。コンウェーがアルプスのオーバランドの氷河に因んで命名したコンコディアといふ巨大な氷河原の一角にテントを張つた。ブロード・ピークの下でバルトロ氷河は二俣に岐れてゐる。

一は北上してK^2の方に延びてゐるゴドウィン・オースチン氷河、他はゴールデン・スローン(Golden Throne)とブライド ピーク (Bride Peak) の南東に走つてゐるバルトロ上部氷河である。この氷河は兩方とも東に彎曲してC字型となり、その全長は三一哩にも及んでゐる。この二つの外にブロード、ガッシェルブルム連嶺の西壁からコンコーディアに氷河が二本流れこんでゐる(p. 220)。コンコーディアは直徑二哩半の楕圓形狀の廣場となつてゐるがバルトロだけでもその幅は二哩にも達してゐる (p. 221)。南方から寫したK^2の寫眞をふと見ると登山者はマッターホルンを思ひうかべるであらう。ゴドウィン・オースチン氷河はK^2の胸壁下で終つてゐるやうに見えてゐるが、谷は急に北東に曲り、K^2とブロードピークの北斜面との間に割り込んでゐる(p. 222)。上部バルトロ氷河は南東にゆるやかに彎曲し、恰もゴドウィン・オースチン氷河と相似てゐる。コンウェーがいふところのゴールデン・スローンまでは約一六哩であるが、バルトロは東方に曲り、ついにその終端は見えなくなつてゐる。ゴールデン・スローンとブライド・ピークとの間には廣い氷河が入り込んでゐる。ブライド・ピークは東西の二峰からなり、東峰は西峰より三二五呎高く、インディアン・サーベーによれば Karakoram. No. 8, 25,110feet となつてゐる (p. 223.)。ブライド・ピークから長い支脈が北方へ走つて谷へ鋭く落ちこんでゐる。この尾根とマイター・ピーク(Mitre Peak) との間に、コンコーディア附近で第三番目の大氷河たるヴィグネ氷河 (Vigne) が横たわつてゐる。(p. 224)

公は我々三人をコンコーディアに殘し、ガイド達を連れ、荷物を持つて氷河を溯り、ベースキャンプの適

地偵察のためK²の麓に向つた。この日、空は相當かすんでをり、やがてとうたう霧となり、ネグロットは地形や測量用のパノラマ寫眞を二枚撮つたが、セラは何も撮影出來なかつた。翌朝ベインス等はクーリィ達を連れてロドカスへ下つた。我々は公のパーティーに合同するためにK²の麓へ向け出發した。この日はバルトロ氷河に這入つて以來初めての好晴で拭ふたやうに晴上つた大空、澄みきつた大氣、太陽に輝く白雪、これ等は、凡て一行を歡迎するものゝ如く、一同は意氣軒昂たるものがある(p. 226)。暫くの間左の堆石の間の氷の端に沿ふて進む、コンコーディアとK²との間で二支流が左側から注いでゐる。第一の支流はクリスタル・ピークから下り、第二はK²の西斜面から流れ出てゐる可成り大きい氷河である。この兩支氷河の間の尾根の下へエッケンシュタイン等は第八キャンプを建設してゐたのである。我々は氷河のほゞ眞中を進んで行つた。雪量はまち〳〵で、二尺も沈む箇所があるかと思へば、所によつては雪のない場所もある(p. 226)。

ネグロットが三角測量の結果ブロード・ピークは二七・一三二呎となり、エヴェレスト、K²、カンチェンジュンガの二峰、マカルーに次ぐ世界第六位の高山である(p. 229)。

ゴトウィン・オースチン氷河では始めのうちはブロード・ピークにはあまり氣がつかなかつた。といふのはK²の姿が、非常に壓倒的であつたからであらう、進むに從つてK²の姿はだん〳〵はつきりしてきた。壁は思つたほどではないが、惡場もよく見えてきた(p. 229)。K²の直下までくると頂上も近く見え、一萬二千呎もあるやうにはとても思へない。途中落石の心配もなく三方には風除があり、それでしかも朝早くから、夕方

おそくまで陽が當る場所があつたのでそこにテントを張ることにした(p. 231)。ブロード・ピークは谷の向側に眞白に見えてゐる。また南の方は眺望がよくきゝ、ブライド・ピークまで一目に見えてゐる(p. 231)。テントを張り終るや否や公はガイド二名をつれて、下手の氷河の合流點に至り、ついで大した苦勞もなく、奥の瀧を登つて進んだ。クーリィを使つて、もしこの上の方の鞍部にテントを張れたら頂上まで殘りは僅か六千五百呎となるのだが。公はルートの偵察を終つて、午後三時キャンプに歸着した。一方スキス・ガイド四名よりなる他の一隊はK^2の東側斜面を偵察するためゴドウィン・オースチン氷河を登つた。この報告は悲觀的なものであつた。K^2の東側全體の特徴ではあるが、長大な北東稜も非常に急斜面になつてをり、しかも氷で蔽はれ、セラックスの崩壞の危險に曝されてゐるのでこのコースを諦め、一行は氷河から眞直に上り、K^2の雪の多い大きな肩の一端に接續してゐて、キャンプ場から見えてゐる岩稜を偵察したが、これが可能性のある唯一のルートと思はれた(p. 231)。かくK^2眞下にキャンプした日に早くも、周圍三分の二のザッとした偵察を終へたが、樂で安全なルートを發見するには至らず(p. 232)、まだK^2の北斜面は全然偵察が出來なかつた。K^2の北側を望見したヤングハズバンドによれば、北側で登高ルートの發見は殆んど望めないといふことである。

コンコーディアに殘してきた荷物を運ばすためにクーリィ達を歸した(p. 233)　五月二七日までにはキャンプを建設し、長期間の偵察をつゞけうるやうにと一ケ月分の食糧を準備した。テントは平坦な堆石の上に

二列にはり、食糧品等は石垣を作つて圍ひ、その上に防水布を蔽ひかぶせた。かくして第三キャンプはK²偵察の根據地となつた。測量の結果によるとこゝの高さは一六・四九三呎である(p. 233)。

公はK²の南稜を試登することにきめた。この南稜は公が曩に偵察した北西稜よりも長くて、また急峻なことは明白なのであるが、このルートだと第一登行距離が明確であり、第二に斜面が南向きなので太陽が早朝から照りつゞけてゐるといふ長所がある。このことは二萬四千呎以上の高地に登る場合は大いに留意しておくべき事柄である。酷寒は登山者に苦痛を感じさせるのみでなく、重大なる危機を招來することがよくある。

ルートはいよ／＼南稜と決定した、双眼鏡で視ると、南稜には水晶のやうに磨ぎすまされた氷がギラ／＼と輝いてゐる。一行は晴天と風を願つた。太陽と風は氷を融かし、雪を吹き飛ばして、ホールドの多い岩肌を出して呉れるからである。三千五百呎ばかり上方に赤茶けた黄色い岩が尾根から突出してゐる。この岩のところへウィンパー・テントを張つて、必要に應じ、數日間頑張りうるやうにと計畫した。輕い小さいマンマリー・テントは夜風を凌ぐだけで荒天に對しては弱いのでウィンパー・テントを張ることにした。そしてこのキャンプの上方にマンマリー・テントを張り、これを中間キャンプとしてK²の肩に到達しやうと考へた。下方から仰ぎ見たところでは、肩から頂上へは登行不可能と思はれるが、二五・三五四呎の肩へ登るだけでも充分の價値がある。登高に要する物資をとゝのへ、荷物運搬の都合上まづ公一人で登高を敢行し出來るだ

け高い地點まで登る、駄目ならばハイ・キャンプまで引返し、そこで隊員と一諸になつて再擧をはかることとした。好晴の二日間は東風、東北風が吹いてゐた。この二日の間にガイド、ポーター、クーリィ達は必要品を尾根まで運搬し、我々はテント等の整調を行つた。天候は再び惡化し、南西風が吹きつのり、尾根の高所では、アルプスの嚴冬期のやうに風が荒れ狂つてゐた(p. 234)。五月二三日の朝には準備萬端出來上つた。天候はまだ落着いてはゐないが、公はガイド三人、ポーター四人とクーリィ達を伴ひ手廻品を持つて出發した。K^2の南斜面から薙ぎ落ちてゐる氷河を横切り、南稜目指してゴトウィン・オースチン氷河を登つて行つた。氷河を渡つてテント地から五百呎ほど登り、南稜の右側をへつり、齒のやうになつた岩稜の下の日蔭に到達、この高度は一八・二四五呎、先日ガイド達が荷物を置きにきたところで(p. 235)、こゝへウィンパー・テントを二張りうち立てた。少憩して腹拵へをし、荷物を持つて登行を續行した。こゝから少し登つたところで、クーリィ達は、公の命令、ガイド等の懇請をしりぞけ、荷物を拋り出してテントへ下つてしまつた。ガイドとポーターは主稜とその東側の第二稜との間を尙も登り、やがて小さな谷に沿ふて登りつゞけ、テント場から千呎ばかり上にある狹い鞍部に辿りつき、荷物をそこに置いてテントへ下つた。この登行の途中には大して困難な箇所はなかつたが、ところ〴〵落石の危險があり、岩、氷、雪が錯雜してゐた。

五月三一日は豫想外の晴天でしかも靜穩な日であつた。荷は一人二五封度なのでクーリィ達もガイドについて鞍部まで登つた。苦勞しながら荷物を運搬して午後三時に辿りつき、五時にテントへ歸つてきた (p.

237)。一方獨りテントに留つてゐた公はコドウイン・オースチン氷河、ブロード・ピークの北壁を詳しく觀察してゐた。この壁からは物凄い氷崩れが頻々と起り、その大音響は谷間に谺し、こゝまでもひゞき渡つてくるほどである。尾根は當初の豫想よりも遠距離であることが判つたので、翌朝六人のクーリィを第三キャンプへ下し、長期滯在に備ふるため食糧を上げさすことにした。バルティス人のクーリィ達は忠實にその職責を守り、その役目を立派になし遂げた。

翌朝天候はまた崩れだしたが、ガイドやポーター等は身輕にして、素早く鞍部に登り、昨日殘しておいたザイルを利用して谷を登りきつた。これから先は豫想を裏切つて、非常な惡場で、兩側とも切立つてゐて手がゝり足がゝりがちつともなく、ことに一方の側は氷の急斜面が、三千呎も下方のゴドウィン・オースチン氷河に薙ぎこんでゐる。この惡場を注意して徐々に進み、三時間ほどして、公がキャンプを作り度いといつてゐた赤茶けた岩の直下へきたが、この尾根を、荷物を持つて登るには、到る處にザイルを用ひねばならず、非常に困難なことである。結局公はこの方面からする攻擊を打切ることにした。

翌六月二日正午前、公の一行と合同した。天候は惡化し、夕方にはひどい降雪となつた。K^2南稜攻擊中にはいゝ經驗を得た、それはクーリィ達も充分な裝備をしてやれば相當高所のキャンプまで連れて行くことが出來、しかも數日間位は火の氣がなくとも凌ぎ得るといふことである。キャンプに歸りつくとクーリィ達は一團となり、樂しそうに焚火の周りに蹲り、空罐でお茶を沸してゐる(p. 239)糧食補給のためクーリィ頭を

ロドカスへ下した。その間しばらくのうちはクーリィ頭がゐなくて不便であつたが、クーリィ達を圓滑に使用することが出來た。

ベインズ氏は規則正しく、いろ〳〵の食糧を上げてくれた。郵便物も一週間に一度はきまつてとゞけてくれた。

第十四章　サボィ氷河とサボィ峠

K^2南面の偵察攻撃を終えたので今度は西側へ向ふことにした。卽ち西側の谷をコルまで登りつめて、K_2の北側と北西稜を調べてみやうといふのである。こちらの側に南壁よりも樂なルートがあるかも知れないからである。

六月四日ガイド、クーリィ達はキャンプを出發。翌五日にセラ、ネグロット及び私がポーターと共に出發した。第三キャンプから暫くの間ゴドウィン・オースチン氷河を下り、先日隊長が西側を偵察したときのルートを傳つてK_2の南西面の支脈の眞下を廻りながらサヴォイ氷河を進んで行つた(p. 242)。狹い雪の多いネグロット・パスから下りてきてゐる支氷河との合流點の上手に第五キャンプを建設した。このキャンプは第三キャンプより一・六六四呎高い(p. 245)。昨日クーリィ達は軟雪に惱まされ、疲れ果てゝこゝへ午後二時に辿りつき、夜は第三キャンプまで下らねばならなかつたので、どうしてもこれ以上の前進を肯じなかつ

た。昨日からこゝにゐるガイド達はルートの偵察に出かけてゐた。標高一八・一七六呎のこゝでは身體のコンディションは完全であつて、第三キャンプよりもむしろ呼吸は樂に出來た。これは第三キャンプが氷河や岩壁にとり圍まれた穴のやうなところで、空氣の流通がよくないからであらう、終日西風が吹きつゞけ、夕方になると烈風に變つた。寒氣凛烈、夜はF五度まで下つた。

コルに到達する登路偵察のため、ガイド達は强風を衝いて六日の早朝から出かけて行つたが霧につゝまれ、十時に歸つてきた。テントの外は非常に寒く、山々は霧に包まれてゐるので地形調査も何も出來なかつた。陽が高く昇るにつれて太陽の輻射が强くなり、今までの寒さとはうつて變り、實際の氣溫は僅かにF二八度であるのに、輻射氣溫計はF一四二度を示してゐた。この輻射溫度はこの度の遠征中最高のものであつた。尤も過去におけるカラコルム遠征隊報告にはこれ以上のものがある。

一一時に公がクーリィをつれて第三キャンプから上つてきた。到着後すぐにクーリィは歸した(p. 246)。夕方になると、また北西風が吹き出した。空はよく澄みわたり、山々は夕陽に美しく輝いてゐる。なかにもK^2は全山夕陽を浴びて薔薇色に染つた雲にとり圍まれ、尾根には雪龍卷が舞ひ上つてゐる。溫度計は急降下し、風は肌を刺すやうに冷たくなり、堪へ切れなくなつてきたのでテントへ逃げこんだ。强風は終夜テントに吹きつけ、明方にやうやく收まり、七日五時に起床したときは全く止み、氣溫はF五度であつた。公は今日中にコルの尾根まで到達する豫定でガイド三名を伴れて五時半に出發した。我々はポーター四名を連れ

てテントを出て、諸測量や寫眞撮影を行つた(p. 247)。K^2の西壁を觀察したが、雪はところ〴〵にあるが、氷河がかゝらないほど嶮しい。こゝから山頂までは水平距離にして一哩、高距にしては一萬呎近くもあるが、岩の模樣は南側からよりもよく判る(p. 247)。北西稜の終端には岩塔や尖塔がつゝ立つてゐて、その兩側は雪に蔽はれた廣い鞍部になつてをり、公はこゝを目指して登つてゐるのである。K^2の頂上から南西に長い尾根が派出し、その末端には二二・四九〇呎の巨峰を起してゐる。南方には氷河の向ふ側にピラミッド型の鋭い岩の鉾先が現れてゐる。四時間足らずで公の一行はコルの下の圓い底の谷についた。これから氷壁の登攀である。テントに戻つて、望遠鏡でのぞいてゐると、アンザイレンして硬い氷にステップを切りながら登つて行つた。今日は晴れた靜かな日なので、登高にはお誂向である。殆んど一二時間のアルバイトの後、午後五時一五分遂に尾根に登り立つた。コルの右の方で、コルよりも幾分高く、標高は二二・八七〇呎と測定された(p. 248)。こゝは分水嶺になつてゐて、雪疵がはり出してをり、北側は斷崖絶壁で、下の方は見えなくなつてゐる。漸くこゝまで登つて來たのであるが、この方面からの登頂希望も亦捨てねばならなくなつた。この鞍部は一八八七年九月にヤングハズバンド卿がムスター峠に至る途次北の方から眺めてゐる。ヤ卿の地圖によればこの鞍部の北側の谷はオプランク河（Oprang）の枝川サルボ・ラゴ（Sarpo Laggo）に入り、終にはヤルカンド河に注いでゐる。一二哩北からK^2を眺めたヤ卿はその北壁について「すつかり氷に蔽はれてをり、この氷壁は一萬六千呎乃至一萬四千呎にも及んでゐるであらう」と記してゐる。註一　K^2やステアケー

ス・ピークから北方に大きな尾根は出てゐない。北の方の大きな谷はオプランゲの溪谷であらう。その彼方には低い山が連互してをり、大きな氷河は見當らない。

時間が遲いのでコルでゆっくりも出來ず、休憩一五分にして下りはじめた。八時前ベルグシュルンドのところまで下つた時に、ランタンをつけて熱い飲物を持つて迎へにきたポーターに出合ひ、九時半キャンプに歸着した。一行は一萬八千呎乃至二萬呎の高所で一六時間も動いたのに、疲れてもをらず、身體のコンディションが良好なのを證明してゐる。今日のアルバイトは登頂には直接これといふ寄與を齎さなかつたが、附近一帶の地圖作成上に役立ち、今日歩いた氷河をサボィ氷河、コルをサボィ峠と命名した。

翌八日朝、セラ、ネグロットと私は第三キャンプからやつてきたクーリィ五名と一緒に下つた。(p. 249) 途中氷河上で時間を食はれ、日沒ごろ第三キャンプに辿りついた。公は翌九日に第三キャンプへ下つてきた。この日は今度の遠征中一番暖かつた日で、そよ風もなかつた。一一日には新鮮な食料がつき、新手のクーリィも五名きたのでキャンプの移動には大助りである。サボィ氷河のテントを撤收し、第二次行動の準備のため第三キャンプに四日間滯在してゐた。こういふ間の身體のコンディションは却つて悪いもので、頭痛を感じたり、食慾不振、睡眠不足等に陷つた(p. 250)。第三キャンプを建設して以來一六日。その間に下部バルトロ氷河の樣子も大分變つた。また一六日間に好晴の日は三日とはつゞかなかつた。高い頂や尾根の高いところではたえず風が吹きつけてゐる。雪や霙もよく降つた。風が東か北に變ると普通靜穩な天氣になるが、

長持はしなかつた(p. 251)。いつも夕方になると急に寒くなる。あたりは靜寂そのものでつい物思ひに耽り、時としては重苦しい氣持にさへなる。孤獨、愁傷、自然に對し、人力がいかに弱いものであるかをこんなにまでしみ〴〵と感じさゝれたことはなかつた。

註一　Sir F. E. Younghusband, Proc. Roy. Geog. Soc. N. S. X, 1888, p. 785.

第十五章　上部ゴドウィン・オースチン氷河とK^2の東面

引きつゞきK^2の東面とゴドウィン・オースチン氷河の上流を探檢し、これに一五日かゝつた。今度の測量の結果によると、ゴドウィン・オースチン氷河はコンコーディアからウィンディー・キャンプまで延長一二哩半に及びこれが大體二等分されてゐる。下半部は既述の通りで、コンコーディアから北上しK^2の下まで六哩、この間に約八二〇呎登つてゐる(P. 253)。この氷河はK^2の下で北東に曲り、K^2とブロード・ピークとの間は峽谷になつてゐる。表面の堆石はやがてなくなり、六哩半の間に三・九五〇呎も登つてゐる。

ガイド、ポーター及びクーリィからなる第一隊は、六月一二日第三キャンプを出發、ガイド以外の連中はその晩歸つてきた。セラ、ネグロット及び私は翌日、公は殘りの荷物を運ぶクーリィ達を伴つて翌々一四日に出發した。ゴドウィン・オースチン氷河の左岸寄りの尾根の下にテントを張つた。ヂラモンドの一行が第九キャンプを設營してゐたのはこのすぐ上手で、今でもそのときに築かれた石圍ひが殘存してゐる(p. 254)。こ

の邊の地圖にはコンウェーの二〇萬分の一、ヂラモンド、ファンルが獨墺山岳會誌(一九〇四年第二五號)に發表したものがある。ヂラモンド隊は一九〇二年の六月二〇日から七月三一日まで約一ケ月間上部ゴドウィン氷河に頑張つてゐた。その間惡天候つゞきではあつたが、墺人ファンル(Phaml)、ウェセリ(Wessely)は諸所をよく踏査してゐる。七月一五日ファンルが肺を惡くしたので、已むなく踏査を打切つて下山したのである。ブロード・ピークの北峰二六・一七四呎の北側には直徑一哩ばかりの氷河原がある。この氷河はゴドウィン・オースチン氷河に注いでゐるが、この合流點をすぎて少し登ると第六キャンプで、その高度は一八・六〇二呎である。こゝにクーリィ一二名を殘し、他はガイド一名をつけて第三キャンプに歸へし、ロドカスとの連絡に當らせた。この第六キャンプは、南の方ブロード・ピークにつゞく一萬呎にも及ぶ直垂の大氷壁に相對してをり、實に印象的な據點である(p. 255)。この壁はこゝから見ると尖つてゐるブロード・ピークの北峰につゞいてゐる。その左側、丁度稜の前に三頂中の最高峰の圓い頂が突立つてゐる(p. 257)。他の五峰は圓弧を描くやうに連互し、その高度は二三・二二二呎から二〇・九八一呎である。第六キャンプは二〇・九八一呎峯の麓に位してゐる。こゝからのK^2の山容は全く一變し、氷の山となつてゐる。

谷の最奥に聳ゆる高峰は二四・〇七八呎のステァケース・ピークである。こゝから見えるのは山の南西側だが、四千呎にも及ぶ三角型をした岩壁になつてゐる(p. 258)。ステァケースとK^2につゞく尾根との間には氷河がある。この谷は狹くなつてゴドウィン・オースチン氷河に流れ込んでゐる。ステァケース・ピークから

ウィンディ・ギャップへは氷の支脈が階段狀につゞゐてをり、これがゴドウィン・オースチン氷河の最奥點になつてゐる(p. 259)。

隊長はガイド三名をつれてテントの上の稜を登り、三時間後テントから約二千呎上方のコルに到達した。K^2方面は濃霧に包まれてゐたが、運よくコルの附近は晴れてゐたのでK^2の東の方のディティルを調べてきた。コルの上は寒さ嚴しく、風も強くて長く止つてをれなかつた。これから一週間の後、七月二二日にセラがポーターとクーリィを各一人宛つれて寫眞撮影のためこの鞍部に登つた。尙も前進をつゞけ、強風を衝いて約二時間の後二二・三二九呎峰の南東尾根へ到達した。こゝから南方一哩半ばかりのところにガシャブルムの巨峰が聳えてゐる。こゝでガシャブルムの貴重な寫眞を撮り、強風を衝いてコルに辿りついた。このときクーリィは不平一つ言はないでよく頑張つて呉れた。

このときに撮影したセラの寫眞のおかげでヤングハズバンドが一八八九年に僅かに足を踏み入れた外殆んど知られてゐないバルトロ氷河東方地域の概略が判るやうになつた。六月一四日セラ、ネグロットとゝもにウィンディ・ギャブへテントを張りに行つた。我々三人の外にガイド二名、クーリィ一二名よりなり、一行は二隊に別れてアンザイレンした。この日は寒氣烈しく風さへあつた、氷河の左側を登り、ついで左側の急斜面から落ちてくる崩雪を回避して氷河の中央部を進んだ。相憎天候惡くクーリィ達は大變難澁した。我々が停つて一休みするとクーリィ達は寒さにふるへてゐる。ウィンディ・ギャブ近くで、もう前進出來ないと哀

願しだしたが、いろ〳〵と勞つてやつて登行をつゞけさせた。我々の經驗ではバルティス人は脅したり、叱つたりするよりも、親切に、よく言ひきかせてやる方がずつとよいと思つた(P. 264)。實際クーリィの惡意や反抗のため行程が妨げられるといふやうなことは一度もなかつた。コルには好い場所がないので、その直ぐ下の小さいベルグ・シュルンドの附近に第七キャンプを建設した。風は終日吹きつゞけ、テントのすき間からは氷粒が吹きこみ、風が少し小やみになると雪が降りだした。翌一五日も一四日につゞいて惡天候であつたが、望遠寫眞の撮影等を試みた。溫度はF二一度位なのだがこの日の寒さは實に猛烈で、寒くて齒はガタ〳〵し、足はふるへ、手を叩き合せてゐた。天候は一時些とよくなつたが夕方になると却つて惡くなつたのでテントへ逃げこんだ。留守中ガイド引率のもとにクーリィ達が食糧と物資の補給にやつてきた。このコルをヂラモンドはウィンディ・ギャブと命名した。ファンルはグレンツ・ザッテルといつてゐる。これはインダス水系の分水嶺になつてゐるからである。高度は二〇・五五〇呎とし、ヂラモンドは二一・五〇〇呎とするも、我々は二〇・四四九呎といふ數値を得た。陽が落ちると意地惡く天候は好轉してきた。K^2の頂はもう蔭になつてゐる。巨峰の頂からは三千呎にも及ぶとても巨大な雪龍卷が卷き上つてゐる。海拔三萬二千呎乃至三萬三千呎にも及ぶ雪龍卷の頂端がわづかに落陽に照り輝いてゐた。翌日は好晴であつた。コルに駈け上り、霧一つかゝらぬK^2の東面を初めて眺めたが、全く別の山のやうに見える。その山容は巨大、豪壯の極みである。しかし山は恐しい岩、氷の絶壁に取り圍まれ、グロテスクな怪物の貌を呈してをり、隊員が最後の望をかけてゐ

た頼みの網もあへなく絶ち切られてしまつた。公が當初試登した南尾根の側面も見えてゐるが、下から見えてゐるよりもずつと急で、距離も長い(p. 267)。ネグロットやセラはコルで測量寫眞やパノラマ寫眞を撮りテントへ下つた。ウィンディ・ギャプでの仕事は大體終了したので、第六キャンプに下り、ステァケース・ピークの登攀を目論んでゐる公と入れ替ることになつた。歸途は三隊に別れて下つたが、クーリィ達もザイル捌きが大分上手になつてきた(p. 270)。

六月一七日の朝、公はウィンディ・ギャプに登つて行つた。前日に到着してゐたガイド達はその日は第一のテラスへつゞく氷稜のステップ・カットに行つてゐた。折悪しくその夜から雪となり、一八日も降りつゞいたので折角のステップ・カットも無駄になつてしまつた。一九日も天候は定まらなかつたが兎に角出發、雪が少し降り出したので途中で五時間も天候の回復を待つたが好轉する模樣がないので遂に諦めてテントへ引き返した。この日の登高で、二日前に轉落して負傷したブロシュレル(Alessio Brocherel)が身體の不調を訴へたので、ガイド二名を附き添へ第六キャンプへ下らせた。一方第五キャンプでは三日の間我々は何もせずにブラ〳〵してゐた。第三キャンプに殘つてゐた三人のクーリィは郵便物その他を持つて我々のところへやつてきた(p. 271)。一九日の夕方、風もなく大雪が靜かに降り出した。溫度計はF一九度を示す、天候の回復を待つ方が上策と考へ、二〇日正午ごろ公はテントに歸つてきた(p. 272)。

二三日に隊長はウィンディ・ギャプで再びガイド達と一緒になつた。ウィンディ・ギャプにはガイド、ポー

ター等五名ゐたが、見るべき業績もなく、風に阻まれてステアーケース・ピークの第一テラスの程遠からぬところから引き返してきた。しかしこの時の上方偵察では、三日間晴天がつゞけば登頂が可能かも知れないといふ考が出來た。

二四日朝の天候がハッキリしなかつたので公は登高を諦め、ウィンディ・ギャプの東の氷河を下つて見ることにした。然しまた晴れかゝつたので、マンマリー・テント二張、寢袋四、食糧等を持つて大急ぎでステァアケース・ピークの尾根に向ひ、テラスの上手に雪穴を掘つて小さいテントを張つた。公は三人のガイドと共に、このテントに殘り、ガイド二名はウィンディ・ギャップのテントへ下つた。夜中ブロシュレルは咳をしだし、胸苦しくなり、血まで吐いたが、この原因は不明である。翌朝身體の具合が惡いのに一行とともに出かけて行き度がつてゐたが、咳がひどくなつてきたので斷念させた(P 273)。この病氣は原因不詳で、その後は何の變兆もなく、ことに後にチョゴリサ・ザッテルのテントではもつと高い所にゐたが至極健であつた。

公はガイド三名を伴ひ行けるところまで行つてみることにして出かけた。約四時間の後第二テラス直下の廣いクレバスに行手を遮ぎられてしまつた。何とかして渡りきらうといろ〳〵工夫して頑張つてみたが、端の方が融解してゐて危險であり、せまい尾根のことゝて結局どうにもならず全く前進を阻まれてしまつた。陽も西に傾き初めその上一行の中には相當疲勞した者も出たので、また明日やり直すことにし(p. 274)K²の觀察や偵察を終へてテントに歸つた。こゝで第七キャンプから迎へにきたポーター二名と一緒になり、その晩

第七キャンプに下つた。翌日は全員休養し、二七日にはガイド一名ポーター二名が下り、二八日には公も第七キャンプに下つた。

第十六章　K^2の麓からブライド・ピークの麓へ

——上部バルトロ氷河——

K^2の近隣やゴドウィン・オースチン氷河の調査は終つた。公はK^2の南、西、東側の氷河や斜面を詳細に調査し、北側の大絶壁もカメラに收めた。セラやネグロットは悪天候と闘ひ、霧や霰に妨げられながらも、瞬時の晴間をよく利用してK^2附近の壑や山を充分に撮影した(p. 227)。斯くしてK^2の全姿が今や闡明せられその概要、尾根の狀況、壁の傾斜等も判然としてきた。北面、西面は岩が多くゴツ〳〵してゐる。南も岩が稍多いがフィリッピ氷河が斜に走つてゐる。東面は氷にすつかり蔽はれてゐる。K^2は何處から眺めてもピークは一つきりである(p. 278)。ドリュー(F. Drew.)は南西方六二哩の距離から眺め明かに二峰あると記してゐる。註一コンウェエーも双峰だと言つてゐる。ゴドウィン・オースチンは一峰だとハッキリいつてゐるが、註二これが正しいのである。しかし見る場所によつて時に双峰のやうにみえるのは、東側にある大きい肩がピークと誤認されるからである。K^2は見るところによつてその山姿は全く一變し、種々様々の姿を呈する。しかも何れの方面も等しく極めて堅固な防塞を築いて登山者の挑戰を阻止してゐる。數週間に亘つて踏査し、幾

時間も〳〵熟考の結果、公は終にK^2は登頂不可能なりと結論せざるを得なくなつた。これはその高度のためではなく、その位置が大いに關係してゐる。長期間かゝつて前進しやうやくK^2の麓にキャンプを設營するころには天候が悪くなつてしまふ。若し假りにK^2がアルプスに聳えてゐたら、この程度の高度ならば登れないことはなからう。何度も〳〵反復攻擊してゐるうちには相當犧牲者も出るではあらうが、結局登頂されるであらう(P. 279)。

ゴドウィン・オースチン氷河上の一ケ月間は、天候には全く惠まれなかつた。連續三日の晴天がたゞ一度あつたゞけで、風は殆ど常に西及び南西方から吹きつゞけ、高いところへ登れば登るほど、風は强く、かつ冷くなる。一日中空が澄み亘つてゐることは珍らしく、また山には雲がしぢゆうかゝつてゐる。尤もあまりひどい吹雪にはさう會はなかつた。雲や霧は非常に高く二三・〇〇〇呎以上の高所に浮遊してゐるので、我我は殆どいつも雲や霧の下にゐた。

六月にはモンスーンは非常に高いところを吹いてゐる。谷間は靜かであるのにK^2の上方一千呎位のところを雲や霧が吹き流れてゆくのを見た。カシュミルやパンジャブ平原では、モンスーンは七、八月より早くこないといつてゐるが、實際にはそれよりも早くヒマラヤの障壁にぶつかつてゐるのだ。モンスーンについてはいろ〳〵と調べられてゐるが(P. 280)、その成因はとにかくとして、長い間の悪天候は登山者にとつては致命的な妨害である。この時季には時として新雪があり、雪崩の危險性が增加してくる。結局六月にとつて

最大の敵は絶えず吹きつゞいてゐる風なのである。

カラコルム地方にはいつた探檢者は皆我々同樣險惡な天候に祟られてゐる。たゞ一九〇八年に這入つたウァークマンは七、八月の二ケ月間晴れ上つた、暖い日に惠まれてゐる。

K^2に關する仕事は終つたが、これで遠征を打ち切る氣はなかつた。どの山でもよいからせめて最高到達記錄を作つてこの遠征の目的を達成したいと思つた。季節がまだそんなに惡くもなく、ガイドは元氣であり一六、五〇〇呎以上の高所で生活するのも大して苦痛ではなく、全員の身體のコンディションもよく、たゞガイドのA・ブロシュレルが數日間病臥し、そのため身體が弱つてゐる位のことである(p. 281)。つぎにどの山に試登しやうかといふことが問題になつたが、いろ〳〵と考へた揚句にバルトロ氷河の南端に聳ゆるブライド・ピークとゴールデン・スローンが選ばれた。ゴールデン・スローンはコンウェーが既に述べてゐる通り大きい氷河と、かなり急な斜面を持つてゐるが、その高度は二三・五九〇呎で、二年前諸人ルーベンソン及びモンラッド・アースが登つた、カンチェンジュンガのカプルーより四百呎も低い、そこで標高二五・一一〇呎のブライド・ピークに登ることになつた。二三日ステアケース・ピーク第二回登攀のため、公は惡天候を衝いてウィンディー・ギャプへ登つて行つたが、セラは病めるブロシュレルを助けつゝK^2直下のベースへ下り、ネグロットと私も翌日下つたが、氷河は往きに通つたときと大分樣子が變つてゐるのに驚いた(p. 282)。二五日にセラはガイド一名、クーリィ一五名をつれて、第三キャンプを出發し、ゴドウィン・オースチン氷河

の入口に向つた。二七日我々はサヴォイ氷河との合流點まで行つてゴドウィン・オースチン氷河の最後の撮影を行つた。この日クーリィ一四名をガイド一名が指揮して中間キャンプに登らせ、ついでウィンディ・ギャップにあるハイ・キャンプを撤收に登らせた。その翌日の午前中にガイド三名が歸り、午後公がウィンディ・ギャップから下つてきた。この晩はロドカスからきた二三人のクーリィを加え、急に賑かになつた。このクーリィ達をブライド・ピークへの運搬に使役することにした。

二九日、嵐がきたが公はガイド、全クーリィを連れてコンコーディアに向ひ、ガイド二名と我々だけがキャンプに殘つてゐた(p. 284)。一〇日には大雪の中で第三キャンプを撤收して下り始めた。ブロシュレルにはクーリィ四名が附き添ふた。この日降雪は激しかつた。下る途中で一ケ月も暮した泊場を懐しく振り返つて見たがたゞ雪が靜かに降つてゐるばかりであつた。病人のブロシュレルも一緒なのでゴドウイン・オースチン氷河をゆっくり下り、コンコーディアにほど近いところにテントを張つた(p. 286)。そのころ雪は小やみとなり、風はいつものやうに南西から吹いてきた。二六日にセラはバルトロとゴドウィン・オースチン氷河との間の岩角を登り、一七・二三九呎の肩に達し、パノラマ寫眞を撮影した。翌日もセラはガシャブルムの西尾根一七・九一七呎の地點に達しパノラマ寫眞を寫した(p. 287)。

七月一日、公、セラ、ガイド及び全クーリィは第九キャンプ出發、ネグロットと私は二人のガイドと共にキャンプにゐ殘り、クーリィの歸つてくるのを待つことゝなつた。五日間もテントにゐたが、その間は何か

と忙しかつた。ブロシュレルはだん〳〵よくなり、元氣になつてきた(p. 288)。ロドカスからやつてきたクーリィ達全部を收容しうるだけのテントがなかつたので、石で壁を作つたり等してオープン・エア・キャンプをやつた(p. 290)、七月六日上部バルトロ氷河に向つて出發、ブライド・ピークの下へ一五日分の食糧を運び、殘部はコンコーディアに置きブロシュレルがそれを看ることゝなつた。ブロシュレルはもう全くよくなつたが、高山地への登攀はまだ無理なのでクーリィ達がロドカスに行くときに一緒に下らせた。前日に雪が降りつゞいたので、新雪のためにいろ〳〵と難儀をした(p. 291)。この夜はコンコーディアとゴールデン・スローンの麓との略眞中あたりにテントをはることにした。この夕方、ロドカスから郵便物や食糧を持つてクーリィ五名が來泊した。

七日は昨日同樣の曇天、ゴールデン・スローンの麓のテント場へ登つて行つた、足下の石のほかは全然眺望がきかなかつた(p. 293)。ブライド・ピーク東側氷河とバルトロ氷河との合流點から少し上つたところ一六・六三七呎の高所に第一一キャンプがあり、テントと岩壁との間には小さな池がある。先年コンウェーがゴールデン・スローンを攻擊したときにキャンプしたところもこの近くである。テントに辿りついたときには誰もゐなかつたが一時間ほどするとセラやガイド、クーリィ達がテントの前の氷河を下つてきた。こゝで公の新計畫はチョゴリサ鞍部に登るものであることを聞いた(p. 294)。ネグロットと私はこの第一一キャンプに一三日間滯在してゐた。セラは一一日まで一緒にゐたが、ロドカスに下るクーリィ達と途中まで一緒に下

りヴィネ氷河とバルトロ氷河との合流地點近くで寫眞を撮ることになつた(p. 295)。

一三日に攻擊隊から便りがあつた。ガイド三名がクーリィを伴つて食糧補給のため下つてきて、公からの手紙を齎した。それには第一回の試登は惡天候に阻まれたがなほ攻擊を續行すると書いてあつた (p. 296)。天候は七月にはいつてから六月とは大分違つてきた。風が少くなり、溫度は昇つてきたが雪がよく降りだし(p. 301)、七月一七日には雪が不愉快な霧雨になり、翌日にはそれが激しい雨となつた。これが一六・六三七呎の高所でのことである。

數多の旅行者によつて齎らされてゐるデーターから見て、カラコルム地方の雪線は實に不確實なものである(p. 302)。

註一 F. Drew, Jummoo and Kashmir. 2nd ed. London 1877. P370

註二 Geog. Jour. 3, 1894, pp 431 & 527,

第十七章　ブライド・ピーク

七月一日公はコンコーディア・キャンプを出發、ゴールデン・スローンの麓に至り、そこへベース・キャンプを設置してブライド・ピークの攻擊準備を初めた。K°方面から觀ると、北側の雪の大斜面が容易なルートのやうに思はれるが、近くから見ると、案に相違して非常に困難であることが判つたので (p. 303)、チョゴリ

サ鞍部にテントを張つて東尾根から登る方法を考へてみた。七月三日晴、上に行かないクーリィをロドカヌに送り返し、ハイキャンプ用のウィンパー・テント、マンマリー テント食糧等を携へたクーリィを連れてバルトロ氷河のテントを出發した(p. 304)。初めは二日もかゝれば鞍部に到達出來るだらうと思つてゐたが、實際やつてみると意外の惡場に行き惱みとうたう八日もかゝつてしまつた(p. 305)。ベース・キャンプからの物資の運搬はガイドが惡場をリードしながら登つたが、深雪とクレバスに阻まれて難澁をきわめ、結局ベース・キャンプの上方一・三五〇呎の地點にテントを張つた(p. 306)(第一二キャンプ)。四日、五日、深雪を冒し縱横につゞくクレバスをさけつゝ懸命に前進これ努めたが一向に進捗せず、五日の夜、六日と大雪が降りつづいたので、公は下のテントに、セラ達は上方のテントに閉ぢこめられてしまつた。七日公はガイド三名、クーリィ四名をしてセラ達の救出に赴かしめ、やうやく一同第一二キャンプに集結することが出來た。五日間もかゝつてまだベース・キャンプから僅かに一・三〇〇呎しか上つてゐない有樣である。クレバスに取り圍まれ、雪に埋もれてゐる小さなウィンパー・テント、マンマリー・テントに一同もぐりこんだ(p. 309)。八日は荒天であつたが九日には天候回復したので再び登り初め、異つたルートを見つけた。この日は海拔一九・〇九八呎卽ちチョゴリサ鞍部の下一・六五〇呎の地點にテントを張つた。七月一〇日卽ちベース・キャンプ(第一一キャンプ)を出發して八日目にチョゴリサ鞍部に達し、あたりを吹きまくる强風の風蔭になつてゐるところ、二〇・七八四呎の地點にテントを張つた。クーリィが寒さのために參つてしまつたのですぐに下のキャンプに下

すことにしたが、クーリィ達は實によくやつて呉れた(p. 310)。チョゴリサ鞍部はブライド・ピークの東峰と氷の圓頂の二一・六五二呎峰との間に位置してゐる。この氷の圓頂を越ゆればゴールデン・スローンの下コングス・サッドル(Kondus Saddle 20669ft.)で、チョゴリサ鞍部よりも少し低い。天候は良くテントの位置は隨分眺望のよい所で、ブロード・ピークの三峰、ガシェルブルムの頂四つがよく見える。七月一一日も引きつゞき晴天、チョゴリサから頂上までは四・三二六呎で、その高距はアルプスならば一日で到達出來るほどだが、深雪と稀薄な空氣のため、中間キャンプを置くことになつた(p. 311)。一行七名は肩の第一四キャンプを早朝に出發し、急な南斜面を登つた。相變らず深雪に惱まされ、午前一一時早くも第一五キャンプをはりポーター三名のみ下つた。こゝの高さは二一・六七三呎で頂上まで僅かに三・四三七呎を殘すのみである。明日好晴であれば勝利はもう我々のものである。少し暖かいが靜穩であるからこの分ならば明日もお天氣らしい。

一二日、あまりよいお天氣ではなく霧がかゝつてゐる。溫度も高く、雪は朝から惡かつた。五時出發、ガイドは交代で先頭に立ちベルグシュルンドには二ケ所とも丈夫な雪橋があつたので難なく通過することが出來た。霧は濃くなり、風さへ加はつてきたが、そんなに困るほどでもなかつた。二三・〇〇〇呎附近の地點でクランポンをつけ、リッヂを登り初めた。雪崩の危險に曝されつゝ急斜面を登つて行つた。霧がだん〳〵ふかくなり、天候が惡化し(p. 312)、危險が刻々に迫つてくるので、二・三四五八呎の地點から引き返したが、

別に呼吸困難は感じなかつた。そのころから天候は益々惡くなり、テントに着いたころには雪が降りだした。その夜は雪が小やみなく、靜かに降りつゞいた。こゝで四日間惡天候のために閉ぢこめられた(p.313)。即ち一三日から一六日までの間常に南西風が吹き雪もよく降つた。空はしぢゆう灰色の雲に蔽はれてゐた。今までにカラコルムに這入つた人々がいふやうに荒天のときでも雷鳴を聞かないし、閃光も見なかつた(p.315)。ストラケー(R. Strachey)は荒天時の電氣現象はクマオン、ガルワルの北斜面では非常に稀なことであり、チベット高原では稀でないといつてゐる。カラコルム地方で嵐の際に電氣現象を伴はない理由はいろいろと說明されてゐるが何れも不滿足なものである。

高所で頑張つてゐた者達の健康狀態は申し分なかつた。ウォークマン博士は二萬呎以上では眠れないといつてゐるが、公等四名は小さなマンメリー・テントの中で二二・四八三呎の高所で熟睡出來たさうである。また高山病の前兆ともいふべき頭痛などは全然なく、しかも脈搏もノルマルであつたさうだ。たゞ食慾の減退ばかりはどうも仕方がなかつた(p.316)。

七月一八日は午前五時半出發、一時間たらずで肩の上二萬三千呎の地點に辿りついた。この日も霧が深く好天氣とはいへない。一五分間毎に小憩しつゝ、堅實に、徐々に四時間半登りつゞけ、一一時前に二四・二七八呎に達し、こゝで休憩してなほも登りつゞけた(p.318)。二萬四千六百呎まで登つたとき、氣溫はF二一度であつた。霧が深くしかもセラックスが崩落したり危險なのでこゝで二時間ばかりも待つた。午後三時半に

なつたが天候は好轉しないので遂に意を決して下山することゝなり、危險な長い下降が日沒までつゞいた。二萬四千六百呎の地點に辿りついたとき一同の身體の狀態は上々で、脈搏も百を僅かに越してゐたゞけであるから、もし晴天に惠まれてゐたならば、遲くもあと三時間位で二五・一一〇呎の頂に達し得たことゝ思はれる。この日チョゴリサ鞍部に安着したのは八時半であつたから、二二・四八三呎と二四・六〇〇呎との登降に一一時間を要したことになる(p. 319)。

今度到達した二萬四千六百呎といふ高度は、先にグラハムがカブルーで作つた在來の最高記錄たる二萬三千九百呎を七百呎も更新したものである。

七月二〇日公はベース・キャンプに安着し、いよ〳〵歸り仕度にとりかゝつた(p. 324)。

第十八章　スリナガルへ

七月二〇日歸途についた日は霧が降つてゐた。ロドカスでは美しい花をつけた草が一面に咲き亂れてゐた。ベインズが嬉しさうに一同を迎へて呉れ、先に下つてゐたガイドのブロシュレルはもう健康を回復して元氣になつてゐた。二三日は歸り仕度に忙しく、二四日にロドカスを發つてパイユまで下つた。二八日アスコリーを出發して旅行をつゞけ、今度はデオサイ高原を横斷し、八月一一日スリナガルに一同元氣で到着した。

ウィリアム　マァティン　コンウェイ傳

Sir William Martin Conway　Lord Conway of Allington (1856–1937)

高橋文太郎

一

マァティン　コンウェイ卿、後のロードコンウェイは、北米ロチェスター(Rochester)に於いて一八五六年四月十二日に生れた。父はウィリアム　コンウェイ牧師、母はロチェスターの醫師アダム　マァティンの娘エリィザベスであつた。然もその父コンウェイ牧師は、ウェストミンスターの僧會員に屬してゐた。こゝにいふ登山家コンウェイ氏は長ずるに及び劍橋大學レプトン並にトリィニティ、カレッヂに學び、一八七八年には同大學歴史科の優等及第者として第三等級を登錄されてゐる。一八八〇年に劍橋學園を離れてから、歐洲に於ける重要な圖書館を訪れ同時に著書のための材料蒐集の旅に或る期間を費した。この際の著作はヘンリィ　ブラッドショウ Henry Bradshaw の慫慂によつて書かれ「十五世紀ネザァランドの木彫師」と題されるもので、一八八四年の出版になつて居る。この年にコンウェイ氏は、北米メーン州アウガスタのチャール

スラムバァドの娘なるカトリィナ Katrina と恰度その二十八歳の時に結婚してゐる。

一八八二年から一八八五年の間、大學巡回講演の美術史講師の職にあり、その後三箇年はリヴァプールの大學カレッヂに於いて美術の教職に在つた。リヴァプールに於いては、美術發展のために、その協會設立に就いて援助をなし、傍ら 'The Gallery of Art of the Liverpool Royal Institution' なる述作を公にした。尙この他當時に於ける美術史に關する氏の研索は幾つかの著述となつて表はされ、其については終りに纒めて記したい。

又氏は、一八八九年に於いて、埃及、シィリア、希臘、土耳其、小亞細亞、アルヂェリア、南部西班牙の各地方を九箇月に亘つて視察旅行を爲してゐるが、一八九一年には「古代社會に於ける美術の黎明」と題する一書を著し、之はこれらの旅行の結果であらうと見られて居る。

一八九五年並に一八九八年—一八九九年には、著述家協會 The Incorporated Society of Authors の委員會々長を務め、次で一九〇一年から一九〇四年まで、劔橋大學の教授として美術を擔當した。この間、氏の專門に關する書數種を公にしてゐる。一九〇五年にはメイドストン近くのアリントン城を購ひ、一年後にはそれの復興に著手して居り、爾來この復古改設は氏の主なる關心事の一つとなつた。この時代に屬する氏の興味は、スピッツベルゲン古代史の研究にも向けられ、之に關する論題については、英國地理學協會の機關誌 The Geographical Journal 1899—1903 に多くの報告と論說とを寄與した。或は、一九〇二年版の大英百科

全書にも、當地方に關する講述を載せてゐる。

降つて世界大戰當時には、政治家として氏の一面を認識せしめる時局に關する著書「平和と戰爭に於ける民衆」を世に問ふてゐる。併し戰後は再び安らかな旅路に上り、專門とする參考品の蒐集に力を注いだのである。而してこれら旅行の產物として「パレスティナ及びモロッコ」が上梓され、又從來と聊かその目的を異にした一九二四年の旅からは「ソヴィエットにおける美術の富」なる著述が齎され、これには實に優れた報告が載せられたといはる。

斯のやうな研究旅行と著述の傍に在つて、氏は尙多くの文化機關に係る重職に任じて居つた。

卽ち、聯合全英大學の代表委員假稱 a Unionist by the Combined English Universities（一九一八年）、ウァレイス　コレクション保管委員 Trustee of the Wallace Collection（一九一六—一九二四年）、帝國戰役博物館理事 Director-General of the Imperial War Museum（一九一七年）、國立肖像陳列館評議員 Trustee of the National Portrait Gallery（一九二二年）、ケント考古學會々長 President of the Kent Archaeological Society（一九二三年）、好古家協會副會長 V.P. of the Society of Antiquaries（一九一八年）、又氏が極めて密接な關係をもつてゐた英國地理學協會 The Royal Geographical Society には一八九三年入會、同時に評議員 Council に推され、同役員を一九〇七—一九〇八、一九一四—一九一七、一九二〇—一九二四年の各期間歷任、副會長として一九一八—一九二〇年の間その職に在つた。その功勞に據つて設立者賞牌 The Founders

Medal を一九〇五年に受領して居る。或は當時、年代を詳にしないが、國立博物館並に同美術館の委員會 The Royal Commission の重任に在つたこともある。

或は一方において氏の登山團體關係の閲歴はどうで有つたかと云ふに、一八七六年、卽ち氏の劔橋大學々生の當時既に英國山岳會 The Alpine Club の會員に選ばれる名譽を贏ち得てゐる。後にも記すやうに、この年は氏がエンガディーン地方の山にあつて、登山技術などの修得に只管身を傾けた時代であつた。その後に到つて、各主要山岳會（Yorkshire Ramblers' Club, 1896; Appalachian Mountain Club, 1896; Club Alpin Français, 1898）の名譽會員に推され、一九〇八—一九〇九年にはアルパイン スキー クラブ Alpine Ski Club の會長に選ばれて居る。尙又、一九〇二—一九〇五年には、英國山岳會々長の重職にあつたといふことを特筆して置きたい。

上述の如き氏の社會的な經歴は、社會人としてもその交際の範圍が汎く、又氏の學識の豊富にして且つ普遍的なることを物語る良き證左たることを失はない。私共は之等の閲歴だけから觀るならば、氏が一方に於いて異色ある登山家であり、同時にアルプス時代から大陸遠征時代へと歐洲登山界の趨勢が移りつゝあつた初期において、優れた探檢家としての業績も併せ殘してゐることに、さう容易に思ひ及ばないのであるが、氏の著「一登山家の自叙傳」The Autobiography of a Mountain Climber などに盛られた其の自然に對する憧憬、山岳の自然美に對する審美的な鑑賞眼とそれへの追求、その他、氏の生れ乍らの性向に關する叙述に據

つて、山への獻身はその最も自然的なる氏個人の純情の發露であり、これに伴ひ起る自然探究への行動であることが判る。

こゝで私は遲蒔きながら、八十一歳の高齡をもつて、數多の業蹟と山への思索に輝くその全生涯の帳りを降した、本年(一九三七)に於ける氏の逝去について記さねばならない。之に關して氏が如何なる場所でどんな風にその永い探檢登山家としての生涯を閉ぢたかを、現在私に知らせて呉れる材料の尠いことを言はねばならぬが、幸ひ生前の氏と極めて關係の深かつた英國地理學協會の一九三七年七月發行「地理學雜誌」には氏の逝去に際しての略傳(オビチユアリイ)を載せてゐるので、若干をそれに據り述べて置きたい。

氏の稱號として、一九二八年版A・L・マムによる「英國山岳會員登錄簿」には、一八七七年五月當時に於ける氏の履歷として載錄されたものに尙、'Sir' が冠せられて居るが、この方には既に 'Lord' が記されて居る。而して氏の如き最も卓越した會員の一人を失つたことが、特にこの協會に依つて惜しまれて居る。氏の學識の汎さが普遍的であつたが爲めに、人との交游關係に於いても、氏の性格の著しい魅力とか心性の豐富であつたことが認められて居る。氏は又、探檢家として一般には知られて居たが、併し美術 Art 古代風習 Antiquities 民族學 Ethnology についても造詣深く、議會政治の實際方面、美術品並に風致の保存事業などに就いても、識見實行共に極めて汎い限度にまで關心をもつことが出來た。特に又「美」とか「ロマンティシズム」の姿は、臨終の際まで氏の心に强く訴へられるものであつた。そして死の瀨戸際まで、諧謔的な氣分

をもち、それが氏をして常に微笑を浮ばさしめ且つ同時に若々しい心をもたしめて居たのであつたといふ。

二

こゝには特に氏の業蹟として永く記憶されてよい登山及び探檢旅行の主なるものについて、むしろ輪廓だけを述べて見たい。一口に云ふならば、コンウエイ氏は氏とも交游のあつたA・F・マムマリィの如く眞正面から山に擊ちつかつて行つた山への鬪士と云ふよりも、より多く山を探檢した山岳人といへる。この點に於いて、氏は未だ知られない地方の山への放浪的山旅家であり、いはばロマンティストであつた。併し山への生理的な行爲の享しみを逐ふ許りでなしに、あらゆる部面からそれを全面的に把握しやうとする意企をもつた探檢家、山の味解者であつた。而して氏をして單なるロマンティシズムに陷らしめなかつたのは、氏がもつ科學的學識に據る所大なるものがあつたらうと思ふ。氏がもつた偉大な岳友の一人マムマリィに關する氏の登行批判は微細を盡してゐるが、後述することとする。氏の登山行爲、山への認識方向に關聯してD・W・フレッシュフィールドと氏はよく並び稱揚されるが、前掲「地理學雜誌」の記者は矢張り氏の登山に關して次の如く述べて居る。

フレッシュフィールドがコーカサスに對してその業蹟を殘したことに、コンウェイのヒマラヤに對する其れは比較される。一八九二年に於けるコンウェイ氏のカラコラムへの遠征、それはヒスパァとバルトロ

Hispar, Baltoro 地方の測量を伴つたものであり、特に二萬三千呎の高所に達して永い間一つの新記録とされたパイオニィア　ピークへの登攀が爲されたこと、就中この山行の著作「カラコラム　ヒマラヤにおける登山と探檢」Climbing and Exploration in the Karakoram Himalayas にA・D・マコーミックの手になる寫生畫が數多挿入されたことなどは、當時登山界へ向つて、一つの新しい方向を示したものと云ひ得よう。而して氏の山地測量は、細目に於いては非難されたが、之は地方の如何なるを問はずその最初の地圖を作る場合に多くの旅行者が臆面もなく敢てすると云つた一般の避け難い傾向と解さねばなるまい。然も氏のものは、亞細亞高地からの廣大なスケールに亙る最初の氷河測量であるから、尙更、その先驅者的な仕事として多少の缺點は許さるべきである。これより二年後の一八九四年にはC・G・ブルースがそのヒマラヤ行（コンウェイと同行の）に連れたグルカ兵四名の中から二名を選び同伴して、氏はアルプスに入り永い期間を歩いたが、この記錄は「アルプス踏破記」The Alps from End to End と名付けて著はされた。この書の內容は、既にアルプスは登り盡されたと語りつゝあつた若い當時の山岳人たちによい刺戟となり或は一つの啓示を獨したとも云へる。之は氏がどんな細かい峰や峠の部分にも常に新しい分野を求めて歩いた丹念さと執拗な放射主義によらない一種のロマンティシズムの然らしむる點で、それがまた新たなるものを示したことに據るのであらう。アルパイン　ヂャーナルに掲載された氏の好ましい論述である‘Centrists and Eccentrists’は同じやうな效果を生み、當時の登山思想並にその實踐に對して貴重な敎導の割役をもつた。一八九六—七年の間二

同に亙つて氏はガーウッド E. J. Garwood と共にスピッツベルゲン探檢行をなして居り、次の一八九八年には恐らく氏の生涯に於いて最も成功を收めたといへる登山を兼ねた遠征を行ひ、それは南米ボリヴィアのアンデス Bolivian Andes に於いてソラタ Sorata とイリマニ Illimani に登つて居ることである。それから此行の際にアンデスを南に到りアコンカグア Aconcagua 登山を行つてゐる。そしてこの後サルミエント Sarmiento (Tierra del Fuego) を部分的に登つた。而して一つの記錄(レコード)をも殘さなかつたと言ふことが出來るやうに、現實にその山の頂點を踏み占めることを寧ろ控へるといつた態度を採るのが、コンウェイ氏の山行の特性であつた。最も苦心を要した登攀の後と雖も、彼は眼の先に迫つてゐる山の頂點の方へ彼の頭を傾けるが、しかし彼の脚をそこに置かうとするのを欲しなかつたであらう、と云ふ樣な一つの比喩が彼の場合は成り立ち且つそれについて一種の興奮に唆られた彼の微笑が見られる氣がする。

こゝに「地理學雜誌」の記者T・G・Lも述べて居る如く、コンウェイ氏の探檢登山として最も成功を收めたものの一つは、ボリヴィアのアンデス山脈に於ける未踏峰への初登頂であつたが、當時に於ける氏の遠征は現今のヒマラヤ其の他への幾つかのエクスペディションが現はすやうなる、その組織と方法と良きティームワークによる行動とを持つて居たとは見られない。これは時代的に見られる差異であつて、氏の探檢行は早期遠征時代とも名付けられる種類に尙屬してゐやう。隊員の數なども大抵の場合、尠かつた。そこには尙、何かアルプス時代の「山の英雄」といつた風な俤を彷彿させるものもあつたやうに見え、同時に、氏の抱懷し

た山への放浪精神の現はれなるものが、如實に働いてゐたやうに思ふ。この傾向は氏のためには、却て自然的な動向として受け入れられ、こゝにロマン派の雄として、その面目躍如たるものが見られるのである。從つて、氏の登攀からは、ウィムパー、マムマリィに見られるやうな純然たる山岳人としての切實なる山への闘爭心の燃えさかりは見られなかつた。氏の場合、この種の岩壁へのアクティヴなそして放射狀登攀の行爲と精神を求めれば吾々は明らかに失望するのであるが、氏の環境、性向のもつ條件並にその當時のアルプスから離れて他の遠い新しい地域への探檢行なる萠芽に想ひ及べば、それが却て氏の登山の內容又はその山岳觀ともいふべきものを普遍的にし且つその持つスケールを幾分でも大きくして居るやうに思はれる。

三

前章では概括的に氏の登山及び探檢に觸れたものの、多少の私見の他は、氏長逝後の刊行物による側面觀に過ぎないとも云へる。これからは其等の第三者側からの觀察批評を補ふために、主として氏の自敍傳記に依つて、ゆつくりとその登山並に探檢の形式、內容、氏自身の登山觀、その岳友との交游關係などについて述べて見たい。

氏も亦、他の多くの登山家の爲した如く、大きい山への登攀を敢行する前提としての技術の練磨とか幾シーズンかの山間においての準備的經驗といふ正統的な經過を經てゐることは云ふ迄もない。氏のこの期間も

その大部分は劍橋の學生であつたのであるが、斯ういふ時期を過ぎると、氏獨自の山岳觀なり登山觀なりが自づと生れて來て、氏に在つては前述のやうな各條件によつて、當然ロマンティシィズムの方へ向つて進んでゐる。氏の場合は、生れ故郷である英國山地の岩とか低い歴史のある山で、其の少年時の自然に對する憧憬と營みが始められて居る。氏自ら言ふ岩登りの悦びの最初の經驗は、トード　ロック Toad Rock などで獲られて居た。北部山地に於けるスノゥドン Snowdon といふ山は、故C・E・マシュウズも極めて好んで登つたといふが、コンウェイ氏はこの山に登りそれから山好きとなる將來の機緣を得たとさへ言つてゐる。その後、父などと共に海を渡つてアルプスの山村ツィムマーワルトなどに入り雪の峰々の姿に接して、愈々山と離れ難い因緣が結ばれて居る。氏は又この當時既に天文學などに尠からぬ興味をもち、ツィムマーワルトの空にその小さい望遠鏡を覗いて、英國では解かれなかつた幾つかの星を探求した。又、クレヴァスをもつた本當の氷河に始めて登り得て、雪線の上にある自分を見出して悦んだのは、フルカ峠を登りティーフェン氷河の露頭に達して居た時であつた。或は矢張りこの時期にあつて、モン　ブラン山嶺の全眺をその近くからのぞみ、この高山脈を一眸に收め得たパノラマは、氏の心に深い魅惑を與へた。斯くして、この最初のアルプス山間の放浪六週間は、山に對する氏の熱望を決定せしめ同時に山への愛好心を植ゑつけてしまつた。そして、氏をして「この世の美といふものに私は始めて眼醒めた。私の興味の限界線は最早英國にはない。私は放浪のロマンスを見出したのである」と言はしめてゐる。

第二回目のアルプス行は一八七五年に實現して居り、ティロール地方のステルツィング Sterzing を根據地としてゐる。當地は登山の中心地とは云へないが、この地から一日の旅で行かれる山々が多かつた。又この附近の良い地圖もなく、山案内者もなかつた事が却て氏の爲めに仕合せなこととなり、地方的なトポグラフィーに興味を起す誘因となつた。當地には勇敢なる羚羊獵師が居つて、その遊獵に關する範圍の地域については知つて居たが、山登りのためのルートなど無頓着であつた。一つの氷斧もなく、これを使用する術も知らないと云ふのが、この附近二十哩に於ける狀態であつた。併しコンウェイ氏はこの間にあつても山登りへの情熱に驅られ、「若し吾々に讀書會(劔橋大學生の)の仕事がなかつたならば、雪の中へもつと入り込めるのだつた。從つて、週末休暇をうまく捉へて出るより仕方がなかつたが、生憎その時は屢々雨に祟られた。ツェルマットでは、ウィムパーの書物'Whymper's Scrambles'にある段階の現代登山技術に關する觀念の收得に夢中になつたが、このステルツィングでは却て、山案内者も地圖も傳統も、知られたルートもないといつた中世期の狀態に逆戻りさせられてしまつた」と述べてゐる。

此の次に來たシーズンは、前にも少し記したが、一八七六年のエンガディーンに於ける其れである。このシーズンは氏の登山にあつて技術方面の修得に最も力を入れた時期であつた。「氷斧(アックス)と登山綱(ロープ)を本當に用意して山へ向つた最初のシーズンであり、之以來この氷斧は私の山登りが終るまで持ち續けた私の忠實なる友となつた、勿論、正確に云へば、時にその氷斧の頭や柄や石突は取換へられたとしても」と氏は述べ又「技術

的に私は氷斧と登山綱を如何にして使用するかを修得し始めた。私はステップの多くを—それが必要、不必要のものを問はず—切り、只獨り或はエキスパートに從つて、その露頭からスノー フィールドまで多くの氷河を渉り歩いた」と言つてゐる。又こゝで、氏はあらゆる異つたキヤラクター（例へば Steep rocks, narrow snow arêtes, ice-slopes, avalanche and snow-slopes, couloirs, séracs）についての經驗を獲て居り、各種の山とか氷河の代表型にも接したので、以前に書物によつて許り讀み知つたものの名稱とか實體が（例へば bergschrunds, crevasses, ice-falls, moulins, glacier-tables, moraines）氏の前の現實の經驗として現はされたのであつた。

次の時期は氏にとつてツェルマット時代とも名付けられるもので、一八七七年に彼の古い學友であり山友達としても最も親しかつたスクリィヴン George Scriven を同行して、このツェルマットを訪れてから、後も五シーズンを尙當地方に入つてゐる。その翌一八七八年のシーズンに於ける經驗は氏も言ふ如く、二つの結果を得た。氏にとつて、山の地形誌と歴史に就ての興味を確かなものとし又今迄よりも深くすることが出來たし、或は新しいエクスペディションへの執着を强めることが出來た。しかし、一八七九年は、寧ろライブラリィ ワークに費された。氏はこの圖書館などに於いての文庫作業についても特に意を注いだ人として尊敬される。此の年が特に登山の歴史等の研索に充てられたと云ふのではないが、平生に於ても氏は自分達の行かうとする山や地方に關して從來の登行史とか地理的な研究を前以て行ふのが常であつたらしい。だか

ら氏にとつては、この文庫作業はそのフィールド　ワークといはれる野外の調査作業と關聯して最も有意義であつた筈である。一八八〇年の夏山季節には當地方に於いて尙不詳であつた登行記錄が氏の實地踏査によつて明らかになり、氏の登山案內書なる'The Zermatt Pocket-book'は愈々上梓の準備が成つて、翌一八八一年には遂に發行された。當時、W・A・B・クーリッヂは牛津大學の學生でありアルパイン　ヂャーナルの編輯(一八八二年から)に關係して居つたが、コンウェイとも親交があり、氏はこの著作その他山の智識についてクーリッヂに負ふ所が多かつた。當時既にクーリッヂの私設山岳圖書館ともいふべき山岳書の蒐集は注目すべきもので、氏も之を其後において完成された私藏における最も優れた存在として、その價値を認めてゐる。又、クーリッヂのアルプスに關する全面的な智識は自分より遙かに汎くあり、自分の知らない伊太利語を知つて居たので之にも負ふ所が大きかつたことを氏は率直に記してゐる。そして、クーリッヂが死ぬ迄、この兩人の交游は續けられた。

氏のこの當時の所感として、特にツェルマット山間地の住民生活の古風なる習俗を理解する前、自分は永い間單なる登行者として過したと述べ、卽ち幾シーズンかの後始めて當地方の山間住民の生活に關しても良解することが出來たのであつた。而して、この種の山間住民の移り住んだ歷史とか人種の系統とか或は古習俗に對して理解をもつことが出來るやうになると、山岳・溪谷の風景といふものに、今迄に氣の付かなかつた一つの新しい意義が見出せるのであることを、そして連綿として過ぎ去つた幾代かの人々についての回想

とか活動或は記念的な營爲などが織り交つてその土地に含まれてゐるのを知るとき、その風景の美しさがその意味に於ては認められるのであることを、氏は述べてゐる。氏はアルプスに於いて過した幾シーズンかを地形、地理、氷河、植物その他の自然科學的な研索に費したが、これらに對して他に民間事象とか地方史の研究を加へることの必要を次第に望んできた。こゝに氏が山自體に關する自然科學方面に對してと同樣に、他の一方に於ける人間が山に對してもつ文化史的な部面への觀察にも注目とその必要を感じて居つたことが知れる。氏の浩翰な著作である「アルプス」にも、山間に於ける人間の生活に關する興味への追求、山間に於ける人類史への探索とその追慕に並々ならぬ心を寄せて說いてゐる一章を見るのである。古代風習 Antiquities とか民俗 Folklore についての關心は英國に於いて古く注意されたことを聽くが、流石に氏の如き人にしてこれへの興味を感じて居つたのも尤もなることかと頷かれる。併し乍ら强ひて難を云へば、山に關する假令ひ第二次的な關心としても、氏にあつては餘りにその方面が多種に過ぎて居た嫌ひが無いでもない。しかし、風景美鑑賞の要素に人間生活に關するものを一つ加へてゐたのは、氏のこの方面の觀察眼を特色づけるものと云ひ得る。

一八八四年の夏に於ける氏の山行は伊太利アルプスに向けられ、この後三シーズンが特にレポンティンアルプス Lepontine Alps に費された。こゝで氏は再び雪の寶庫に還り、高所に於ける山旅の享しみを新たにした。そこで今までのツェルマットとは自然に緣遠くなつて其後も其處を訪れない譯はなかつたが氏の登

山の根據地では既になかつた。レポンティンの山は、氏の親しき岳友クーリッヂと共によく歩かれ、時にこの兩人の間には例へばモンテ　レオーネ Monte Leone への登行の際などに、恐らく親しきに慣れた爲めの意見の喰ひ違ひであらうが、そんな小さい悶着の起つたこともある。卽ちクーリッヂは今迄歩かれてゐる古いルート、コンウェイは全く新しいルートによつて登らうとした事による意見の相違であつた。併し一八九〇年には再びこの兩雄はレポンティン地方に於いて相會して居り、ワーゼンホルン Wasenhorn に行を共にしてゐる。その麓なるヴェグリア　アルプ Veglia Alp の瑣やかな古びた山小屋風な宿屋に着いて三日間といふもの、雪雨に鎖ぢ込められてしまつたが、このとき二人はレポンティン　アルプスに關する「登山案内」の下拵へのために原稿を書いて過してゐる。コンウェイ氏は當地方の山をペンニン、東部ペンニン、レポンティンの各連嶺に分けて登山案内書なるものを誌さうと意圖し、後者はクーリッヂとの共著になつて公にされてゐる。而して之等の他に數種の他の書を含めた 'Conway and Coolidge's climber's Guides' なるものは、この兩人の名前を唱つた叢書として現はれてゐる。

この一八九〇年にコンウェイ氏はシャモニイ Chamonix をも訪れて居るが、同じ所にゆつくり構へることを敢てせず、氣の向くまゝに高い所の彷徨をなしつづけてゐる。E・A・ブルームとコル　ドゥ　ジャン Col du Géant に登り、D・W・フレッシュフィールドとモン　ブラン Mont Blanc 或はC・E・マシュウズとエギィーユ　ダルジャンティエール Aiguille d'Argentière に登つてゐる。尙、前述した如く、クーリッヂとも

一緒になつて登山して居り、インネレ　ロッカー　スピッツェ Innere Lecker Spitze 或はステルリィホルン Zellhorn の初登行、ワーゼンホルン Wasenhorn の下降における新ルートなどを拓いてゐる。而して、コル　ドウ　クレトン Col de Créton の初通過もなして居り、ブルイユ Breuil の山の宿では當時既に有名であつた探檢登山家　フィリィッポ　デ　フィリィッピ Filippo de' Filippi に始めて遭つてゐる。これを態々書き記して居るところを見ると、餘程コンウエイ氏の印象に殘つた事實らしい。氏にとつて謂はば、このシーズンは之から遠征に向はうとする直前であり、遠く離れた山脈への探檢行のために氏の熱情は燃えてゐたらしいが、このアルプスに於ける登山內容も氏に在つては優れ、その登り盡された地方の山から新たなる登山內容を見出し、'Contrists and Excentrists' なる論說を書いて、當時の登山者を刺戟する所が大きかつたことは前述した。

一八九一年、遂に氏の云ふ「東方の呼び聲」は、氏を驅つてヒマラヤへの熱望の實現に端緒が開かれていつた。氏のこの年四月十三日の日記の誌すところによると、フレッシュフィールドとマムマリィに氏を加へたこれら三巨人が當日、英國地理學協會の一室で相會してゐた。そして、カンチェンジュンガ Kinchinjunga の登行を試みる目的のために此の九月十日にダアジィリン Darjeeling で會ふことに話が極まつた。併し乍ら之から一箇月後早くも、フレッシュフィールドは私的な理由から參加を見合せねばならなくなつたが、マムマリイと氏は希望を棄てず、假令ひ期日を延ばし或はカンチェンジュンガに代へるに K・2（ケイ　ツウ）を以てしても、兎

に角初志の貫徹に向つて進むことになつてゐた。處が、結局はマムマリイもこの山行に加はらなかつたのであるが、之には氏が次のやうにマムマリイ個人並に登山觀を示して居る如く、思想上の相違に依つて良解の上別れてゐるのである。斯うなつて來ると、氏は同行者を失つた譯になるが、ロードブッシュ J. H. Roudebush の友人A・D・マコーミックとブルース C. G. Bruce を良き同伴者とすることが出來た。而して此の翌一八九二年の二月六日倫敦を出帆、同年十二月二十日に歸國して居るが、この間に於けるカラコラム奥地に關する氏等の探檢は當時に於いて先驅者的位置を占むるものであつた。K・2の登頂を狙つて果し得なかつたと雖も、同年八月三日バルトロ Baltoro 氷河の麓に達し、同月十日にはこの氷河を登つてクリスタル　ピーク Crystal Peak（一九、四〇〇呎）への登攀を爲し、同月十二日にはファン　サッドル Fan Saddle（一八、七五〇呎）を極めこゝからK・2への最初の展望を贏ち得てゐる。而して、K・2への頂上へ向つて登攀を續け、同月二十四日には二〇、〇〇〇呎の地點に達してコンウエイ氏はそこで幕營を爲してゐる。翌二十五日パィオニアピーク Pioneer Peak に達し之がその際登られた最高地點であり、その高さは卽ち二二、六〇〇呎と氏等の高度計によつて測定されてゐる。この高度は當時に於ては尙未だ達せられない最高のものであつた。

少し前後したが次に氏のマムマリイ觀の要點を抄錄して置きたい。

「マムマリイとは永い間の知已であつた。彼は充分附き合ふ價値のある男であつた。多くの山仲間の間にも

一人の「山の天才」として通り、幾分その仲間からも離れてゐた。彼と山との間には自然的に一種の本能的な了解があつたと云へる位で、或る人達がよく馬を知るやうに、彼は山を知つて居た。假令ひ、彼は肉體的には競技者のやうな風采をもたなかつたが、しかし、山を登るために生れて來たやうな人間だつた。彼の身體は輕く、きやしやであつた。脊椎の弱さから苦しみ、この爲め重い荷を擔ぐことが容易でなかつた。その腕脚は長く、手足の部分も特に敏感で役に立つた。彼は險しい岩組の上では蜘蛛のやうであり、魔術に依つて其れに粘り著いてゐるかのやうに見えた。背も亦高く、その程度の高さの人を大抵凌いでゐた。一本の足指をもつてその高い身體を殆ど平均に保たせることも出來たし、岩の割れ目や岩の棚(レッヂ)に沿ふても一、二本の伸ばした手指をもつてよくその體重を支へることが出來た。從つて、彼は腕と脚の强い筋肉をもち、そして岩にかかつた場合も、今取り著いてゐるポイントが暫らくは安全であるか否かを、本能と今までの經驗によつて知つた。そんな場合、彼が今までに滑つたことがあるかどうかをさへ私は疑ふ位だ。彼は何時も自信をもつて行動し、何事に對しても焦らなかつた。彼は寒氣の眞只中によく耐え、如何なる高さに於いても外氣に觸れたまゝの狀態でその夜を坐り通すことさへ欲した。又彼は、如何に嚴寒の中にあつても、夜が明けて進むことの出來るやうになる迄そこで待ち明かすことを敢て欲した。午後の中に頂上に著くならば何時であつても、彼は日の暮れるのを覺悟して未踏のルートを取つて降ることを敢てした。二日の經驗があれば、登らるべきものとしての全體的な山々についてそのキャラクターを彼は摑んだ。そのルートが新しいとか古いと

か云ふ問題は、彼の頓著しない所であつた。何處までも彼は自分自身の選んだ道を採つたが、良き山案内者と同じ程度にリイダーとしての實力を持つてゐた。彼は輕い裝備を發明することにかけては全く器用であつて、從來の傳統などに左右されることは無かつた。その爲め、彼は大部分の登攀者が非正統的と見做してゐる、優れた質の極めて細い登山綱の使用をさへ紹介した。登攀は彼が享しんだ所のものであるが、探檢した所のものではない。山の地理に就いて注意せず、測量とか寫眞の器械に依つては寧ろ苦しめられた方だ。彼の心を奪ふものは、艱難を伴ふ登攀の眞の悦びに外ならなかつた。若し彼がヒマラヤまで行かうとするならば、アルプスに用意された山より、もつと大きな且つ困難な山を見出す筈であつたのに、彼を知れば知る程私は彼が好きになるが、其だけ又山に對する彼の態度は根本的に私のものから離れていくのが判るのだ。私が入念に組立てた計畫は、カシミィルの極北部地方に於ける大きな峰と氷河のある未探檢の地域に對する山旅についてのものである。自分は出來るだけ多くの土地を過ぎ同時にその地方全體が如何なるものであるかを見出さうとした。而して一人の畫家を同伴し、事情の許す限りスケッチ測量を持ち還り又科學的蒐集なり其方面の調査を行はうと考へた。斯のやうなパーティに參加した所で、マムマリイは恐らく仕合せで無かつたと思ふ。彼は時間のある限りを大きな山の發見乃至はそれへの登攀に費すことを望んでゐた。斯くして私共は相互の理解から、ヒマラヤ行のパートナァシップを解消してしまつた。此の行から歸國した時、マムマリイは私に祝意を表するために遣つて來て、「若し自分があなたの行に參加して居つたなら、今回あなたが爲

し遂げた仕事の半分も、あなたは行つて居らなかつたらう」と言つた。これは本當だと思つた。彼ほど心の豊かな又何事にも拘束されない人間は尠い。ところで、彼は極めて物の判つた且つ才能豊かな男であるといふ印象を讀者諸君に殘さなかつたとしたなら、彼の特質を描き出さうとした私の試みは成功して居らない。彼は登攀の天才であつたが、單なる登攀者ではなかつた。自分が興味をもてることには、全關心をあげて其れに沒頭すると云つた性質があつた。彼に於ては審美的なものを賦與されて居たと見るより、寧ろより多くの知性に惠まれてゐたと見たい。從つて、彼の考へ方は哲學的であり、抽象的(理論的)なものに精通して居つた。經濟學の問題は特に彼にとつて魅力のあるものであつて、偏見から離れた自由な立場をとつて其樣な問題に接したと同じやうに、個性的な捉はれない新鮮な心をもつて彼は又山に近づいて行つたのである。彼にとつては、それが古いルートであらうが既に踏まれた途であらうが問題では無かつた。彼は常に自分自身の途を發見し、自分の實力によつて其れを進むことを欲した。前以て理論的に用心はするにしても、彼はその危險のために危險を愛し、寧ろ好んで避け難い冒險のうちに入ることを望んだとも云へる。斯くしてこそ、彼がヒマラヤに向つた時、ナンガ　パルバトで生命を失つてしまつたのだ。そこで彼は雪崩の危險を敢て冒した。その雪崩も彼が知つてゐる今迄の山では小さくある筈だつたのに、亞細亞ではアルプスの五十倍も屢々落ちるのだから、彼が遭難してしまつたのも殆ど必然とも云へるのだ。彼の時代の否今迄にも最も良き登攀者であつた彼は、斯のやうにして、世界の中でも亦最も豪勢な山々の一つで命を失つてしまつた。そ

の死こそ、あらゆる物の中で彼が眞に選んだであらうものなのである」。

以上の如く氏の岳友觀はその理解の點において友情の溢るゝものさへ見え、之に據つてマムマリイの同行しなかつた事情も判つてくる。マムマリイのナンガ　パルバトに於ける遭難は、コンウェイのパィオニァピーク登行(一八九二年)より三年後の一八九五年八月であつた。顧ると、恰度マムマリイは四十歳の若さで山にその生命を棄て、コンウェイは彼と一つ違ひの年長であつたから、パイオニァ　ピークへは三十六歳の時に登頂してゐる。又この兩雄のそれ〴〵劃期的ともいへる之等の山行に、彼等の良き友C・G・ブルースが參加して居るのも何等かの奇緣といふべく、共に在るべくして無かつた兩雄の心をこのブルースが間接的に結び付けて居たやうにさへ思はれてならない。

一八九四年に於けるコンウェイ氏は、フィツジェラルド E. A. Fitzgerald と自分のために一張りのマムマリイ・テントと二つの鳥毛の寢袋をもつて—もつと詳しく云ふならば—二年前、ヒマラヤ行の際にブルースの配下であつたグルカ兵二名 (Kirbir, Amar Sing) を同伴して、アルプスの諸山を歩き、又この行の三分の二に當る期間をフィツジェラルド及びその配下の山案内二名(Aymonod, Louis Carrel) と共に歩いた。卽ち同年六月に於けるペルヴォ　デルヴァ Pelvo d'Elva への新登路、同月二十四日に於けるコル　ドゥ　エスグラート Col de S. Grat への最初の通過、七月のガーレンシュトック Galenstock からの新下降、同月二十五日のピス　グルカ Piz Gurkha への最初の登攀とグルカ Gurkha 峠の最初の通過、同月二十八日におけ

るルチ Ruchi とハウスシュトック Hausstock の通過（後者は新下降）、八月四日のオーベル フェルムント Ober-Vermunt 峠の最初の通過、同月七日におけるワイスクーゲル Weisskugel への登降における新ルートなど、それが目立つた大きな發見ではないにしても、登り盡されたといふ分野から隨所に新ルートを拓き、最初の登降を試みてゐた。この翌年（一八九五）には、これら山行の結果として氏の著 'The Alps from End to End' が上梓されて居り、この書の當時登山界に與へた影響が又黙殺さるべきもので無かつたことは前述た通りである。

この年のアルプス行に於いてブルースとは全行程を過して居らないが、別に問題があつた爲めではないらしく、コンウェイがこの夏山を終へて倫敦に歸つた時は、ブルース自らコンウェイの家に出かけて居つて出迎へ、グルカ兵を見るや否や彼の腕に擁へた程であつた。

一八九六年にはガーウッド E. J. Garwood 其他の者とスピッツベルゲン Spitsbergen に探檢を試みた。六月二日英國出發、同月十八日、アイス フィヨルド Ice Fjord に著きこの二十日に上陸してゐる。直後、アイス フィヨルド とベル サウンド Bell Sound との間の山嶺を探檢した。七月十七日に、この島の最初の横斷として、東海岸のアガァズ Agardhs 灣にまでアイヴォリイ ゲート Ivory Gate 氷河超えをしてゐる。コンウェイはハムマァフェスト Hammerfest に向つて當島を八月十六日に離れてゐる。この行で彼等は小馬（ポニィ）と橇に依る內地旅行の困難さを大いに經驗した。翌年の氏の著 'The First Crossing of Spitsbergen' に

この際の記事が納められて居る。

一八九七年には再びこのスピッツベルゲン行がガーウッドと共に爲された。六月二十九日英國出發、七月九日アドヴェント Advent 灣に到著、同月十一日にアイス　フィヨルドの北部クラースビルレン Klassbillen 灣頭近くに上陸してゐる。之より内地に進み、幾つかの氷河や峠、山の探檢後、八月五日にはディアデム Diadem へのスキー遠征十八哩を敢行して居り、その登頂をも行つてゐる。八月十八日にはヘッヂホッグ Hedgehog (Horn Stands Tind) への完登を行つた。この山は標高約四、五〇〇呎ほど。一行は同月二十一日に當島を引揚げてゐる。翌年、この紀行は'With Ski and Sledges over Arctic Glaciers'として著はされた。

一八九八年のアンデス行は、氏にとつて最後の大きな探檢行となる。七月十三日英國出發、リィマ Lima の港カラオ Callao へは八月十五日に著いて汽車でリィマに行つてゐるが、再びカラオに戻りこゝを出發、モレンド Mollendo に八月二十一日上陸、諸所經由後、九月一日イリィマニ Illimani に向け出發、カイムバヤ Caimbaya (標高一一、八〇〇呎) に同月四日著、五日には一四、〇〇〇呎の地點に幕營してゐる。六日には一六、〇〇〇呎、七日には一六、五〇〇呎、八日には一八、五〇〇呎の各々地點に達し幕營、遂に九日に於いてイリィマニの登頂を完行した。翌十日はカイムバヤに戻り、ラ　パス La Paz に十二日到着した。これから第二に目指すソラタ Sorata に向け出發が同月十七日、ウマプサ Umapusa に十九日著、ハウカニャ Haukaña 氷河の近くに幕營したのが二十日、一八、〇〇〇呎に於ける幕營が二十二日、翌二十三日には殆ど二〇、〇〇

〇呎の地點まで天幕を持つて登り、幕營。二十四日は激しい吹雪のため頂上へ達せられず暫く偵察の後ベース　キャンプまで戻つてしまつてゐる。併し、ソラタへの登行はその足で再び爲され、第二回目は十月五日ウマプサ、八日ハウカニャ氷河幕營、九日一八、〇〇〇吹幕營、十日には遂に登頂を行ふべく進んだが、頂上から約三〇〇呎下で、雪の惡い狀態の爲め惜しくも亦引返してしまつて居る。

尙、氏はこの際、アンデスを南に到り同年十二月に於いてアコンカグア Aconcagua（二三、一〇〇呎）を登つてゐる。卽ち、十二月三日ホルコネス Horcones 溪谷の頭に幕營（一六、〇〇〇呎の地點）、五日にはE・A・フィツジェラルド氏幕營の地點（一六、〇〇〇呎）に達し、六日には一八、五〇〇呎の第三幕營地、七日には遂にこの登頂を敢行してゐる。此の後、同月三十一日にはサルミィエント Mt. Sarmiento (Tierra del Fuego) の部分的登行を果してゐる。而して翌年一月にリヴァプールに著いてゐた。氏は山旅の後殆ど必ず著作を爲してゐるが、この結果の主なるものとして「ボリィヴィア　アンデスに於ける登山と探檢」Climbing and Exploration in the Bolivian Andes 全二卷が公にされた。

氏はこの行に特に連れて行つたマッターホルン南麓村（Valtournanche）の二人の案內者（A. Maquignaz, Louis Pellissier）の外は、同行の友はなかつた。併し彼の古い岳友フィツジェラルド一行が最初の登頂に成功したアコンカグアへ敢て登攀を試み、友の業蹟を偲んだが、こゝに氏らしい行爲と友情の披瀝に關する氏の言葉があるから引用しておきたい。「……フィツジェラルドの書物は自分の登攀（アコンカグア）の時には未

だ出版されて居なかつた。フイツジェラルド達のパーティが數箇月かかつて登頂した所を若し私達が一週間で敢行したことを知るならば、出版の結果に關して、その本の値打と權威を害するのを自分は考へ又それを信ずる。それ故その山の頂に正しく立つことを自分は避けておいた。しかしその後になつて、私の行動はむしろ後悔された。といふのは、私が豫期したあらゆる結果は成し遂げられなかつたからだ」と嘆息してゐる。こんな所に氏の一見旋も曲りの性向も見られないとも云へないが、この點前述「地理學雜誌」の記者の言葉と符合するのは面白い。

右のアンデス行から三年目の、氏に關する一九〇一年について、「八月十九日、彼の娘と共にブライトホルン Breithorn に登る、この登行は山に對する彼の離別となつた、「山への追憶」'Mount-in Memories'、二七五—六頁を見よ」と記したのはA・L・マム氏であつた、この年は氏が恰度四十五歳のときである。氏自らの筆になる自敍傳風の書の最後の頁を飜くならば、そこに「アンデスから歸つてから私はそれ以上山へは登らなかつたが、私がツエルマットのブライトホルンの頂きへ再び登つて雪の山へ正式に別れを告げたのは、一九〇一年八月十九日のことだ。そのブライトホルン、それへ私は一八七二年九月九日に始めて登つたのだつた。その當時、私は未だ生徒であつたが、今や私は自分の娘を連れて登つた。それが以前の私の場合と同じやうに、娘にとつては始めての山登りであつた。四旬節(レント)のうちに、當時の自分と同じ年頃に娘もなつてゐた。私共はテオデュル Théodule 小屋で共に泊つた。其の日の天候は好都合だつたが、二十九年前に比べてもつ

と骨の折れる辛さをその最後のスロープで經驗した。そのときの眺望はすべて私の白髮の頭をもつた友だち（舊知の山々）を抱擁してゐた。私が嘗て登らなかつた峰でさへ、そのときは現はれてゐた。私はそれらの山々に別れの挨拶をした。併し何等悔恨の情に唆られるものはなかつた。その山々は自分に健康と喜悅と美と友とそして豊かなる回憶の數々を與へて呉れたのであつた。それらのものを私はその後棄て去らうとしなかつた。今も尙、それらの山から與へられたものは、すべて私のものであり且つ限り無くそれらは私にとつて貴いものなのだ」と記されてゐる。アルプスの山らしい山へ登つてから恰度二十九箇年後、その四十五歳のときに、氏の登山家としての山への營みは終りを告げたことになつて居る。それ故に、その生涯の重要な期間略〻三十年を山登りのために捧げたと云ふことも出來やう。

四

今迄にも述べた如く、氏は山行の傍ら、或部分は山登りに關聯したものとして、その自然美に對して根強い愛著と探究心をもつて居た。氏が一八九二年のヒマラヤ行の際、特に山の繪を描いて貰ふ目的で當時の山岳畫家マコーミック A. D. Mc Cormick を同伴し、上述の著「カラコラム　ヒマラヤにおける登山と探檢」全二卷を通じてその繪を挿入したことにつき、「地理學雜誌」の記者も當時に於ける一つの新しい方向を示したものと讃めてゐることは既に記した通りである。そして、コンウェイ氏自らも、その著の序文で、「今

迄にマコーミックより優れた藝術家を同伴した山旅者は嘗て無かつたのだ。此の本を飾つたその挿圖、最近展覽されたその水彩のスケッチ、何れも各方面から賞讃を浴び、且つ高く充分に評價された」と述べてゐる。このカラコラム行に於いては、自然科學的蒐集物の他、地圖の作成など云ふ迄もないが、コンウェイは寫眞を一千枚、マコーミックは三百の水彩畫と多くの鉛筆のスケッチを收穫してゐること、矢張りその序言に述べてゐる。この勢力には驚くが、實際にその書の挿畫を觀て感ずることは、その繪に餘り魅力のないことだ。寧ろ思ひ切つて氏自身の撮つた寫眞を使用して貰ひ度かつたとさへ思ふ位である。

ヒマラヤ行より二年後の一八九四年に於けるアルプス山間の放浪の結果として、氏は上述の著「アルプス踏破記」を著してゐるが、これにも百枚許り、マコーミックの描いた水彩畫が入れてある。前者と同じやうな描き方で淡彩のものである。併し、この年のアルプス行には記錄によるとマコーミックは參加して居らないが、コンウェイ自らは多年使ひ古した寫眞器のルゾ Luzo をこの夏山にも持參したといふから、その寫眞などを元にしてマコーミックが畫室で描いたものらしい。尤もその中には誰々の寫眞から描いたといふ斷り書きのあるのもある。

他の著書「アルプス」The Alps は豪華限定版として一九〇四年に出てゐるが、これにはその畫家の手になる山、谿、湖、山麓風物、山案内者の肖像といつた種類の美しい水彩畫が色刷で七十枚も入つてゐる。色刷のためか、この書の水彩畫が最もよい。この場合はその畫家がコンウェイと共に歩いた時描いたのか其れ

共、他の機會に描いたものか判らないが、實際の寫生畫であらう。輕い調子の品のよい、微妙な色感に富む水彩畫だけに、迫る力は薄いが、その書物とよく調和して、なつかしい感じをもたせる。

私は未だ見て居ないが、「スポーツ百科全書」The Encyclopaedia of Sport の登山に關する氏の論文のところにも、この畫家の挿繪があると云ふことである。

マコーミックは油繪は描かなかつたらしい。而して、その水彩畫とか鉛筆又はペンによるスケッチが、實際にはどの程度まで評價されてゐたものか、私などには到底判らないが、第一流品に屬するものでは無かつたと推測される。コンウェイがその書物の挿繪に使用した原畫は、恐らく所持されてゐたであらうが、氏の死後どうなつてゐるか。何れにしても、マコーミックが一方に於いて登山の實踐家であり山を愛してカラコラムにまで出かけたことは、氏の繪を全體的に評價する場合、考慮に入れなければならないことなので、この點山岳畫家として、その業蹟は永く傳へられてよいものであらう。氏の繪は前にも述べた樣に、樂に描かれてゐて重さとか深刻さはないが、山に關するその題材として、登山家の山における行動とか生活、或は山間の風物、特に人間を多く採り入れたといふ點に特色がある。しかし、この種の部面は、精巧な寫眞にその役割を持たせた方がよいといふ意見も有り得るわけだが、これが氏の繪の多くに實質的な挿繪としての役割を果さしてゐる。そして一方ではその著「アルプス」に挿入されたやうな英國風の詩のある繪も描いた點を汲んでよいであらう。何れにしても、山を愛して登つて描いたといふマコーミックの態度とその精進に敬意

を表しておきたい。同時に又、美術にも專門的な智識をもつて居たコンウェイは恐らくこの水彩畫家の實力をも充分に知り拔いて居たであらうのに、相知り合つた機緣を基にしてどこまでも重用したといふ點を、何よりもまづ購ひたいのである。

—一九三七、一二、稿了—

一、主要參考文獻(本文關係)

A. L. Mumm: The Alpine Club Register 1877—1890.

R. G. S.: The Geographical Journal, XCI. July 1937.

Lord Conway of Allington: The Autobiography of a Mountain Climber (The travellers' Library)

W. M. Conway: Climbing and Exploration in the Karakoram-Himalayas 2vols.

W. M. Conway: The Alps from End to End.

W. M. Conway: The Alps.

二、コンウェイ氏著作表(登山關係)

The Zermatt Pocket-Book, a Guide Book to the Pennine Alps from Simplon to Arolla 1881.

The Central Pennine Alps 1890.

The Easiern Pennine Alps 1891.

The Lepontine Alps (Simplon and Gothard) by W. M. Conway and W. A. B. Coolidge.

以上三册は他の書と共にコンウェイ並にクーリッヂ編輯の登山案內叢書 Conway and Coolidge's Climbers' Guides に含まれる。

Climbing and Exploration in the Karakoram Himalayas 2vols. 1894.

この書の第三卷目に相當する科學的報告書がボニイ教授其他專門家によつて公にされた。

The Alps from End to End 1895. (The travellers' library edition 1933)

The First Crossing of Spitsbergen 1897.

With Ski and Sledges over Arctic Glaciers 1898.

Climbing and Exploration in the Bolivian Andes, with Scientific Appendix, including notes on rocks, by T. G. Bonney 1901.

Aconcagua and Tierra del Fuego 1902.

The Alps 1904.

Mountain Memories: a Pilgrimage of Romance 1920.

The Autobiography of a Mountain Climber, mountain memories, (The travellers' library) 1933.

三、コンウエイ氏發表文書。

Paper — 'The Exploration of the Alps' — Centrists and Excentrists (Alpine Journal XV.)

Paper — 'Rough-and Tumble Ski-Running' in Alpine Ski Club Annual, 1911, p. 1.

Paper — 'an Orographical Sketch of the Southern Andes' (A.J.XX)

Paper — 'The Future of Alpine Club' 'Reminiscenes and Reflections of an Old Stager' (A. J. XX. XXXI)

Note — 'Alpine Art on the Eastern Alps' (A. J. X.)

Paper — 'Life in the Vispthal at the Beginning of the Sixteenth Century' (A. J. XII)

Paper — 'An Exciting Glissade' (A. J. XXI)

Note — 'The 1st Ascent (1811) of the Jungfrau (A. J. XIX)

Note — 'an Alpine Landscape, by P. Breughel senior, of the Sixteenth Century' (A. J. XXXII)

Letter— 'Early Use of Crampons' (A. J. XXXIII)

Letter — 'Climbing at High Altitudes (A. J. XIX)

Notes — M. L. Hepburn's paper on same subject. (A. J. XX)

Review of Charles Gos' 'Le Cervin par l'Image' (A.J.XXXV)

Memoriam notices of F. W. Whitridge; P. J. Truffer, Mattias Zurbriggen, W. A. Baillie-Grohman. (A-J.XXXI. XXXII.XXXV)

Biographical Sketches of Aloys Pollinger, F. J. Andermatten, and Ferdinand Imseng 'in Pioneers of the Alps' (1887)

Articles — 'Mountaineering' in 'The Encyclopaedia of Sport' (1898) and in 'Encyclopaedia Britanica' (1902)

Chapter — 'Mountaineering in the Arctic (Spitsbergen)' in G. Winthrop Young's 'Mountain Craft' 1920.

Chapter — 'Maps and Guide Books' in C. T. Dents ''Mountaineering' (The Badminton Library) 1914.

四、ロンカミヤ氏著作表(登山以外のもの)

The Woodcutters of the Netherlands in the Fifteenth Century 1884.

The Gallery of Art of the Liverpool Royal Institution 1885.

The Artistic Development of Reynolds and Gainsborough 1886.

Exhibition of Reproduction of the Works of Raphael in the Walker Art Gallery, Liverpool 1887.

Early Flemish Artists and their predecessors of the Lower Rhine 1887.

The Literary Remains of Albrecht Dürer 1889.

The Dawn of Art in the Ancient World 1891.

The Domain of Art 1902.

Early Tuscan Artists 1902.

Great Masters 1904.

The Early Dutch and English Voyages to Spitsbergen in The XVIIth Century 1904.

No Man's Land: a History of Spitsbergen from its Discovery in 1596 to the Beginning of the Scientific Exploration of the Country 1906.

The Sport of Collecting. 1914.

The Crowd in Peace and War 1915.

The Abbey of St. Denis 1916.

Palestine and Morocco 1923.

The Art Treasures of Soviet Russia 1925.

附記　コンウェイの著「アルプス」については「山岳」二ノ一に小島烏水氏が既に紹介され、マコーミックの繪のことも其後何かゝ書かれたと記憶する。又、本文の地名（特に佛語）の讀み方については畏友K・F氏に教へを乞ふたが、私の記し間違ひがあるかも知れない。又、コンウェイの著書の内容には殆ど觸れなかつたが、既に松方三郎氏（（山岳講座）、「山岳圖書展覽會目錄」にも記されてゐるから、私としてはいつか詳しく書くことにしたい。

會務報告

十月定例理事會

十月十四日日本橋日本商工倶樂部

出席者

木暮、高頭、茨木、角田、槇、木村、西堀、高橋、津田、鳥山、島田黑田

一、山岳第一號編輯
一、ウェストン紀念事業ノ件
一、新理事推薦ノ件
一、新入會員薦考
一、關西支部報告

十一月定例理事會

十一月十一日　本會事務室

出席者

木暮、小島、武田、鳥山、黑田、西堀、茨木、島田、角田、（委任）高橋

一、山岳第一號第二號編輯ノ件
一、ウェストン紀念事業ノ件
一、會員大會ノ件
一、長野縣學務課主催、山案內人及觀光從業員講習會（講師派遣ノ件
一、新理事推薦ノ件
一、新入會員薦考

十二月定例理事會

十二月九日　虎の門本會事務室

出席者

木暮、槇、冠、武田、黑田、茨木、島田、高橋、鳥山、木村、角田

一、山岳第二號編輯ノ件
一、會員大會及晩餐會ノ件
一、新理事選擧ノ件
一、ウェストン記念事業ノ件
一、長野縣學務課主催講習會報告
一、英國エヴエレスト隊員C・ジョン・モリス氏來朝ノ件

一、昭和十三年度豫算ノ件

昭和十二年度年次大會

昭和十二年十二月十六日（木）午後六時より日本橋區日本商工倶樂部に於て年次大會を開催鳥山、黒田諸氏より本年度の事業、會計報告等あり、ついで晩餐會にうつつた。

來會者約四十名

「山岳」投稿規定

一、投稿は何人も自由とす。日本山岳會員たると然らざるとを問はず

一、原稿の採否は理事會に於て決定す。

一、原稿は返却せざるものとす。

一、別刷所要の向はその旨原稿に朱記せられたし、その費用は筆者の負擔とす。

一、原稿にはその梗概を附せられたし。

一、紀行には概念圖を添付せられたし。

一、寫眞は光澤印畫紙に燒付けられ度、裏面或は別紙に說明記入を乞ふ。

一、校正は編輯者に一任せられたし。

一、地名及び外國語は特に明確に書かれ度、地名には振假名を附せられ度し。

原稿蒐集所

東京市芝區琴平町一、不二屋ビル、三〇七號室

日本山岳會編輯所

原稿用紙所用の向は前記編輯所宛て申込みあり度し。

昭和十三年四月二十日印刷
昭和十三年四月三十日發行　〔定價金參圓〕

發行所　日本山岳會
東京市芝區琴平町一、不二屋ビル內
電話芝一六四九番
振替口座東京四八二九番

編輯兼發行者　黑田孝雄　東京市牛込區市谷仲之町二八
印刷者　植田庄助　東京市芝區濱松町一ノ十三
發賣所　東京堂　東京市神田區神保町

著作權所有

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXXII 1937 No. 2.